Pioneer sound.vision.soul

AV マルチチャンネルアンプ

VSA-AX10Ai

ホームシアター入門ガイド
各部の名称
接続
設定
操作
リモコン
技術資料
困ったとき

インターネットによる登録のお願い

http://www3.pioneer.co.jp/

お買い上げの製品について、上記URL「お客様のページ」でお客様登録をお願いします。

この「お客様のページ」は、お客様とのコミュニケーションを目的としたウェブサイトです。新規登録されたお客様にはID・パスワードを発行させていただき、新製品のカタログや取扱説明書のダウンロード、メールマガジンの購読など各種サービスをご利用いただけます。

取扱説明書

このたびは、パイオニアの製品をお買い求めいただきましてまことにありがとうございます。
この取扱説明書をよくお読みになり、正しくお使いください。特に、本書および別冊の「安全上のご注意」は必ずお読みください。
なお、「取扱説明書」および「安全上のご注意」は「保証書」、「ご相談窓口·修理窓口のご案内」と一緒に必ず保管してください。

安全上のご注意　付属の「安全上のご注意」もお読みください

安全に正しくお使いいただくために

絵表示について

この取扱説明書および製品への表示は、製品を安全に正しくお使いいただき、あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、いろいろな絵表示をしています。その表示と意味は次のようになっています。
内容をよく理解してから本文をお読みください。

⚠警告　この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。

⚠注意　この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が傷害を負う可能性が想定される内容および物的損害のみの発生が想定される内容を示しています。

絵表示の例

△記号は注意（警告を含む）しなければならない内容であることを示しています。
図の中に具体的な注意内容（左図の場合は感電注意）が描かれています。

⃠記号は禁止（やってはいけないこと）を示しています。
図の中や近くに具体的な禁止内容（左図の場合は分解禁止）が描かれています。

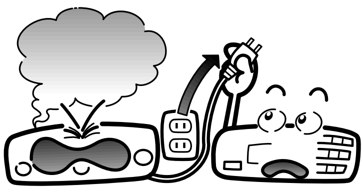
●記号は行動を強制したり指示する内容を示しています。
図の中に具体的な指示内容（左図の場合は電源プラグをコンセントから抜け）が描かれています。

⚠警告

〔異常時の処置〕

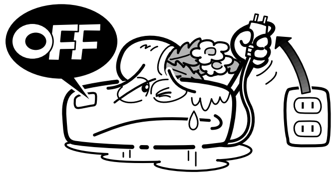
プラグを抜け

● 万一煙が出ている、変なにおいや音がするなどの異常状態のまま使用すると火災・感電の原因となります。すぐに機器本体の電源スイッチを切り、必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。煙が出なくなるのを確認して販売店に修理をご依頼ください。お客様による修理は危険ですから絶対おやめください。



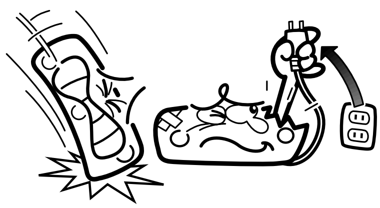
プラグを抜け

● 万一内部に水や異物等が入った場合は、まず機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

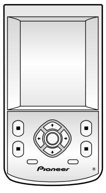


プラグを抜け

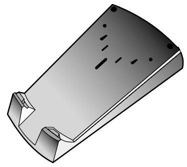
● 万一本機を落としたり、カバーを破損した場合は、機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。



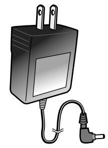
付属品を確認する



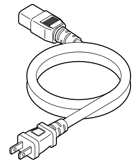
リモコン



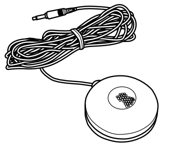
リモコン充電器



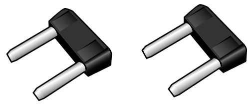
ACアダプター
（リモコン充電器用）



電源コード



オートサラウンド
セットアップマイク



ショートピン×2
（リアパネルに装着されています）

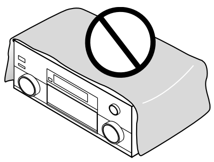
- リファレンスキャリブレーションディスク
- マルチチャンネルオーディオ用
  スピーカーセッティングガイド
- 取扱説明書（本書）
- ご相談窓口・修理窓口のご案内
- 安全上のご注意
- 保証書

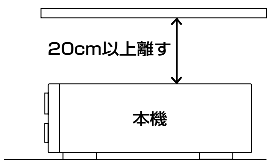
設置について

警告

放熱性を十分に確保してください。異常発熱は故障や事故の原因となります。

- 本機の上に物を置いたり、布やシートなどを被せた状態でのご使用は絶対におやめください。
- ラック等に設置する場合は、上部に20cm以上空間をあけてください。



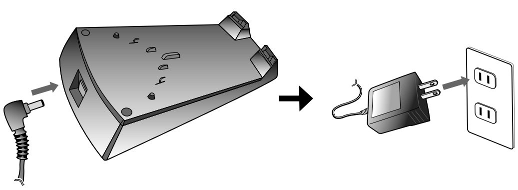


リモコンの準備

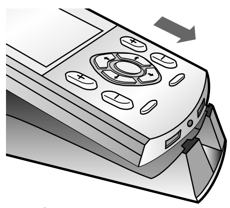
リモコンの充電のしかた

以下のようにリモコンを充電します。リモコンを使用していないときは常に充電器に置いておくことをおすすめします。残量がなくなったまま長い期間充電しなかった場合、充電器にセットしてもすぐには画面が表示されないことがあります。正しくセットした後、5分以上経って画面を触っても何も表示されないときは、一度充電器から外して、再度セットし直してください。2、3回繰り返しても何も表示されないときは「リモコン関係」（➡ P.135）をご覧ください。

1 付属のACアダプターを、充電器と家庭用コンセントにつなぐ



2 リモコン下部のへこみと充電器のツメが合うようにセットする



充電中は、画面右上に下の表示が出ます。

充電中

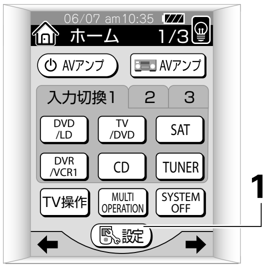


メモ

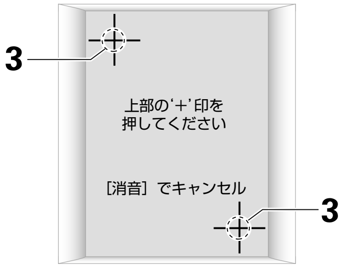
- 付属のACアダプター以外は使わないでください。
- リモコンが充電できないときは「リモコンの電池交換」（➡ P.137）をご覧ください。

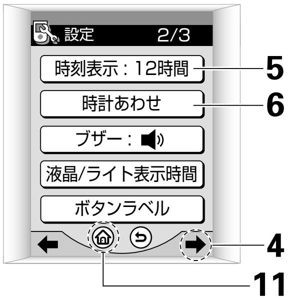
リモコンの初期設定

本機のリモコンは、ＬＣＤ画面に表示されるボタンを操作するタッチセンサー式になっています。ここでの設定はリモコンを快適に使っていただくための設定です。

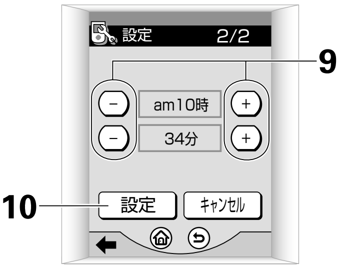












1 ［設定］

リモコン設定モードにする。
リモコンのＬＣＤ画面に設定メニューが表示されます。

2 ［位置あわせ］

タッチパネル調整画面を呼び出す。

3 ＋　＋

左上の十字マークボタンの中心を押したあとに右下の十字マークボタンの中心を押す。
タッチポイントと画面ズレが正しく調整されます。リモコン設定画面に戻ります。

4 ➡

リモコン画面を切り換える。
［時刻表示：12時間］ボタンのある画面を表示させます。

5 ［時刻表示：12時間］

時刻表示を選択する。
時刻表示を選択します。押すたびに、［時刻表示：12時間］と［時刻表示：24時間］表示が切り換わります。

6 ［時計あわせ］

日付と時間を合わせる設定にする。

7 ［＋］［－］

日付を合わせる。

8 ［次へ］

時刻の設定にする。

9 ［＋］［－］

時間を合わせる。

10 ［設定］

日付と時間を決定する。

11 ［ホーム］

設定を終了する。
ホーム画面に戻ります。
［ブザー：］［液晶/ライト表示時間］［ボタンラベル］については P.116 ～ P.118 をご覧ください。

メモ

- ボタンを押すと前の画面に戻ります。

本製品に搭載されているリモコンでは、画面表示にNECのフォント「Font Avenue」を使用しています。
Font AvenueはNECの登録商標です。

特長

Advanced Multi-Channel Stereophonic Philosophy

サウンドクリエイターの想いまでも、ありのままに伝える高音質思想。右記の3STEPにより、プロスタジオの高音質モニタリング環境を家庭で忠実に再現することを可能にしました。

- **STEP1** 高音質設計
- **STEP2** 音場補正技術の開発
- **STEP3** 世界最高峰のスタジオエンジニアとの共同音質チューニングの実施（協力：エアースタジオ）

AIR STUDIOS

高音質設計

- **「ステイブルキャストアイアンベース」採用**：豊かな低音を再現するハイカーボン鋳鉄製ベース（TAOCとの共同開発）。
- **新デバイス「A.D.E. MOS FET（Advanced Direct Energy MOS FET）」開発**：圧倒的な力感とハイスピードな音を両立させる新出力デバイスを7ch全てに搭載。
- **高性能DSP処理ブロック**：デュアル演算ユニットが特徴のSHARC Melody UltraシリーズDSPを2つ、およびMotorola社製DSPを1つ搭載することで大規模な信号処理を高速で行います。
  また、「True 32 bit Tri Digital Signal Processing Type II」回路により、3つのDSP部の信号処理および伝送を、全て32bit以上で行います（一部48bit処理）。

1 Advanced MCACC を搭載

聴感のみでは正確な調整が難しいマルチチャンネル（サラウンド）の設定を自動化しました。レコーディングスタジオの現場で行われる調整技術を家庭内で実現するため、音場を正確に測定し、チャンネル間の空間情報の歪みを補正します。残響特性を考慮した周波数特性の補正や残響特性のグラフ表示（パソコンまたはOSD画面）が可能です。

P.40
「Auto Surround Setup（サラウンドの自動設定）」
P.55
「Acoustic Cal EQ Professional（視聴環境の残響特性の測定と周波数特性の補正）」

2 i.LINK（アイリンク）端子を搭載

DVDオーディオやSACDの高音質マルチチャンネル再生がケーブル1本で手軽に楽しめます。

*DVDプレーヤーの出力設定が必要な場合があります。詳しくはプレーヤーの取扱説明書をお読みください。

P.28
「i.LINK対応機器の接続」
P.65
「i.LINK入力の設定」

3 USB端子を搭載

パソコンに収録されているマルチチャンネル音声をUSBケーブル1本で手軽に楽しめます。

P.27
「パソコンの接続（USB接続）」
P.95
「USBオーディオ再生」

4 最先端規格・デジタル音声フォーマットに対応

「THX ULTRA2」規格の認証取得。「DTS 96/24」、「MPEG-2 AAC」（BSデジタル）、「Dolby Digital Surround EX」、「DTS-ES」、「WMA9 Pro」など、さまざまなデジタル音声フォーマットに対応したデコーダーを搭載し、また「THX Surround EX」、「Dolby Pro Logic IIx」などの新技術にも対応しています。

P.75
「ハイサンプリングフォーマットディスクの再生について」
P.120
「サウンドフォーマットについて」

5 その他の主な特長

- **多彩なスピーカーシステムの構築：**
  スピーカーがバイワイヤ対応であれば、バイアンプ接続により高品位な再生が楽しめます。またお部屋が縦長の場合はサラウンドスピーカーを2系統使用してお楽しみいただくこともできます。
- **パイオニアビデオコンバーター搭載：**
  接続の自由度を拡大し、伝送ロスの少ない接続を可能にします。
- **充電タイプの新デザイン液晶リモコン付属**
- **192kHz/24bit対応A/Dコンバーター搭載**
- **省エネルギー設計：**
  待機時消費電力0.65Wの省電力設計です。

P.33
「スピーカーの接続（応用編）」
P.24
「映像信号について（パイオニアビデオコンバーター）」
P.124
「フレキシブルA/Dシステム」

目　次

準　備

ホームシアター入門ガイド

各部の名称と主な働き

接　続

音場補正の設定 基本

入力に関する設定 基本

エキスパート設定 応用

目　次

基本操作

応用操作

リモコンによる他機器の操作

リモコンの便利な機能

技術資料

困ったとき

ホームシアター入門ガイド

テレビ、DVDプレーヤー、スピーカーと本機VSA-AX10Aiを接続して、簡単にデジタルサラウンドを楽しむ方法を説明します。i.LINK対応機器やその他の機器の接続については「接続」（P.20 ～ P.38）をご覧ください。

入門ガイドは以下の３ステップで進みます。

Step1 接続する ―― 「テレビ/DVDプレーヤーの接続」「スピーカーの接続」

Step2 設定する ―― 「サラウンドの自動設定」

Step3 再生する ―― 「接続した機器の再生」

Step1 接続する

警告

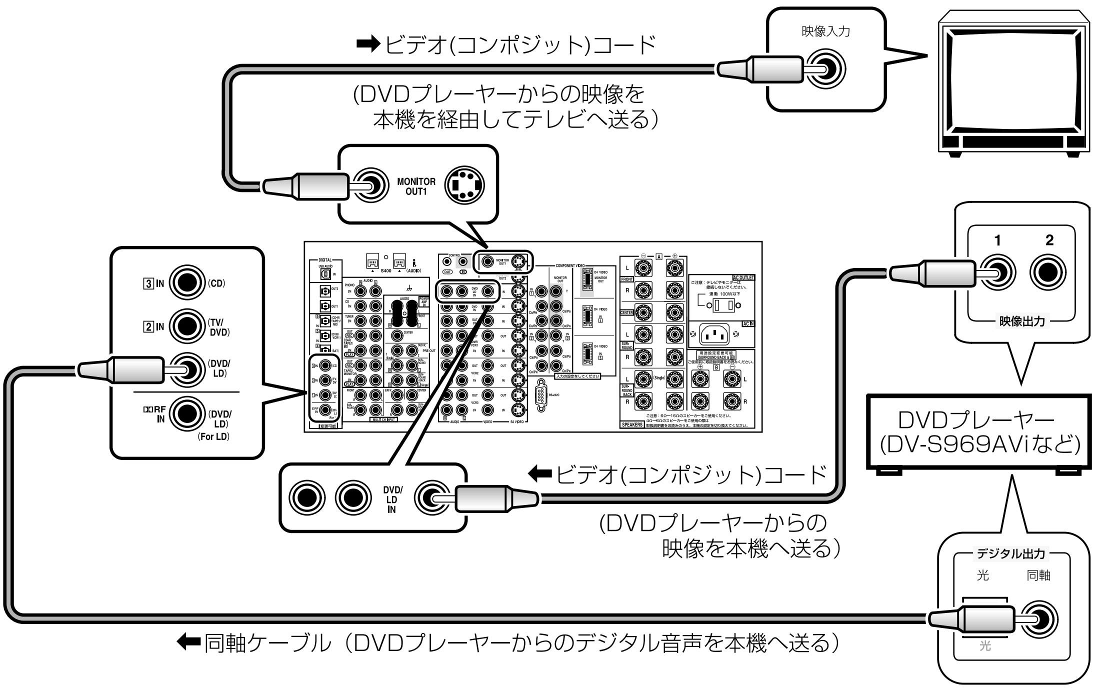
- 機器の接続を行う場合には、必ず接続するすべての機器の電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。電源コードは最後に接続してください。

テレビ/DVDプレーヤーの接続

ドルビーデジタルやDTSのマルチチャンネル音声を再生するために、音声はデジタル接続します。

用意していただくケーブル

- 同軸ケーブル1本
- ビデオコード2本
- オーディオコード(モノラル)1本
- スピーカーコード



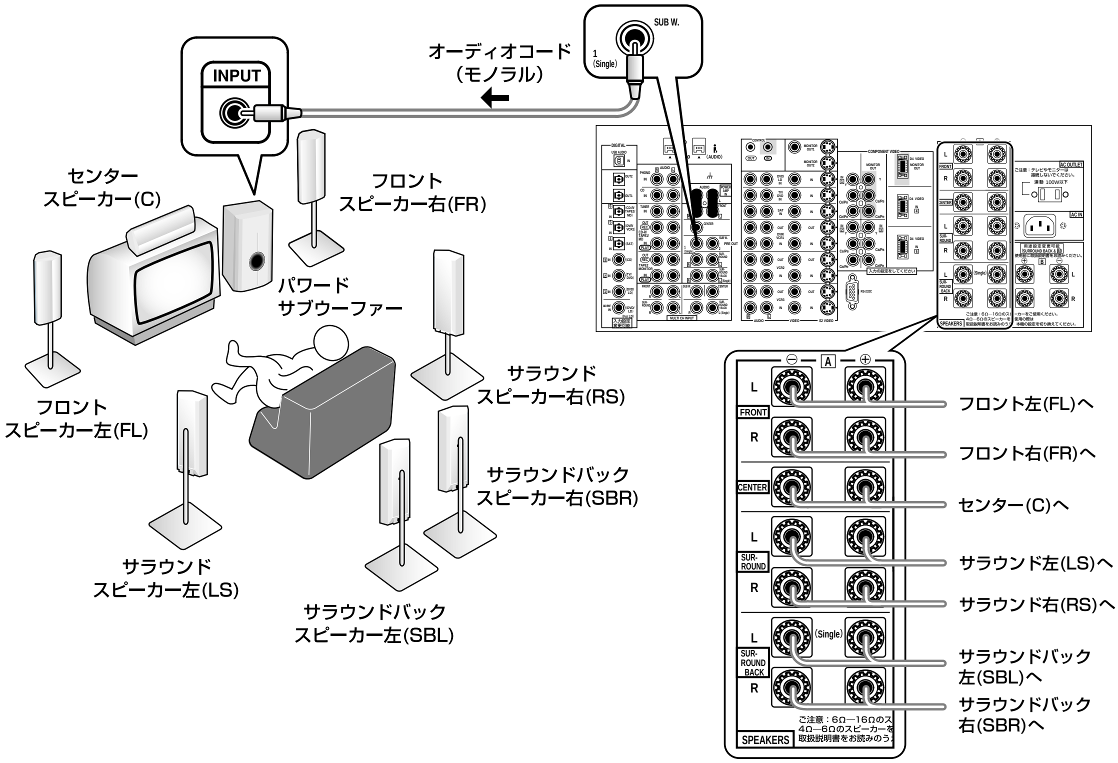
メモ

- お持ちのDVDプレーヤーのデジタル出力が光端子のみの場合は、光ファイバーケーブルでいずれかの光入力端子に接続したあと、デジタル入力の設定(➡ P.63)を行ってください。
- 同軸ケーブルには、ビデオ(コンポジット)コードを使用できます。
- ビデオコードは、コンポジットの他にSビデオやコンポーネントなどの接続もできます。

ホームシアター入門ガイド

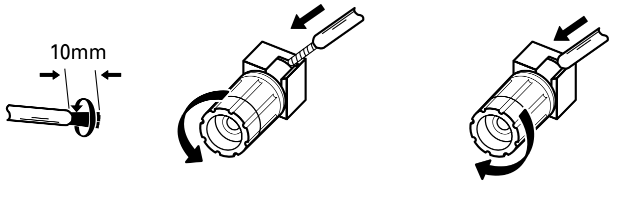
スピーカーの接続

7本のスピーカーとサブウーファーをつないだ例です。お持ちのスピーカーに合わせて（サラウンドバック、センタースピーカーがない場合でも）接続してサラウンドサウンドが楽しめます。

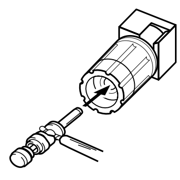


■SPEAKER(スピーカー)端子

① 線をねじる。 ② スピーカー端子をゆるめ、スピーカーコードを差し込む。 ③ スピーカー端子を締めつける。



バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください)。



注意

- **インピーダンスが4Ω～16Ωのスピーカーをご使用ください。**
- 4Ω以上6Ω未満のスピーカーをご使用になるときは「スピーカーインピーダンスの切り換え」(➡ P.103)を行ってください。
- スピーカーと本機の⊕および⊖ 端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕ および⊖ が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

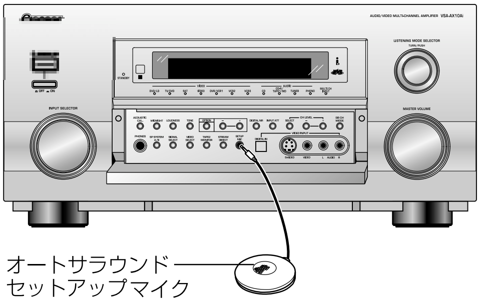
メモ

- 各機器の接続が終わったら、電源コードをコンセントへ差し込みます(➡ P.38)。
- スピーカーの配置については P.31 ～ P.32 をご覧ください 。

Step2 設定する

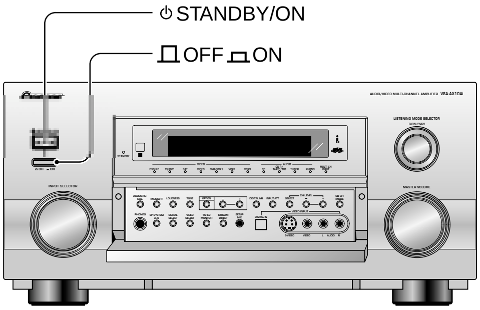
サラウンドの自動設定(Auto Surround Setup)

サラウンドの自動設定について、詳細は「Auto Surround Setup」（➡ P.40）をご覧ください。



1 オートサラウンドセットアップマイクを接続／設置する

三脚や台などを使って、リスニングポジションの耳の位置へ水平にマイクを設置します。



2 本機とテレビの電源を入れる

本体の[OFF/ON]ボタンを押してから[STANDBY/ON]ボタンを押します。

メモ

- サブウーファーを接続しているときは、測定のためサブウーファーの電源を入れてボリュームレベルを適度に上げておいてください。



3 テレビに本機のメニュー画面を表示させる

ＡＶアンプボタンを押してからシステムセットアップボタンを押します。

メモ

- システムセットアップボタンを押したあとに、テレビにメニュー画面が表示されるようテレビ側の入力切り換えを合わせてください。



4 オートサラウンドセットアップを開始する

次ページの画面に従って進めます。

メニュー操作は⬆ ⬇ ボタンでカーソルを移動して、決定ボタンで決定します。

注意 測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

```
System Setup
►[ Auto Surround Setup ]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]
```

決定 ⇒

```
Auto Surround Setup
► Speaker System Select
◄[ Normal Surround ]►
SP-B:        [ Second Zone ]
X–curve      [ ON ]
[Go Next]
[Return]
```

決定 ⇒

```
Auto Surround Setup
Speaker System Select
[ Normal Surround ]
SP-B:        [ Second Zone ]
X–curve      [ ON ]
► [Go Next]
[Return]
```

⇓ 決定

```
Auto Surround Setup
•Connect microphone
•Please be quiet
•Move obstacles away
•If you have a subwoofer
 turn power on and
 turn volume up
► [Start]
[Cancel]
```

[Start]を選んで決定ボタンを押すと、測定を開始します。

✎メモ

正確な測定のため、測定のときは以下の点に注意してください。

自動設定時における注意事項

- 付属の設定用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。（TVモニターの近くには設置しないでください）
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。
- サブウーファーを接続している場合は電源を入れてボリュームを上げておいてください。

```
Check!!
FRONT        [ YES ]
CENTER       [ YES ]
SURROUND     [ YES ]
SURR BACK    [ YES×2]
SUB WOOFER   [ YES ]
► [OK,Go Next]
[Retry]
[ERR→Fix SP.]
[Return to Menu]
```

5 スピーカーあり／なしの確認をする

測定開始から１分程で左の「Check!!」画面が表示されます。

[OK,Go Next]を選んで決定**ボタン**を押すと、測定を再開します。

ERRと表示されたときは「オートセットアップ（自動音場補正）のOSD画面メッセージの意味」（➡ P.132 ）をご覧ください。

```
Auto Surround Setup
!! Complete !!
►[ Data Copy ]
[ Check ]
[ Return ]
```



6 オートセットアップを終了する

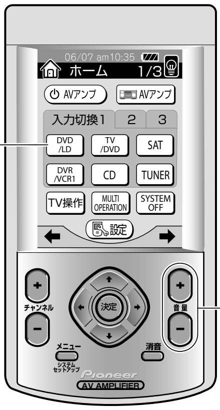
左の画面が表示されたら、オートサラウンドセットアップは完了です。測定結果を確認したいときは「3）測定結果を確認する」（➡ P.43 ）をご覧ください。確認しないときはシステムセットアップボタンを押して、メニュー操作を終了します。

✎メモ

- もしオートサラウンドセットアップの途中でエラー画面が出るなどうまくいかなかったときは、「Auto Surround Setup（サラウンドの自動設定）」（➡ P.40 ）か「オートサラウンドセットアップによる設定がうまくいかない」（➡ P.131 ）をご確認ください。
- Advanced MCACC 機能にて、部屋の残響特性を考慮した、より高度な補正を行いたいときは[Professional]で補正を行ってください（➡ P.55 ）。

Step3 再生する

接続した機器の再生



1 DVDプレーヤーの電源を入れる

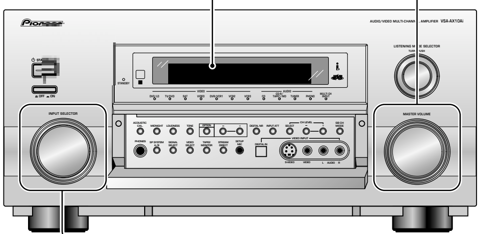
2 入力ファンクションを切り換える

リモコンの入力切換1の「DVD/LD」ボタンまたは本体のINPUT SELECTORを使ってディスプレイの表示を切り換え、「DVD/LD」を選びます。

3 DVDを再生する

4 音量を調節する

リモコンの音量ボタンまたは本体のMASTER VOLUMEを使って、−80dB（最小）から＋12dB（最大）で調節できます。

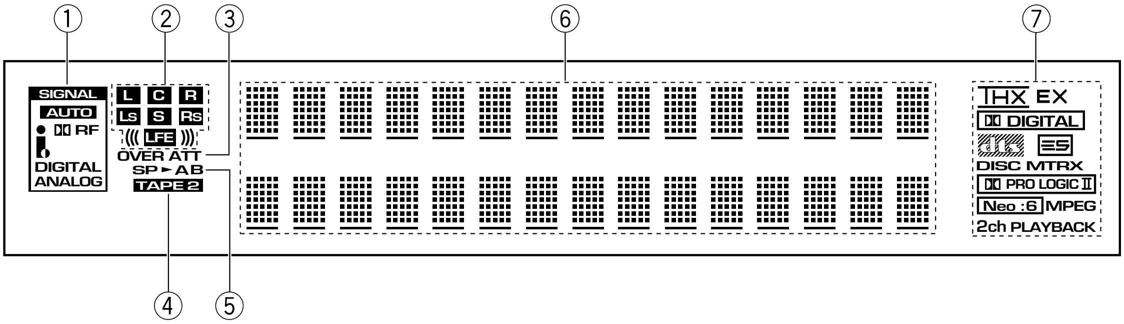


メモ

- 本機を使っての再生には、様々な機能があります。「基本操作」（➡ P.74）、「応用操作」（➡ P.95）をご覧ください。

これで入門ガイドは終了です。
もし本機の接続、設定、操作で困ったときは、「故障？ちょっと調べてみてください」（➡ P.127）もご覧ください。

ディスプレイ



① **SIGNAL SELECTインジケーター（➡ P.79）**
現在選択されている機器の入力信号の種類が点灯します。

② **プログラムフォーマットインジケーター**
DDDIGITAL、DTS信号、MPEG-2 AACなどの圧縮デジタル音声やDVDオーディオ、SACDが入力されたときにソースに含まれるチャンネルの情報を点灯します。
L:左フロントチャンネル
C:センターチャンネル
R:右フロントチャンネル
LS:左サラウンドチャンネル
S:サラウンドチャンネル（モノラル）
RS:右サラウンドチャンネル

LFE: Low Frequency Effect（超低音の効果音）チャンネル

(((　))):実際にLFE信号が入ってきたときに点灯します。

「6.1再生検出信号」の入ったソースが再生されると「**LS**」「**S**」「**RS**」の3つのインジケーターが点灯します。

③ **アナログ信号レベルインジケーター（➡ P.98）**
OVER:アナログ入力信号のレベルが高すぎるときに点灯します。
ATT:INPUT ATTモードがONのときに点灯します。

④ **TAPE2インジケーター（➡ P.99）**
TAPE2 MONITOR機能がONのときに点灯します。

⑤ **スピーカーインジケーター（➡ P.100）**
現在選択されているスピーカーシステムが点灯します。

⑥ **キャラクター文字表示部**
ボリュームレベルやリスニングモードなどの情報を表示します。

⑦ **デジタルフォーマットインジケーター（➡ P.120 ～ P.123）**

入力信号を示すインジケーター

DD DIGITAL
ドルビーデジタル信号入力時に点灯
dts
dts信号入力時に点灯
MPEG
MPEG-2 AAC信号入力時に点灯

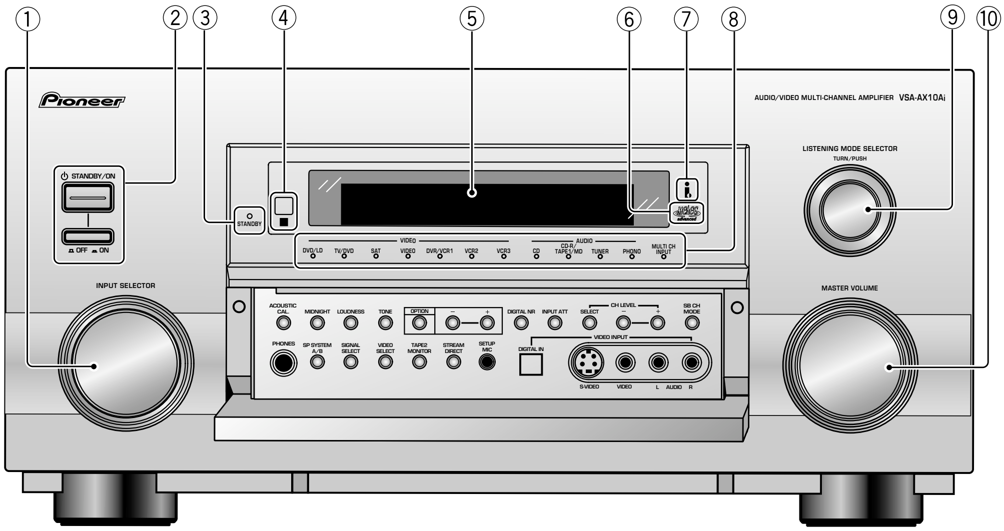
実際に行われている処理を示す

THX
HOME THXモード選択時に点灯
EX
EXマトリックス処理を行っているときに点灯
ES
ESデコード（DTSディスクリートまたはDTSマトリックス）処理しているときに点灯

EX、ES信号が入力されても実際にEX、ES処理がされていないときは点灯しません。入力信号がEX、ES信号のときは、「**LS**」「**S**」「**RS**」の3つのインジケーターが点灯します。

DISC
DTSディスクリート6.1処理しているときに点灯
MTRX
DTSマトリックス6.1処理しているときに点灯
DD PRO LOGIC II
DDプロロジックII処理またはDDプロロジックIIx処理をしているときに点灯
Neo :6
2chソースをNeo:6処理しているときに点灯
2ch PLAYBACK
再生出力がフロント2ch（設定によってはサブウーファーも含む）のみの場合と、ヘッドホン挿入時に点灯

フロントパネル



① INPUT SELECTOR
入力ソースを選択します。

② ▮OFF▂ON ボタン(主電源)
このボタンが OFF(▮)の状態ではフロントパネルおよびリモコンでの操作ができません。

⏻STANDBY/ON ボタン
本機の電源を入れたり、スタンバイモードにします。

③ STANDBY インジケーター
スタンバイモード時に点灯します。

④ リモコン受光部（➡ 下記参照）
リモコン信号はここで受信されます。

⑤ ディスプレイ （➡ P.13 ）

⑥ MCACC インジケーター （➡ P.52 ）
Acoustic Cal EQがONのときに点灯します。また、音場補正の自動測定中も点灯します。

⑦ i.LINK インジケーター
i.LINKケーブルで接続されているi.LINK対応機器が選ばれているときに点灯します。

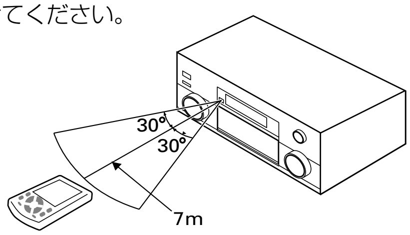
⑧ 入力ファンクションインジケーター
選択している入力ファンクションのインジケーターが点灯します。入力設定をしていない i.LINK 対応機器またはUSB入力が選ばれている場合は点灯しません。

⑨ LISTENING MODE SELECTOR
(➡ P.83 P.84)
リスニングモードを選択します。リスニングモードによっては押して選ぶモードもあります。

⑩ MASTER VOLUME
本機の音量を調節します。

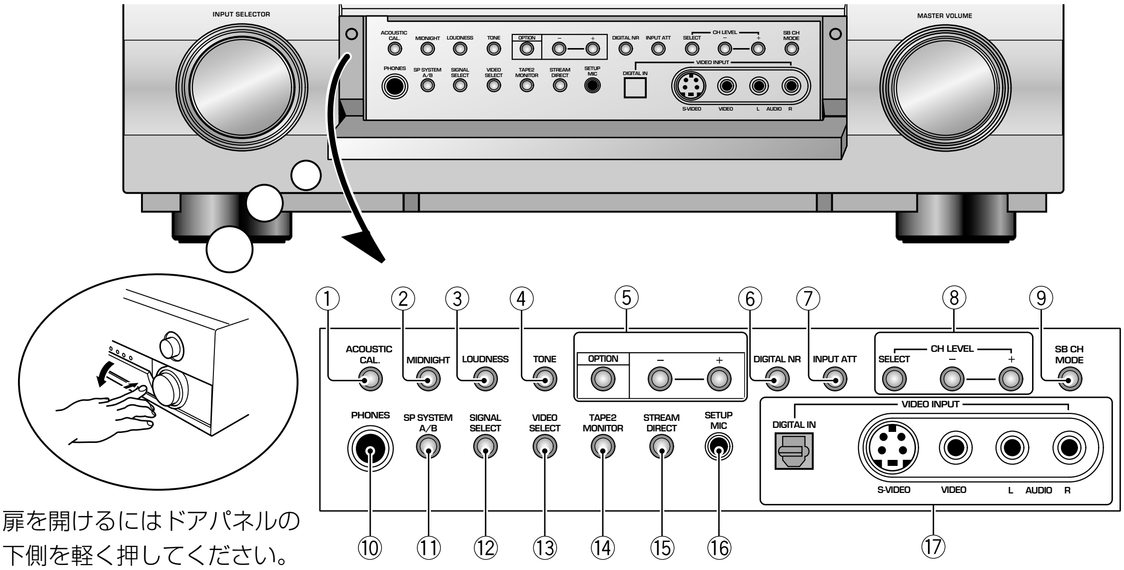
リモコンの操作範囲

本機をリモコンで操作するときは、リモコンをフロントパネルのリモコン受光部に向けてください。



- リモコンと本機との間に障害物があったり、リモコン受光部との角度が悪いと操作ができない場合があります。
- リモコン受光部に直射日光や蛍光灯などの強い光が当たると誤動作することがあります。
- 赤外線を発射する機器の近くで本機を使用したり、赤外線を利用したほかのリモコン装置を使用したりすると、本機が誤動作することがあります。逆にこのリモコンを操作すると、他の機器を誤動作させることもあります。

フロントパネルドア内部



扉を開けるにはドアパネルの
下側を軽く押してください。

① ACOUSTIC CAL.ボタン (➡ P.78)
「視聴環境の周波数特性の補正」での設定をON/OFFします。

② MIDNIGHTボタン (➡ P.90)
ミッドナイトリスニング機能をON/OFFします。

③ LOUDNESSボタン (➡ P.91)
ラウドネス機能をON/OFFします。

④ TONEボタン (➡ P.91)

⑤ OPTIONボタン
トーンコントロールやサウンドディレイ機能、ADVANCEDモードのエフェクトレベルなどの各機能を設定するときに押します。

＋/－ボタン
OPTIONボタンで選択された各機能を設定します。

⑥ DIGITAL NRボタン (➡ P.90)
デジタルノイズリダクションをON/OFFします。

⑦ INPUT ATTボタン (➡ P.98)
アナログ信号の入力レベルを減衰させるときに押します。

⑧ CH LEVEL (➡ P.50)

SELECTボタン
出力レベルを調整するスピーカーを選択するときに押します。

＋/－ボタン
チャンネルレベルを調整します。

⑨ SB CH MODEボタン(➡ P.81)
サラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFFを選択します。また、サラウンドバックスピーカーをNO(無し)で設定しているときは、バーチャルサラウンドバック機能のON/AUTO/OFFを選択します。

⑩ PHONES(ヘッドホン)端子
ヘッドホンを差し込む端子です。ヘッドホンを使用すると、スピーカーから音声は再生されません。

⑪ SP SYSTEM A/Bボタン (➡ P.100)
スピーカーシステムのAとBを切り換えます。

⑫ SIGNAL SELECTボタン (➡ P.79 P.80)
入力信号の種類(i.LINK接続された機器/DIGITAL/ANALOGなど)を切り換えるとき押します。
MULTI CH INPUTまたはUSB入力については再生チャンネル数を切り換えます。

⑬ VIDEO SELECTボタン (➡ P.102)
音楽を聞きながら他のファンクションのビデオ映像をみたいときに押します。

⑭ TAPE2 MONITORボタン (➡ P.99)
TAPE2 MONITOR入力端子に接続されているテープデッキなどの音声を再生するとき押します。

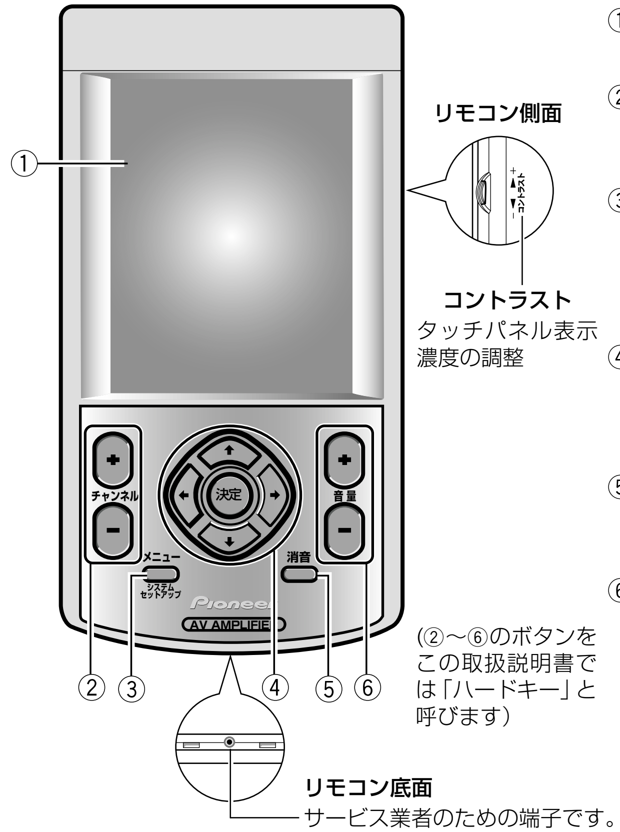
⑮ STREAM DIRECTボタン (➡ P.76)
ストリームダイレクトモードをON/OFFします。

⑯ SETUP MIC端子 (➡ P.10 P.40)
オートサラウンドセットアップを行う際、セットアップ用マイクを差し込みます。

⑰ VIDEO INPUT端子 (➡ P.23)
VIDEOファンクション用の接続端子です(光デジタル接続も可能です)。

各部の名称

リモコン



① LCD画面
表示されるボタンを押して操作します。

② **チャンネル+/−ボタン**
テレビやビデオ、DVDレコーダーのチャンネルを切り換えます。

③ **メニュー/システムセットアップボタン**
DVDやテレビなどのメニュー画面をテレビに表示させます。
ホーム画面やA V アンプ画面では、本機のシステムセットアップメニューが表示されます。

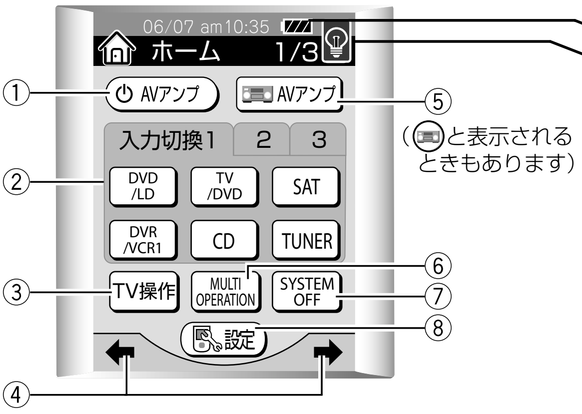
④ **⬆⬇⬅➡/決定(ENTER)ボタン**
テレビに表示されるシステムセットアップやメニュー画面で項目を選択したり、決定するとき押します。

⑤ **消音ボタン**
本機やテレビの音を一時的に消します。もう一度押すと消音は解除されます。

⑥ **音量+/−ボタン**
本機やテレビの音量を調節します。

ホーム画面　リモコンの画面を表示するにはLCD画面またはハードキー(上記参照)を押してください。

（ホーム画面は⬅➡で3つの画面を選びます。）



表示	意味／動作
(電池アイコン)	充電池の残量表示
(電球アイコン)	タッチパネルのバックライト点灯

① ⏻ AVアンプボタン
本機の電源を入れたり、スタンバイモードにします。

② **他機器操作ボタン (➡ P.109)**
リモコンで他機器を操作するとき、または本機の入力を切り換えるとき押します。④LCD画面切り換えボタンで3つの画面から選べます。

③ **TV操作ボタン**
TVを操作する画面に切り換わります。

④ **LCD画面切り換えボタン**
操作画面のページが複数あるときに前のページまたは次のページへ変わります。

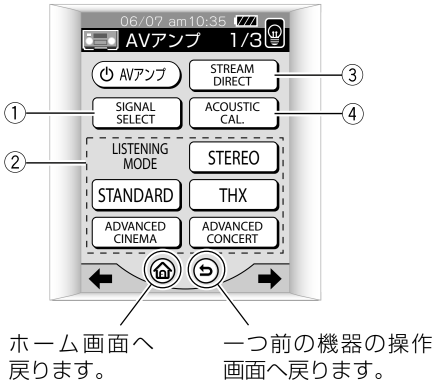
⑤ **AVアンプボタン**
LCD画面をAVアンプ画面に切り換え、リモコンをアンプ操作モードにします。

⑥ **MULTI OPERATIONボタン (➡ P.110)**
マルチオペレーションを実行するとき押します。

⑦ **SYSTEM OFFボタン (➡ P.113)**
あらかじめ設定したコマンドと、すべてのパイオニア機器の電源を切るとき押します。

⑧ **リモコン設定ボタン (➡ P.4 P.105 ～P.119)**
リモコンの各種設定に使用します。

AVアンプ画面　リモコンの画面を表示するにはLCD画面またはハードキー(前ページ参照)を押してください

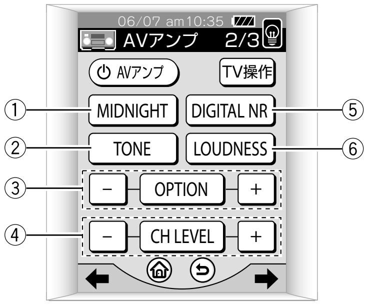


① SIGNAL SELECTボタン (➡ P.79 P.80)
入力信号の種類やチャンネル数を切り換えるとき押します。

② LISTENING MODEボタン (➡ P.83)
リスニングモードを選択するとき押します。

③ STREAM DIRECTボタン (➡ P.76)
ストリームダイレクトモードをON/OFFします。

④ ACOUSTIC CAL.ボタン(➡ P.78)
「視聴環境の周波数特性の補正」での設定をON(モード選択)/OFFします。



① MIDNIGHTボタン (➡ P.90)
ミッドナイトリスニング機能をON/OFFします。

② TONEボタン (➡ P.91)
トーンコントロールを設定するときに押します。

③ OPTIONボタン
トーンコントロールやサウンドディレイ機能、ADVANCEDモードのエフェクトレベルなどの各機能を設定するときに押します。

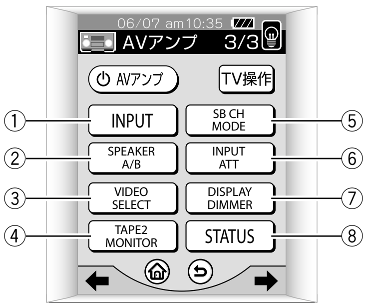
＋/－ボタン
OPTIONボタンで選択された各機能を設定します。

④ CH LEVELボタン (➡ P.50)
出力レベルを調整するスピーカーを選択するときに押します。

＋/－ボタン
チャンネルレベルを調整します。

⑤ DIGITAL NRボタン (➡ P.90)
デジタルノイズリダクションをON/OFFします。

⑥ LOUDNESSボタン (➡ P.91)
ラウドネス機能をON/OFFします。



① INPUTボタン (➡ P.74)
入力ファンクションを順次切り換えます。

② SPEAKER A/Bボタン (➡ P.100)
スピーカーシステムのAとBを切り換えます。

③ VIDEO SELECTボタン (➡ P.102)
音楽を聞きながら他のファンクションのビデオ映像をみたいときに押します。

④ TAPE2 MONITORボタン (➡ P.99)
TAPE2 MONITOR入力端子に接続されているテープデッキなどの音声を再生するとき押します。

⑤ SB CH MODEボタン (➡ P.81)
サラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFFを選択します。また、サラウンドバックスピーカーをNO(無し)で設定しているときは、バーチャルサラウンドバック機能のON/AUTO/OFFを選択します。

⑥ INPUT ATTボタン (➡ P.98)
アナログ信号の入力レベルを減衰させるときに押します。

⑦ DISPLAY DIMMERボタン (➡ P.102)
ディスプレイの明るさを調整するとき押します。

⑧ STATUSボタン (➡ P.104)
MIDNIGHTやDIGITAL NRなど選択されている機能の情報を、ディスプレイとOSDに表示させて確認したいときに押します。

リアパネルの全体図

✎**メモ**

ショートピンは抜かないでください。
(➡ P.36)

アナログ音声入出力端子(➡ P.26)

i.LINK端子(➡ P.28)

POWER AMP IN端子(➡ P.36)

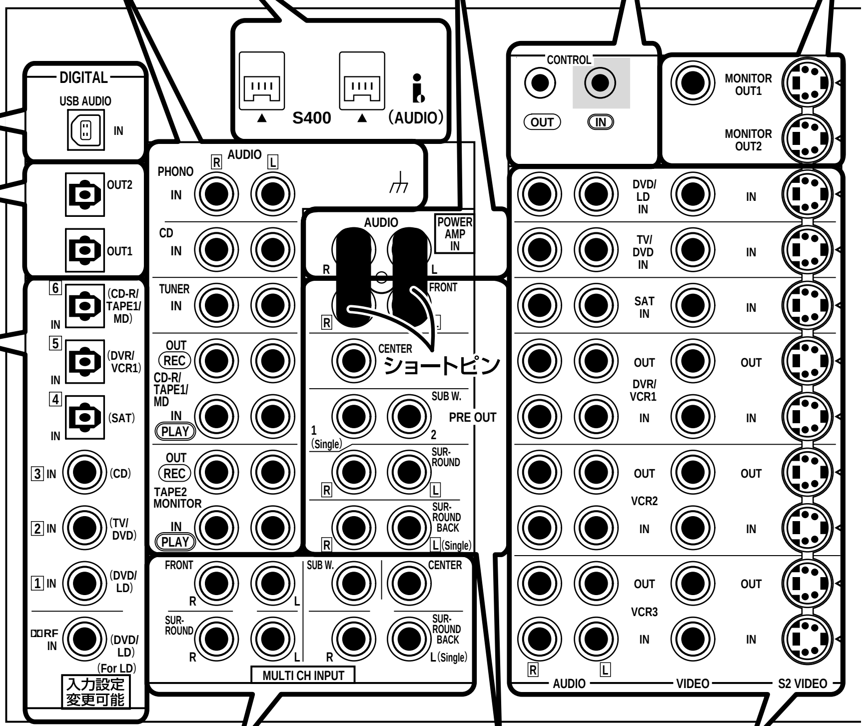
CONTROL IN/OUT端子(➡ P.37)

MONITOR OUT端子(➡ P.20)

USBオーディオ端子(➡ P.27)

デジタル出力端子(➡ P.26)

デジタル入力端子(➡ P.21 ～ P.23 P.27)
どのデジタル入力端子をどの機器に使用するかは自由に変更できますが、端子に表示された機器と違う機器を接続するときは入力設定が必要です。(➡ P.63)



MULTI CH INPUT端子(➡ P.21 P.22 P.27)

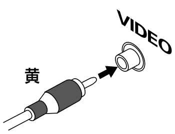
PRE OUT端子(➡ P.36)

AV機器入出力端子(➡ P.20 ～ P.23)

接続コード/ケーブルについて　(コード/ケーブルは全て別売りです)

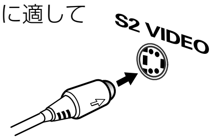
■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。



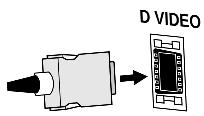
■Sビデオケーブル

輝度信号(Y)と色信号(C)を分離して接続することができ、コンポジットよりも高品位な映像品質を楽しむのに適しています。



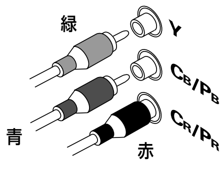
■D端子ケーブル

映像信号と映像コントロール信号を、1つのコネクタで接続できるケーブルです。コンポーネント映像ケーブルと同等の映像品質を楽しめます。



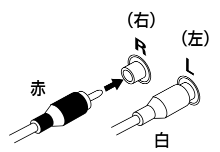
■コンポーネント映像ケーブル

Y、C_B/P_B、C_R/P_Rの3つの信号に分離されており、Sビデオケーブルよりも高品位な映像品質を楽しむのに適しています(ビデオコード3本での接続も可能です)。



■オーディオコード

オーディオ機器の接続に使用します。

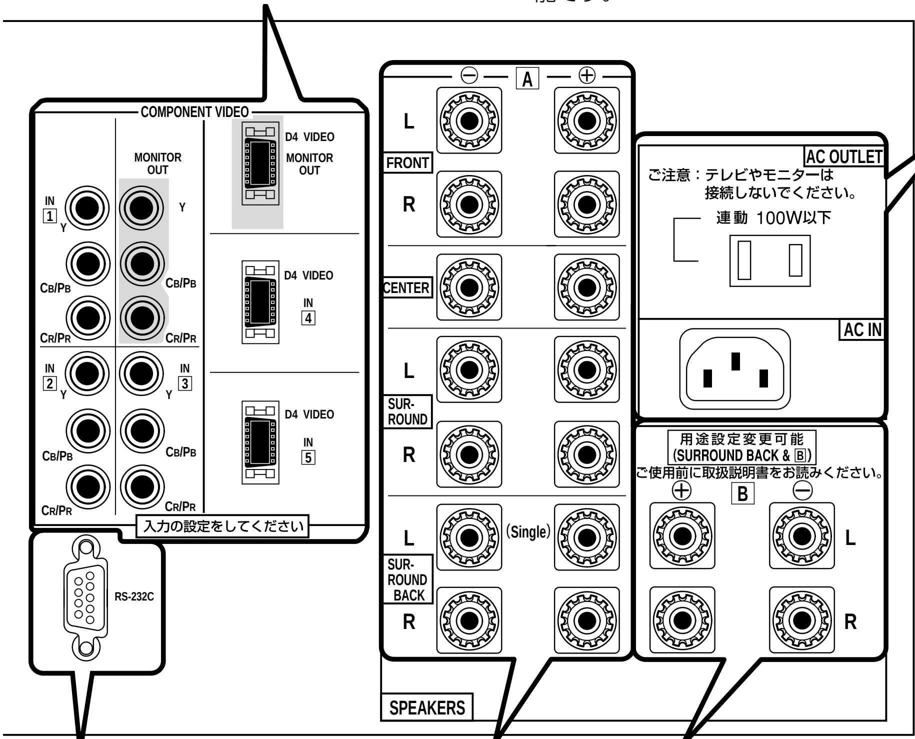


警告 機器の接続、変更を行う場合は必ず接続するすべての機器の電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。電源コードは最後に接続してください。

COMPONENT VIDEO入/出力端子
(➡ P.25)
この端子に機器を接続するときは入力設定が必要です(➡ P.64)。

メモ

- 本機リアパネルのS 端子にはS2 VIDEOと書かれていますが、S、S1、S2と書かれた機器すべてと接続が可能です。また同様に本機のD端子にはD4 VIDEOと書かれていますが、D1、D2、D3、D4と書かれた機器すべてと接続が可能です。



AC OUTLET
AC IN
(➡ P.38)

注意
必ず一番最後に接続してください。

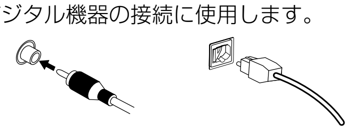
RS-232C端子
(➡ P.61)

スピーカー端子A
(メインシステム)
(➡ P.30)

スピーカー端子B
別エリアでのステレオ再生(➡ P.33)
2つのスピーカーシステムを両立させる(➡ P.35)

■同軸ケーブル/光ファイバーケーブル

デジタル機器の接続に使用します。



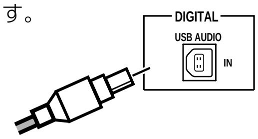
同軸ケーブル
(またはビデオコード)

光ファイバーケーブル

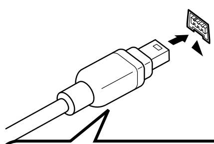
- 接続の際は端子の向きを合わせてください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉らなくなることがあります。
- 長さは3m以下のものを使用してください。
- プラグにホコリが付着したときは、柔らかい布で拭いてから接続してください。

■USBコード

パソコン側がAタイプ、本機側がBタイプ(4ピン)のケーブルを使用します。



■i.LINKケーブル

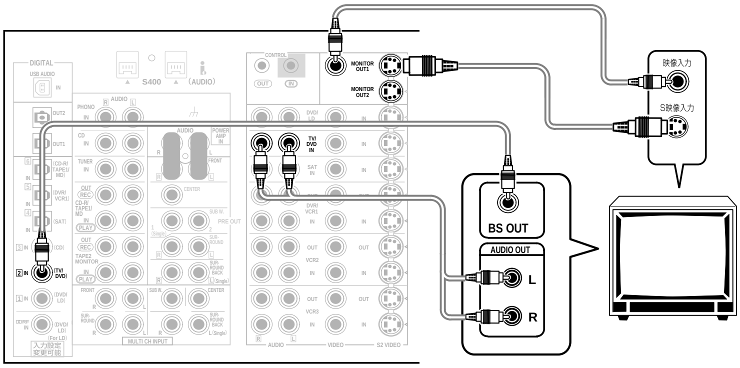


ケーブルに表示されている⬆を下側にし、本体に表記されている▲と合わせてまっすぐ挿入してください。
斜めから無理に挿入すると端子が故障する恐れがあります。

本機は最大転送速度が400Mbpsのため、S400対応で長さ3.5m以下の4ピンi.LINKケーブルを使用します。
※推奨ケーブル：オーディオテクニカ製
AT-DVC44/1.0(長さ1.0m)
AT-DVC44/1.5(長さ1.5m)
AT-DVC44/2.0(長さ2.0m)
AT-DVC44/3.0(長さ3.0m)

TVの接続

「映像信号について」(➡ P.24)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.18)をご覧ください。
コンポーネント端子やD 端子で接続するときは「映像信号のコンポーネントビデオ接続」(➡ P.25)をご覧ください。
音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(➡ P.63)。

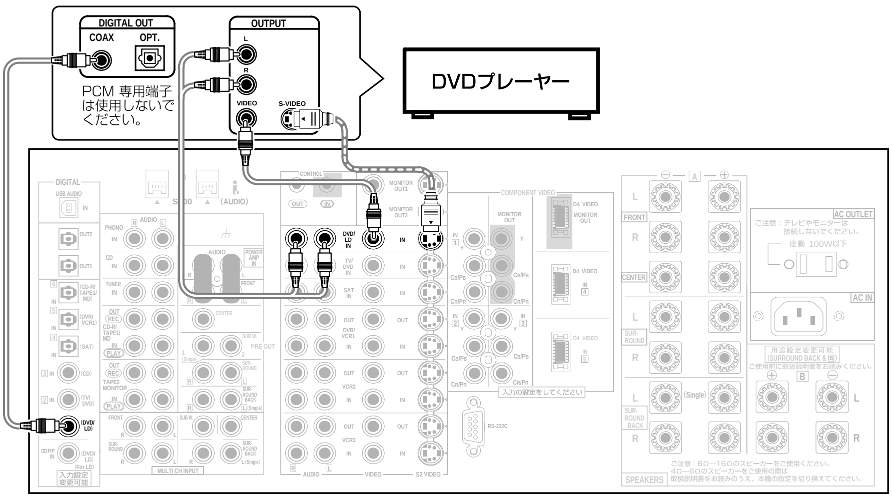


✎メモ

- TVからの出力音声を聴くときは、TVの入力を本機ではなく見たいチャンネルに切り換えてください。

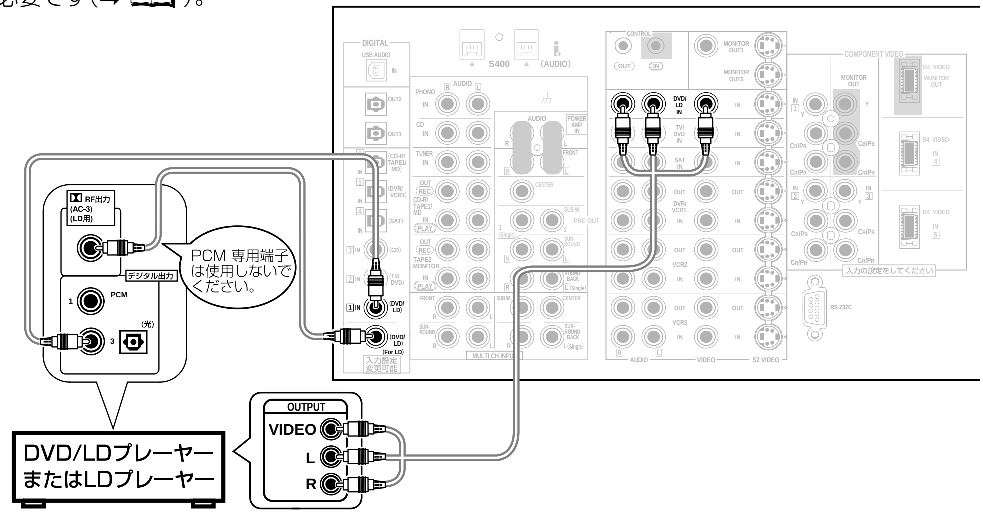
DVDプレーヤーの接続

i.LINK端子を使った接続については、「i.LINK対応機器の接続」(➡ P.28)をご覧ください。
「映像信号について」(➡ P.24)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.18)をご覧ください。
コンポーネント端子やD 端子で接続するときは「映像信号のコンポーネントビデオ接続」(➡ P.25)をご覧ください。
音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(➡ P.63)。



DVD/LDコンパチブルプレーヤーまたはLDプレーヤーの接続

DVD/LDプレーヤーまたはLDプレーヤーにDDRF出力端子がある場合は、DDRF端子も接続します。これは、ドルビーデジタルLDソフトの再生に必要です。また、LDのアナログオーディオ信号はデジタル出力されませんのでアナログオーディオ接続も行ってください。
録画を前提とする場合は、コンポジットかSビデオのどちらかの映像およびアナログ音声を接続してください。
音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です（➡ P.63 ）。

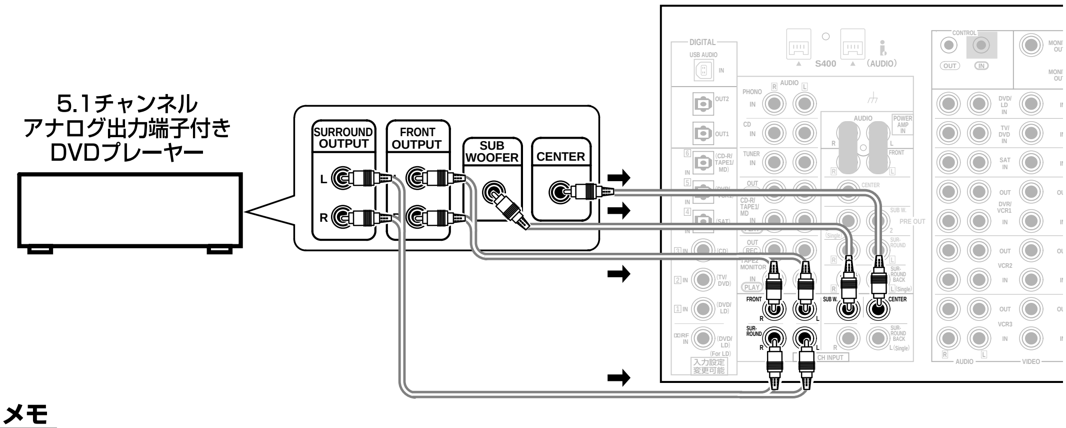


✎メモ

- DDRF端子の接続は同軸ケーブルで行います。
- DDRF端子に接続した機器を再生するときは、SIGNAL SELECTボタンで入力信号をDDRFに切り換えてください（DVD/LD入力以外でDDRF信号を楽しむためには「デジタル入力の設定」が必要です（➡ P.63 ）。

DVDオーディオ/SACDプレーヤーのアナログ接続

DVDプレーヤーに5.1chアナログ出力端子がある場合は、本機のMULTI CH INPUT端子と接続してDVDオーディオ再生を行うこともできます。MULTI CH INPUT端子に接続した音声を再生するには、入力を「MULTI CH INPUT」に切り換えてください。「MULTI CH INPUT」入力で映像も同時に楽しむには「Video Assign（ビデオ入力の設定）」（➡ P.65 ）をご覧ください。

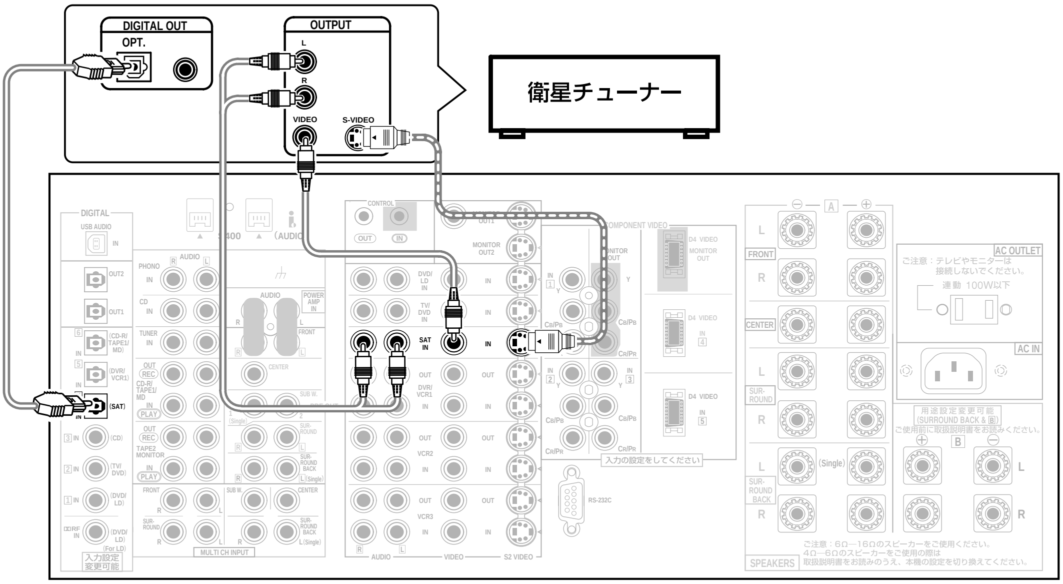


✎メモ

- DVDプレーヤー側の設定で、DVD 5.1chアナログ出力をONにしないと正しく音が出ません。詳しくはDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

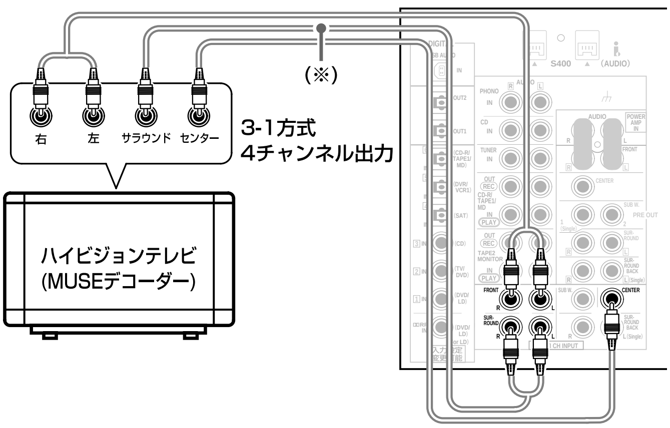
BS/CSチューナーの接続

「映像信号について」(➡ P.24)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.18)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネントビデオ接続」(➡ P.25)をご覧ください。
録画を前提とする場合は、コンポジットかSビデオのどちらかの映像およびアナログ音声を接続してください。
音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(➡ P.63)。



ハイビジョンテレビ(またはMUSEデコーダーの3-1方式4チャンネル放送)との接続

本機裏面のMULTI CH IN端子に、オーディオコードで接続します。
この端子に接続した機器の音声を再生するには、入力を「MULTI CH INPUT」に切り換えてください。



✎メモ

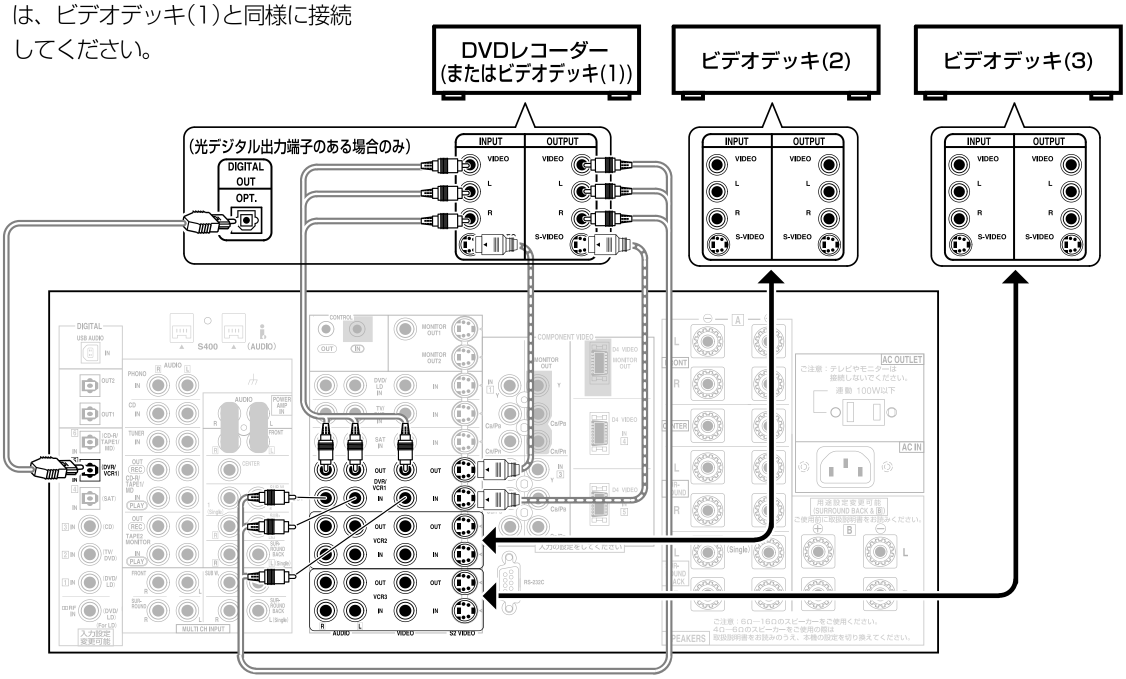
- サラウンドの接続(※)は1P→2Pの分岐コード(モノラル→ステレオ)をお使いください。(ハイビジョンテレビ(MUSEデコーダー)側にサラウンド右/左の出力がある場合は、通常のステレオオーディオコードをお使いください)

映像機器(ビデオデッキやDVDレコーダー)の接続

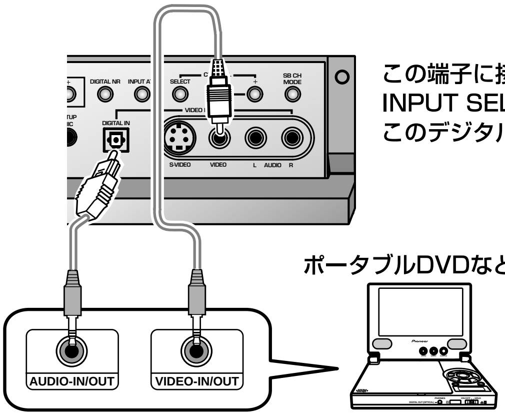
「映像信号について」(➡ P.24)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.18)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネントビデオ接続」(➡ P.25)をご覧ください。
録画を前提とする場合は、コンポジットかSビデオのどちらかの映像およびアナログ音声を接続してください。
音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(➡ P.63)。

メモ

- 接続図の中のビデオデッキ(2)(3)は、ビデオデッキ(1)と同様に接続してください。



■前面(「VIDEO」入力)の接続



この端子に接続された機器を再生するときはINPUT SELECTORを「VIDEO」にします。
このデジタル入力端子は「VIDEO」入力専用です。

メモ

- ポータブルDVDを接続するときはミニプラグを使用します。

映像信号について(パイオニアビデオコンバーター)

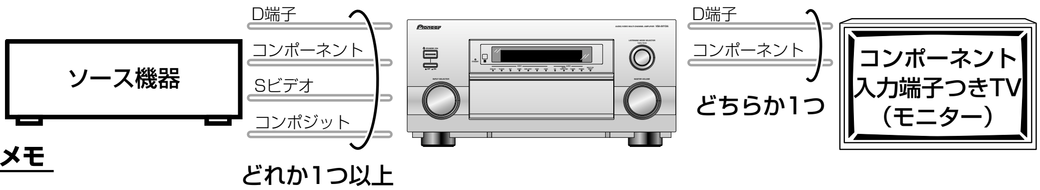
本機は入力された映像信号を異なる種類の信号に変換することのできるビデオコンバーターを搭載していますので以下のようにビデオ機器との接続方法が選べます。各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.18)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは「映像信号のコンポーネントビデオ接続」(➡ P.25)をご覧ください。

✎メモ

- 異なる種類の信号に変換可能なのはNTSC信号のみとなります。PAL信号は変換できませんのでビデオ機器とモニターTVを接続するときは同じ接続コード/ケーブルをお使いください。

モニターTVをコンポーネント端子またはD端子で接続する場合

ソース機器との接続は4種類の中から自由に選べます。



✎メモ

- コンポーネントかD端子でソース機器を接続した場合は、入力設定をしないと映像が出ません(➡ P.64)。
- コンポーネントやD端子など複数のケーブルでソース機器を接続している場合、入力は①D端子またはコンポーネント、②Sビデオ、③コンポジットの順で優先されますが、コンポーネントビデオ入力の設定(➡ P.64)をしていないとSビデオまたはコンポジットの映像信号が出力されます。
- モニターTVをコンポーネントかD端子で接続した場合は、オーバーレイ表示(モニターTV画面の下側に操作内容などを示す表示)が出力されません。

モニターTVをビデオ(コンポジット)端子またはSビデオ端子で接続する場合

ソース機器はビデオ(コンポジット)かSビデオのどちらかを接続してください。

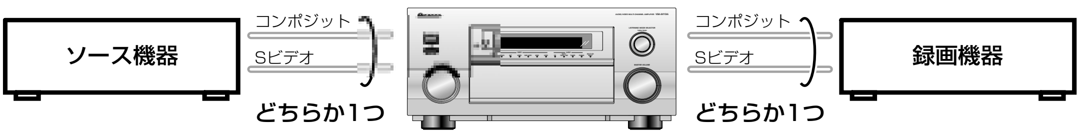


✎メモ

- モニターTVをコンポジットまたはSビデオで接続したときは、ソース機器をコンポーネントやD端子で接続しても、映像は出ません。
- Sビデオとコンポジットの両方でソース機器を接続した場合は、Sビデオ入力が優先されます。
- この接続でソース機器とモニターTVが同じ種類のケーブル/コードで接続されているときのみ、オーバーレイ表示(モニターTV画面の下側に操作内容などを示す表示)が出力されます。

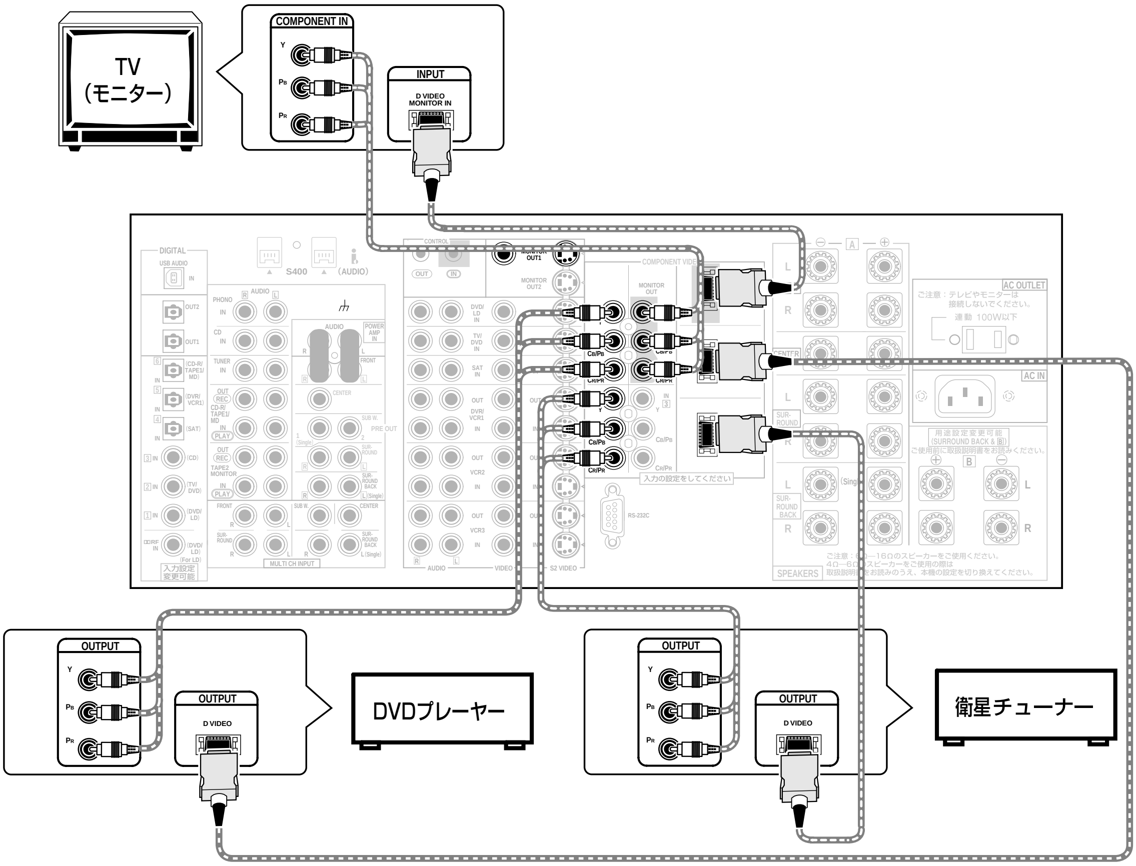
録画機器と接続する場合

録画を前提として接続する場合は、ソース機器も必ずコンポジットかSビデオのどちらかを接続する必要があります。



映像信号のコンポーネントビデオ接続

コンポーネント端子やD端子で接続すると、コンポジットビデオやSビデオ端子で接続したときよりも高品位な映像品質をお楽しみいただくことができます。「映像信号について」(➡ P.24)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。コンポーネント端子やD端子で接続するときは、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(➡ P.64)。録画を前提とする場合は、コンポジットかSビデオのどちらかの映像およびアナログ音声を接続してください。

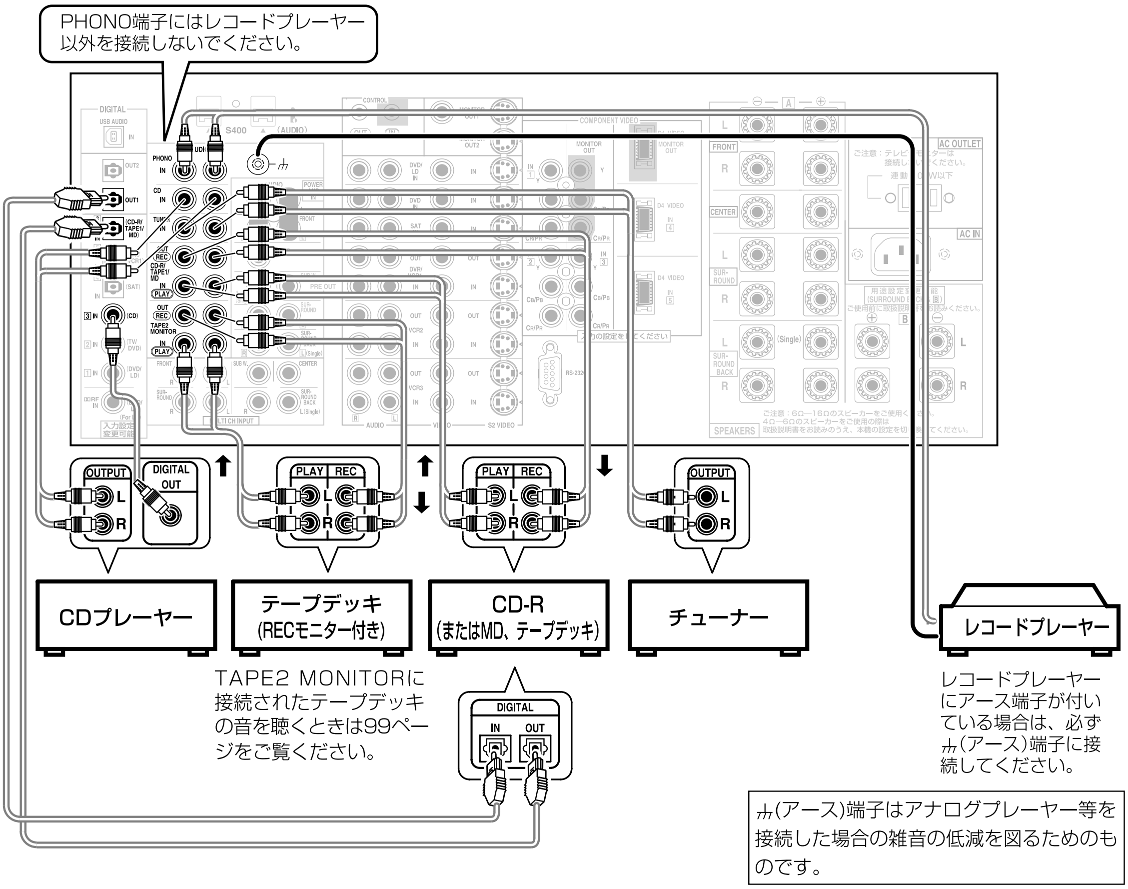


✎メモ

- コンポーネント端子やD端子で接続するときは、DVDプレーヤー側でコンポーネントビデオの出力設定が必要な場合があります。
- TVによっては、コンポーネント端子で接続したときにOSD画面(セットアップ画面など)が表示されなくなる場合があります。そのようなときは、カラーバースト設定(➡ P.138)をOFFに切り換えてください。
- コンポーネント端子やD端子で接続したときはオーバーレイ表示(モニターTV画面の下側に操作内容などを示す表示)が出力されません。

オーディオ機器の接続

✎メモ
- 音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(➡ P.63)。



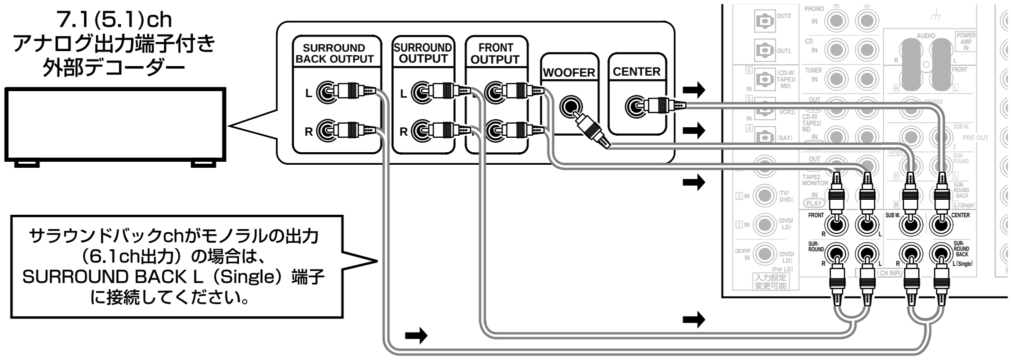
✎メモ
- カセットデッキを設置する場所によっては、再生したときに雑音などが発生する場合があります。これはアンプのトランスによるリーケージフラックス(漏れ磁束)の影響によるものです。このようなときには、設置する場所を変えるか、アンプから離して設置してください。
- REC OUT端子からはアナログ入力された信号がそのまま出力されます。アナログ録音するときは録音機器とREC OUT端子を接続して、ソース機器もアナログ接続してください。
- DIGITAL OUT端子からはデジタル入力された信号がそのまま出力されます。デジタル録音するときは録音機器とDIGITAL OUT端子を接続してソース機器もデジタル接続してください。

⚠ 注意

PHONO端子にはレコードプレーヤー以外接続しないでください。大音量を出力し、スピーカー等を破壊する恐れがあります。また、イコライザ内蔵レコードプレーヤーを接続する際はPHONO端子ではなくCD端子等をお使いください。

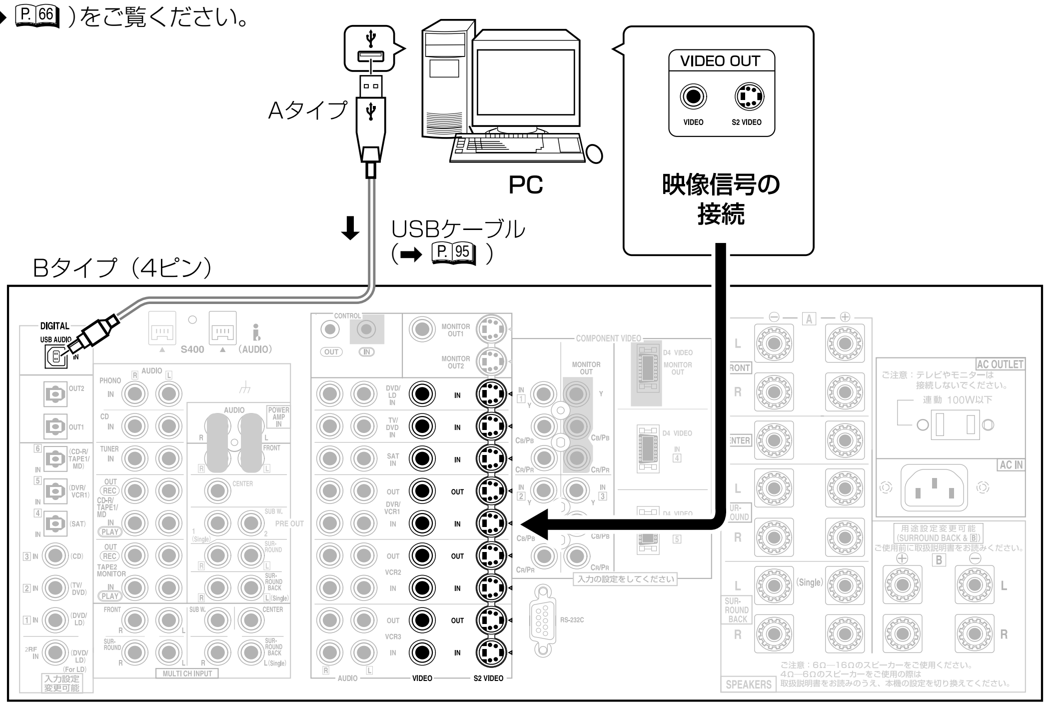
外部デコーダーのアナログ接続

マルチチャンネルアナログ出力端子(5.1chまたは7.1ch)を持つ外部デコーダーとの接続には、本機のMULTI CH INPUT端子を使用します。この端子に接続した機器の音声を再生するには、入力を「MULTI CH INPUT」に切り換えてください。「MULTI CH INPUT」入力で映像も同時に楽しむには「Video Assign(ビデオ入力の設定)」(➡ P.66)をご覧ください。



パソコンの接続(USB接続)

接続にはパソコン側がAタイプ、本機側がBタイプ(4ピン)のUSBケーブルを使用してください。接続後はドライバーのインストールが必要となります。詳細は「USBオーディオ再生(パソコンと組み合わせて使う)」(➡ P.95)をご覧ください。また、USBインターフェースでは映像信号は伝送されないため、USB入力で映像を楽しむには映像信号の接続と設定が必要です。「映像信号について」(➡ P.24)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択し、空いている入力ファンクションに接続してください。設定については「Video Assign(ビデオ入力の設定)」(➡ P.66)をご覧ください。



✎メモ

- USBハブおよびUSB延長ケーブル経由で接続したときは正しく動作しない場合があります。

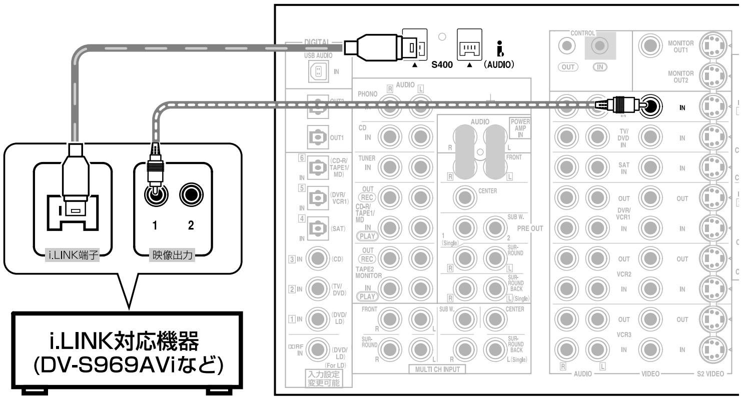
i.LINK 対応機器の接続

接続には、S400 対応の４ピン i.LINK ケーブルを使用してください（➡ P.19 ）。

i.LINK AUDIOインターフェースでは、映像信号は伝送されないため、ビデオ機器と接続する場合は映像信号の接続も必要になります。「映像信号について」（➡ P.24 ）をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。すでにその機器の映像信号が本機と接続されている場合は新たに接続する必要はありません。

接続後、「i.LINK 入力の設定」（➡ P.65 ）を行ってください。

必要に応じて再生機器側の出力設定を行ってください。詳しくは、再生機器側の取扱説明書を参照してください。



✎ **メモ**

- i.LINK ケーブルを接続するとき、i.LINK ケーブル側の金属部が i.LINK 端子以外の本体金属部に触れるとショートの原因となることがありますので十分注意してください。

i.LINK について

i.LINKとは、デジタル音声などのデータ転送や接続した機器に対して操作なども行えるシリアル転送方式のデジタルインターフェース IEEE1394 の呼称で、IEEE1394 は、米国電子電気技術協会（IEEE）によって標準化された国際標準規格です。i.LINK と i.LINK ロゴ は、ソニー株式会社の商標です。

本機は i.LINK AUDIO（A&M プロトコル）に対応しているので、本機と i.LINK 対応機器とを i.LINK ケーブルで接続すると、DVD オーディオや SACD などのマルチチャンネル音声も、１本のケーブルだけでデジタルでやり取りすることができます。また複数の i.LINK 対応機器をつないだときは、他の機器を介してつないでも、操作やデータのやりとりができます。このため接続順序は、あまり気にする必要はありません。

また本機で i.LINK 接続した DVD オーディオや SACD、CD の再生を行うとき、接続した再生機器が PQLS* または同様のレートコントロール機能に対応していれば、デジタル音声部分はジッターレスにて再生することができます。

＊PQLS（レートコントロール）
PQLS（Precision Quartz Lock System）とは、本機の高精度な水晶発振器を使用することで、ジッターのない状態にてデジタル / アナログ変換を行うことができる i.LINK インターフェース上のデジタルオーディオの伝送技術です。この技術を動作させるには、本機と PQLS または同様のレートコントロール機能に対応したプレーヤーとが、i.LINK 接続されている必要があります。

著作権保護システム

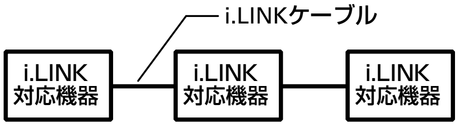
i.LINK 接続を通して DVD オーディオ、SACD、DVD（コピー自由なディスクは除く）の音声を再生するには、プレーヤーとアンプの双方が DTCP（Digital Transmission Content Protection）とよばれる著作権保護システムに対応している必要があります。DTCP はデータの暗号化と相手機器の認証からなるコピープロテクション技術です。本機は DTCP に対応しています。お手持ちのプレーヤーについてはプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

この機器のi.LINKインターフェースは、以下の規格に基づいて設計されています。
1) IEEE Std 1394a-2000, Standard for a High Performance Serial Bus
2) Audio and Music Data Transmission Protocol 2.0
この規格のAM824 sequence adaptation layersの中の、IEC60958 bitstream、DVD-Audio、SACDに対応しています。

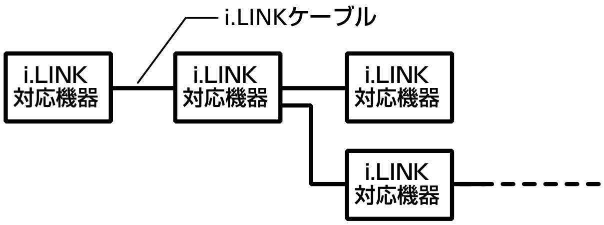
i.LINKネットワーク

下図のようにして複数のi.LINK機器を接続することができます。

デイジー・チェーン型(数珠つなぎ)で接続の場合は、最大17台まで接続できます。

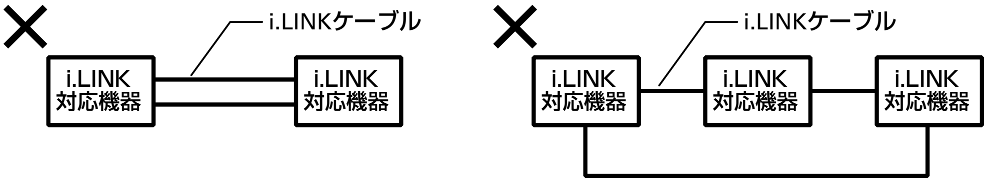


i.LINK端子が3個以上ある機器の場合、途中から分岐してツリー型に接続することもできます。ツリー型で接続の場合は、最大63台まで接続できます。



接続が輪(ループ)にならないように接続する。

デジタル信号は、接続したすべてのi.LINKケーブルに流れます。信号を出力した機器に同じ信号が戻らないよう、輪にならないようにつないでください。接続が輪(環状)になることを「ループ」と呼びます。



メモ

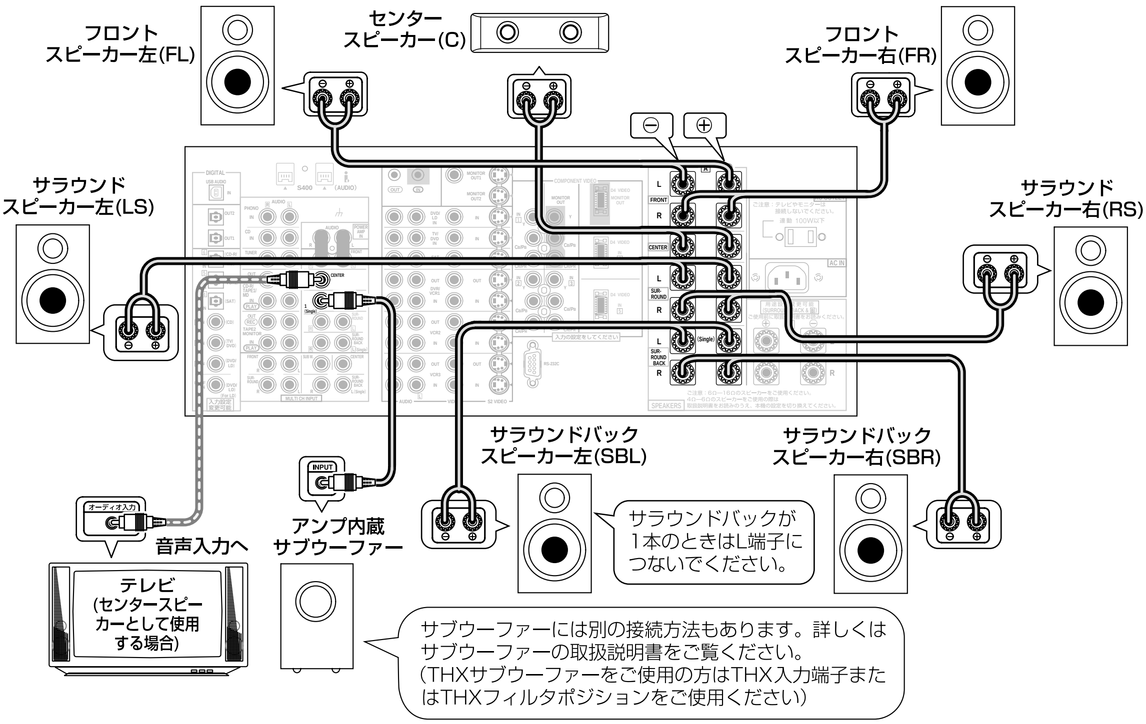
- i.LINKの伝送フォーマットには、本機のような「i.LINK AUDIO(A&Mプロトコル)」、BSデジタルのような「MPEG-2 TS」、DVDレコーダーやデジタルビデオのような「DV」といった種類があります。本機は「i.LINK AUDIO」フォーマットに対応しており、「MPEG-2 TS」や「DV」フォーマットには対応していないため、「MPEG-2 TS」や「DV」フォーマットに対応した機器との接続では音や映像は伝送されません。また、誤動作する場合もありますので「MPEG-2 TS」や「DV」フォーマットに対応した機器との接続はしないでください。
- i.LINK対応機器の再生中は、他の機器のi.LINKケーブルを外したり、新しい機器を接続したり、電源のオン/オフは行わないでください。
- i.LINK対応機器の中には、電源がスタンバイ状態やオフになっていると、データを中継できない機器があります。接続するi.LINK対応機器の取扱説明書もご覧ください。本機はスタンバイ状態のとき、i.LINKのデータを中継できません。
- i.LINK対応機器には、その機器が対応している最大データ転送速度がi.LINK端子の周辺に表記されています。i.LINKの最大データ転送速度は、約100/200/400Mbps*が定義されており、200MbpsのものはS200、400MbpsのものはS400と表記されます。本機のi.LINK最大データ転送速度は、400Mbpsです。S100やS200の機器をつないだ場合や、機器の仕様により、実際の転送速度が400Mbpsより遅くなる場合があります。できるだけ、最大データ転送速度が同じ機器どうしを並べて接続してください。

  * Mbps(メガビーピーエス)とは、「Mega bits per second」の略で、1秒間に通信できるデータの容量を示しています。400Mbpsでは、1秒間に400メガビットのデータを転送します。

- i.LINK機能は、すべてのi.LINK対応機器間での接続動作を保証するものではありません。i.LINK対応機器間でデータやコントロール信号がやりとりできるかどうかは、それぞれの機器の機能によって異なります。
- i.LINK接続時、コピーガードされた96kHz DVDビデオは48kHzにダウンサンプルされて再生されます。

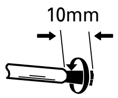
スピーカーの接続(基本編)

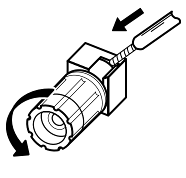
メインスピーカーシステムの接続にはスピーカー端子Ⓐを使います。本機でサラウンドを楽しむためには、7本のスピーカーとサブウーファーを接続することをおすすめします。
サラウンド用スピーカーを1組しか持っていない場合は、サラウンドバックではなくサラウンドに接続してください(サラウンドスピーカーを接続していないとサラウンドバックスピーカーから音を出す設定ができません)。

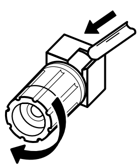


■SPEAKER(スピーカー)端子

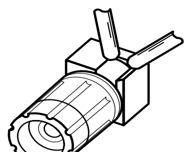
① 線をねじる。
② スピーカー端子をゆるめ、スピーカーコードを差し込む。
③ スピーカー端子を締めつける。







バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください)。



注意

- **インピーダンスが4Ω〜16Ωのスピーカーをご使用ください。**
- 4Ω以上6Ω未満のスピーカーをご使用になるときは「スピーカーインピーダンスの切り換え」(➡ P.103)を行ってください。
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

メモ

以下のようなときはスピーカー端子Ⓑの接続も必要になります。

- メインのリスニングルーム以外の場所(キッチンなど)でも聴きたいとき(この場合はステレオ再生になります)(➡ P.33)。
- 2つめのスピーカーシステムのサラウンドスピーカーとしてお使いになるとき(DVDオーディオ用のサラウンドスピーカーとしてのみお使いになるときなど)(➡ P.35)。

スピーカーの配置について

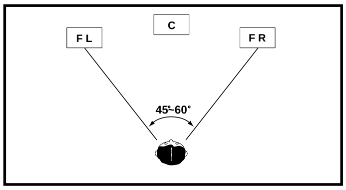
スピーカーの配置はマルチチャンネルサラウンド再生において重要な役割を果たします。
一般家庭における各スピーカーの配置の例は以下の通りです。以下の図を参考にしながらリスニングルームに合わせたスピーカーの配置をお試しください(「THXの推奨するスピーカー配置」➡ P.73)。

メモ

- スピーカーを床に直接設置すると、建物に直接振動が伝わり音質が変わってしまったりします。また、柔らかすぎる棚の上なども音質に影響がありますので、専用スタンドやコンクリートブロックなどの使用をおすすめします。

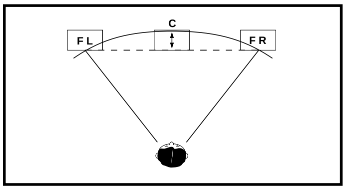
フロント & センター

リスニングポイントからの角度



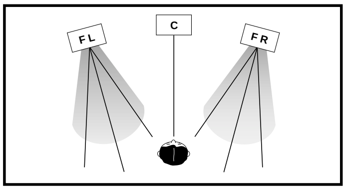
センター(C)を使用する場合は広めに、センター(C)を使用しない場合は狭く配置することをおすすめします(上図の範囲)。

奥行き



センター(C)はフロント(FL/FR)と同一面からフロントまでの距離を超えない位置に。フロントよりも前方だと音場感を損ねます。

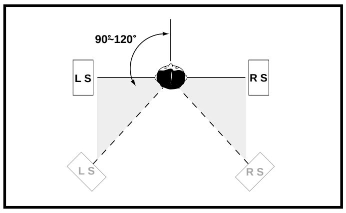
スピーカーの向き



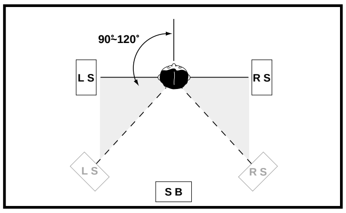
中抜け感を防ぐために多少内振りに。ただし、あまり内振りにしすぎると広がり感などを損ねます。

サラウンド & サラウンドバック

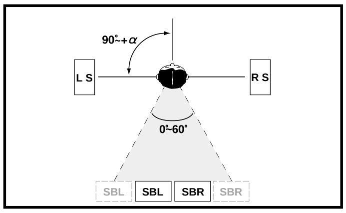
サラウンドバック無しの場合



サラウンドバック1本の場合



サラウンドバック2本の場合



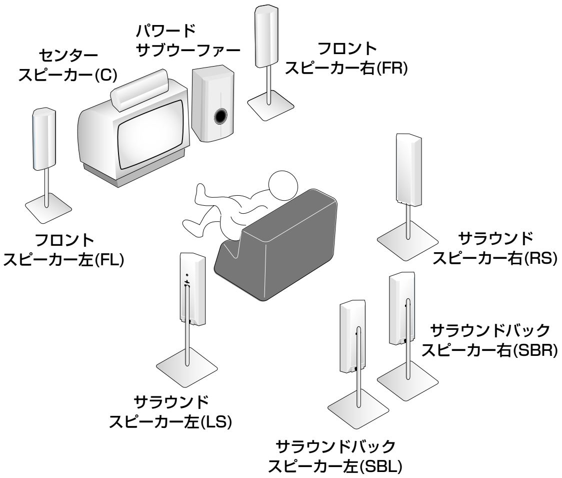
サラウンドスピーカー(LS/RS)は耳の位置より上方60cm～1mでやや下振りにします。DVDオーディオ用の配置と両立したいときは後方寄りに配置します。LSとRSが真正面で向き合わないように多少左右に振ったりしてみてください。

サラウンドバックスピーカー(ＳＢ／ＳＢＬ／ＳＢＲ)も耳の位置より上方６０ｃｍ～１ｍでやや下振りにします。サラウンドバック２本の場合はSBLとSBRを隣接させ、リスニングポジションから等距離に設置(設定)するとHOME THXモードの効果が最大限発揮されます(➡ P.85)。

サブウーファー

特に制限はありませんが、他のスピーカーの低音出力との打ち消し合いが起こらないような場所に配置してください。また、壁の近くに設置すると建物との共振により低音が極端に増強される場合がありますのでご注意ください。

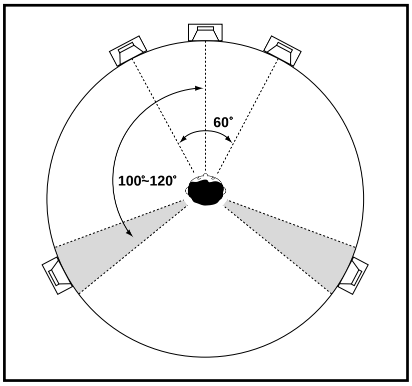
モニターTVとスピーカーの位置関係



フロントスピーカーはテレビから等距離になるようにします。センタースピーカーはモニターTV画面に近い方がセリフなどが自然に聞こえます。ただし、テレビが色ずれ等を起こすのを防止するため、防磁型のスピーカーを使用してください。防磁型でない場合は、テレビから離して設置してください。

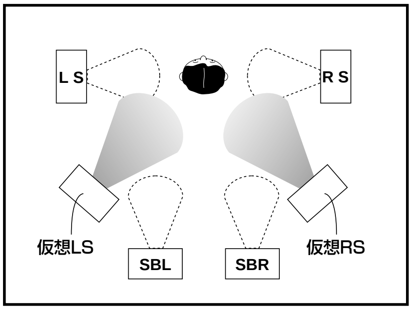
注意 センタースピーカーをテレビの上側に置くときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

DVDオーディオ用スピーカー配置



ITU-R BS.775-1

ITU-R（国際電気通信連合の無線通信部門）の勧告に基づく配置法です。DVD オーディオのマルチ ch ソースのミキシング・スタジオでは、基本的にこの配置法を採用していますが、サラウンドスピーカーを 135° の位置に想定して収録している場合もあります。



サラウンドバック２本の場合、リスニングモードを「STANDARD SX」にすると(➡ P.85)、サラウンドとサラウンドバックの合成仮想音源をDVDオーディオ再生時のサラウンドスピーカーとして使用することができます。

メモ

- また映画を見るときと音楽を聴くときなどでスピーカー配置を変えたい場合は、スピーカー端子B にスピーカーを2本追加することで、ソースに合わせて使うスピーカーをSP SYSTEM A/B ボタン1つで切り換えることもできます(➡ P.35)。

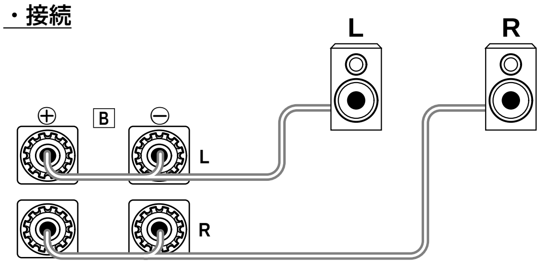
スピーカーの接続(応用編)

本機ではスピーカー端子Ⓑやサラウンドバック端子を使うことでさまざまなスピーカーシステムを組むことができます。インピーダンスが4Ω〜16Ωのスピーカーをご使用ください。4Ω以上6Ω未満のスピーカーをご使用になるときは「スピーカーインピーダンスの切り換え」(➡ P.103)を行ってください。それぞれの接続、設定については以下の説明をご覧ください。

別エリアでのステレオ再生

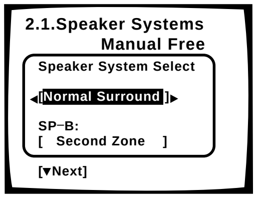
寝室やキッチンなど、メインのリスニングルームとは別の場所のステレオ再生が可能です。

・接続



・スピーカーシステムの設定(➡ P.46)

Speaker System Selectは「Normal Surround」を、SP-B:は「Second Zone」を選択してください。



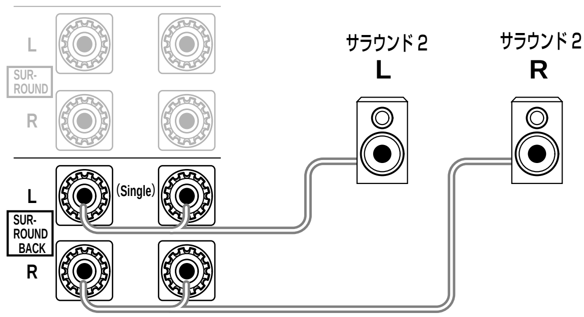
・スピーカーシステムA/Bの切り換え(➡ P.100)

「SP B►2CH」を選択してください。

サラウンドスピーカーのBi-Surround接続

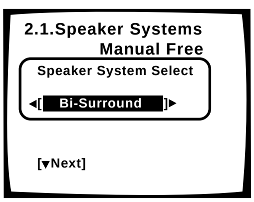
サラウンドバックスピーカーのかわりに、サラウンドスピーカーをもう1組追加して、計4本のスピーカーでサラウンドチャンネルを再生することができます。リスニングルームが縦に広く、フロントスピーカーからリスニングポジションまでの距離が遠い場合などに壁際にもう1組サラウンドスピーカーを追加したいときは以下のような接続、設定を行います。

・接続



・スピーカーシステムの設定(➡ P.46)

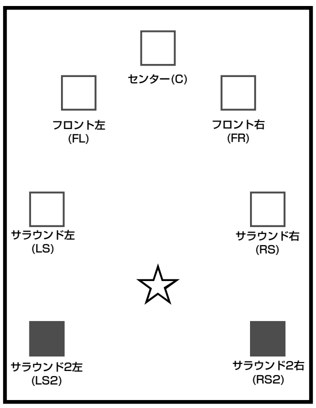
Speaker System Selectは「Bi-Surround」を選択してください。



・スピーカーシステムA/Bの切り換え(➡ P.100)

「SP A : BI-SURR」を選択してください。

・設置

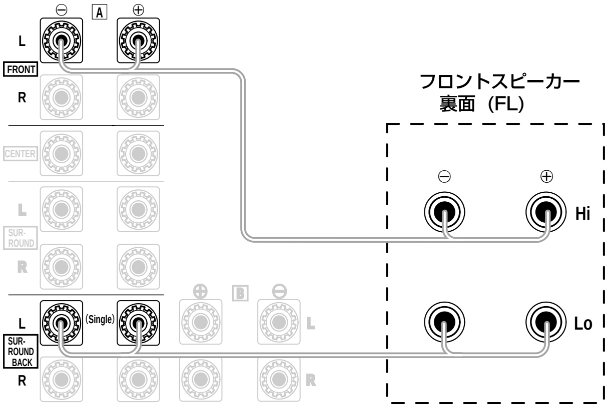


☆：リスニングポジション

フロントスピーカーのBi-Amp接続

フロントch用スピーカーがバイワイヤリング対応であれば、以下の接続、設定を行うことでより高品位なBi-Amp再生が可能です。ただし、この接続で7.1chシステムを組むには外付けパワーアンプが必要です。

・接続



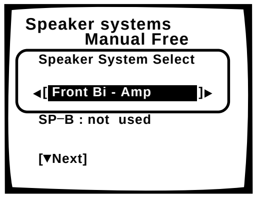
スピーカー端子Ⓐのフロントとサラウンドバックからは同じ音が出力されるため、Hi/Loのどちらとでも接続できます。

注意

フロントスピーカーのBi-Amp接続するときはアンプへの悪影響を防ぐため、スピーカーに付属されているHi-Loのショート金具は必ずはずしてください。詳しくはスピーカーの取扱説明書もご覧ください。

・スピーカーシステムの設定(➡ P.46)

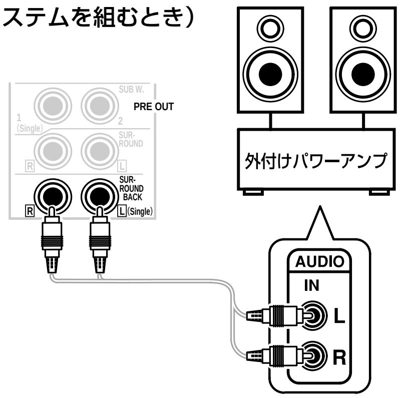
Speaker System Selectは「Front Bi-Amp」を選択してください。



・スピーカーシステムA/Bの切り換え(➡ P.100)

「SP A：BI-AMP」を選択してください。

(7.1chシステムを組むとき)



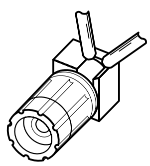
このシステムはスピーカー端子Ⓐのサラウンドバックch用のパワーアンプ回路をフロントBi-Amp用に使用します。よってサラウンドバックchはPRE OUT端子のSURROUND BACK[L][R]を外付けパワーアンプに接続し、そのアンプからスピーカーを接続してください。

注意

ネットワークが着脱できるスピーカーの場合、ネットワークが外れたままだとスピーカーを破損する恐れがありますので必ずネットワークを装着した状態でお使いください。

Bi-wire(バイワイヤ接続の場合)

外付けパワーアンプを使わずに7.1chでシステムを組む場合はBi-AmpではなくBi-wire接続にします。スピーカー端子Ⓐに、バイワイヤリング対応スピーカーのHiとLoの2本を並列に接続してください(端子Ⓑは使用しません)。

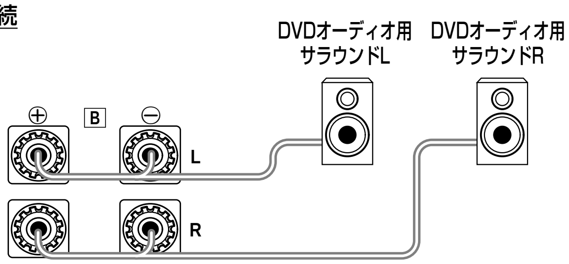


「Normal Surround」設定のままでご使用ください。

スピーカー 端子Ⓑを使い2つのスピーカーシステムを両立する

スピーカー端子Ⓑに接続したスピーカーを、DVDオーディオ用のサラウンドスピーカーとして使うことができます。通常の7.1ch再生するときはスピーカーシステムA（SP►A）を選び、DVDオーディオ再生するときはスピーカーシステムB（SP►B）を選ぶことで、最適なスピーカー配置でマルチチャンネル再生をお楽しみいただくことができます。この場合、スピーカーは全部で9本接続することになります。

・接続

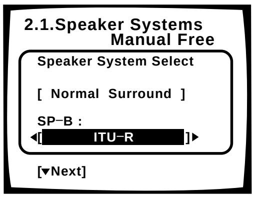


・配置

DVDオーディオ用サラウンドスピーカーの配置については P.32 をご覧ください。

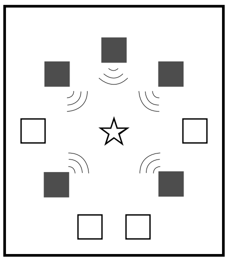
・スピーカーシステムの設定（➡ P.46）

Speaker System Selectを「Normal Surround」に、SP-B:を「ITU-R」に設定してください。



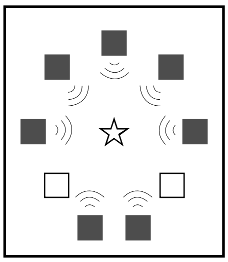
・スピーカーシステムA/Bの切り換え（➡ P.100）

「SP-B : ITU-R」を選択してください。
「SP A : NORMAL」を選択すると通常のマルチチャンネル再生となります。



「SP-B : ITU-R」を選択したとき

☆ ：リスニングポジション
■ ：出力スピーカー



「SP A : NORMAL」を選択したとき

☆ ：リスニングポジション
■ ：出力スピーカー

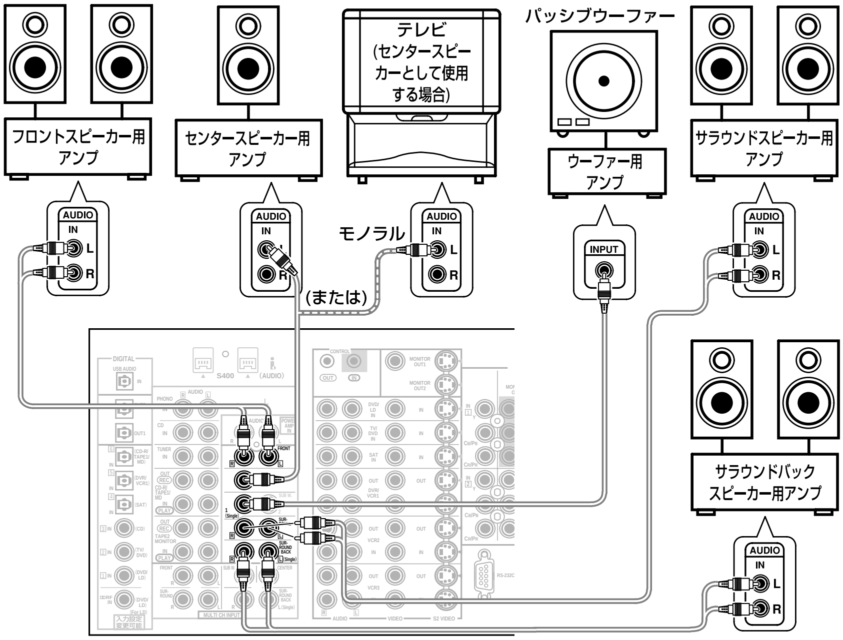
メモ

- 「スピーカーシステムの設定」（➡ P.46）でSP-Bを「ITU-R」に設定していてSP-Bを選択しているときは、サラウンドchの音声はストリームダイレクトモードによってサラウンドかサラウンドバックスピーカーのどちらかから出力されます。

他のパワーアンプの接続

付属のショートピンプラグを抜いてから接続してください(通常は付属のショートピンを抜かずにショートしてご使用ください。ショートピンを抜いたままではフロントスピーカー、ヘッドホンから音が出ません)。

他のアンプをパワーアンプとして本機と組み合わせることができます。各プリアウト端子から出力される音はスピーカーシステムによって変わります。詳しくは「スピーカーシステムA/Bの切り換え」(➡ P.100)をご覧ください。

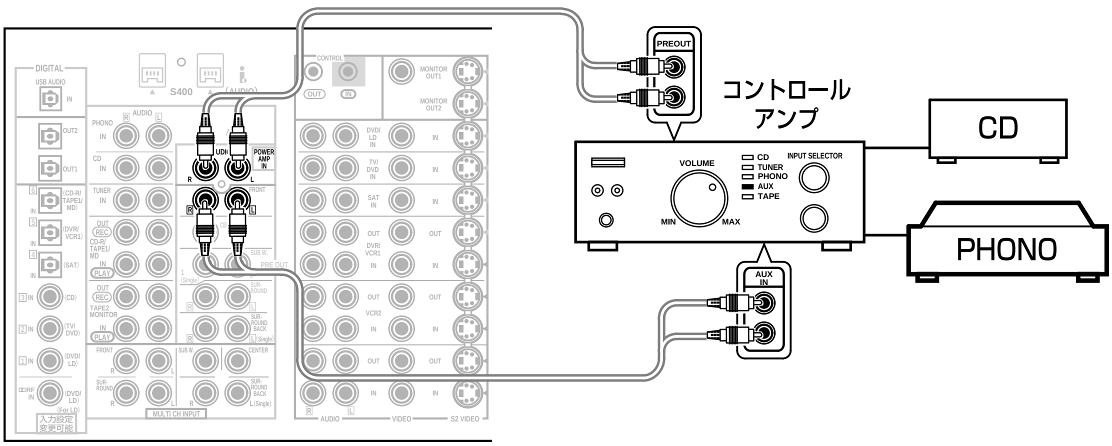


✎メモ
- この接続を行った場合、個々のアンプの能力やボリューム位置などにより音場補正を正確に行うことができない場合があります。

プリアウトパワーインについて

付属のショートピンプラグを抜いてから接続してください(通常は付属のショートピンを抜かずにショートしてご使用ください。ショートピンを抜いたままではフロントスピーカーから音が出ません)。

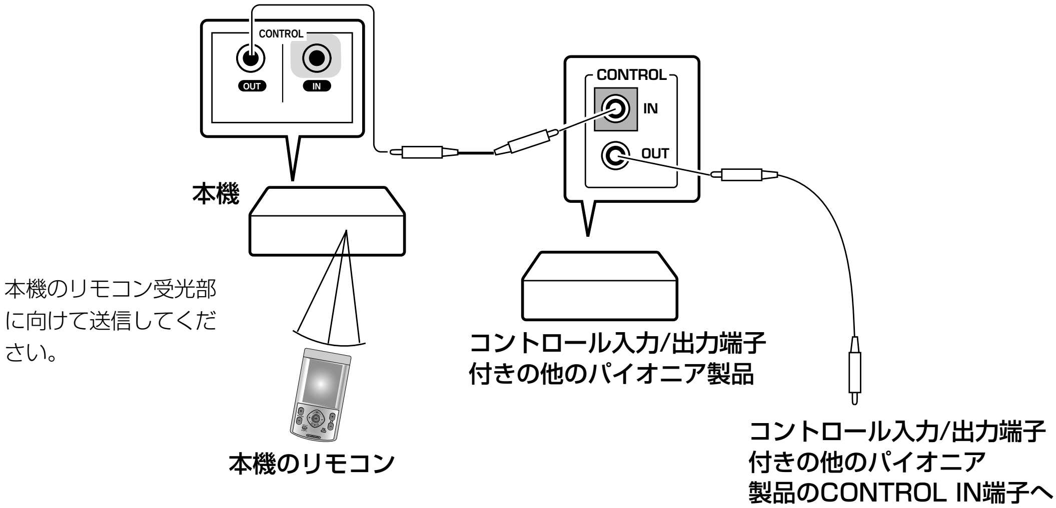
本機リアパネルの端子では足りずにもっとソース機器を接続したいときや、ご使用になりたいお手持ちのプリメインアンプがあるときには本機と他のコントロールアンプを接続して使用することができます。



✎メモ
- コントロールアンプのプリアウト端子と本機のPOWER AMP IN端子を接続しないと、本機のスピーカー端子およびヘッドホン端子から音は出ません。

コントロール入力/出力コードの接続

コントロール入力/出力端子の付いた複数のパイオニア機器を、本機のリモコン受光部を使って集中コントロールすることができます。リモコン受光部を持たない機器や、受光部が信号を受けられないところに設置した機器もリモコン操作が可能になります。



接続

メモ

- 本機のCONTROL IN端子にコントロールコードを接続すると、リモコンを本機に向けて直接操作することはできません(リモコン信号受光部が機能しなくなります)。
- 接続には市販のモノラルミニプラグ付きコード(抵抗なし)をお使いください。
- コントロール端子の接続をする場合は、必ずオーディオコードまたは映像ケーブルの接続もしてください。デジタル接続だけでは、システムコントロールは正しく動作しません。

視聴環境の整備

マルチチャンネルサラウンドの再生では、視聴環境(リスニングルーム)の違いが音質(音の透明度や定位感など)に大きく影響を与えます。特に、定在波と過度な残響音は電気的に除去することができませんので、以下の点に留意し、いろいろとお試しください。

① 正方形の部屋を避ける
② 部屋の辺の長さの比が1:2などの整数倍になっている部屋を避ける
③ 平行な壁面(向かい合った壁や天井など)に対し、定在波や残響音の発生を防止する
(厚手のカーペットを敷く、吸音材を置く、厚手のカーテンを吊るすなど)
④ スピーカーユニットが他のチャンネルのスピーカーユニットと向かい合わせにならないよう、方向や位置を考える
(他チャンネルの出力音声によるスピーカーユニットの干渉を避ける)

スピーカーの配置やリスニングルームの環境を変えたときは「音場補正」(➡ P.40 ～ P.62)を行ってください。
本機にはMulti-Channnel Acoustic Calibration Systemを搭載していますので、オートセットアップ(➡ P.40 ～ P.43)を行うことにより音場補正を自動で簡単に行うことができます。

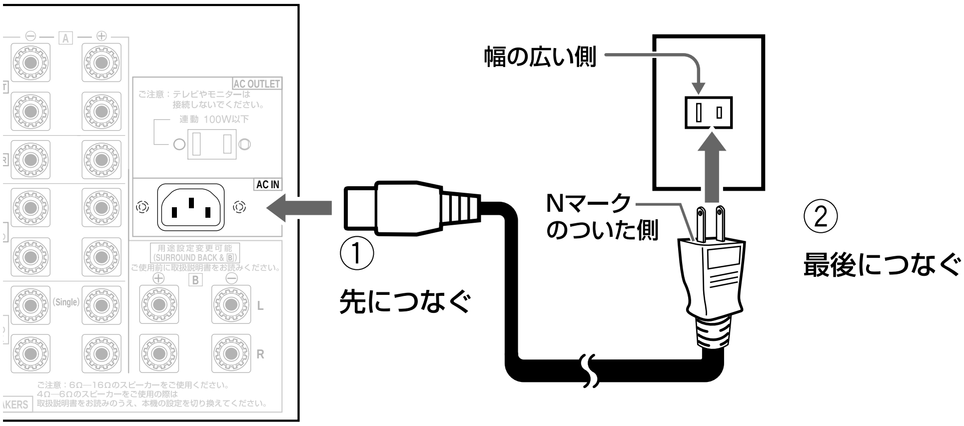
電源コードの接続

全ての接続が終了したら、電源コードを家庭用電源コンセント(AC 100V)に接続します。

電源コードのつなぎかた

本機の電源コードは極性管理されています。音質向上のため、極性を合わせせることをお薦めします。下図のように電源プラグのNマークのある側をコンセントの幅の広い方(アース側)に合わせて差し込んでください。

警 告
- **本機の電源コードは着脱式になっていますが、付属しているコード(電流容量15A、機器側3Pプラグインソケット方式)以外の電源コードはご使用にならないでください。**
- 本機のAC INLETのアース端子は本機のシャーシに接続されていません。



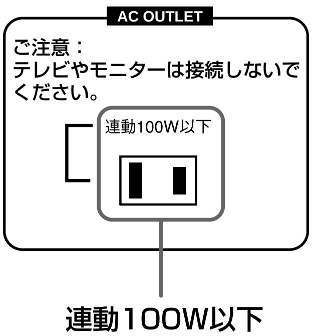
メモ
- 旅行などで長期間本機を使用しない場合は、必ず電源コンセントから電源コードを抜いておいてください。

予備コンセント(AC OUTLET)の接続

[連動100W以下]

本機の電源スイッチのON/STANDBY(OFF)の切り換えに連動して、接続した機器の電源をON/OFFできます。接続した機器の消費電力が100Wを超えないようにしてください。

警 告
- 消費電力がパネルに表示されているワット数を超えるような電気器具(暖房、アイロン、テレビ、トースター、ドライヤーなど)は絶対に接続しないでください。機器の故障や火災の恐れがあります。
- テレビは接続しないでください。
  表示されている消費電力が本機のパネル表示値より少なくても、電源を入れたときに大きな電流が流れる場合があります。



システムセットアップの設定項目一覧

システムセットアップにするためにはまずリモコンを以下の順番で押してから以下の表をご覧ください。

① (ホーム) または (AVアンプ) ➡ ② メニュー システムセットアップ

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

- オートサラウンドセットアップを行った場合は、音場補正を行う必要はありません。
- 入力に関する設定は、必要に応じて行ってください。
- エキスパート設定とTHXオーディオ設定は必ず行わなければならない設定ではありませんが、本機を快適にお使いいただくための設定になります。

↑↓ 選んで 決定	↑↓ 選んで 決定	設定概要	参照ページ
基本 [Auto Surround Setup]（オートサラウンドセットアップ）	—	音場補正の全項目を自動測定	(➡P.40)
基本 [1.Input Assign]（入力に関する設定）	Digital In（デジタル入力の設定）	デジタル入力端子の割り当て入力ファンクションの変更	(➡P.63)
	Component Video In（コンポーネントビデオ入力の設定）	コンポーネントビデオ入力端子の割り当て入力ファンクションの変更	(➡P.64)
	i.LINK In（i.LINK入力の設定）	i.LINK対応器機の割り当て入力ファンクションの変更	(➡P.65)
	Video Assign（ビデオ入力の設定）	USB、MULTI CH INPUT入力へのビデオ信号割り当て	(➡P.66)
基本 [2.Surround Setup]（音場補正） ➡P.44 で詳しく説明しています。	Speaker Systems（スピーカーシステムの設定）	スピーカーシステムの使用用途、接続の有り無し、低域再生能力などの設定	(➡P.46)
	Channel Level（スピーカー出力レベルの設定）	各チャンネルの出力レベルを補正	(➡P.50)
	Speaker Distance（スピーカーまでの距離の設定）	各スピーカーまでの距離を入力し、最適なディレイ値に設定	(➡P.51)
	Acoustic Cal EQ（視聴環境の周波数特性の補正）	出力音声の音色を補正	(➡P.52)
	X-Curve（聴感上の高域補正）	部屋の大きさとリスニングポジションに合わせた高域の減衰カーブの補正	(➡P.62)
応用 [3.Expert Setup]（エキスパート設定）	OSD Adjustment（OSD[メニュー画面]の調整）	メニュー画面の表示位置（上下左右）調整	(➡P.67)
	Bass Peak Level（超低域音声のピークレベル設定）	超低域音声のリミッター設定「する/解除」の選択と設定値の調整	(➡P.68)
	D-Range Control（ダイナミックレンジコントロールの設定）	ダイナミックレンジ圧縮レベルの変更	(➡P.69)
	Function Rename（入力ファンクション表示の設定）	入力ファンクションごとの表示文字列の変更	(➡P.70)
	OSD Overlay（オーバーレイ表示の設定）	テレビ画面に操作内容などを表示するかしないかの設定	(➡P.71)
応用 [4.THX Audio Setup]（THXオーディオ設定）	Ultra2 SW Setup（Ultra2サブウーファーの設定）	THX Ultra2準拠のサブウーファーに対する低域制御フィルターのON/OFF設定	(➡P.72)
	SB SP Position（サラウンドバックスピーカー間の距離の設定）	サラウンドバックスピーカー間の距離の設定	(➡P.73)
[EXIT] 設定の終了（通常状態へ）			

[Return]を選んで決定すると1つ前の手順に戻ります。

■ 操作を行う前には必ず本機の主電源ボタンをON(▬)にしてください。
■ はじめてリモコンを使用される方は、まず「リモコンの初期設定」(➡P.4)を行ってください。

Auto Surround Setup（サラウンドの自動設定）

本機のオートサラウンドセットアップでは従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、付属のマイクを使い自動で高精度に測定、設定することができます。「ホームシアター入門ガイド」Step2のサラウンドの自動設定（➡ P.10 ）と同様の設定ですが、ここではより詳しく説明します。
測定中はスピーカーからテストトーンが出力され、その音を付属のマイクで測定し、解析します。測定項目と全体の流れは右記の通りです。

⚠ 注意　測定中は大きな音でテストトーンが出力されます。近隣住宅や小さなお子様などへのご配慮をお願いします。

✎ **メモ**

- Advanced MCACC 機能にて、部屋の残響特性を考慮した、より高度な補正を行いたいときは、ここでのオートサラウンドセットアップを行った後、[Professional]で補正を行ってください（➡ P.55 ）。
- X-CurveをONにして自動設定を行うと、スピーカーからの距離をもとに部屋の広さが計算され自動的に適した高域補正カーブが設定されます（➡ P.62 ）。

初期測定（測定設備のチェック）

① 暗騒音（部屋の騒音）の測定
② マイク感度の診断
③ 各chのスピーカー有り無し判定

⬇

スピーカーの有り無し判定結果のユーザー確認（または修正）

⬇

システム全体の解析測定

④ スピーカーシステム
（各chの低域再生能力を判定）
⑤ スピーカーからの距離
（最適なディレイ値を解析）
⑥ スピーカーの出力レベル
（各chの出力バランスを補正）
⑦ 視聴環境の周波数特性
（出力音声の音色を統一）

⬇

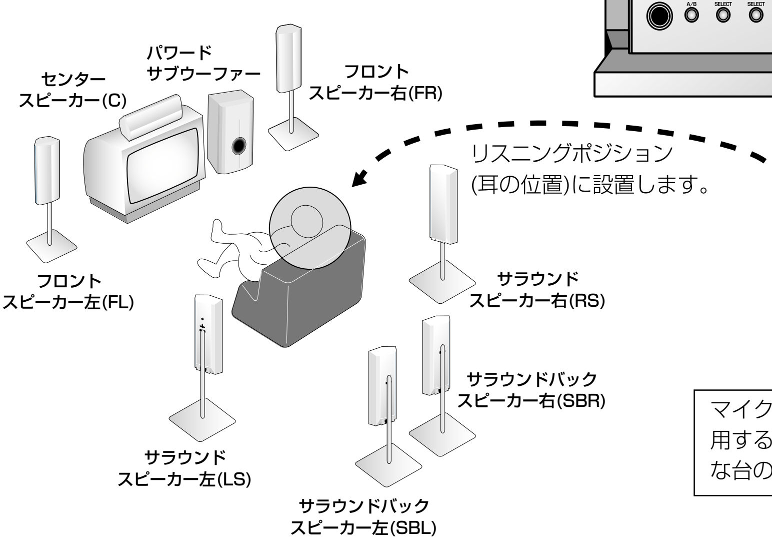
システム全体の解析結果のチェック

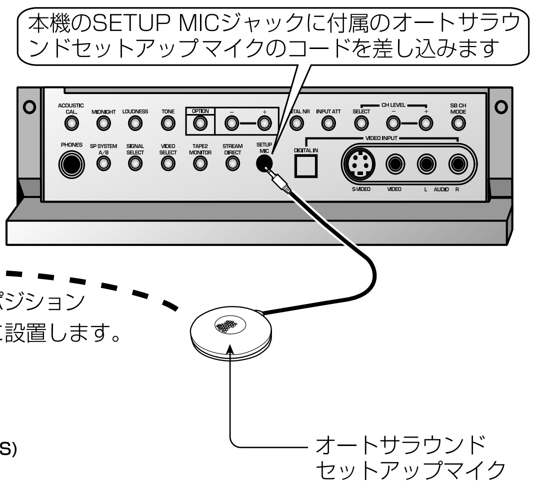
上記①〜⑦の測定／解析にかかる時間
合計3〜6分程度

1）オートサラウンドセットアップマイクを接続する

✎ **メモ**

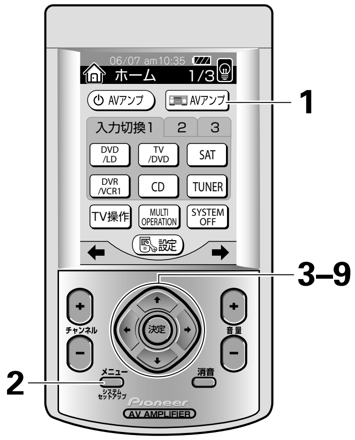
- オートサラウンドセットアップマイクをＴＶモニターの近くに置いてオートサラウンドセットアップを行わないでください。





マイクを耳の高さに設置するには三脚を使用すると便利です。三脚がない場合は水平な台の上にのせてください。

2）自動測定を開始する

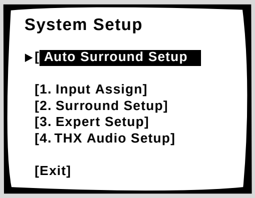


メモ

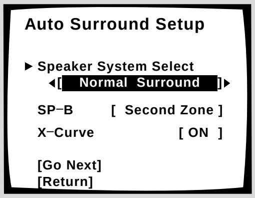
- 「Auto Surround Setup」では、設定の途中で静止画面を3分間放置すると画面は一時的に消えますが、何かボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。
- 自動測定の途中でCANCELを行ったときはそれまでの内容は設定されません。
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。
- サブウーファーを接続しているときは電源を入れてボリュームを上げておいてください。
- 測定中はリスニングポジションから離れて、各スピーカーの外側からリモコンで操作を行ってください(各スピーカーとマイクの間に障害物があると正しく測定できません)。
- 古いテレビをお使いのとき、ブラウン管からのノイズにより、オートサラウンドセットアップが正しく測定されないことがあります。その場合は、テレビの電源を切って測定を行ってください。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

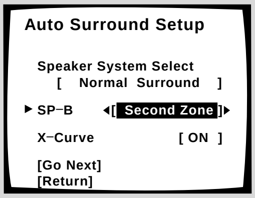
3



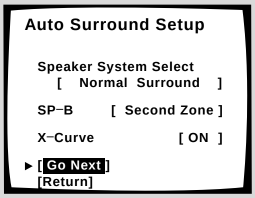
4



5



7



1 **リモコンをホーム画面またはAVアンプ画面にする。**

2 

システムセットアップモードにする。
テレビ画面にセットアップメニューが表示されます。

3 **⬆⬇ボタンで[Auto Surround Setup]を選んで(決定)ボタンで決定する。**
オートサラウンドセットアップになります。

4 **設定するスピーカーシステムを⬅➡ボタンで「Normal Surround」にする。**
[THX(all small)]については P.48 を、[Front Bi-Amp]については P.34 を、[Bi-Surround]については P.33 をご覧になり、必要に応じて切り換えてください。

5 **⬆⬇ボタンで「SP-B」を選んで⬅➡ボタンで「Second Zone」にする。**
[ITU-R]については「スピーカーの接続(応用編)」(➡ P.33)をご覧ください。[OFF]を選ぶとスピーカー端子Ⓑからは音が出ません。

6 **⬆⬇ボタンで「X-Curve」を選んで⬅➡ボタンで「ON」にする。**
X-Curveの設定は補正後、個別にOFF/ONを切り換えることができます。詳しくは P.62 をご覧ください。

7 **⬆⬇ボタンで[Go Next]を選んで(決定)ボタンを押す。**
P.11 のメモをご覧になり、画面の注意事項をよく読んでから自動測定の準備をしてください。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

8

```
Auto Surround Setup

•Connect microphone
•Please be quiet
•Move obstacles away
•If you have a subwoofer
   turn power on and
     turn volume up

 ► [Start]
   [Cancel]
```

自動的にボリュームを0dBに設定

```
Auto Surround Setup



     Please Wait

Caution!!
   Test tone is
        output loudly.
   [Cancel]
```

測定画面へ

```
Auto Surround Setup

     Now Analyzing…

Environment Check
   Ambient Noise      [OK]
   Microphone         [OK]
 ►Speaker Level       [  ]

   [Cancel]
```

確認画面へ

9

```
        Check!!
   FRONT        [ YES ]
   CENTER       [ YES ]
   SURROUND     [ YES ]
   SURR BACK    [ YES×2]
   SUB WOOFER   [ YES ]

 ► [OK,Go Next]
   [Retry]
   [ERR→Fix SP.]
   [Return to Menu]
```

10

```
Auto Surround Setup

     Now Analyzing…

Surround Analysis
   Speaker Systems    [OK]
 ►Speaker Distance    [  ]
   Channel Level      [  ]
   Acoustic Cal EQ    [  ]

   [Cancel]
```

11

```
Auto Surround Setup

     !! Complete !!



 ►[ Data Copy ]
   [ Check ]

   [ Return ]
```

---

8 ⬆⬇ボタンで[Start]を選び(決定)ボタンを押す。

オートセットアップが開始されます。まずは初期測定(測定設備チェック)です。この自動測定は数十秒で終わりますので、手順9の画面になるまでしばらくお待ちください。

「Ambient Noise」:暗騒音(部屋の騒音)の測定をします

「Microphone」:マイクの感度を診断します

「Speaker Level」:各スピーカーの有り無し判定をします

9 スピーカー有り無し判定結果の確認画面になります。判定結果が合っている場合は⬆⬇ボタンで[OK,Go Next]を選んで(決定)ボタンを押す。

YESはスピーカー有りでNOはスピーカー無しを意味します。次の自動設定が始まります。手順10へお進みください。

判定結果が間違っていて、もう一度自動測定を試す場合は⬆⬇ボタンで[Retry]を選んで(決定)ボタンを押す。

手順8へ戻ります。

判定結果が間違っていて、手動で設定し直す場合は⬆ ⬇ ボタンで[ERR→Fix SP.]を選んで(決定)ボタンを押す。

設定が間違っているチャンネルを⬆⬇ボタンで選び⬅➡ボタンで正しい設定にします。

すべてのチャンネルを正しく設定したら⬆⬇ボタンで[OK, Go Next]を選んで(決定)ボタンを押します。

✎メモ
- 判定結果で[ERR]が表示された場合は、接続を間違えている可能性があります。[Retry]しても結果が同じような場合は一度電源を切り、スピーカーの接続を確認してください。また、途中で測定エラーによる警告が表示されている場合がありますので、そのときは画面の指示に従ってください。

10 補正用測定が開始されます。

「Speaker Systems」:各スピーカーの低域再生能力判定

「Speaker Distance」:最適なディレイ値を解析

「Channel Level」:各chの出力バランスを補正

「Acoustic Cal EQ」:出力音声の音色を統一

これらの自動設定には接続しているスピーカーの数によって2〜6分程度かかりますので、手順11の画面になるまでしばらくお待ちください。

11 「!!Complete!!」の画面が表示されたら自動測定は終了です。

次ページの「3)測定結果を確認する」へお進みください。データをコピーして手動で微調整することもできます。その場合は

① [Data Copy] を選んで(決定)

② [CUSTOM1]または[CUSTOM2]のどちらにコピーするのか選んで(決定)

③ [Copy OK]を選んで(決定)

を行った後に「Acoustic Cal EQ(視聴環境の周波数特性の補正)(➡ P.52)」をご覧ください。

✎メモ
- 設定の途中でOSD画面に何かメッセージが表示された場合は「オートセットアップ(自動音場補正)のOSD画面メッセージの意味」(➡ P.132)をご覧ください。

3）測定結果を確認する

1 **⬆⬇ボタンで[CHECK]を選び(決定)ボタンを押す。**
[NEXT]を選んで決定しながら測定された内容を以下の順に確認する。

- １つ前の画面や先の画面を表示したいときは⬅または➡を押します。
- 途中で確認画面を終了するときは⬆⬇ボタンで[Return]を選び(決定)ボタンを押します。

スピーカーシステム➡ P.46
（各スピーカーの低域再生能力判定）

```
Speaker  Systems Check

  " Normal  Surround  "

FRONT          [ SMALL ]
CENTER         [ SMALL ]
SURROUND       [ SMALL ]
SURR BACK      [SMALL×2]
SUB WOOFER [   YES    ]

► [Next]   (◂Back/Next ▸)
  [Return]
```

➡ (決定)

スピーカーの出力レベル➡ P.50
（各chの出力バランスを補正）

```
Channel  Level  Check

LEFT           [  +1.5dB]
CENTER         [  +1.5dB]
RIGHT          [  +2.0dB]
SURROUND R     [  -3.5dB]
SURR BACK R    [  -1.5dB]
SURR BACK L    [  +3.0dB]
SURROUND L     [  +2.0dB]
SUB WOOFER     [ +10.0dB]
►[Next]   ( ◂Back/Next ▸)
 [Return]
```

➡ (決定)

スピーカーまでの距離 ➡ P.51
（最適なディレイ値を解析）

```
Speaker Distance Check

LEFT          [2.75m]
CENTER        [2.40m]
RIGHT         [2.45m]
SURROUND R    [1.10m]
SURR BACK R   [1.20m]
SURR BACK L   [1.60m]
SURROUND L    [1.85m]
SUB WOOFER    [3.30m]
►[Next]    ( ◂Back/Next ▸)
 [Return]
```

(決定)

視聴環境の周波数特性➡ P.52
（出力音声の音色を統一）

```
2.Acoustic  Cal  EQ  Check
  Target  Curve : ALL  CH  ADJ
                 63Hz :-----dB
LEFT            125Hz :    0.0dB
  SMALL         250Hz : +  0.5dB
                500Hz : -  2.0dB
                  1kHz : -  3.0dB
                  2kHz : +  6.0dB
                  4kHz :    0.0dB
                  8kHz :    0.0dB
►[Next]          16kz : -  4.0dB
 [Return]        TRIM :    0.0dB
```

ALL CH ADJ補正
フロント左チャンネル

➡ (決定)

２ 種類の補正カーブ（ＡＬＬ CH ADJとFRONT ALIGN）について各チャンネルの測定結果を⬅ ➡ ボタンで表示させることができます。

視聴上の高域補正➡ P.62
（41ページ手順6でONにしたときのみ）

```
X-Curve  Check

  X-Curve
   [-1.5dB/oct]

 [Next]
►[Return]
```

最後の画面は[Return]が選ばれているので(決定)ボタンを押すと、System Setupメニュー画面に戻ります。

2 **⬆⬇ボタンで[Exit]を選び(決定)ボタンを押す。**
System Setupが終了し、通常動作に戻ります。
このとき、アコースティックキャリブレーションEQが自動的にALL CH ADJでONになり、MCACCインジケーターが点灯します。

- 再度設定内容を確認したいときは「音場補正の設定確認」(➡ P.45)をご覧ください。

自動設定（[Auto]による設定）

「音場補正(Surround Setup)」の個別の項目を自動で設定することができます。次ページ以降をご覧になり、自動設定を行う項目については[Auto]を選択してください。その場合は以下の手順に従ってください。[Auto]による設定では、設定の途中で静止画面を3 分間放置すると画面は一時的に消えますが、何かボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。

```
2.1. Speaker  Systems

  [Manual  Free]
  [Manual  THX]
         (all  small)
►[Auto]

  [Return]
```

1. 自動測定の準備をする。
- 付属の設定用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。（TVモニターの近くには設置しないでください）
- 測定中は静かにしてください。
- スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。
- サブウーファーを接続している場合は電源を入れてボリュームを上げておいてください。

2. [Start]を選んで(決定)ボタンを押す。
- 自動設定をキャンセルする場合は[Cancel]を選んで(決定)ボタンを押してください。

3. 測定が終了し、測定結果を確認後[Return]を選んで(決定)ボタンを押す。
- Surround Setup(音場補正)のメニュー画面になります。

設定

Surround Setup(音場補正)

音場補正の設定項目の詳細と効果

以下の５つの設定（補正)を音場補正（Surround Setup）と呼びます。本機のオートサラウンドセットアップ機能を使うと、これらの設定を自動で行うことができます。初めて音場補正を行う場合は、オートサラウンドセットアップ機能による設定をおすすめします（➡ P.10）。

オートサラウンドセットアップ機能にて設定を行った場合は、以下の５つの設定を行う必要はありません。ただし、残響特性を考慮した周波数特性の補正を行う場合には「Acoustic Cal EQ」の［Professional］を行う必要があります。

スピーカーシステムの設定(Speaker Systems)

これはソースに含まれる音声成分の全てを再生するための基本設定です。この設定が正しく行われないと、サウンドトラックの特定チャンネルに収録された音声が再生されなかったり、低域成分が欠落してしまう、などの不具合が発生する場合があります。スピーカー接続の有り/無しや低域再生能力の大小、クロスオーバー周波数などを設定し、上記の問題を回避します。

スピーカー出力レベルの設定(Channel Level)

リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせる設定です。「スピーカーまでの距離設定」と同様に、音の定位感や移動感を正確に再現することが目的です。この設定が正しく行われないと、いわゆる「バランスの悪い音」になってしまいます。これまでは聴感での設定が一般的でしたが、この方法では正確な設定は不可能です。プロのスタジオ・エンジニアは、ミキシング作業前に必ず専用の音圧測定器で測定を行い、バランスの微調整を施します。本機では、MCACCによって、このプロレベルの精密な調整がだれでも簡単にできるようになりました。

スピーカーまでの距離の設定(Speaker Distance)

実際には距離を設定することで各チャンネル間の遅延(ディレイ)を算出・補正しています。マルチチャンネル再生では特に重要で、音の定位感や移動感を正確に再現するために必要です。測定用のマイクを使用して実測した場合は、電気的な遅延現象(特にサブウーファーに多く見受けられる)をも測定します。よって、メジャー等を使った物理的な距離測定とは違う値が設定される場合もあります。

視聴環境の周波数特性の補正(Acoustic Cal EQ)

「視聴環境の周波数特性の補正」とは、リスニングポイントでの視聴環境トータルの周波数特性(以下、Ｆ特)の補正を意味します。全チャンネルに同じ種類のスピーカーを使用しても、リスニングポイントでは音色が違って聞こえます。これは、設置場所・設置方法・壁面・内装、など様々な影響により実際のＦ特が違ってしまうためです。
本機の「視聴環境の周波数特性の補正」では、リスニングルーム固有のＦ特まで含めた補正をすることで、各チャンネルの音のつながりを飛躍的に向上させ、これまでにない実像感やリアルな移動感を再現します。スタジオや映画館などにおいてはこの補正は絶対に欠かせないものです。これがホームシアターとの大きな差でしたが、当社の研究により、一般家庭環境におけるＦ特の補正に最も有効であるエンベロープ補正方式を採用し、この差を埋めることを可能としました。 さらに、Acoustic Cal EQ Professionalでは残響特性を考慮した周波数特性の補正や残響特性のグラフ表示(パソコンまたはOSD画面)もできるようになりました。
全チャンネルをフラット特性にする「ALL CH ADJUST」と、フロントスピーカーの特性に合わせ込む「FRONT CH ALIGN」の2種類の補正カーブのほか、手動で自由に調整できる「CUSTOM1」「CUSTOM2」を用意しました。

視聴上の高域補正(X-Curve)

スタジオや映画館のような広い視聴環境では多くの反射波が合成されるため、音響心理学上、高域の成分がきつく感じられる傾向にあります。そこで国際スタジオ規格のISO2969では、この聴感上の補正を行うためにX-Curve(Xカーブ)というものを規定しています。
本機では、この理論をホームシアターにも適用し、Acoustic Cal EQで周波数特性がフラットになった視聴環境に対してX-Curve補正を行うことで、部屋の大きさに影響される聴感上の周波数特性の補正を可能とします。

メモ

- 一度登録した設定内容は本機に記憶されるため、システムを使用するたびに設定し直す必要はありません。ただし、スピーカーシステムの構成や配置を変更したり、新しくスピーカーを追加したときには、設定し直す必要があります。

Check（音場補正の設定確認）

音場補正の各項目の設定内容を一通り確認することができます。



1-6

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定ボタンを押します。

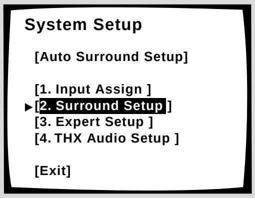
ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① または ➡ ② メニュー システムセットアップ

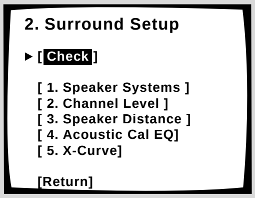
（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面（テレビ画面）です

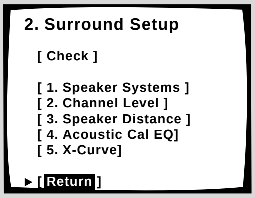
1



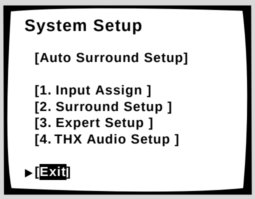
2



5



6



1 **[2.Surround Setup]を選択して決定する。**

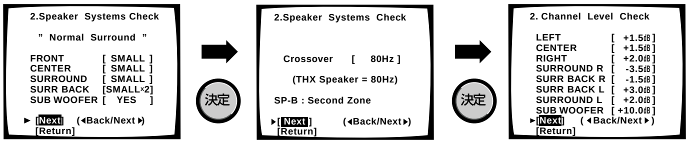
Surround Setup（サラウンドの設定）のメニュー画面になります。

2 **[Check]を選択して決定する。**

サラウンドの設定の設定確認画面になります。

3 **決定ボタンを押して、以下の順に確認する。**

サラウンドの設定の設定内容が、ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。

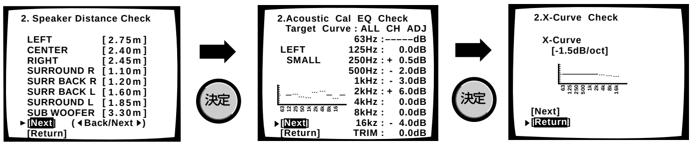


スピーカーシステム ➡ P.46

クロスオーバー周波数 ➡ P.47

スピーカー出力レベル ➡ P.50

（X-CurveがONのときのみ）



スピーカーまでの距離 ➡ P.51

視聴環境の周波数特性 ➡ P.52

視聴上の高域補正 ➡ P.62

視聴環境の周波数特性は4種類の補正カーブ（ALL CH ADJとFRONT ALIGN、CUSTOM1、CUSTOM2）について各チャンネルの設定内容を⬅ ➡ ボタンを使って表示することができます。

１つ前の画面や先の画面を表示したいときは⬅ または➡ を押します。

4 **確認画面を終了するときは⬆⬇ボタンで[Return]を選択して決定する。**

Surround Setupメニュー画面に戻ります。

引き続き設定を行うには、設定したい項目のページの手順2へお進みください。

5 **⬆⬇ ボタンで[Return]を選択して決定する。**

6 **⬆⬇ ボタンで[Exit]を選択して決定する。**

設定

Speaker Systems（スピーカーシステムの設定）

この設定が基本となり、次ページ以降の各設定が行われるため、この設定をしないと音声成分の一部が欠落したり、正しい設定ができなくなってしまう場合があります。お手持ちのスピーカーシステムや視聴環境などに合わせて正しく設定してください。

- スピーカーシステム（Speaker Systems）の選択

本機は、スピーカーシステム全体をどのように使用するかを選択できる「バーサタイルスピーカーコンフィグレーション」機能を搭載し、フロントスピーカーのバイアンプ接続にも対応しています。[Normal Surround]や[Front Bi-Amp]、[Bi-Surround]の３つのスピーカーシステムから選択します。[Normal Surround]を選択したときは、SP-B も選択することができます。

Speaker System Select

[Normal Surround]：
一般的な設定です。メインのシステムをスピーカー端子Ⓐだけに接続（バイワイヤ接続を含む）したときはこの設定を選びます。この設定では、スピーカー端子Ⓑに接続したスピーカーを使って２つのスピーカーシステムを切り換えて楽しむことができます。詳しくは下記「SP-B」をご覧ください。

[Front Bi-Amp]：
バイワイヤ対応のフロントスピーカーを使って、**バイアンプ接続**（➡ P.34）をしたときはこの設定を選びます。
7.1ch システムを組むときは、サラウンドバック ch は PREOUT 端子の SURROUND BACK Ⓛ Ⓡから他のパワーアンプに接続し、そのアンプからスピーカーを接続してください。

[Bi-Surround]：
縦長の部屋で音の横抜けを防ぐために、横の壁面にサラウンドスピーカーを２組置きたいときはこの設定を選びます（➡ P.33）。この場合、サラウンドバックスピーカーを置くことはできません。

SP-B（Speaker System Select で Normal Surround を選んだときのみ選択することができます）

[Second Zone]：
スピーカー端子Ⓑに接続したスピーカーで別の場所でのステレオ再生を行うことができます（➡ P.33）。

[ITU-R]：
スピーカー端子Ⓑに接続したスピーカーを DVD オーディオ用のサラウンドスピーカーとして使うことができます。（➡ P.35）。[ITU-R] に設定するとスピーカー端子Ⓑに接続したスピーカーも音場補正の各項目を設定することができます。

[OFF]：
スピーカー端子Ⓑにスピーカーを接続していないときは［OFF］に設定します。

- スピーカーの有 / 無、低域再生能力の大／小の設定

サブウーファー以外

[LARGE]（大）：低音域を再生する十分な能力がある場合。
[SMALL]（小）：そのチャンネルの低音域をほかのスピーカーまたはサブウーファーから出力する場合。（低音域がどのスピーカーまたはサブウーファーから出力されるのかは、各スピーカーの設定の組み合わせによって変わります）
[NO]（無）：接続しない場合。（NOに設定されたチャンネルの音声は、他のスピーカーまたはサブウーファーから出力されます）

サラウンドバックスピーカーは１本（×１）か２本（×２）かも設定します。

サブウーファー

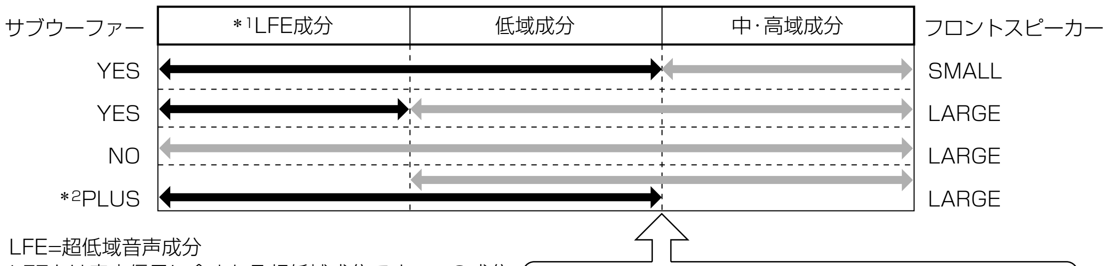
[YES]（有）：サブウーファーを接続する場合。このときサブウーファーからは、LFE 成分（超低域信号成分）や SMALL 設定されたチャンネルの低音域（各スピーカーの設定の組み合わせにより違います）が出力されます。
[PLUS]：サブウーファーから常に音を出したい場合。
このときサブウーファーからは［YES］に設定したときと同じ信号に加えて、フロント・センタースピーカーから出力される低音域も出力されます。これにより、常時迫力ある低音再生が可能になります。ただし、アナログ入力ではリスニングモードによってサブウーファー出力が無い場合もあります。
[NO]（無）：サブウーファーを接続しない場合。（低音域はほかのスピーカーから出力されます）

以下の組み合わせが設定可能です。

フロントスピーカー	センタースピーカー	サラウンドスピーカー	サラウンドバックスピーカー	サブウーファー
SMALL	**SMALL**／NO	**SMALL**	**SMALL (×1,×2)**／NO	**YES** (PLUSやNOを選ぶことはできません)
		NO	NO	
LARGE	LARGE／SMALL／NO	LARGE	LARGE（×1,×2）／SMALL（×1,×2）／NO	YES／PLUS／NO
		SMALL	SMALL（×1,×2）/NO	
		NO	NO	

太字：工場出荷時の設定

フロントスピーカーの設定によってサブウーファーの再生する音域成分は以下のようになります。



クロスオーバー周波数(工場出荷時：80Hz)
お手持ちのスピーカーに合わせて設定してください(⇨P.49)

＊1 LFE=超低域音声成分
LFEとは音声信号に含まれる超低域成分です。この成分が入力されるとディスプレイのインジケーターが点灯します。この成分は常に含まれているとはかぎりません。

＊2 [PLUS]設定の場合はサブウーファーからLFE成分に加えFront／Centerの低域成分も出力されます。

- **クロスオーバー周波数(Crossover)の設定**
  SMALL(小)に設定したチャンネルの何Hz以下の低音域を他のスピーカーやサブウーファーで再生するのか、またLFE信号の何Hz以下の低音域を再生するのかを設定します。

メモ

- サラウンドバックチャンネルを無し（NO）に設定すると、再生チャンネル数は最大5.1chになります。この場合はサラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すことができます。詳しくは「バーチャルサラウンドバックモードのON/AUTO/OFF」（➡ P.82 ）をご覧ください。
- サラウンドバックチャンネルを有り（LARGE ×1，×2またはSMALL ×1，×2）に設定すると、再生チャンネル数は最大6.1chまたは7.1chになります。この場合はお好みで最大5.1ch再生か6.1ch/7.1chシステムのどちらかに切り換えることができます。詳しくは「サラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFF」（➡ P.81 ）をご覧ください。

設定



1-10

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① または ➡ ② メニュー システムセットアップ

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
```
System Setup
 [Auto Surround Setup]
 [1. Input Assign ]
▶[2. Surround Setup]
 [3. Expert Setup ]
 [4. THX Audio Setup ]
 [Exit]
```

2
```
2. Surround Setup
 [ Check ]
▶[ 1. Speaker Systems ]
 [ 2. Channel Level ]
 [ 3. Speaker Distance ]
 [ 4. Acoustic Cal EQ]
 [ 5. X-Curve]
 [ Return ]
```

3
```
2.1. Speaker  Systems
 ▶[Manual  Free]
  [Manual  THX]
         (all  small)
  [Auto]
  [Return]
```

4
```
2.1.Speaker Systems
        Manual Free
 Speaker System Select
◀[Normal Surround]▶
 SP–B:
 [   Second Zone   ]
 [▼Next]
```

5 6
```
2.1. Speaker  Systems
        Manual  Free
" Normal  Surround  "
▶FRONT       ◀[ LARGE ]▶
 CENTER       [ LARGE ]
 SURROUND     [ LARGE ]
 SURR BACK    [LARGE×2]
 SUB WOOFER   [  YES  ]
 (▼NEXT)
```

1 **[2.Surround Setup]を選択して決定する。**

Surround Setup（サラウンドの設定）のメニュー画面になります。

2 **[1.Speaker Systems]を選択して決定する。**

スピーカーシステムの設定になります。

3 **設定方法を選んで決定する。**

[Manual Free]：手動ですべてを設定します。

[Manual THX]：THXの推奨によりすべて[SMALL]で設定されるので、SURR BACKの接続した本数のみを設定します。

[Auto]：マイクを用いた測定により自動設定します。この場合は[Normal Surround]に切り換えてから[Next]を選んで決定し「自動設定」（➡ P.43）をご覧ください。

4 **スピーカーシステムを⬅➡ボタンで選択し⬇ボタンで手順5に進む。**

「Normal Surround」を選んだときは⬇ボタンでSP-B:を選び⬅➡ボタンでスピーカーシステムBの使い方を選ぶ（➡ P.46）。

5 **⬆⬇ボタンで設定するスピーカーを選択する。**

手順3で[Manual THX]を選んだ場合、SURR BACK以外は選択できません。

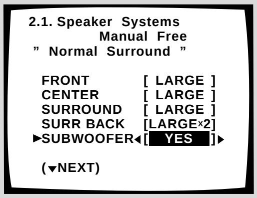
6 **⬅➡ボタンで選んだスピーカーについて、その有無や低域再生能力の大/小を選択する。**

設定するスピーカーによって選べる内容が異なります。設定内容については前ページの説明をご覧ください。

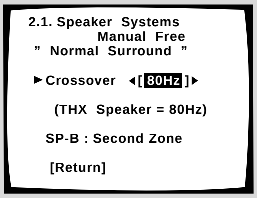
7 **それぞれのスピーカーについて手順5～6を繰り返す。**

以下はOSD画面(テレビ画面)です

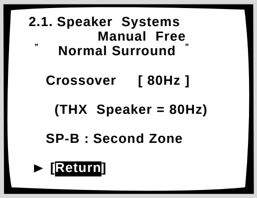
8



9



10



[Manual THX]を選んだ場合は画面が異なります。

8 SUBWOOFERの設定が済んだら⬇ボタンで手順9へ進む。

FRONTを[SMALL]で設定しているときはSUBWOOFERは[YES]で固定されるので、この場合はSURR BACKの設定が済んだら⬇ボタンで手順9へ進んでください。
手順3で[Manual THX]を選んだ場合、Crossoverは[80Hz]で固定されますので、SURR BACKの設定が済んだら手順10へ進みます。

9 Crossoverを⬅ ➡ボタンで[50Hz]、[80Hz]、[100Hz]、[150Hz]、[200Hz]のいずれかに設定する。

「SP-B：」の表示は、手順4で設定するスピーカーシステムに合わせて自動で切り換わります。

10 [Return]を選んで決定する。

スピーカーシステムの設定を終了します。
「Channel Level」に進みます。この場合、P.50 の手順2へ進みます。

設定

メモ

- [AUTO]で測定を行うときは、エアコンやファンヒーターなど、低周波騒音が出る機器の電源を一時的にOFFにしてから測定を行ってください。
- サブウーファーを[PLUS]にした場合、サブウーファーの低域成分とフロントの低域成分の打ち消し合いが発生し、十分な低音の効果が発揮されないことがあります。このような場合は、まずスピーカーの設置場所や向きを変えてみてください。それでも解消されない場合は実際に音を出しながらサブウーファーを[YES]にしたり、フロントスピーカーを小([SMALL])にしてみて比較し、最適な設定にしてください。
- THX Ultra2規格準拠のサブウーファーなど周波数特性が超低域まで伸びているスピーカーを使用される方は「Ultra2サブウーファーの設定」(➡ P.72)もご覧ください。

Channel Level（スピーカー出力レベルの設定）

リスニングポジション（視聴位置）での各チャンネルの音量レベルが一定に揃うように調整します。3 つの設定方法のうち、[Manual]、[Semi Auto]については実際に出力されるテストトーンを耳で確かめながら手動で各スピーカーの出力レベルを調整します。



1-7

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定ボタンを押します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① または ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
```
System Setup
 [Auto Surround Setup]
 [1. Input Assign ]
▶[2. Surround Setup]
 [3. Expert Setup ]
 [4. THX Audio Setup ]
 [Exit]
```

2
```
2. Surround Setup
 [ Check ]
 [ 1. Speaker Systems ]
▶[ 2. Channel Level ]
 [ 3. Speaker Distance ]
 [ 4. Acoustic Cal EQ]
 [ 5. X-Curve]
 [ Return ]
```

3
```
2.2. Channel Level
▶[Manual]
 [Semi Auto]
 [Auto]
 [Return]
Your Speaker Systems
 " Normal Surround "
```

4 5
```
2. 2. Channel Level
                 Manual
LEFT          ◀[+ 9. 5dB]▶
CENTER         [+10. 0dB]
RIGHT          [   0. 0dB]
SURROUND R     [   0. 0dB]
SURR BACK R    [   0. 0dB]
SURR BACK L    [   0. 0dB]
SURROUND L     [   0. 5dB]
SUB WOOFER     [ -10. 0dB]
(▼Next)
```

```
2. 2. Channel Level
                 Manual
SP–B : ITU–R
[▲Back ]
SURROUND L    ◀[+10. 0dB]▶
SURROUND R     [+10. 0dB]
[ Return ]
```

7
```
2. 2. Channel Level
                 Manual
SP–B : ITU–R
[▲Back ]
SURROUND L     [+10. 0dB]
SURROUND R     [+10. 0dB]
▶[Return]
```

1 [2.Surround Setup]を選んで決定する。

Surround Setup（サラウンドの設定）のメニュー画面になります。

2 [2.Channel Level]を選んで決定する。

スピーカー出力レベルの設定になります。

3 設定方法を選んで決定する。

[Manual]：テストトーンを再生するスピーカーを手動で切り換えて調整します。この場合は手順4へお進みください。

[Semi Auto]：テストトーンを再生するスピーカーが自動で切り換わります。この場合は次ページの「[Semi Auto]で調整する」の手順3へお進みください。

[Auto]：マイクを用いた測定により自動設定します。詳しくは「自動設定」（➡ P.43）をご覧ください。

～ご注意～

テストトーンは大きな音で再生されます。音量（MASTER VOLUME）は自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

4 ⬆⬇ボタンで調整するスピーカーを選択する。

- スピーカーBシステムを「ITU-R」で設定しているときは⬇を押していくとスピーカーB のスピーカーも選択することができます。
- スピーカーシステムが[Bi-Surround]の場合はサラウンドバックスピーカーにつながっているスピーカーがSURROUND 2と表示されます。

5 ⬅➡ボタンでレベルを調整する。

各チャンネルのテストトーンが同じ音量に聴こえるように調整してください。

～ご注意～

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

6 それぞれのチャンネルに手順4～5を繰り返す。

7 [Return]を選んで決定する。

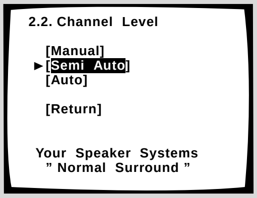
音量（MASTER VOLUME）が元の位置に戻り、スピーカー出力レベルの設定を終了します。

「Speaker Distance」に進みます。この場合、P.52 の手順2へ進みます。

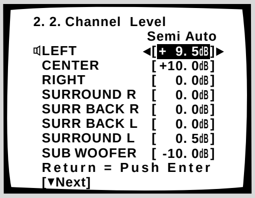
[Semi Auto]で調整する

以下はOSD画面(テレビ画面)です

3



4



3 [Semi Auto]を選んで決定する。

テストトーンの再生されるスピーカー(調整するスピーカー)が 約3秒ごとに自動で切り換わります。

～ご注意～

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

4 **調整したいスピーカーからテストトーンが出力されているときに⬅➡ボタンを押してレベルを調整する。**

－10～+10dBの範囲で調整することができます。

各チャンネルのテストトーンが同じ音量に聴こえるように調整してください。

～ご注意～

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

5 (決定)ボタンを押して設定を終了する。

音量(MASTER VOLUME)が元の位置に戻りスピーカー出力レベルの設定を終了します。

「Speaker Distance」に進みます。この場合、P.52 の手順2へ進みます。

メモ

- 音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75dB SPLに調整してください。
- リモコンのAVアンプ画面のCH LEVELボタンまたはフロントパネルのCH LEVELのSELECTボタンと+/－ボタンでも各スピーカーのレベルを設定できます(テストトーンは出ませんのでお手持ちのソースを再生して調整を行ってください)。この方法では、リスニングモードの3つのグループ(STANDARD/HOME THX、ADVANCED CINEMA/ADVANCED CONCERT、STEREO)で別々に設定できますが、オートサラウンドセットアップや本ページに記載された方法で設定を行うと、すべてのモードがその値で統一されます。

設定

Speaker Distance (スピーカーまでの距離の設定)

リスニングポジション(視聴位置)からスピーカーまでの距離を設定することにより、各チャンネルの再生にディレイタイムが付加され、リスニングポジションで適切なサラウンド効果を得ることができます。マニュアルで設定する場合は、それぞれのスピーカーから視聴位置までの距離を測り、ここで指定してください。本機は、指定された距離から自動的にディレイタイムを算出します。



1-7

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い(決定)ボタンを押します。

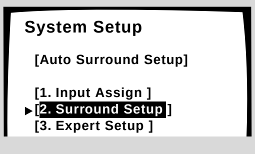
ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① (ホーム) または (AVアンプ) ➡ ② メニュー(システムセットアップ)

(リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません)

以下はOSD画面(テレビ画面)です

1



1 [2.Surround Setup]を選んで決定する。

Surround Setup(サラウンドの設定)のメニュー画面になります。

音場補正の設定 基本

以下はOSD画面(テレビ画面)です

2

```
2. Surround Setup

  [ Check ]

  [ 1. Speaker Systems ]
  [ 2. Channel Level ]
► [ 3. Speaker Distance ]
  [ 4. Acoustic Cal EQ]
  [ 5. X-Curve]

  [ Return ]
```

3

```
2.3. Speaker Distance

 ►[Manual]
  [Auto]
```

4

```
2. 3. Speaker  Distance
                      Manual
►LEFT          ◄[ 2. 75m ]►
 CENTER         [ 2. 40m ]
 RIGHT          [ 2. 40m ]
 SURROUND R     [ 1. 15m ]
 SURR BACK R    [ 1. 20m ]
 SURR BACK L    [ 1. 65m ]
 SURROUND L     [ 1. 85m ]
 SUB WOOFER     [ 3. 30m ]
(▼Next)
```

```
2. 3. Speaker  Distance
                      Manual
 SP–B : ITU–R

(▲Back)
►SURROUND L    ◄[ 1. 65m ]►
 SURROUND R     [ 1. 80m ]
```

5

```
2.3. Speaker Distance
                     Manual
►LEFT         ◄[3.05m]►
 CENTER        [2.40m]
 RIGHT         [2.40m]
 SURROUND R    [1.15m]
 SURR BACK R   [1.20m]
 SURR BACK L   [1.65m]
 SURROUND L    [1.85m]
 SUB WOOFER    [3.30m]
  [Return]
```

7

```
2.3. Speaker Distance
                     Manual
 LEFT          [3.05m]
 CENTER        [2.40m]
 RIGHT         [2.40m]
 SURROUND R    [1.15m]
 SURR BACK R   [1.25m]
 SURR BACK L   [1.60m]
 SURROUND L    [1.85m]
 SUB WOOFER    [3.30m]
► [Return]
```

2 [3.Speaker Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定になります。

3 設定方法を選んで決定する。

[Manual]：手動ですべてを設定します。この場合は手順4へお進みください。

[Auto]：マイクを用いた測定により自動設定します。詳しくは「自動設定」(➡ P.43)をご覧ください。

4 ⬆⬇ボタンで調整するスピーカーを選択する。

- スピーカーBシステムを「ITU-R」で設定しているときは⬇を押していくとスピーカーB のスピーカーも選択することができます。
- スピーカーシステムが[Bi-Surround]の場合はサラウンドバックスピーカーにつながっているスピーカーがSURROUND 2と表示されます。

5 設定するスピーカーまでの距離を⬅ ➡ボタンで設定する。

0.05m〜9mの範囲内において0.05m間隔で設定できます。

6 それぞれのスピーカーに手順4〜5を繰り返す。

7 [Return]を選んで決定する。

スピーカーまで距離の設定を終了します。

「Acoustic Cal EQ」に進みます。この場合、 P.53 の手順2へ進みます。

メモ

- サラウンドバックスピーカーを2本接続した場合は設置および設定をリスニングポジションから等距離にしますと、HOME THXモードの効果が最大限に発揮されます。

Acoustic Cal EQ(視聴環境の周波数特性の補正)

各スピーカーの周波数特性を補正し、視聴環境全体の周波数特性を均一化します。補正カーブには[ALL CH ADJUST]と[FRONT CH ALIGN]の２種類があり、それぞれの内容は以下の通りです。まずオートサラウンドセットアップ（➡ P.40 ）またはAuto（手順３の**Auto**を参照）モードで自動調整したあとに、その補正カーブをCUSTOM1やCUSTOM2にコピーして手動調整する方法（手順３の**Manual**を参照）をおすすめします。

データコピーを行わなくても直接CUSTOM1やCUSTOM2の補正カーブを手動で調整することはできますが、この場合はフラット状態からの手動調整となります。

[Professional］はALL CH ADJUSTとFRONT CH ALIGNの補正カーブを視聴環境の残響特性を考慮して自動設定します（➡ P.55 ）。また、残響特性をグラフ表示（パソコンまたはOSD画面）することもできます（➡ P.61 ）。

ALL CH ADJUST：(ALL ADJ)　部屋の特性を含めて、サブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性をフラットに補正します。全てのチャンネル間の再生音のつながりがよくなり、サラウンドなどの音場のバランスが改善され、特に映画などのソースではワンランク上の臨場感、迫力をお楽しみ頂けます。

FRONT CH ALIGN：（F ALIGN） フロント左/右(FL/FR)とサブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性を、フロントchの特性に合わせます。フロントchについてはスピーカー本来の性能をそのまま引き出し、他のチャンネルはフロントchの特性に合わせることで、チャンネル間のつながりと音場のバランスを改善します。音楽などのソースに適しています。

CUSTOM1： 「オートサラウンドセットアップ」で設定した「視聴環境の周波数特性の補正」の設定値をコピー(保存)することができます。更にCUSTOM1にコピーされた設定値は手動で微調整することもできます。

CUSTOM2： CUSTOM1と同様です。

各周波数帯と音声の分布については「各種音声の周波数分布について」(➡ P.124)をご覧ください。



1-14

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① 🏠 または AVアンプ ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面(テレビ画面)です

1

```
System Setup
 [Auto Surround Setup]
 [1. Input Assign ]
▶[2. Surround Setup]
 [3. Expert Setup ]
 [4. THX Audio Setup ]
 [Exit]
```

2

```
2. Surround Setup
 [ Check ]
 [ 1. Speaker Systems ]
 [ 2. Channel Level ]
 [ 3. Speaker Distance ]
▶[ 4. Acoustic Cal EQ ]
 [ 5. X-Curve]
 [ Return ]
```

3,4

```
2. 4. Acoustic Cal EQ
 ▶[Data Copy]
  [Manual]
    CUSTOM1 , CUSTOM2
  [Auto]
    ALL ADJ & FRONT ALIGN
  [Professional]
  [Return]
```

5

```
2.4. Acoustic Cal EQ
 A.Cal EQ Data Copy
     To        ←     From
 ▶ CUSTOM1        ◀[CUSTOM1]▶
   CUSTOM2         [CUSTOM2 ]
  [Copy OK]
  [Cancel]
```

6

```
2.4. Acoustic Cal EQ
 A.Cal EQ Data Copy
     To        ←     From
 ▶ CUSTOM1        ◀[ALL ADJ]▶
   CUSTOM2         [CUSTOM2 ]
  [Copy OK]
  [Cancel]
```

1 [2.Surround Setup]を選んで決定する。

Surround Setup(サラウンドの設定)のメニュー画面になります。

2 [4.Acoustic Cal EQ]を選択して決定する。

視聴環境の周波数特性の補正になります。

3 設定方法を選ぶ。

[Data Copy]：「CUSTOM1」または「CUSTOM2」に、視聴環境の周波数特性をコピーします。この場合、手順4からの操作になります。

[Manual]：「CUSTOM1」または「CUSTOM2」にコピーした周波数特性を手動で調整します。この場合、手順8からの操作になります。

[Auto]：マイクを用いた測定により自動設定します。詳しくは「自動設定」（➡ P.43 ）をご覧ください。

[Professional]：視聴環境の残響特性にも対応して周波数特性を補正します。詳しくは「Acoustic Cal EQ Professional(視聴環境の残響特性の測定と補正)」（➡ P.55 ）をご覧ください。

4 [Data Copy]を選んで決定する。

「CUSTOM1」または「CUSTOM2」のどちらに保存するかを選択する画面になります。

5 ⬆⬇ボタンで「CUSTOM1」または「CUSTOM2」のどちらにコピーするのかを選ぶ。

6 ⬅➡ボタンで、どの補正カーブをCUSTOMにコピーするのかを選択して決定する。

以下のように切り換わります。

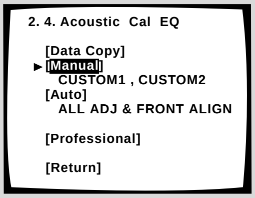
→ CUSTOM1 ⟷ CUSTOM2 ←
→ F ALIGN ⟷ ALL ADJ ←

設定

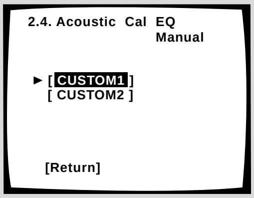
音場補正の設定 基本

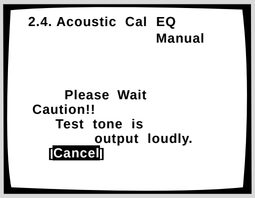
以下はOSD画面(テレビ画面)です

8

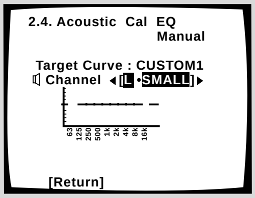


9

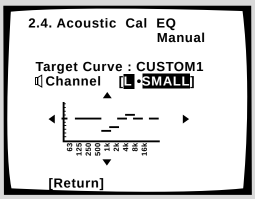




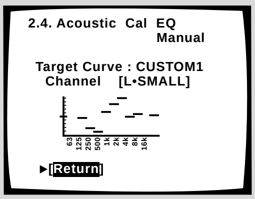
10



11



14



7 [Copy OK]を選んで決定する。

手順5で選んだ[CUSTOM]に、手順6で選んだ補正カーブがコピーされ、[Data Copy]モードを終了します。データコピーをキャンセルする場合は、[Cancel]を選びます。

8 [Manual]を選んで決定する。

[CUSTOM1]または[CUSTOM2]のどちらを調整するかを選択する画面になります。

9 ⬆⬇ボタンで調整する補正カーブ([CUSTOM1]または、[CUSTOM2])を選んで決定する。

テストトーンが出力されます。

〜ご注意〜

テストトーンは大きな音で再生されます。音量(MASTER VOLUME)は自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

10 ⬅➡ボタンで調整するチャンネルを選んで決定する。

11 ⬅➡ボタンで調整したい周波数を選び、⬆⬇ボタンでレベルを上下に調整する。

TRIM機能については次ページをご覧ください。

12 (決定)ボタンを押してそのチャンネルの調整を終了する。

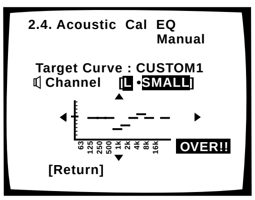
13 それぞれのチャンネルについて手順10〜12を繰り返す。

14 [Return]を選んで決定する。

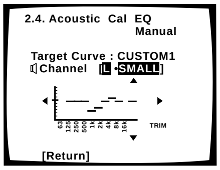
音量(MASTER VOLUME)が元の位置に戻り、視聴環境の周波数特性の補正を終了します。
「X-Curve」に進みます。この場合、 P.62 の手順2へ進みます。

✎メモ

- Autoで設定を行った場合、アコースティックキャリブレーションEQはALL CH ADJUSTモードで自動的にONになります(➡ P.78)。
- スピーカー設定で[SMALL]に設定されたチャンネルは、63Hzの調整を行うことができません。
- レベルを調整しているときに、 左図のように「OVER!!」と表示されることがあります。このような場合、各設定の合成特性により音声が歪んでしまうことがありますので、変更した周波数または周辺の周波数のレベルを小さめに設定し直すことをおすすめします。



Acoustic Cal EQ（視聴環境の周波数特性の補正）では、チャンネルごとに周波数特性を調整するためチャンネル間のレベルバランスがくずれてしまう場合があります。TRIM機能を使うと、調整した周波数特性のバランスを保ったまま全帯域のレベルを上下させることができます。



TRIM機能を使うには、前ページの手順11でカーソルを右端に移動させ、画面の右下に「TRIM」の文字が表示されたら⬆⬇**ボタン**で全帯域のレベルを調整してください。

Acoustic Cal EQ Professional（視聴環境の残響特性の測定と周波数特性の補正）

視聴環境の残響特性を測定し、測定された残響特性に適した周波数特性の補正を行います。残響特性とは視聴環境における音の響き方のことです。カーテンの位置や壁の質、吸音材の位置などで残響特性は変わります。ここでは、残響特性に応じた周波数特性の補正を行いますので、以下のような視聴環境のときに効果を発揮します。

① 各チャンネルごとに響き方が異なる視聴環境。

② 各周波数帯域ごとに響き方が異なる視聴環境。

お客様の視聴環境の残響特性はOSD画面（テレビ画面）またはパソコンのモニターで確認することができます。この機能により、お客さまが部屋に施した吸音材などの使用効果を目で見て確認することができますので、より理想的な残響特性を創ることができます。各チャンネルにおける各周波数の残響特性をご覧になり、視聴環境の整備（➡ P.37）が必要と思われるときは、カーテンの位置やカーペットまたは吸音材の使用などを見直し、もう一度音場補正を行うことをおすすめします。

メモ

- Acoustic Cal EQ Professionalの［Auto Pro.］または［Advanced EQ Setup］を行うと、オートサウンドセットアップ（➡ P.10）またはAcoustic Cal EQの［Auto］モードにて測定された補正カーブ（ALL CH ADJとFRONT ALIGN）はここでの補正カーブに上書きされてしまいますのでご注意ください。上書きしたくないときは、CUSTOM1, 2にコピーしておくことをおすすめします。
- パソコンにて残響特性を表示するにはパソコンが P.61 に記載されている条件を満たしていなければなりません。また、別途、専用アプリケーションソフトおよびRS-232Cケーブルが必要となります。専用アプリケーションおよびその取扱説明書については表紙でも紹介した下記URLにてお客様登録をした後、ダウンロードのサイトへ進み、ダウンロードしてください。

  http://www3.pioneer.co.jp/

  RS-232Cケーブルの詳細についてはダウンロードした取扱説明書をご覧ください。その他ご不明な点がありましたら、カスタマーサポートセンターへお問い合わせください。
- Acoustic Cal EQ Professionalの［Auto Pro.］は周波数特性の補正についての自動設定です。Auto Surround Setupと違い、スピーカーシステム、スピーカーからの距離、スピーカーの出力レベルについての設定は行いませんので、Professionalを行う前に「Auto Surround Setup」（➡ P.40）を行うことをおすすめします。

[Auto Pro.]： 視聴環境の残響特性を測定し、その特性に応じて「20～40［ms］」か「60～80［ms］」のどちらかの補正位置を自動で選択して周波数特性の補正を行います（ALL CH ADJUSTとFRONT ALIGNの２つの補正カーブ）。測定時間は２～13分程度です。

[Manual Pro.]： 視聴環境の残響特性を測定し、各チャンネルにおける各周波数の残響特性を時間軸と音量レベルで表示します。また、時間軸のどの位置の音で周波数特性の補正を行うかを手動で選択し、調整を開始することもできます。

[Reverb Measurement]：
お客様の視聴環境の残響特性を測定します。測定時間はおよそ２～６分程度です。

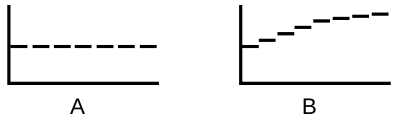
[Reverb View]：
[Reverb Measurement]で測定した各チャンネルにおける各周波数の残響特性をOSD画面（テレビ画面）で確認することができます。[PC Output]を選ぶとパソコンでより詳細に確認することができます。

[Advanced EQ Setup]：
[Reverb Measurement]で測定した各チャンネルにおける各周波数の残響特性がOSD画面（テレビ画面）に表示されますので、表示された残響特性カーブを参考にしながら周波数特性の補正を行うための「時間軸上の位置」をお好みで選択し補正を行います。

設定

残響特性グラフの見方

グラフは、静寂な状態から時間０でテストノイズを出力し始め、以降スピーカーから一定レベルを出力し続けた時のマイク入力レベルの時間変移を示したものです。全く残響のない場合は、下図Ａのようになりますが、残響がある場合、徐々に音響パワーが累積されて下図Ｂのようになります。



メモ

- 低い周波数帯域は群遅延特性の影響で0ms付近の立ち上がりが鈍くなる場合があります。
- 各スピーカーの「距離と能力の差」による「ディレイとレベル差」は、グラフを見やすくするため、補正されたものを表示します。周波数特性に関しては補正しないで表示します。

Advanced EQ Setup での 補正時間位置の決め方

［Manual Pro］では、［Reverb Measurement］で測定した残響特性カーブを参考に、お客様が補正時間位置を手動で選択します。この機能は上級者向けの機能になります。補正時間位置の設定および Advanced EQ Setup をすべて自動で行いたいお客様は［Auto Pro.］を選択して下さい。
［Reverb Measurement］で測定した残響特性カーブは、［Reverb View］で OSD 画面またはパソコン表示により確認できます。また、Advanced EQ Setup の補正時間位置を設定する OSD 画面にも表示されます。残響特性カーブをご覧になり、各周波数、各チャンネルで、残響特性カーブの形状の差が大きいような場合は、残響音の悪影響を受けないようにするために、早い時間位置（例えば20～40[ms]）に設定することをおすすめします。お好みで他の時間位置をお試しいただくのも結構です。どの時間位置にしてよいかわからない場合には、20～40[ms]に設定してください。ただし20～40[ms]の間で残響カーブのどこかの周波数帯に突発的な変化が見られる場合は他の時間位置を選択してください。
通常の Acoustic Cal EQ 補正では、図１のようにマイク入力のデータ取得時間が 80 ～ 160[ms]の固定になっています。それに対して、Professional では、０～ 80[ms]の中の１ポイント（20[ms]幅）をお客様が選択できます。補正時間位置の設定は、測定した残響特性のグラフをみて、以下の１～３のパターンを参考に決めます。

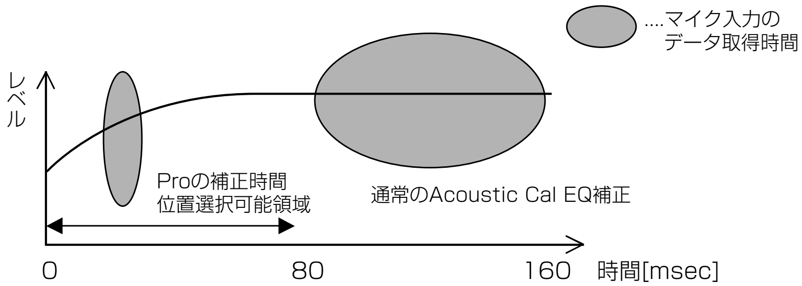


図1　Professionalと通常モードの比較

1. <周波数毎に残響特性が異なる場合>
例えば図２のような残響特性の部屋の場合、低域が大きく響いて高域があまり響かないというような特性になっています。通常の Acoustic Cal EQ の ALL CH ADJUST 補正をすると、80 ～ 160[ms]のデータを取得するため、低域の音量が大きく、高域が小さいと判断し、EQのカーブは高域を上げ気味に補正します。ところが、スピーカーから直接耳に届く約40ms以内の特性は高域を上げる必要がないくらい、十分な音量が出ていますので、通常の Acoustic Cal EQ 補正をすると高域がきつく感じることがあります。このような場合にはスピーカーからの直接音を大切に補正するという意味で、Professional の20～40[ms]くらいを指定して補正をすると、スピーカーからの直接音（初期反射音を含む）がフラットになり、聞きやすい音場になります。

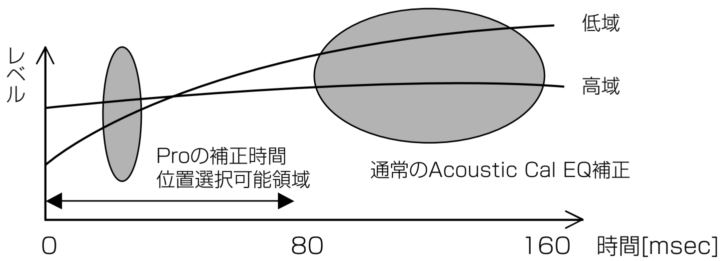


図2　周波数毎に残響特性が異なる場合の例

2. <チャンネル毎に残響特性が異なる場合>
また、図３のような残響特性の部屋の場合、チャンネル毎に残響特性が異なっています。このような部屋で通常のAcoustic Cal EQ 補正をすると、80 ～ 160[ms]のデータを取得するため、スピーカーから音が放射されてから80[ms]以降に徐々に各チャンネルの音色がそろってくるようになります。一方、音像の定位感や移動感、各スピーカーからの音のつながりは、残響音ではなく、各スピーカーからの直接音（初期反射音を含む）に左右されます。80 ～ 160[ms]のデータを取得し補正する通常のAcoustic Cal EQ 補正では、このような部屋の場合、直接音の特性をそろえることは出来ません。そこで、Professional の20 ～ 40[ms]くらいを指定して補正をすると、各チャンネルの直接音がそろい、音像の定位感や移動感、各スピーカからの音のつながりが理想的となり、素晴らしい音場をお楽しみいただけるようになります。

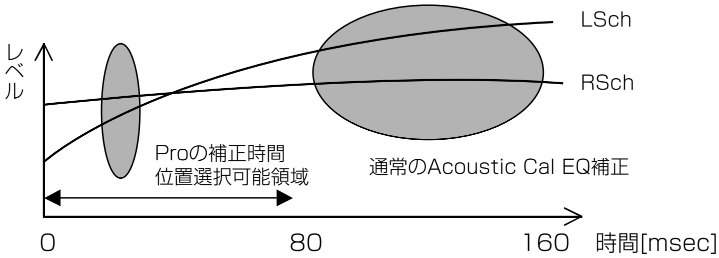


図3　チャンネル毎に残響特性が異なる場合の例

3. <周波数毎、及びチャンネル毎に残響特性が似ている場合>
図４のように、各周波数、各チャンネルの残響特性が似ているような場合には、残響特性が悪影響を及ぼすことはありませんので、直接音で補正する（20 ～ 40[ms]程度に設定する）必要はありません。そのような場合には、Acoustic Cal EQ は［Professional］モードではなく、通常の［Auto］で行うことをおすすめします。そうすることで、直接音及び残響音を全て含んだトータルでの補正が行われ、理想的な音場空間を再現できます。

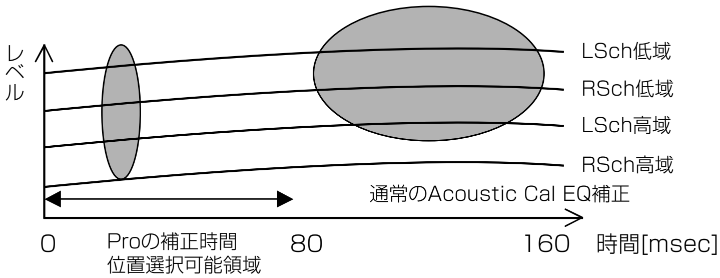


図4　周波数毎、及びチャンネル毎に残響特性が似ている場合の例

メモ

- 本機の「残響特性測定及びグラフ表示機能」は、お客様の吸音材設置の効果を確かめるツールとしてお使いいただけます。
- 吸音材の位置などを変更された後は、残響特性の測定［Reverb Measurement］、補正時間位置の決定［Advanced EQ Setup］をやりなおすことをおすすめします。



1-22

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① または ➡ ② メニュー システムセットアップ

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

1

```
System Setup

[Auto Surround Setup]

[1. Input Assign ]
►[2. Surround Setup ]
[3. Expert Setup ]
[4. THX Audio Setup ]

[Exit]
```

[2.Surround Setup]を選んで決定する。

Surround Setup（音場補正）のメニュー画面になります。

2

```
2. Surround Setup

[ Check ]

[ 1. Speaker Systems ]
[ 2. Channel Level ]
[ 3. Speaker Distance ]
►[ 4. Acoustic Cal EQ ]
[ 5. X-Curve]

[ Return ]
```

[4.Acoustic Cal EQ]を選択して決定する。

視聴環境の周波数特性の補正になります。

3

```
2. 4. Acoustic Cal EQ

[Data Copy]
[Manual]
  CUSTOM1 , CUSTOM2
[Auto]
  ALL ADJ & FRONT ALIGN

►[Professional]

[Return]
```

[Professional]を選択して決定する。

視聴環境の残響特性の測定と周波数特性の補正になります。「残響特性の測定」、「時間軸上の補正位置の設定」および「周波数特性の補正」をすべて自動で行うときは「自動設定（[Auto]による設定）」（➡ P.43）をご覧になり「Auto Pro.」を選択して決定し、[Start]を選びます（設定にはおよそ2～13分かかります）。この場合は「[Auto Pro.] で設定する」（➡ P.60）をご覧ください。

[Manual Pro.]を選ぶときのみ手順４へお進みください。

4

```
2.4. Acoustic Cal EQ Pro.
  " Professional "

[Auto Pro. ]

►[Manual Pro. ]
  Reverb Measurement
  Reverb View
  Advanced EQ Setup

[Return]
```

[Manual Pro.]を選んで決定する。

[Reverb Measurement]、[Reverb View]、[Advanced EQ Setup]の選択画面になります。

5

```
2.4. Acoustic Cal EQ Pro.
        Manual Pro.

► [ Reverb Measurement ]

[ Reverb View ]

[ Advanced EQ Setup ]

[Return]
```

[Reverb Measurement]を選んで決定する。

6

マイクを接続して残響特性の測定の準備をする。

・付属の設定用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。（TVモニターの近くには設置しないでください。）

・測定中は静かにしてください。

・スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。

7

```
2.4. Acoustic Cal EQ Pro.
              Reverb
•Connect microphone
•Please be quiet
•Move obstacles away
•If you have a subwoofer
   turn power on and
      turn volume up

► [Start]
  [Cancel]
```

[Start]を選んで決定する。

残響特性の測定になります。測定にはおよそ2～6分程度かかります。

設定の途中で静止画面を３分間放置すると画面は一時的に消えますが、何かボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。

8

```
2.4. Acoustic Cal EQ Pro.
              Reverb

   !! Complete !!

► [Return]
```

[Return]を選んで決定する。

測定結果を確認するときは手順９へ、測定結果を確認せずに周波数特性の補正を行うときは手順15へお進みください。

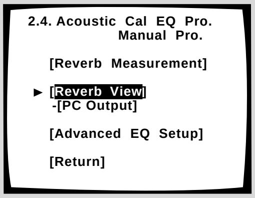
9

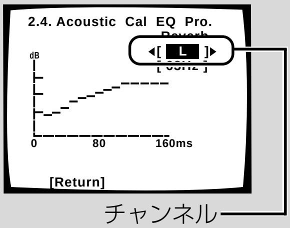
[Reverb View]を選んで決定する。

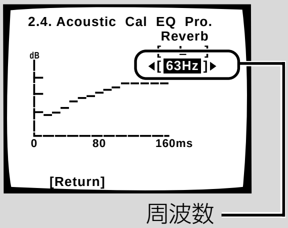
残響特性の測定結果確認画面になります。

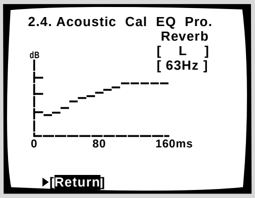
パソコンで残響特性の表示をするときは「パソコンのモニターで各チャンネルにおける各周波数の残響特性を確認する」（➡ P.61）へお進みください。

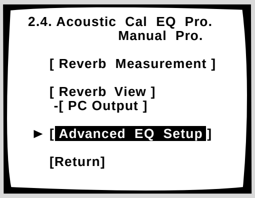
以下はOSD画面（テレビ画面）です

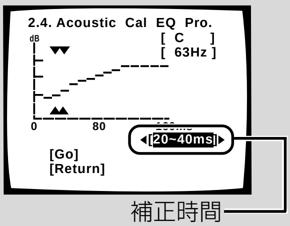
9


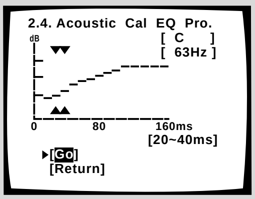
10


11


14


15


16


17


10 ⬅➡ ボタンで測定結果を確認したいチャンネルを選ぶ。

11 ⬇ ボタンで周波数を選び、⬅➡ ボタンで測定結果を確認したい周波数バンドを選ぶ。

選べる周波数バンドは各チャンネルについて「63Hz」、「125Hz」、「250Hz」、「500Hz」、「1kHz」、「2kHz」、「4kHz」、「8kHz」、「16kHz」の９つです。

12 ⬆ ボタンでチャンネルを選ぶ。

13 手順 10 ～ 12 を繰り返して各チャンネルにおける各周波数の残響特性の測定結果を確認する。

14 [Return]を選んで決定する。

残響特性の測定結果確認画面を終了します。
各チャンネルにおける各周波数の残響をご覧になった結果、チャンネルごとまたは周波数ごとに響き方が異なるときは手順 15 へお進みください。
部屋の残響特性を改善したいときはここで吸音材の調整などを見直し、視聴環境の整備を行ってください。その場合、再度[Reverb Measurement]を行い[Reverb View]でその効果を確認することをおすすめします。
残響特性が特にバラつきなく測定されているときは理想的な残響特性が得られていますので、[Return]を選んで決定し、手順21へお進みください。このとき、通常のAcoustic Cal EQ 補正を行っていないと周波数特性は補正されないままですので、[Professional]を終了した後、P.53 の手順３の[Auto]を実行してください。

15 [Advanced EQ Setup]を選んで決定する。

補正時間位置を指定する画面になります。

16 ⬆⬇ ボタンで補正時間を選び、⬅➡ ボタンで補正時間位置を指定する。

残響特性カーブを参考に補正時間位置を指定します。スピーカーからの音接音と初期反射音をカバーする[20 ～ 40ms]をおすすめします。補正時間位置の決め方は「Advanced EQ Setupでの補正時間位置の決め方」（➡ P.56）をご覧ください。補正時間位置は各チャンネル、各周波数に共通です。
チャンネルと周波数を切り換えることができますが、この切り換えは参考にする残響特性カーブの切り換えです。

17 ⬆⬇ ボタンで[Go]を選んで決定する。

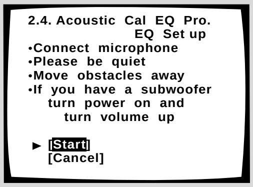
設定

✎メモ

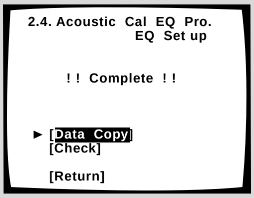
- ＯＳＤのｄＢ表示（縦軸の目盛り）は２ｄＢごとに区切られています。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

18



19



18 **[Start]を選んで決定する。**

手順16で選んだ時間帯の音で周波数特性の補正を自動で行います。測定にはおよそ2～11分程度かかります。
設定の途中で静止画面を3分間放置すると画面は一時的に消えますが、何かボタンを押すことで再び同じ画面を表示します。

19 **⬆⬇ ボタンで[Data Copy]、[Check]または[Return]のいずれかを選んで決定する。**

[Data Copy]：
① [Data Copy] を選んで 決定
② [CUSTOM1]または[CUSTOM2]のどちらにコピーするのか選んで 決定
③ [Copy OK]を選んで 決定

[Check]： ALL CH ADJ と FRONT ALIGN の各チャンネルについて確認することができます。

[Return]： ［Advanced EQ Setup］を終了します。

20 **⬆⬇ ボタンで[Return]を選んで決定する。**

［Manual Pro.］を終了します。

21 **⬆⬇ ボタンで[Return]を選んで決定する。**

［Professional］（視聴環境の残響特性の測定と補正）を終了します。

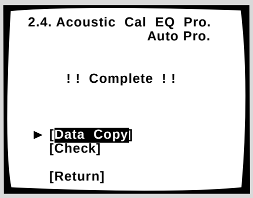
22 **もう一度 ⬆⬇ ボタンで[Return]を選んで決定する。**

視聴環境の周波数の補正を終了します。
「X-Curve」に進みます。この場合、 P.62 の手順2へ進みます。

[Auto Pro.] で設定する

以下はOSD画面(テレビ画面)です

4



4 **⬆⬇ ボタンで[Data Copy]、[Check]または[Return]のいずれかを選んで決定する。**

[Data Copy]：
① [Data Copy] を選んで 決定
② [CUSTOM1]または[CUSTOM2]のどちらにコピーするのか選んで 決定
③ [Copy OK]を選んで 決定

[Check]： ALL CH ADJ と FRONT ALIGN の各チャンネルについて確認することができます。

[Return]： ［Auto Pro.］を終了します。

5 **⬆⬇ ボタンで[Return]を選んで決定する。**

［Professional］（視聴環境の残響特性の測定と補正）を終了します。

6 **もう一度 ⬆⬇ ボタンで[Return]を選んで決定する。**

視聴環境の周波数の補正を終了します。
「X-Curve」に進みます。この場合、 P.62 の手順2へ進みます。

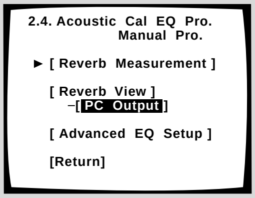
パソコンのモニターで各チャンネルにおける各周波数の残響特性を確認する

ここでは残響特性の測定結果をお持ちのパソコンに転送してご覧いただく方法を説明します。測定結果をパソコンに転送してご覧いただくにはお持ちのパソコンが以下の条件を満たしていなければなりませんので、ご確認ください。

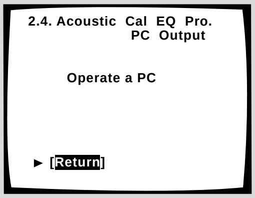
- OS が「Windows® XP」、「Windows® 2000」、「Windows® Millenium Edition」、「Windows® 98 Second Edition」、「Windows® NT 4.0 (Service Pack 6)」のいずれかであること。
- CPU が Pentium 3/300MHz 以上か AMD K6/300MHz 以上（または 100% 互換のある CPU）であること
- メモリーが 128MB 以上であること
- 画面解像度が 800 × 600 ドット以上であること
- インターネットに接続可能であること
- 232C ポートを搭載していること（COM ポートの接続についてはパソコンメーカーへお問い合わせください）

以下はOSD画面（テレビ画面）です

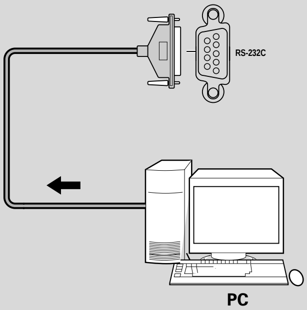
9



10



10



ここから読む場合は P.58 の手順1～8を行ってから以下の手順へお進みください。

9 **[PC Output]を選んで決定する。**

パソコンへのデータ転送待ち画面になります。パソコン表示用のデータが存在しない場合は［PC Output］が表示されません。このようなときはもう一度 P.58 手順 1 ～ 8 を行ってください。

10 **本機とパソコンをRS-232Cケーブルで接続する。**

ケーブルはメス―メスのクロスタイプを使用します。詳細はダウンロードしたＰＣ アプリケーションの取扱説明書をご覧ください。

11 **パソコンの電源を入れて専用のPCアプリケーションを起動してください。**

PC アプリケーションの取扱説明書の指示に従い、データ転送を行います。データ送信は 10 秒程で終了します。
パソコン表示用の残響特性データは電源をOFFにしたり、再度残響特性の測定を行うと本機のメモリから消去されます。測定後はすみやかにパソコンへデータ送信し、保存しておくことをおすすめします。

12 **[Return]を選んで決定する。**

残響特性の測定確認画面を終了します。
各チャンネルにおける各周波数の残響をご覧になった結果、チャンネルごとまたは周波数ごとに響き方が異なるときは P.59 の手順 15 へお進みください。
残響特性が特にバラつきなく測定されているときは理想的な残響特性が得られていますので、[Return] を選んで決定し、 P.60 の手順21 へお進みください。このとき、通常の Acoustic Cal EQ 補正を行っていないと周波数特性は補正されないままですので、[Professional]を終了した後、 P.53 の手順 3 の[Auto]を実行してください。

X-Curve(聴感上の高域補正)

広い視聴環境において、聴感上、高域がきつく聞こえてしまう場合に、X-Curve（X カーブ）と呼ばれる高域の減衰カーブを使って補正することができます。この補正は「Acoustic Cal EQ」（➡ P.52 ）の補正値には影響しません。X-Curve は 2kHz 以上の周波数を減衰させるカーブで、減衰の傾きは –0.5dB/oct ～ –3.0dB/oct（0.5dB ステップ）の 6 種類から選択可能です。以下の表を目安に、部屋の広さや聴感によって、自由に調節してください。

部屋の広さによる減衰カーブの目安

部屋の広さ	～36m²	～48m²	～60m²	～72m²	～300m²	～1000m²
減衰カーブ	−0.5dB/OCT	−1dB/OCT	−1.5dB/OCT	−2dB/OCT	−2.5dB/OCT	−3dB/OCT

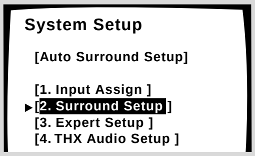


1-9

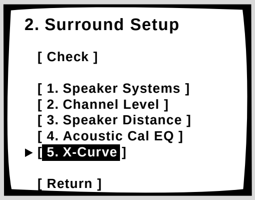
⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

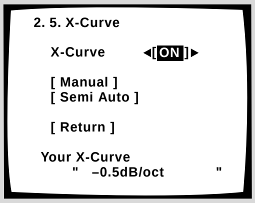
1



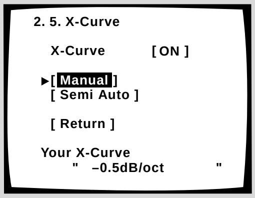
2



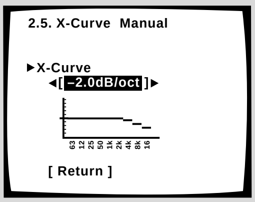
3



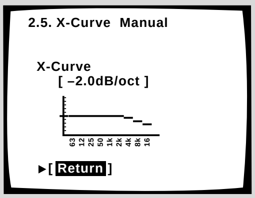
4



5



6



ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① （ホーム）または（AVアンプ） ➡ ② メニュー システムセットアップ

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

1 **[2.Surround Setup]を選んで決定する。**
Surround Setup(サラウンドの設定)のメニュー画面になります。

2 **[5. X-Curve]を選んで決定する。**
聴感上の高域補正になります。

3 **⬅➡ボタンで[ON]または[OFF]のどちらかを選ぶ。**
[ON]を選択すると[Manual]または[Sem: Auto]を選択することができます。
[OFF]を選択するとX-CurveはFLATになり聴感上の高域は補正されません。この場合は手順7へお進みください。

4 **調整方法を選んで決定する。**
[Manual]：手動で減衰カーブを設定します。
[Semi Auto]：スピーカーまでの距離の設定をもとに部屋の広さが計算され自動的に適した減衰カーブが設定されます。この場合手順6へ進みます。

5 **⬅➡ボタンで高域減衰カーブを調整する。**
–0.5から–3.0dB／octを0.5dBステップの6段階で調整することができます。

6 **[Return]を選んで決定する。**
X-Curve調整画面を終了します。

7 **[Return]を選んで決定する。**
Surround Setupのメニュー画面になります。

8 **[Return]を選んで決定する。**
System Setupのメニュー画面になります。「Expert Setup」に進む場合は、 P.67 の手順1へ進みます。

9 **[Exit]を選んで決定する。**
System Setupを終了します。

メモ
- THXモードでは、Xカーブと同じような、高域を補正するRe-Equalizationという機能がはたらくため、Xカーブの設定は無効になります。

Input Assign（入力に関する設定）

Digital In（デジタル入力の設定）

デジタル入力端子（DIGITAL IN 1～6 と DDRF IN）に接続したデジタル機器が、工場出荷時の設定（右表）と異なるときに設定します。DDRF IN入力はLDプレーヤーやDVD／LDプレーヤーの DDRF端子に対応します。

- Digital-1～6 に選択できる入力ファンクションは[DVD/LD]、[TV/DVD]、[CD]、[SAT]、[DVR/VCR1]、[CD-R/TAPE1/MD]、[VCR2]、[VCR3]です。
- DDRF IN に選択できる入力ファンクションは[DVD/LD]、[TV/DVD]、[SAT]、[DVR/VCR1]、[VCR2]、[VCR3]です。

入力端子	設定
IN 1	DVD/LD
IN 2	TV/DVD
IN 3	CD
IN 4	SAT
IN 5	DVR/VCR1
IN 6	CD-R/TAPE1/MD
DDRF IN	DVD/LD

メモ
- 工場出荷時の各入力端子の設定は右の図の通りです。 リアパネルは下から 1 2 3 ... と上へ並んでいますのでご注意ください。



1-6

↑↓←→ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

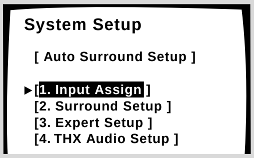
① （ホーム）または （AVアンプ） → ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面（テレビ画面）です

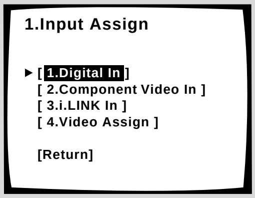
1 [1.Input Assign]を選択して決定する。

入力に関する設定のメニュー画面になります。



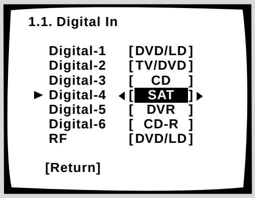
2 [1.Digital In]を選択して決定する。

デジタル入力の設定になります。



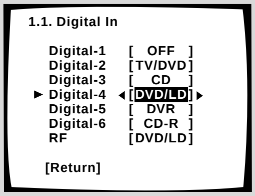
3 変更したいデジタル入力端子を選ぶ。

例えばDigital-4を[SAT]から[DVD/LD]に変更したいときはDigital-4を選びます。



4 ←→ボタンで割り当てる入力ファンクションを選択する。

例えばDigital-4を[SAT]から[DVD/LD]に変更したいときは[DVD/LD]を選びます。

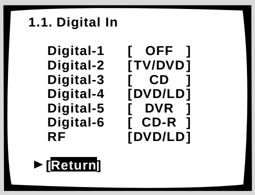


5 他の入力端子についても変更する場合は、手順3と4を繰り返す。

6 [Return]を選択して決定する。

デジタル入力の設定を終了します。

「Component Video In」に進みます。この場合、P.64 の手順2へ進みます。



メモ
- Digital-1～6で、同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、先に割り当てられていた入力端子の設定がOFFに切り換わります。

設定

Component Video In （コンポーネントビデオ入力の設定）

本機とソース機器をCOMPONENT VIDEO端子（コンポーネントまたはD端子）で接続しているときにその機器を「DVR」などの入力ファンクションに割り当てます。ソース機器をCOMPONENT VIDEO入力端子に接続しているときは、この設定をしないとCOMPONENT VIDEO接続したソース機器の映像を出力することができません。

- 選択できる入力ファンクションは[DVD/LD]、[TV/DVD]、[SAT]、[DVR/VCR1]、[VCR2]、[VCR3]です。

メモ • 工場出荷時の各入力端子の設定は右の図の通りです。

IN 1	OFF
IN 2	OFF
IN 3	OFF

D4 VIDEO

IN 4	OFF
IN 5	OFF



1-6

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

①  または  ➡ ② メニュー  システムセットアップ

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面(テレビ画面)です

1

```
System Setup
 [ Auto Surround Setup ]
▶[1. Input Assign]
 [2. Surround Setup ]
 [3. Expert Setup ]
 [4. THX Audio Setup ]
 [Exit]
```

2

```
1.Input Assign
 [ 1.Digital In ]
▶[ 2.Component Video In ]
 [ 3.i.LINK In ]
 [ 4.Video Assign ]
 [Return]
```

3

```
1. 2. Component Video In
▶Component1 ◀[ OFF ]▶
 Component2  [ OFF ]
 Component3  [ OFF ]
 D4  Video4  [ OFF ]
 D4  Video5  [ OFF ]
 [Return]
```

4

```
1. 2. Component Video In
▶Component1 ◀[ DVR ]▶
 Component2  [ OFF ]
 Component3  [ OFF ]
 D4  Video4  [ OFF ]
 D4  Video5  [ OFF ]
 [Return]
```

6

```
1.2. Component Video In
 Component1  [ DVR ]
 Component2  [ OFF ]
 Component3  [ OFF ]
 D4  Video4  [ OFF ]
 D4  Video5  [ OFF ]
▶[Return]
```

1 **[1.Input Assign]を選択して決定する。**
入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[2.Component Video In]を選択して決定する。**
コンポーネントビデオ入力の設定になります。

3 **設定したい入力端子を選ぶ。**
例えばCOMPONENT VIDEO IN 1 に接続した機器を設定するときはComponent1 を選びます。

4 **⬅➡ ボタンで割り当てる入力ファンクションを選択する。**
例えば手順3で選んだ機器を[DVR/VCR1]に割り当てたいときは[DVR]を選びます。

5 **他の入力端子についても変更する場合は、手順３と４を繰り返す。**

6 **[Return]」を選択して決定する。**
コンポーネントビデオ入力の設定を終了します。
「i.LINK In」に進みます。この場合、P.65 の手順2へ進みます。

メモ

- Component1～3およびD4 Video4～5で、同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、先に割り当てられていた入力端子の設定がOFFに切り換わります。
- コンポーネントやD端子から入力された信号はSビデオ出力端子、コンポジット出力端子には出力されません。

i.LINK In（i.LINK 入力の設定）

i.LINK 端子に接続した機器を「DVD/LD」などの入力ファンクションに割り当てます。この設定を行うと、その機器の音声と映像を INPUT SELECTOR で同時に切り換えることができます。 また、他の入力ファンクションと同様にすべての機能を使用できるようになります。i.LINK 端子に接続された機器がない場合は、この設定を選択することができません。

- 選択できる入力ファンクションは[DVD/LD]、[TV/DVD]、[SAT]、[DVR/VCR1]、[VCR2]、[VCR3]、[CD]、[CD-R/TAPE1/MD]です。



1-6

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1

System Setup

[Auto Surround Setup]

▶[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]

[Exit]

2

1.Input Assign

[1.DigitalIn]
[2.Component Video In]
▶ [3.i.LINK In]
[4.Video Assign]

[Return]

3

1.3.i.LINK Input

1 DV-S969AVi [i.LINK]
▶ 2 DV-S858Ai ◀ [i.LINK] ▶

[Return]

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① （ホーム）または（アンプ） ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

1 **[1.Input Assign]を選択して決定する。**
入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[3.i.LINK In]を選択して決定する。**
i.LINK 入力の設定になります。

3 **設定したい i.LINK 対応機器を選ぶ。**
i.LINK 対応機器が９台以上接続されている場合は、⬆または⬇ボタンで、OSD 画面を切り替えて、設定したい機器を表示させます。

4 **⬅➡ ボタンで割り当てる入力ファンクションを選択する。**
- 音声と映像を同時に切り換えたいときは、機器からの映像出力を接続した入力ファンクションを選択してください。

5 **他の機器についても設定する場合は、手順３と４を繰り返す。**

6 **「Return」を選択して決定する。**
i.LINK 入力の設定を終了します。
「Video Assign」に進みます。この場合、 P.66 の手順２へ進みます。

メモ

- 割り当てられていないi.LINK対応機器については、「i.LINK」と表示されます。
- i.LINK AUDIO再生機器以外のi.LINK対応機器に接続した場合は、「----」と表示され、入力ファンクションを割り当てることはできません。
- 割り当てたi.LINK対応機器のi.LINKケーブルを外したり、電源をオフした場合は、その機器の製品型番の前に「*」が表示されます。
- 複数の機器で同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、先に割り当てられていた機器の設定が「i.LINK」に切り換わります。

設定

Video Assign(ビデオ入力の設定)

MULTI CH INPUT入力やUSB入力に映像を割り当てます。これらの入力ファンクションは映像入力端子をもっていないので、工場出荷時の設定のままこれらの入力ファンクションに切り換えても映像は出力されません。この設定で、他の入力ファンクションの映像入力端子に接続された映像を割り当てることにより、ビデオ映像を映しながら再生することができます。例えばMULTI CH INPUTにDVD/LDのビデオ映像を割り当てた場合、入力をMULTI CH INPUTに切り換えると、DVD/LDの映像とMULTI CH INPUTの音声を同時にお楽しみいただくことができます。

- 一時的に他の入力ファンクションの映像に切り換えたいときは、ビデオセレクト機能(➡ P.102)をご覧ください。
- MULTI CH INPUTまたはUSB入力にはそれぞれ同じビデオ映像入力ファンクションを設定することができます。
- 選択できるビデオ映像入力ファンクションは、[DVD/LD]、[TV/DVD]、[SAT]、[VIDEO]、[DVR/VCR1]、[VCR2]、[VCR3]です。

メモ

- 工場出荷時の各入力端子の設定は右の図の通りです。

MULTI CH INPUT	OFF
USB	OFF



1-6

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① (ホーム)または(AVアンプ) ➡ ② メニュー(システムセットアップ)

(リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません)

以下はOSD画面(テレビ画面)です

1

```
System Setup

 [ Auto Surround Setup ]

▶[1. Input Assign ]
 [2. Surround Setup ]
 [3. Expert Setup ]
 [4. THX Audio Setup ]

 [Exit]
```

2

```
1.Input Assign

  [ 1.Digital In ]
  [ 2.Component Video In ]
  [ 3.i.LINK In      ]
▶ [4.Video Assign]

  [Return]
```

3,4

```
1.4.Video Assign
▶ MULTI IN      ◀[DVD/LD]▶
  USB            [  OFF  ]
```

5

```
1.4.Video Assign

  MULTI IN       [DVD/LD]
  USB            [  OFF  ]


▶ [Return]
```

1 **[1.Input Assign]を選択して決定する。**
入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[4.Video Assign]を選択して決定する。**
ビデオ入力の設定になります。

3 **ビデオ映像を割り当てたい入力ファンクションを選択する。**
例えば入力ファンクションをMULTI CH INPUTに切り換えたときにビデオ映像を映すように設定したいときは「MULTI IN」を選びます。

4 **⬅➡ボタンで割り当てるビデオ映像の入力ファンクションを選択する。**
例えば手順3で選んだ入力ファンクションに切り換えたときに、DVD/LDにつないだ機器のビデオ映像を映したいときは「DVD/LD」を選びます。USBについても設定する場合は、手順３と４を繰り返します。

5 **「Return」を選択して決定する。**
ビデオ入力の設定を終了します。

6 **もう一度「Return」を選択して決定する。**
入力に関する設定を終了します。
「Surround Setup」に進む場合は、P.44 の手順１へ進みます。「Expert Setup」に進む場合は、P.67 の手順１へ進みます。System Setupを終了したい場合は、[Exit]を選んで決定します。

Expert Setup（エキスパート設定）

OSD Adjustment（OSD[メニュー画面]の調整）

OSD（オンスクリーンディスプレイ[メニュー画面]）をお手持ちのテレビの中央で表示できるように調整します。OSDに表示される文字が切れないようにする機能です。

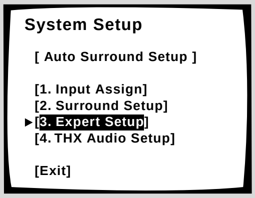


1-4

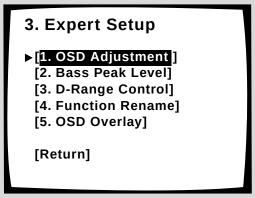
⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い (決定)ボタンを押します。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

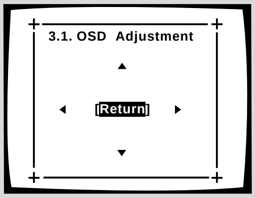
1



2



3
4



リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① (ホーム)または(AVアンプ) ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

1 [3.Expert Setup]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 [1.OSD Adjustment]を選択して決定する。

OSD（メニュー画面）の調整になります。

3 **⬆⬇⬅➡ボタンを押して画面内の枠を中央に調整する。**

4 **(決定)ボタンを押す。**

OSD（メニュー画面）の調整を終了します。

「Bass Peak Level」に進みます。この場合、P.68 の手順2へ進みます。

設定

Bass Peak Level（超低域音声のピークレベル設定）

ドルビーデジタルおよびDTS対応のソフトは超低域信号成分（LFEチャンネル）を多く含んでいます。この超低域周波数信号がスピーカーの再生能力を超えると、再生音声に歪みが生じることがあります。ここでは、LFEチャンネルのピークレベルを設定する方法について説明します。ピークレベルを設定することにより歪みを防止します。



1-5

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い (決定)ボタンを押します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① (ホーム)または(AVアンプ) ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1

System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
▶[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2

3. Expert Setup
[1. OSD Adjustment]
▶[2. Bass Peak Level]
[3. D-Range Control]
[4. Function Rename]
[5. OSD Overlay]
[Return]

3

3.2. Bass Peak Level Manager
▶[Setting Start]
[Setting Cancel]
[Return]
Present Level [OFF]

Present Level【OFF】…設定なし
Present Level【- - -】…SWから音が出ません（−∞）

⬇

3.2. Bass Peak Level Manager
▶[Setting Start]
[Setting Cancel]
[Return]
Please Wait

4

3. 2. Bass Peak Level Manager
▶[Setting OK]
Bass Peak Level
◀[−70.5]▶
[Setting Cancel]

5

3.2. Bass Peak Level Manager
[Setting Start]
[Setting Cancel]
▶[Return]
Present Level [−70.5]

1 [3.Expert Setup]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 [2.Bass Peak Level]を選択して決定する。

超低域音声のピークレベル設定になり、現在の設定値が表示されます。

3 [Setting Start]か[Setting Cancel]を選んで決定する。

[Setting Start]：テストトーンを再生し、設定を行います。
[Setting Cancel]：LFEチャンネルのピークレベル設定を解除します。

[Setting Start]を選んだときは

自動的にMASTER VOLUMEが最小（−−−）になります。手順４へお進みください。

[Setting Cancel]を選んだときは

Present Level ［OFF］になります。
手順５へお進みください。

4 テストトーンのレベルを ⬅➡ ボタンで大きくしていき、サブウーファーからの音に歪みが生じる手前まで大きくして決定する。

MASTER VOLUMEが元の位置に戻ります。
サブウーファーで有りまたはPLUSが選択されている場合は、サブウーファーからのみテストトーンが再生されます。
サブウーファーが無しの場合は、フロントまたはサラウンドスピーカーからテストトーンが再生されます。

5 (決定)ボタンを押して決定する。

超低域音声のピークレベル設定を終了します。
「D-Range Control」に進みます。この場合、P.69 の手順２へ進みます。

メモ

- THX Ultra2準拠のサブウーファーをご使用の場合、バスリミッター機能が内蔵されていますので、この設定は必要ありません。

D-Range Control（ダイナミックレンジコントロールの設定）

ダイナミックレンジとは再生能力を表す用語で、どのくらい小さい音から大きい音までを正しく（小さな音はノイズに埋もれずに、大きな音は歪まずに）再生できるかを数値（dB）で表したものです。ダイナミックレンジコントロールとは、このダイナミックレンジを圧縮する機能です。音量を下げて映画などを楽しむ場合でも、ダイナミックレンジコントロールを設定することで微小な音も聴き取りやすくなります。



1-4

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

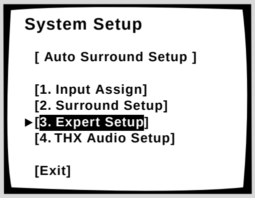
① または

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

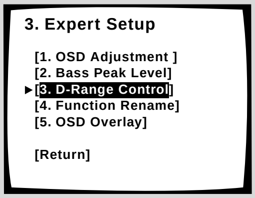
➡ ② メニュー システムセットアップ

以下はOSD画面（テレビ画面）です

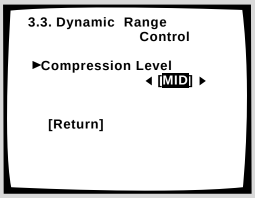
1



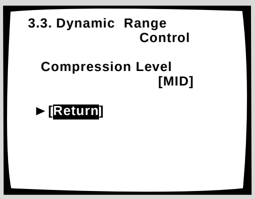
2



3



4



1 [3.Expert Setup]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 [3.D-Range Control]を選択して決定する。

ダイナミックレンジコントロールの設定になります。

3 [OFF]、[MID]、[MAX]のいずれかを⬅➡ボタンで選ぶ。

[OFF]：ダイナミックレンジを圧縮しません。
[MID]：ダイナミックレンジを多少圧縮します。
[MAX]：ダイナミックレンジを最大に圧縮します。

4 [Return]を選択して決定する。

ダイナミックレンジコントロールの設定を終了します。
「Function Rename」に進みます。この場合、P.70 の手順2へ進みます。

メモ

- 大きい音量で楽しむときは、Dynamic Range ControlをOFFにすることをおすすめします。

設定

Function Rename （入力ファンクション表示の設定）

フロントパネルディスプレイに表示される入力ファンクション名を変更することができます。例えばDVR/VCR1の入力端子にDVDレコーダー（DVR-710H）を接続したとき、工場出荷時の設定ではDVR/VCR1入力を選択すると、フロントパネルディスプレイに「DVR/VCR1」と表示されますが、この表示を「DVR-710H」という表示に変更できる便利な機能です。各入力ファンクションごとに接続された機器の名称やメーカー名などを入力すれば、どこの入力ファンクションにどんな機器が接続されているのかを簡単に確認することができます。

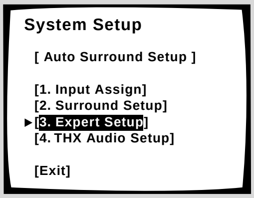


1-7

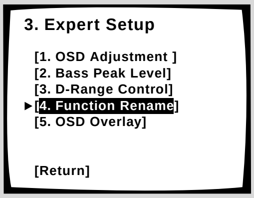
↑↓←→ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

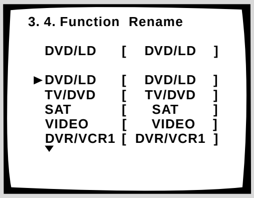
1



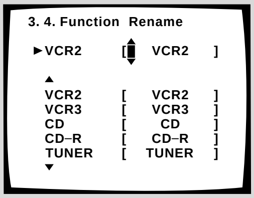
2



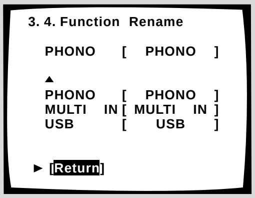
3



4 5 6



7



リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① （ホーム）または（AVアンプ） ➡ ② メニュー システムセットアップ

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

1 [3.Expert Setup]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 [4.Function Rename]を選択して決定する。

ファンクション表示の設定になります。

3 **名前を変更したいファンクションを選択して決定する。**

文字入力画面になります。
すべてのファンクションは3つの画面に分かれています。
（↑↓ボタンで順次切り換わります）

4 **←→ボタンでカーソルを動かして、↑↓ボタンで入力する文字を選ぶ。**

入力できる文字は以下の通りです。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789
!"#$%&'()*+,–./:;<=>?@[\ ]^_{I} (スペース)

↑↓ボタンを押し続けると文字が高速スクロールします。

5 **手順4を繰り返して入力ファンクション名を入力する。**

6 **決定ボタンを押して入力ファンクション名を決定する。**

他にも名前を変更したい入力ファンクションがある場合は、手順3〜5を繰り返します。

7 [Return]を選択して決定する。

入力ファンクション表示の設定を終了します。
「OSD Overlay」に進みます。この場合、P.71 の手順2へ進みます。

OSD Overlay（オーバーレイ表示の設定）

テレビ画面が本機の映像を入力しているときに、入力ファンクションやリスニングモードを切り換えると、モニターTV画面の下側に数秒間そのモードや操作内容などを示すものが表示されます。それをオーバーレイ表示といい、ここでの設定は、オーバーレイ表示をテレビ画面に表示するか表示しないかを選択するものです。



1-5

↑↓←→ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① ホーム または AVアンプ ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1

```
System Setup
 [ Auto Surround Setup ]
 [1. Input Assign]
 [2. Surround Setup]
►[3. Expert Setup]
 [4. THX Audio Setup]
 [Exit]
```

2

```
3. Expert Setup
 [1. OSD Adjustment ]
 [2. Bass Peak Level]
 [3. D-Range Control]
 [4. Function Rename]
►[5. OSD Overlay]
 [Return]
```

3

```
3. 5. OSD Overlay
 ►Overlay    ◄[ON ]►
  [Return]
```

4

```
3. 5. OSD Overlay
  Overlay    [ON ]
 ► [Return]
```

1 [3.Expert Setup]を選択して決定する。

エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 [5.OSD Overlay]を選択して決定する。

OSD Overlayの設定になります。

3 [ON]、[OFF] のいずれかを ←➡ ボタンで選ぶ。

4 [Return] を選択して決定する。

OSD Overlay設定を終了します。

5 もう一度 [Return] を選択して決定する。

エキスパート設定を終了します。
「THX Audio Setup」に進む場合は、 P.72 の手順1へ進みます。System Setupを終了したい場合は、[Exit]を選んで決定します。

メモ

- この設定をONにしていても映像信号の接続の組み合わせによっては、オーバーレイ表示が出力されない場合があります。詳しくは「映像信号について（パイオニアビデオコンバーター）」（➡ P.24）をご覧ください。

設定

THX Audio Setup（THXオーディオ設定）

ここでの設定はリスニングモードがHOME THXのときのみ反映される設定です。

Ultra2 SW Setup(Ultra2サブウーファーの設定)

THX Ultra2準拠のサブウーファーなど、超低域再生能力のあるスピーカーを家庭で使用すると建物の共鳴や定在波の発生などにより、極端に低音が響く音質となってしまいます。このようなスピーカーをお使いの方は、この設定でBoundary Gain CompensationをONにすると、低域成分が補正されます。

Boundary Gain Compensationについて、詳しくは「THX」(➡ P.122)をご覧ください。



1-5

⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

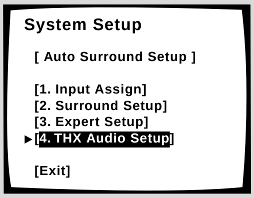
① またはAVアンプ ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

以下はOSD画面(テレビ画面)です

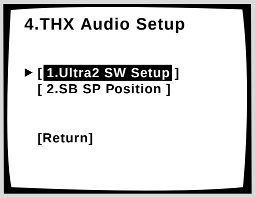
1 **[4.THX Audio Setup]を選択して決定する。**

THXオーディオ設定のメニュー画面になります。



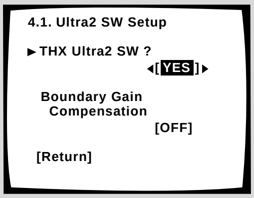
2 **[1.Ultra2 SW Setup]を選択して決定する。**

低域制御フィルターの設定になります。

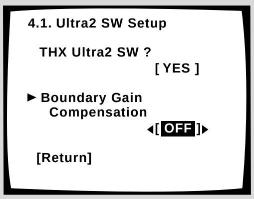


3 **THX Ultra2準拠のサブウーファーをお使いの場合は⬅ ➡ボタンで[YES]を選び「Boundary Gain Compensation」を選ぶ。**

[NO]を選んだ場合、「Boundary Gain Compensation」を選択することはできません。



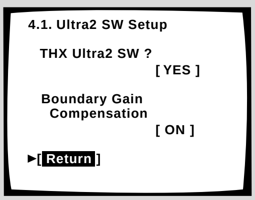
4 **[ON]か[OFF]のどちらかを⬅ ➡ボタンで選択する**



5 **[Return]を選択して決定する。**

Ultra2サブウーファーの設定を終了します。

「SB SP Position」に進みます。この場合、P.73 の手順2へ進みます。



THX Ultra2 準拠のサブウーファーとは

従来のTHX準拠サブウーファーの低域特性は、35Hz以下を12dB/octaveで減衰させています。これは小さい部屋では壁面の影響で空間利得が生じ、35Hz以下の周波数が自然と持ち上がってしまうためです。双方の特性(サブウーファー特性と空間利得)により、20Hzまでフラットな周波数特性となります。

2001年に認可を開始したTHX Ultra2準拠のサブウーファーは20Hzまで低域特性を伸ばしています。よって、リスナーとサブウーファーの位置によっては、低域周波数帯の聴感レベルが極端に大きくなる可能性があります。その場合はBoundary Gain CompensationをONにすることにより、壁面の影響によって生じた低域の空間利得を補正し、聴感レベルをフラットにします。

SB SP Position（サラウンドバックスピーカー間の距離の設定）

THX Ultra2規格にて新規に開発されたASA（Advanced Speaker Array）技術を用いた、THX Ultra2 CinemaとTHX MusicModeに最適な効果をもたらすための設定です。サラウンドバックスピーカー間の距離が、0〜0.3m、0.3〜1.2m、1.2m以上の3段階によって処理を変化させます。THXの推奨するスピーカー配置は下図の通りです。

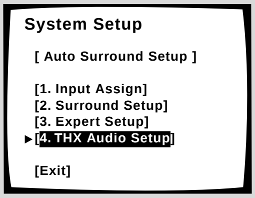
「スピーカーシステムの設定」（➡ P.46）でサラウンドバックスピーカーを「無し」または「×1」で設定したときは、この項目は選択できません。



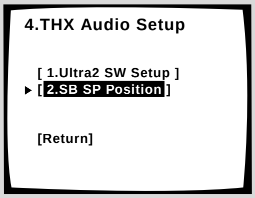
⬆⬇⬅➡ボタンで項目の選択、変更を行い 決定 ボタンを押します。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

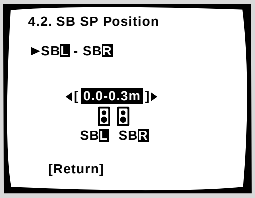
1

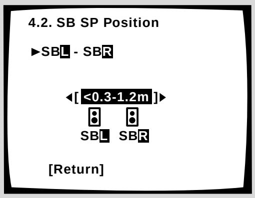


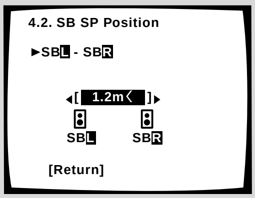
2



3







リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① （ホーム）または（AVアンプ） ➡ ② メニュー（システムセットアップ）

（リモコン画面がホーム画面またはAVアンプ画面のときは押す必要ありません）

1 **[4.THX Audio Setup]を選択して決定する。**
THXオーディオ設定のメニュー画面になります。

2 **[2.SB SP Position]を選択して決定する。**
サラウンドバックチャンネル間の距離の設定になります。

3 **[0.0−0.3m]、[<0.3−1.2m]、[1.2m<]のいずれかを⬅➡ボタンで選ぶ。**

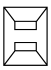
4 **[Return]を選択して決定する。**
サラウンドバックチャンネル間の距離の設定を終了します。

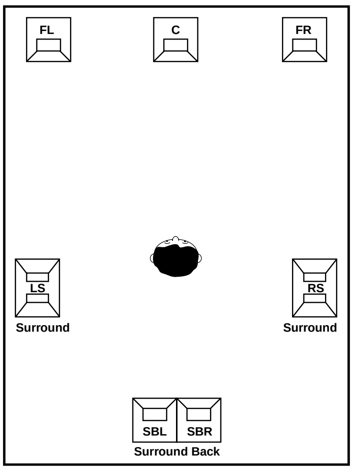
5 **[Return]を選択して決定する。**
THXオーディオ設定を終了します。
System Setupの画面に戻ります。

6 **[Exit]を選択して決定する。**
System Setupを終了します。

THXの推奨するスピーカー配置

サラウンドバックスピーカーは隣接させ、それぞれリスニングポジションから等距離となるように設置します。

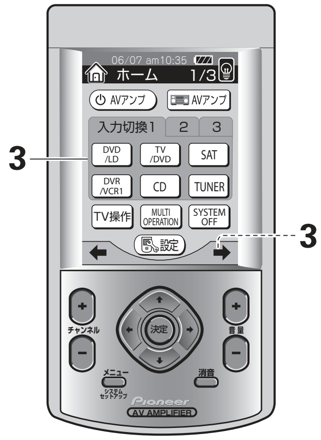

ダイポール型スピーカー

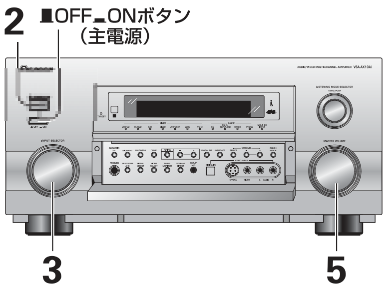


設定

■ 操作を行う前には必ず本機の▮OFF▁ONボタン（主電源）をON（▁）にしてください。

基本再生



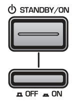


✎メモ

- 前面の入力端子に接続した機器を選択するには入力を「VIDEO」にします。
- 本機は、ドルビーデジタル、DTS、PCM（サンプリング周波数fs：32kHz、44.1kHz、48kHz、88.2kHzおよび96kHz）、MPEG-2 AAC 、WMA9 Proのデジタル信号に対応しています。また、i.LINK接続では、192kHz/24bitのDVDオーディオやSACDなどにも対応しています。これ以外のデジタル信号は再生できないことがありますので、その場合はアナログ接続してANALOGを選択してください。詳しくは「i.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」（➡ P.79）をご覧ください。

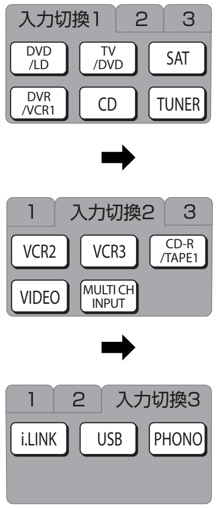
1 再生する機器の電源を入れる。

2



本機の電源を入れる。

3



再生する機器を選ぶ。

⬅➡ ボタンで画面を切り換えて選択します。

本体の場合は、INPUT SELECTORを右に回すと入力が順に切り換わります。

- i.LINK入力の設定（➡ P.65）を行なった場合は、その機器名が表示されます。
- 入力設定していないi.LINK機器も、この操作で選択できます（「i.LINK」を押すと順次、機器名が表示されます）。
- i.LINK対応機器が選択されたときは、i.LINKインジケーターが点灯します。このとき選択された機器に対して再生要求を自動的に出します。接続しているDVDプレーヤーが、再生要求に対応していれば再生することができます。

また、本機にてi.LINK対応機器が選択されていないときでも、i.LINKで接続したDVDプレーヤーを再生すると本機の入力切替えを自動的にi.LINK入力に切り換えるプレーヤーもあります。

i.LINK機器を接続しているときの連動動作については、プレーヤーの取扱説明書も併せてご覧ください。

4 手順1の再生機器の再生を開始する。

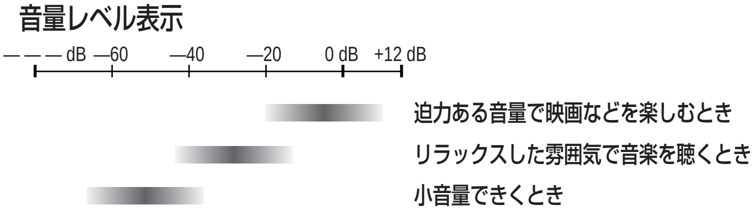
5



音量を調節する。

音量について

再生するソフトや使用するスピーカーによって多少違いますが、表示と音量はおおよそ右図のようになります。



ハイサンプリングフォーマットディスクの再生について

本機は88.2/96kHzをはじめ、i.LINK接続時には176.4/192kHzも含めたハイサンプリングフォーマットディスクの再生に対応しています。

次のようなソフトがそれに該当します。

DVDオーディオ、SACD、DTS96/24、PCM96kHzなど。

これらのソフトの再生中は入力信号のサンプリング処理（Fs）がフロントパネルディスプレイに表示されます。ただし、DTS96/24ソースについては、96kHz処理で再生しているときのみ「96」と表示されます。

本機ではこのようなソフトを高音質（ダウンサンプリング無し）のまま再生する方法が3通りあります。

①ストリームダイレクトモードをONにする。
②リスニングモードをHOME THXモードにする。
③リスニングモードをSTEREOかSTANDARDにして、以下の機能をOFFにする。

・ミッドナイトリスニング（➡ P.90 ）
・デジタルノイズリダクション機能（➡ P.90 ）
・リアルファントム機能（➡ P.94 ）
・ラウドネス機能（➡ P.91 ）
・ダイナミックレンジコントロールの設定（➡ P.69 ）
・バーチャルサラウンドバック機能（➡ P.82 ）

（DTS96/24ソースについては②や③で「DDPRO LOGIC＊＊」以外のリスニングモードを選択する必要があります）

- ハイサンプリングフォーマットディスクを再生するには、接続したＤＶＤプレーヤーがそれらの信号をデジタル（i.LINK含む）出力できることが必要です。ただし、DTS96/24フォーマットディスクは、お手持ちのDVDプレーヤーがDTS対応であれば、96kHzデジタル出力に対応していなくても本機を通じて96kHz処理にて再生することができます。デジタル出力についてはDVDプレーヤー側の設定が必要なときもあるので、詳しくはDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

ストリームダイレクトモード

ソースに収録された情報を忠実に再生するモードです。音の出るスピーカーを自動で切り換え、音声再生用の付加機能（リスニングモード、サラウンドバックチャンネルモード、便利な音声再生用機能）は加えずに再生します。このモードをONにしておくと、ソースによってステレオ再生とマルチチャンネル再生が自動で切り換わります。

ストリームダイレクトモードには以下の３つの種類があります。

1　NORMAL：ソースの種類にかかわらず、常に最適なリスニング環境を提供するための各機能（以下の表を参照）を反映して忠実に再生します。**通常はこのモードでご使用ください。**（工場出荷時は「1 NORMAL」に設定されています）

2　2CH→DIRECT：2chソースを入力しているときは2ch再生に必要な機能のみを有効にして再生します。「2ch再生時にはサブウーファーを使わずに、低域もフロントスピーカーだけで再生したい」という方は、このモードを選ぶと便利です。マルチchソースを再生しているときは「NORMAL」と同じ再生となります。

3　ANALOG→DIRECT：アナログソースを入力しているときはアナログで処理する機能のみを有効にしてアナログのまま再生します。「アナログ信号はアナログ信号のまま再生したい」という方は、このモードを選ぶと便利です。デジタルソースを再生しているときは「NORMAL」と同じ再生となります。

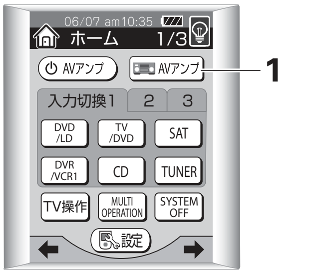
有効機能一覧	NORMAL	2CH→DIRECT (アナログ2ch入力時)	2CH→DIRECT (デジタル2ch入力時)	ANALOG →DIRECT (アナログ入力時)
スピーカーシステムの設定(➡ P.46)	○			
スピーカー出力レベルの設定(➡ P.50)	○	○	○	○
スピーカーまでの距離の設定(➡ P.51)	○			
アコースティクキャリブレーション EQ (➡ P.52)	○			
Xカーブの設定(➡ P.62)	○			
サウンドディレイ(➡ P.99)	○		○	
ハイビット機能(➡ P.92)	○		○	
ハイサンプリング機能(➡ P.92)	○		○	
INPUT ATT(➡ P.98)	○			
DUAL MONO(➡ P.93)	○		○	

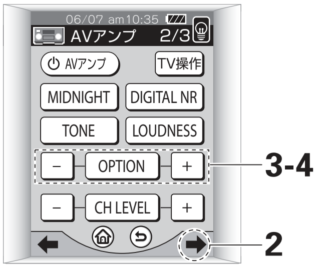
（○：有効）

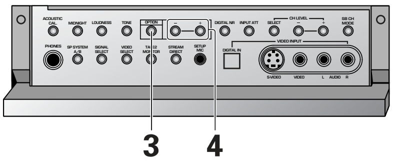
メモ

- MULTI CH INPUTまたはUSB入力では、「MULTI CH INPUTとUSB入力の入力信号のチャンネル数切り換え」（➡ P.80 ）で設定した入力音声チャンネル数のまま再生します。
- MULTI CH INPUT入力を「3 ANALOG→DIRECT」で再生し、ヘッドホンを使用しているときはフロント端子に入力された音声のみがヘッドホンに出力されます（ダウンミックスされません）。
- ストリームダイレクトモードがONになっているときはリスニングモード（➡ P.83 ）、サラウンドバックチャンネルモード（➡ P.81 ）、便利な音声再生用機能（➡ P.90 ）の操作を行うことはできません。
- サラウンドEXやDTS-ESソースのうち、6.1再生検出信号が記録されていないディスクについては、5.1ch再生となります。
- ドルビーサラウンドソースなど、2chサラウンド検出信号が記録されているディスクについては、マルチチャンネル再生します。
- スピーカーインピーダンスを4Kに切り換えているとき（➡ P.103 ）またはDIGITAL SAFETYがONのとき（➡ P.138 ）はストリームダイレクトモードは「1 NORMAL」のみの選択となります。この場合、OPTION ボタンを押してもディスプレイに「SD:」は表示されません。
- 入力ソースによっては各機能がストリームダイレクトのモードに関わらず無効になる場合があります。詳しくは各機能のページをご覧ください。
- ストリームダイレクトモードが「3 ANALOG→DIRECT」でアナログマルチチャンネルソースを入力しているとき、スピーカーシステムの設定（➡ P.46 ）がセンタースピーカー「無し」で設定されていると、センターチャンネルの音声はフロントスピーカーから出力されます。

ストリームダイレクトモードを選択する







1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[OPTION] ボタンのある画面を表示させます。

3 [OPTION] **ストリームダイレクトモードの選択にする。**

ディスプレイに「SD:」が表示されるまで [OPTION] ボタンを押してください。

4 [+][−] **ストリームダイレクトモードを選ぶ。**

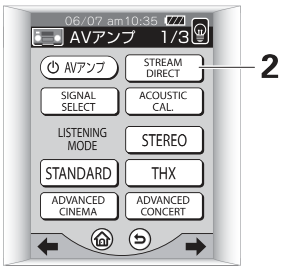
ボタンを押すたびにストリームダイレクトモードが以下のように切り換わります。

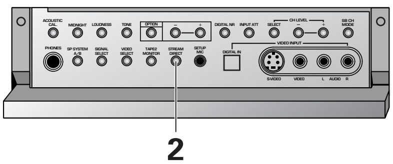
→ 1 : NORMAL ⟷ 2 : 2CH→DIRECT ← → 3 : ANA→DIRECT ←

それぞれの詳しい説明は前ページをご覧ください。ストリームダイレクトモードは選ぶだけでは有効になりません。下記を参照し、ON にすることで、選択されたストリームダイレクトモードが有効になります。工場出荷時は 1 NORMAL で ON に設定されています。

ストリームダイレクトモードをONにする







1 [AVアンプ] **リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 [STREAM DIRECT] **ストリームダイレクトモードをONにする。**

ボタンを押すたびにストリームダイレクトモードのONとOFFが切り換わります。

✎ **メモ**

- ストリームダイレクトモードで再生中はリスニングモード、(➡ P.83)、サラウンドバックチャンネルモード(➡ P.81)、便利な音声再生用機能(➡ P.90)を選択することはできません。これらの機能を使うときは、ストリームダイレクトモードをOFFにしてから操作してください。

アコースティックキャリブレーションEQのON/OFF

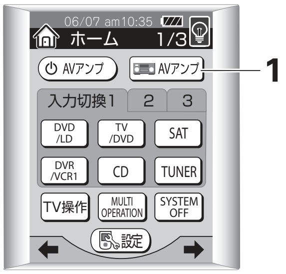
「視聴環境の周波数特性の補正」（➡ P.52 ）での設定をON/OFFします。それぞれのチャンネルを調整しても、以下の設定がOFFになっていると、アコースティックキャリブレーションEQの効果は発揮されません（自動設定後は自動的に「ALL CH ADJUST」でONになります）。設定のONには「ALL CH ADJUST」と「FRONT CH ALIGN」「CUSTOM1」「CUSTOM2」の４つのモードがあります。

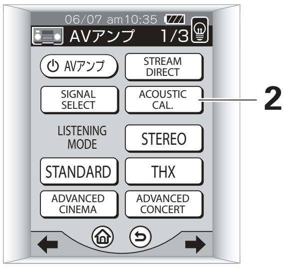
ALL CH ADJUST：部屋の特性を含めて、サブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性をフラットに補正します。全てのチャンネル間の再生音のつながりが良くなり、サラウンドなどの音場のバランスが改善されるため、ワンランク上の臨場感、迫力をお楽しみいただけます。

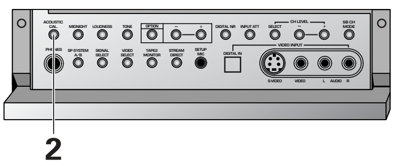
FRONT CH ALIGN：フロント左／右（FL/FR）とサブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性を、フロントchの特性に合わせます。フロントchについてはスピーカー本来の性能をそのまま引き出し、他のチャンネルはフロントchの特性に合わせることで、チャンネル間のつながりと音場のバランスを改善します。

CUSTOM1：設定値を手動で微調整することができます。「オートサラウンドセットアップ」で設定した「視聴環境の周波数特性の補正」の設定値をコピーすることもできます

CUSTOM2：CUSTOM1と同様です。







1 [AVアンプ] **リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 [ACOUSTIC CAL.] **アコースティックキャリブレーションEQをONにする。**

ボタンを押すたび、アコースティックキャリブレーションEQが以下のように切り換わります。

→ CUSTOM2 → OFF → ALL CH ADJ → F ALIGN → CUSTOM1 →（CUSTOM2に戻る）

OFF以外のときはMCACCインジケーターが点灯します。

メモ

- アコースティックキャリブレーションEQのON/OFFは全ての入力ファンクションに共通で切り換わります。
- ストリームダイレクトモードがONになっているときは、入力ソースによってアコースティクキャリブレーションEQの設定が無効になることがあります（➡ P.76 ）。
- 工場出荷時はOFFに設定されていますが、オートサラウンドセットアップなどで自動設定を行うとALL CH ADJモードで自動的にONします。

入力信号の切り換え

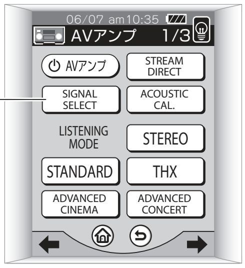
i.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の切り換え

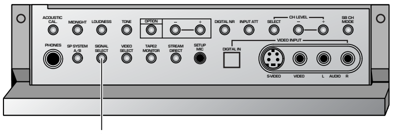
入力信号設定は基本的にAUTOに設定されていますが必要に応じて i.LINKとアナログ、デジタルの入力信号を切り換えることができます。



1

2





2

1 [AVアンプ] **リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 [SIGNAL SELECT] **再生したい入力信号を選択する。**

SIGNAL SELECTボタンを押すたび、以下のように切り換わります。

→ AUTO ——→ ANALOG
DDRF ←— i ←— DIGITAL ←

- i.LINK入力は i で表示されます。

AUTOにしたときは、i→DDRF→DIGITAL→ANALOGの優先順位で自動的に入力信号を選択します(i、DDRF、DIGITALは、それらが割り当てられている入力ファンクションを選んでいるときのみ選択することができます)。

- 入力設定(➡ P.65)をしていないi.LINK対応機器については、i に固定されます。
- MULTI CH INPUT入力は「ANALOG」に、USB入力は「DIGITAL」に固定されていますのでここでは切り換えることができません。

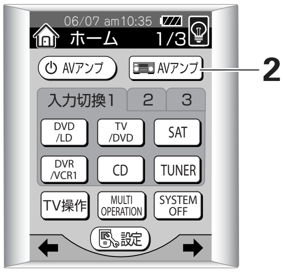
✎メモ

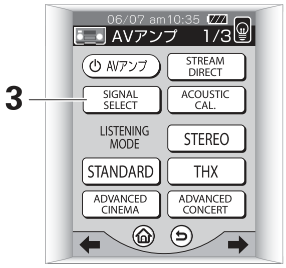
- i.LINK入力信号が選ばれているときは、 i.LINKインジケーターが点灯しますが、このとき、接続した機器側で出力設定をOFFにしていると音はでません。出力設定の方法は機器の取扱説明書をご覧ください。
- デジタル入力端子がいずれも割り当てられていない機器については、SIGNAL SELECTは、ANALOGに固定されています。
- カラオケ機器のマイク音声、およびアナログオーディオのみ収録されているLDの音声はデジタル出力からは出力されません。このような音声を再生するには必ずANALOGを選択してください。

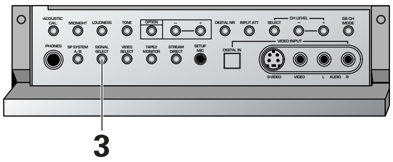
- DTS対応のLDを再生するときや、DTS対応のCDをCDプレーヤーで再生するときに、SIGNAL SELECTボタンでANALOGを選択していると、DTSの原信号がそのまま再生されるため、ノイズが発生します。このような場合、入力信号は必ず、AUTOかDIGITALまたはi.LINK を選択してください。
- DTS 対応のDVD やCD を再生するときDVD プレーヤーの出力設定が正しくないと、音が出なかったり、ノイズが発生する場合があります。詳しくはお使いのDVD プレーヤーの取扱説明書をご覧ください。
- DVD プレーヤーの機種によっては、再生できるデジタル信号に制限があります(DTS信号を出力しないなど)。詳しくは、お使いのDVD プレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

MULTI CH INPUTとUSB入力の入力信号のチャンネル数切り換え

MULTI CH INPUT入力とUSB入力とでは、接続している機器によって入力信号のチャンネル数を切り換えることができます。例えばMULTI CH INPUTに2chの音声信号を入力しているときは「2ch」に切り換えます。







1 入力ファンクションを「MULTI CH」か「USB」にする。

2 AVアンプ　リモコンをAVアンプ画面にする。

3 SIGNAL SELECT　再生したい入力信号のチャンネル数を選択する。

SIGNAL SELECTボタンを押すたび、以下のように切り換わります。

2ch → 6ch → 7ch → 8ch → 2ch

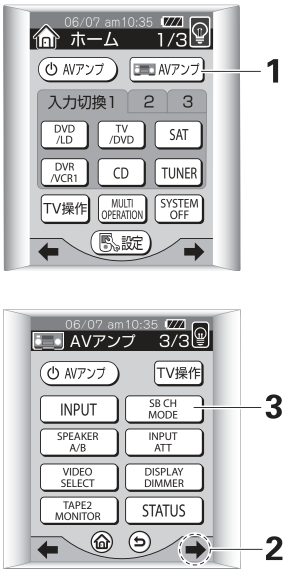
サラウンドバックチャンネルモード

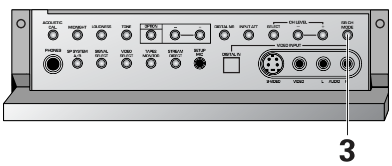
本機ではサラウンドバックスピーカーを接続しているときに、サラウンドバックスピーカーから音を出す（6.1chまたは7.1ch再生）か出さない（5.1ch再生）かを設定することができます。また、サラウンドバックスピーカーを接続していないときには、「バーチャルサラウンドバックモード」としてサラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すか出さないかを設定することができます。

サラウンドバックチャンネルのON/AUTO/OFF

サラウンドバックスピーカーから音を出すか出さないかを設定します。設定内容は以下の通りです。

- ON　：最大7.1chでの再生を行います。5.1chソース再生時は選べるリスニングモードの数が変わります（➡ P.84）。
- AUTO：入力ソースやリスニングモードに応じてサラウンドバックスピーカーから音を出すか出さないかを自動で切り換えます。
- OFF　：最大5.1chでの再生を行います（サラウンドバックスピーカーから音は出ません）。





1 AVアンプ　**リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 ➡　**リモコン画面を切り換える。**

SB CH MODEボタンのある画面を表示させます。

3 SB CH MODE　**サラウンドバックチャンネルをON、AUTO、OFFのいずれかにする。**

SB CH MODEボタンを押すたびに、ONとAUTOとOFFが切り換わります。

✎ **メモ**

- ストリームダイレクトモードがONのときはこの設定を行なうことができません。
- リスニングモードをHOME THXモードにしてDVDオーディオやSACDソースを聴いているとき、サラウンドバックチャンネルモードはONとAUTOのみを選択することができます。
- サラウンドバックチャンネルモードを設定したあとで「スピーカーシステムの設定」（➡ P.46）を変更すると、サラウンドバックチャンネルモードが自動で切り換わることがありますのでご確認ください。
- サラウンドバックチャンネルモードは入力ファンクションごとに設定されます。
- ステレオモードを選んでいるときは切り換えができません。
- スピーカーの設定で[Bi-Surround]を選択しているときは切り換えができません。また、「スピーカーシステムA/Bの切り換え」（➡ P.100）でスピーカーシステムBを選択しているときも切り換えができません。
- スピーカーシステムの切り換えで「A+B」を選んでいるときはサラウンドバックチャンネルを設定することはできずに、バーチャルサラウンドバックモードの設定となります。

操作

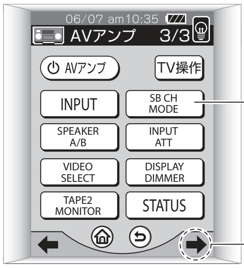
バーチャルサラウンドバックモードの ON/AUTO/OFF

サラウンドバックスピーカーを接続していないときやスピーカーシステムの切り換えで A+B を選んでいるときに、サラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すか出さないかを設定します。設定内容は以下の通りです。

- ON　：リスニングモードでTHX CINEMA以外のサラウンドモードが選択されているときはONになり、サラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出します。
- AUTO：入力ソースやリスニングモードに応じて仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出すか出さないか自動で切り換えます。
- OFF　：サラウンドスピーカーから仮想のサラウンドバックチャンネル音声を創り出しません。

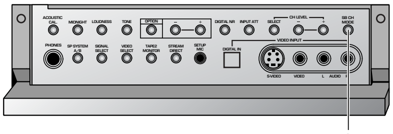


1



3

2



3

1 AVアンプ **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

SB CH MODE ボタンのある画面を表示させます。

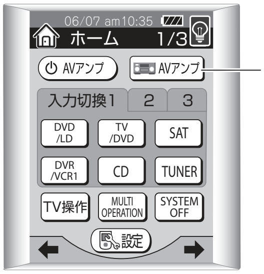
3 SB CH MODE **バーチャルサラウンドバックモードを ON、AUTO、OFF のいずれかにする。**

SB CH MODE ボタンを押すたび、ON と AUTO と OFF が切り換わります。

メモ

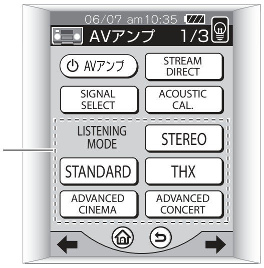
- ストリームダイレクトモードがONになっているときや、HOME THX モードでは使用できません。
- バーチャルサラウンドバックモードは入力ファンクションごとに設定されます。
- ステレオモードを選んでいるときは切り換えができません。
- バーチャルサラウンドバックモードの動作時は、ディスプレイに「+VSB」と表示されます。
- スピーカーの設定で[Bi-Surround]を選択しているときは切り換えができません。また、「スピーカーシステム A / B の切り換え」(➡ P.100)でスピーカーシステム B を選択しているときも切り換えができません。

リスニングモードの選択



1

2,3



2,3

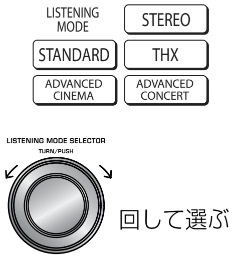


1



リモコンを AV アンプ画面にする。

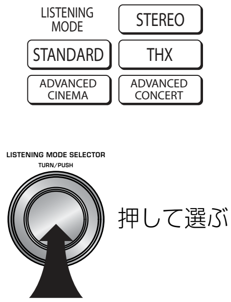
2



お好みのリスニングモードのタイプを選ぶ。

本体は LISTENING MODE SELECTORを回すとリスニングモードのタイプが順次切り換わります。
ディスプレイの上段に各タイプの名称が表示されます。

3



手順2で選んだタイプのボタン（本体はLISTENING MODE SELECTOR）を押して好みのリスニングモードを選ぶ。

ソースの種類や選択されたサラウンドバックチャンネルモードなどに応じて、モードの選択肢が変わる場合があります。
ディスプレイの下段にモードの名称が表示されます。
詳しくは「リスニングモードの種類と効果」（➡ P.84 ）をご覧ください。

メモ

- ヘッドホンで聴いているときのリスニングモードは「STEREO」か「PHONES SURROUND」のどちらかになります。PHONES SURROUND に切り換えるときは STANDARD ボタンを押します。
- ストリームダイレクトモードが ON のときはリスニングモードを選択することはできません。

リスニングモードの種類と効果

本機のリスニングモードは５つのタイプに分かれています。モードの切換方法やサラウンドバックチャンネルモードの設定については、「リスニングモードの選択」、「サラウンドバックチャンネルモード」（➡ P.81 ）をご覧ください。
本書では特に注記の無い限り、「6.1 再生検出信号」の記録されたソースも、5.1ch ソースとして扱います。
入力信号やスピーカーの設定によって、選択できるリスニングモードに制限がかかる場合があります。そのような場合、そのソースを再生中は選択可能なモードに切り換わりますが、別のソースを再生すると元のモードに戻ることがあります。ストリームダイレクトモードがONのときはリスニングモードを選択することはできません。

STANDARD モード

ソフトに忠実なデコード（2ch ソースはマトリクス・サラウンド・デコード）をするモードです。基本的に入力信号の種類や再生チャンネル数の設定に応じて自動的に最適なデコード方式が選択されますが、入力信号によっては以下のように複数のモードの中から選択できる場合もあります。

2chソース（またはドルビーサラウンドソース）の場合

サラウンド化するためのマトリクス・デコード方式を以下の5つの中から選択することができます。ディスプレイにはデコード名称が表示されます。

種　類	効　果	メ　モ
ⅮⅮPRO LOGIC ⅡxMOVIE	2chソースを最大7.1ch化します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド・エンコード作品に効果的です。ドルビーデジタル EXに迫るセパレーションや移動感などが得られます。	・サラウンドバックチャンネルモードをAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからも音が出ます。 ・サラウンドバックチャンネルモードをOFFにしているときはPRO LOGIC Ⅱモードになり、サラウンドバックchから音は出ません。
ⅮⅮPRO LOGIC ⅡxMUSIC	2chソースを最大7.1ch化します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース（CDなど）を再生するときに効果的です。サラウンド ch は定位よりも包囲感を重視しています。	
ⅮⅮPRO LOGIC	2chソースを4.1ch化します。ビデオテープやTV放送などソースのクオリティを問わずご使用いただけます。	・サラウンドバックチャンネルモードをAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからは音が出ません。 ・サラウンドchのLとRからは同じ音声が出力されます。
Neo:6 CINEMA	2chソースを6.1ch化します。映画再生に適したモードで、2chソースを6.1chソースと同じような雰囲気で楽しめます。	・サラウンドバックチャンネルモードをAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからも音が出ます。 ・サラウンドバック chのＬとＲからは同じ音声が出力されます。
Neo:6 MUSIC	2chソースを6.1ch化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化がなく、音楽再生に効果的です。	

5.1chソースでサラウンドバックチャンネルをONに設定している場合

7.1ch化するためのデコード方式を以下の4つの中から選択することができます。

種　類	効　果	メ　モ
SX (Studio extension)	映画製作スタジオや映画館で5.1ch再生を行うときは、サラウンドバックの位置にあるスピーカーからもサラウンドchの音声が出力されます。SX方式はこの音場を再現するためのモードです。ディスプレイにはデコード名称に加え、＋SXと表示されます。	
EX (Extension decode)	マトリクス・デコードによりサラウンドバックch成分を生成します。最大6.1ch再生となり、定位感、移動感、臨場感がより向上します。ディスプレイにはデコード名称 に加え、＋DDEXと表示されます。ソースによってはデコード名称のみが表示されます。	サラウンドバックchのLとRからは同じ音声が出力されます。
DDPRO LOGIC IIx MOVIE	マトリクス・デコードによりサラウンドバックch成分を生成します。映画ソースの再生に適したモードで、最大7.1ch再生となり、定位感、移動感、臨場感がより向上します。ディスプレイにはデコード名称に加え、＋PL IIx MOVIEと表示されます。サラウンドバックchは独立した2chが出力されます。	サラウンドバックスピーカーを1本で設定している場合、このモードは選択できません。
DDPRO LOGIC IIx MUSIC	マトリクス・デコードによりサラウンドバックch成分を生成します。音楽ソースの再生に適したモードで、最大7.1ch再生となり、マルチchの音楽ソースに対して、滑らかで、包み込むようなサラウンド感が得られます。ディスプレイにはデコード名称に加え＋PL IIx MUSICと表示されます。サラウンドバックchは独立した2chが出力されます。	

ヘッドホンを差し込んでいる場合

ヘッドホンを差し込んでいるときのリスニングモードは「PHONES SURROUND」か「STEREO」のどちらかのみです。

種　類	効　果	メ　モ
PHONES SURROUND	ヘッドホンで聴いているときに、仮想立体音響を再現し、マルチチャンネルサラウンド再生時の臨場感をお楽しみいただけます。	

HOME THX モード

HOME THX とは、映画のサウンドトラックを一般家庭でもリアルに再現するためにルーカスフィルム社が開発したシステムで、映画館と家庭のリスニングルームの差異を補完する様々な技術が駆使されています。あらゆるソフトに効果的ですが、ドルビーデジタル、DTS収録のソフトの再生には特に威力を発揮します。
このモードでは忠実なデコード（2chソースはマトリクス・サラウンド・デコード）処理の後、THX処理を加えて再生します。基本的に入力信号の種類やサラウンドバックチャンネルモードの設定に応じて、自動的に最適な処理が選択されますが、入力信号によっては以下のように複数のモードの中から選択できる場合もあります。
ディスプレイには選択されたTHX処理名称が表示されます。

2ch ソース（またはドルビーサラウンドソース）の場合

サラウンド化するためのマトリクス・デコード方式を右の3つの中から選択することができます（各モードの詳細説明はSTANDARDモードをご覧ください）。
右のいずれのモードもディスプレイの表示は数秒後にTHX処理名称（THX CINEMA）に切り換わります。
DVDオーディオ、SACDの2chソース再生時、このモードは選択できません。

種類
DDPRO LOGIC IIx MOVIE
DDPRO LOGIC
Neo:6 CINEMA

5.1ch ソースでサラウンドバックチャンネルモードを ON に設定している場合

7.1ch 化するための THX 処理方式を以下の５つの中から選択することができます。

種　類	効　果	メ　モ
THX CINEMA	家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正します。	ＤＶＤオーディオ、ＳＡＣＤ再生時、このモードは選択できません。
THX SURROUND EX	ドルビー研究所とルーカスフィルム社とで共同開発した再生フォーマットです。SURROUND EX マトリックス処理により、サラウンドch成分からサラウンドバックchを生成します。SURROUND EX 方式にて劇場公開された映画ソフトに最適です。ただし、DTSソースはESデコード処理によりサラウンドバックchを生成するため、ディスプレイには「DTS-ES + THX」と表示されます。	
PRO LOGIC Ⅱx MOVIE	ドルビー研究所の最新マトリクス・デコード技術であるPRO LOGIC ⅡxとTHX処理の組み合わせにより、映画ソフトをより自然でシームレスなサラウンドサウンドで楽しめます。	・サラウンドバックスピーカー１本設定の場合、このモードは選択できません。 ・DVDオーディオ、SACD再生時、このモードは選択できません。
THX ULTRA2 CINEMA	従来よりある5.1chの映画ソフトに最適な、新しい再生フォーマットです。5.1ch再生が標準だった頃のソースに SURROUND EX マトリクス処理を行なってしまうと、かえって後方・側方の音場感が狭く感じてしまうものもありますが、このモードでは定位感と広がり感を同時に実現させ、SURROUND EX 公開映画にも匹敵する音場を生み出します。	
THX MUSIC MODE	ＤＶＤなどで発売されている5.１chの音楽ソフトに適した、新しい再生フォーマットです。音楽ソースは映画ソースと異なり、劇場公開されることを前提にしていません。よってミックスダウンの段階より想定される再生環境が異なります。映画再生に適したスピーカー配置でも音楽ソースの音場効果が最大限再現されるよう、あらゆるノウハウが組込まれています。	サラウンドバックスピーカー１本設定の場合、このモードは選択できません。

メモ　THX認定ディスクを再生しても、自動的にHOME THXモードにはなりません。お好みのモードを選択してお楽しみください。

STEREO(ステレオ)モード

左右のフロントスピーカーからステレオ音声(2ch)で再生するモードです。
ドルビーデジタルやDTSなどのマルチチャンネルソースは2chにダウンミックスして再生します。

種　類	効　果	メ　モ
STEREO	音場補正(Surround Setup)(➡ P.44)やサウンドディレイ(➡ P.99)での各設定を反映し、「便利な音声再生用機能」(➡ P.90)の効果を加えてステレオ再生することができます。	

ADVANCED CINEMA モード

あらゆる映画ソースの再生に適したオリジナルのサラウンドモードです。以下 6 つの中からお好きなモードを選択することができます。忠実なデコード（2ch ソースはマトリクス・サラウンド・デコード）処理の後オリジナルの処理を加えます。このモードでは、サラウンドバックチャンネルモードを AUTO に設定しているとき、サラウンドバック ch からも音が出ます。

種　類	効　果	メ　モ
ACTION	包み込むような空間での反射音を再現します。大きい音がしっかり定位し、躍動感、スピード感が楽しめます。アクションシーンや戦闘、爆発シーンの迫力が、包み込むように再現され、映画の迫力や臨場感を、あますところなく楽しんでいただけます。アクション系の映画の再生に効果的です。	2chソース入力時はNeo:6 CINEMA処理でサラウンド化します。
SCI-FI	広い空間に音が抜けていくイメージです。セリフと効果音の分離が良いため、SF映画などのSE(特殊効果音)の多いソースに効果的です。	2chソース入力時はDDPRO LOGIC IIx MOVIE処理でサラウンド化します。
DRAMA	サラウンドスピーカーからの音が一体となって、1 つの大きなスピーカーのように響くイメージで、落ち着いた雰囲気で映画を楽しんでいただけます。幅広い範囲でサラウンド効果が楽しめ、直接音もしっかりと響きます。ストーリー性重視の映画の再生に効果的です。	
MUSICAL	ミュージカルなどの音楽系ソースを再生しているときのサラウンド感や、コンサートホールのホール感を再現します。広い空間で音に包み込まれるような響きが特徴です。	2chソース入力時はNeo:6 MUSIC処理でサラウンド化します。
MONOFILM	古い映画やテレビ放送のほとんどの割合を占めるモノラル信号も含めすべてのソースに適したマルチチャンネルサラウンドモードです。	2chソース入力時はDDPRO LOGIC処理でサラウンド化します。
5/7-D THEATER（再生モードに合わせて5-Dまたは7-Dと表示されます）	2chで収録された音声を、5chまたは7chのサラウンド効果で再生できます。ドルビーサラウンドソフト再生時は特に効果的です。	

ADVANCED CONCERT モード

あらゆる音楽ソースの再生に適したオリジナルのサラウンドモードです。以下 6 つの中からお好きなモードを選択することができます。忠実なデコード（2ch ソースはマトリクス・サラウンド・デコード）処理の後オリジナルの処理を加えます。このモードでは再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからも音が出ます。

種　類	効　果	メ　モ
CLASSICAL	大型のコンサートホールをシミュレートしています。クラシック系の音楽に適しています。反射音の遅延時間帯が長く、さらに残響音を加えることでコンサートホール特有の美しい響きと、オーケストラの迫力が楽しめます。	2chソース入力時はDSP処理でサラウンド化します。
CHAMBER	石(コンクリート製)のコンサートホールをシミュレートしています。残響音豊かな本格的コンサートホールの響きを楽しむことができます。クラシック音楽などで自然な広がりを感じていただけます。	
JAZZ	一般的なジャズクラブをシミュレートしています。音の響きが強くなるのが特徴です。反射音のほとんどが100ms以下で、目の前で演奏しているような迫力と定位感を楽しめます。	2chソース入力時はNeo:6 CINEMA処理でサラウンド化します。
ROCK	中規模コンサートホールをシミュレートしています。楽器の分離感と臨場感があり、重低音に迫力のあるサラウンドを楽しめます。	2chソース入力時はDDPRO LOGIC IIx MUSIC処理でサラウンド化します。
DANCE	フロアの床面が正方形をしているクラブをシミュレートしています。音の響きが強いのが特徴です。反射音の遅延時間はほとんどが50ms以下で、迫力あるDANCE MUSICが楽しめます。	
5/7CH STEREO（再生モードに合わせて5CHまたは7CHと表示されます）	2chで収録された音声をステレオ音声のまま、5本または7本のスピーカーにて再生しますのでお部屋のどの場所にいてもステレオ感をお楽しみいただけます。	

リスニングモードのオプション機能

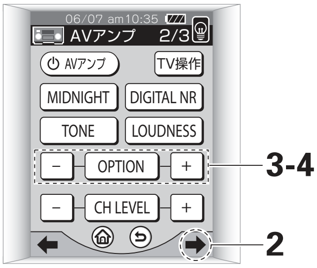
◻◻PRO LOGIC IIx MUSIC モードに音響効果を加えて調整する

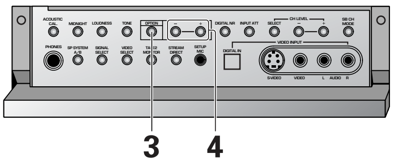
STANDARD モードの ◻◻PRO LOGIC IIx MUSIC には３つの音響効果を加え、その効果を調整することができます。それぞれの説明は以下の通りです。

CENTER WIDTH：センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで、音色の不一致を緩和させることが可能になり、音楽再生により適した音場を創り出すことができます。効果は０〜７の範囲で調整することができます。０がセンタースピーカーからのみの出力で、７はセンターチャンネルの音声すべてを左右のフロントスピーカーに振り分けます。工場出荷時は３に設定されています。

DIMENSION：リスニングポジションから前方の音場を強くするか、後方の音場を強くするかを調整することで、拡がりのある音場を創り出すことができます。－３から＋３の範囲で調整することができます。－３はリスニングポジションから前方の音場が強くなり、＋3はリスニングポジションから後方の音場が強くなります。工場出荷時は０に設定されています。

PANORAMA：前方の音場を左右に大きく回り込ませ、サラウンドチャンネルに繋げるようなサラウンド効果を加えます。正確な定位よりも雰囲気を楽しむための機能です。オンまたはオフの設定で、工場出荷時はオフに設定されています。





1 **◻◻PRO LOGIC IIx MUSICモードを選択する。**
（➡ P.83 ）

◻◻PRO LOGIC IIx MUSICモードは入力信号が2chのときのみ選択することができます。

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

OPTION ボタンのある画面を表示させます。

3 OPTION **「CENTER WIDTH」、「DIMENSION」、「PANORAMA」の中から加えたい音響効果を選ぶ。**

ディスプレイに設定したい音響効果が表示されるまで OPTION ボタンを押してください。
それぞれの音響効果の詳しい説明は上記をご覧ください。

4 ＋ － **音響効果を調整する。**

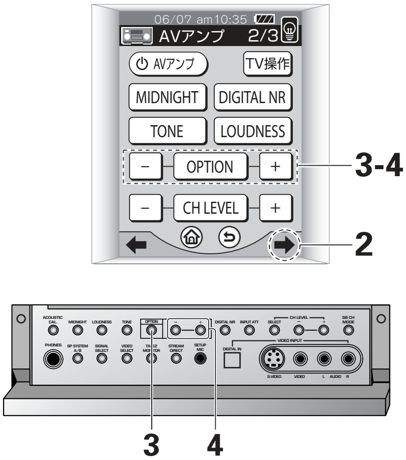
それぞれの音響効果の詳しい調整値は上記をご覧ください。

メモ

- サラウンドバックチャンネルをOFFにしたり（➡P.81）、スピーカーの設定でサラウンドスピーカーをＮＯ にしたりすると（➡ P.46 ）、◻◻PRO LOGIC IIx MUSIC から◻◻PRO LOGIC II MUSICに切り換わりますが、「CENTER WIDTH」、「DIMENSION」、「PANORAMA」の効果は変わらずに反映されます。

Neo:6 MUSIC モードのセンターチャンネルのイメージを調整する

STANDARD モードのNeo:6 MUSIC で再生しているとき、センターチャンネルの音声を左右のフロントスピーカーに振り分けて出力することで、音色の不一致を緩和させることが可能となり、音楽再生に適した音場を創り出すことができます。
効果は0～10の範囲で調整することができます。0はセンターチャンネルの音声がセンターから出ずにフロントから出力されます。10はセンターチャンネルの音声がセンターからのみ出力されます。工場出荷時は3に設定されています。



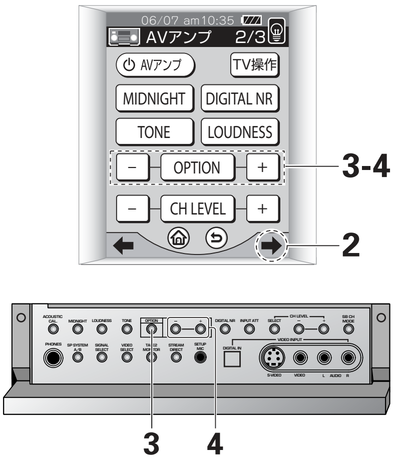
1 **Neo:6 MUSICモードを選択する（➡ P.83 ）。**
Neo:6 MUSICモードは入力信号が2chのときのみ選択することができます。

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**
OPTION ボタンのある画面を表示させます。

3 OPTION **「CENTER IMAGE」を選ぶ。**
ディスプレイに「CENTER IMAGE」が表示されるまで OPTION ボタンを押してください。
詳しい説明は上記をご覧ください。

4 + − **Neo:6 MUSICモードのセンターチャンネルイメージを調整する。**
0～10の範囲で調整することができます。

ADVANCEDモード(CINEMA、CONCERT)の効果を調整する



1 **ADVANCED CINEMA モードまたは ADVANCED CONCERT モードに設定する。（➡ P.83 ）**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**
OPTION ボタンのある画面を表示させます。

3 OPTION **エフェクトレベルの設定にする。**
ディスプレイに「EFFECT」が表示されるまで OPTION ボタンを押してください。

4 + − **エフェクトレベルの効果を調整する。**
エフェクトレベルは10～90の範囲で調整することができます。

メモ

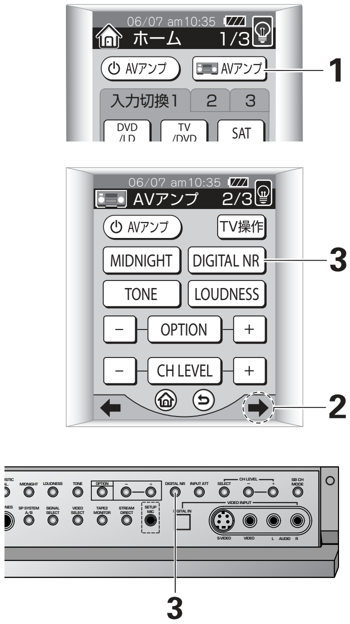
- 工場出荷時の設定は、5/7CH STEREOのときが90、それ以外のモードのときが50に設定されています。
- エフェクトレベルは各リスニングモードごとに設定できます。

操作

便利な音声再生用機能

デジタルノイズリダクション機能 （ノイズの低減）

DIGITAL NR を ON にすると、カセットテープやビデオテープなど、雑音が多く含まれるソフトのノイズを低減することができます。



1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[DIGITAL NR] ボタンのある画面を表示させます。

3 [DIGITAL NR] **DIGITAL NR を ON にする。**

ボタンを押すたび､デジタルノイズリダクション機能が ON または OFF に切り換わります。

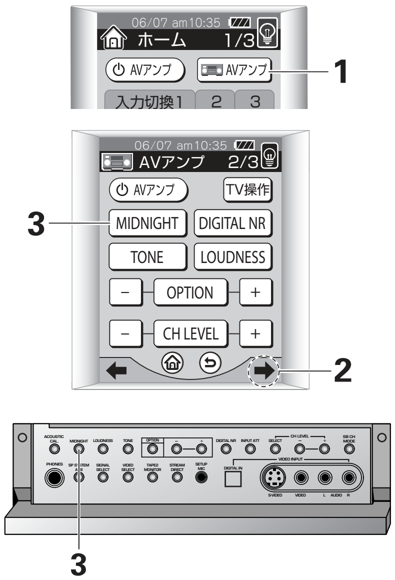
メモ

- 以下の場合は、DIGITAL NR を ON にしてもノイズが十分に低減されないことがあります。
  - 突然のノイズ
  - 極端に大きいノイズ
  - 高い周波数成分を非常に多く含む信号
  - もともとノイズの少ない録音状態の良い信号
- 各音源に対し、DIGITAL NR は以下のような改善効果があります。
  ステレオ再生時
  - アナログ入力 ... 10 ～ 18dB
  - i.LINK 入力 ...... 10 ～ 15dB
  - デジタル入力 ..... 10～15dB
  - AM/FMチューナー .... 10～15dB

  ADVANCED、STANDARD、96kHz 再生時 .... 6 ～ 10dB
- ストリームダイレクトモードが ON になっているときや HOME THX モードでは使用できません。

ミッドナイトリスニング機能 （小音量での快適なサラウンド再生）

音量を小さくすると、サラウンド効果が弱くなったり、微小な音やセリフなどが聴きとりにくくなることがあります。ミッドナイトリスニング機能は、ボリュームレベルやソースに応じて様々な補正を行いますので小音量でも全体のバランスが良い状態で映画などをお楽しみいただけます。



1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[MIDNIGHT] ボタンのある画面を表示させます。

3 [MIDNIGHT] **ミッドナイトリスニング機能を ON にする。**

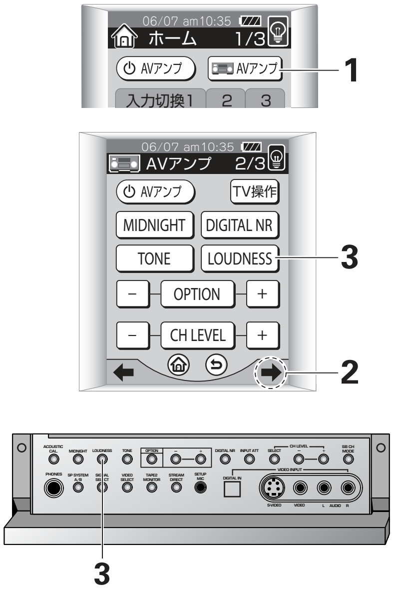
ボタンを押すたび､ミッドナイトリスニング機能が ON または OFF に切り換わります。

メモ

- この機能は音量が－ 20dB 以下のときに効果があり、音量に合せてサラウンド効果も自動調整されます。
- ストリームダイレクトモードが ON になっているときや HOME THX モードでは、使用できません。
- ラウドネス機能､トーンコントロール機能との併用はできません。

ラウドネス機能 （小音量時の高低音域の補正）

ラウドネス機能は小音量時にボリュームレベルに応じて、低音域、高音域のレベルを適正値に補正します。



1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**
[LOUDNESS] ボタンのある画面を表示させます。

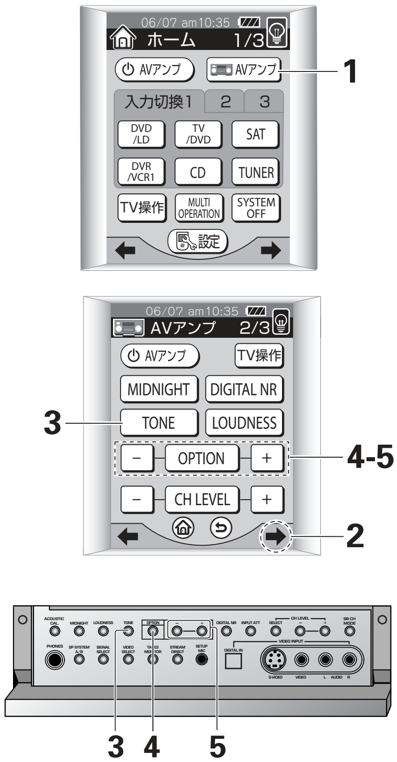
3 [LOUDNESS] **ラウドネスモードにする。**
ボタンを押すたび、ラウドネス機能が ON または OFF に切り換わります。

メモ

- ラウドネス機能は音量がー 20dB 以下のときに効果があります。
- ストリームダイレクトモードが ON になっているときや HOME THX モードでは使用できません。
- ミッドナイトリスニング機能、トーンコントロール機能との併用はできません。

トーンコントロール機能 （好みに応じた高低音の調整）

トーンコントロール機能を ON にすると、低音、高音がお好みによって調整できます。



1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**
[TONE] ボタンのある画面を表示させます。

3 [TONE] **トーンコントロールモードを ON にする。**
ボタンを押すたび、トーンコントロールモードが ON または BYPASS に切り換わります。

4 [OPTION] **低音または高音の調整モードを選ぶ。**
ディスプレイに「ＢＡＳＳ」（低音）または「TREBLE」（高音）と表示されるまで [OPTION] ボタンを押します。

5 [＋][－] **調整する。**

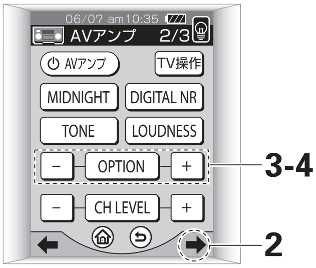
メモ

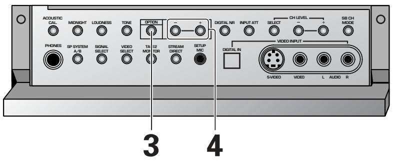
- トーンが ON になっているときのみ [OPTION] ボタンを押すと「BASS」「TREBLE」が表示され調整が可能になります。
- トーンは、－６～＋６dB の範囲で調整できます。
- ストリームダイレクトモードが ON になっているときや HOME THX モードでは使用できません。
- ミッドナイトリスニング機能、ラウドネス機能との併用はできません。

Hi-bit (ハイビット)機能

CD や DVD などのデジタル音声信号（PCM の 16 ビットデータまたは圧縮音声の 20 ビットデータ）に対し、ダイナミックレンジの拡大（24 ビットに再量子化）を行い、より滑らかで繊細な音楽表現を可能にします。







1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[OPTION] ボタンのある画面を表示させます。

3 [OPTION] **「HI-BIT」を選ぶ。**

ディスプレイに「HI-BIT」が表示されるまで [OPTION] ボタンを押してください。

4 [+][−] **HI-BIT 機能を ON にする。**

ボタンを押すたび、HI-BIT機能が ON または OFF に切り換わります。

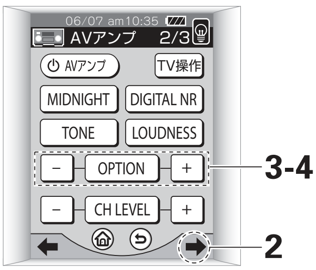
メモ

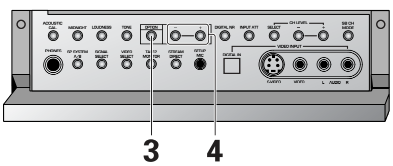
- SACDや88.2kHz以上の入力信号を再生しているときは、この設定は無効になります。

Hi-sampling (ハイサンプリング)機能

CD や DVD などの音声信号に対し、周波数方向の広帯域化を行い、より滑らかで繊細な音楽表現を可能にします。







1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[OPTION] ボタンのある画面を表示させます。

3 [OPTION] **「HI-SAMPLING」を選ぶ。**

ディスプレイに「HI-SAMPLING」が表示されるまで [OPTION] ボタンを押してください。

4 [+][−] **HI-SAMPLING 機能を ON にする。**

ボタンを押すたび、HI-SAMPLING機能がON または OFF に切り換わります。

メモ

- ストリームダイレクトモードがONになっているときは、アナログ信号を入力すると Hi-Sampling（ハイサンプリング）機能が無効になることがあります。（➡ P.76 ）

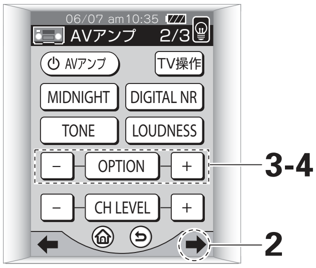
DUAL MONO（デュアルモノ）の再生と設定

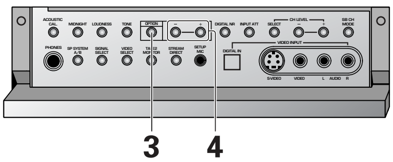
モノラルの音声チャンネルを２つ持つデジタル信号のことを 1+1 デュアルモノラル信号といいます。ここではデュアルモノラル信号が入力されたときにどちらの音声をどのスピーカーから出力するかを設定します。この設定は、例えば以下のようなMPEG-2 AACやドルビーデジタル またはDTSの1+1デュアルモノラルフォーマットのソースにのみ有効です。

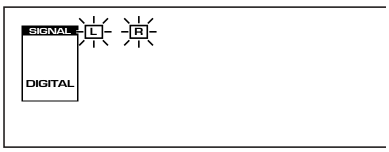
- BS デジタル放送のモノラルの二カ国語放送や音声多重放送など
  ステレオの二カ国語放送などはデュアルモノラルとは異なるフォーマットになります。
- 二カ国語放送などを DVD レコーダーのデュアルモノラルモードで録画したもの
  録画モードの名称は機器によって異なります。詳しくは DVD レコーダーの取扱説明書をご覧ください。

CH1　　　：チャンネル１の音声のみを再生する場合。
CH2　　　：チャンネル２の音声のみを再生する場合。
CH1/CH2 ：チャンネル１／チャンネル２の音声をそれぞれ左／右のフロントスピーカーから分けて再生する場合。









1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**
[OPTION] ボタンのある画面を表示させます。

3 [OPTION] **デュアルモノの設定にする。**
ディスプレイに「DUAL:CH」が表示されるまで [OPTION] ボタンを押してください。

4 [+] [−] **デュアルモノの設定を変更する。**
ボタンを押すたび、以下のように切り換わります。

→ DUAL:CH1 ←→ DUAL:CH2 → DUAL:CH1/CH2 →（DUAL:CH1へ戻る）

メモ

- 工場出荷時の設定は DUAL：CH1 に設定されています。

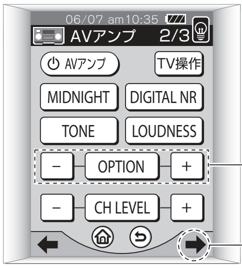
デュアルモノ信号を検出すると[L]と[R]が数秒点滅します。その後CH1 選択時は[L]、CH2 選択時は[R]、CH1/CH2 選択時は[L][R]が点灯します。

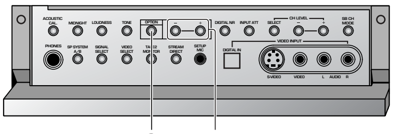
操作

リアルファントム機能

センタースピーカーを接続していなくても、あたかも左右のフロントスピーカーの中央にセンタースピーカーがあるかのように聞こえる効果を加える機能です。
この機能はセンタースピーカーを接続しているとき（スピーカーシステムの設定で、センタースピーカーを有りに設定したとき）は使用できません。





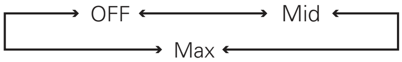


1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**
[OPTION] ボタンのある画面を表示させます。

3 [OPTION] **リアルファントム機能の設定にする。**
ディスプレイに「R.PHANTOM」が表示されるまで [OPTION] ボタンを押してください。

4 [+] [−] **リアルファントム機能を調整する。**
ボタンを押すたび、リアルファントム機能が以下のように切り換わります。

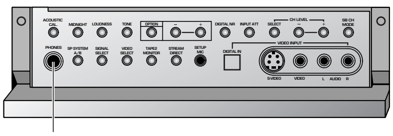


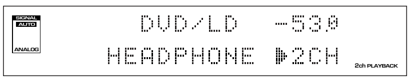
「Mid」：センタースピーカーから少し音が出ているような効果
「Max」：センタースピーカーから音が出ているような効果

メモ

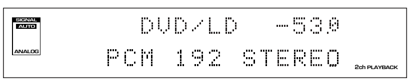
- 以下の場合はリアルファントム機能は使用できません。この場合 [OPTION] ボタンを押してもディスプレイに「R.PHANTOM」は表示されません。
  ・センタースピーカーを有りに設定しているとき
  ・ストリームダイレクトモードを ON にしているとき
  ・リスニングモードが STEREO のとき

ヘッドホンを使う





⬇



1 **ヘッドホンのプラグをヘッドホン端子に差し込む。**

メモ

- ヘッドホンを差し込むとスピーカーから音は出なくなります。
- ショートピン（➡ P.18）が抜けているときはヘッドホンからも音が出ません。
- ヘッドホンで聴いているときは、Surround Setup（音場補正）の各設定は反映されません。

USB オーディオ再生 （パソコンと組み合わせて使う）

本機の USB AUDIO 端子とパソコンを接続することで、パソコンで再生可能な音楽データを本機を通して再生することができます。
USB 接続できるパソコンの OS は「Windows® XP」、「Windows® 2000」、「Windows® Millennium Edition」、「Windows® 98 Second Edition」のいずれかです。これ以外の OS での動作は保証しません。
再生可能な最大チャンネル数は Windows® XP 使用時は 7.1ch、それ以外の OS 使用時は 5.1ch です。
USB オーディオを再生するにはまず、「ドライバーのインストール」を行います。
ドライバーのインストールが完了したことを確認したあと、「USB オーディオを再生する」をご覧ください。

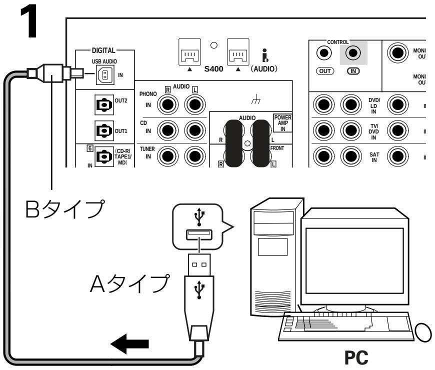
メモ

- 本機のUSBインターフェースはUSB規格Ver.1.1互換です。
- 上記のOSがインストールされていても、お使いのパソコン環境によっては正常に動作できない場合があります。

ドライバーのインストール

本機のUSB AUDIO端子を使ってパソコンの音楽を再生するためには、ドライバーをインストールする必要があります。ドライバーはOSに標準添付されているものを使い、インストールの手順はパソコンの指示に従って行います。一度ドライバーをインストールすれば次回からインストールする必要はありません。OSによってはOSのCD-ROMが必要になる場合がありますので、お手元にご用意ください。

1



メモ

- USBハブおよびUSB延長ケーブル経由で接続したときは正しく動作しない場合があります。
- USBドライバーのインストールをしているときは、USBケーブルを抜かないでください。

1 本機の「USB AUDIO」端子とパソコンUSB端子を接続する。

詳しくは「パソコンの接続（USB接続）」（➡ P.27）をご覧ください。

2 本機の電源を入れる。

3 パソコンの電源を入れる。

パソコンの OS が起動した後、本機の USB ポートを自動検出します。

4 OSの指示に従ってドライバーをインストールしていきます。

例えば、「Windows® XP」をお使いの場合は、特に指示はなくすべて自動でインストールが行われますが、その他のOSをお使いの場合は、インストールの途中でダイアログボックスが表示されますので、その指示に従って操作していきます。ドライバーのインストールには数分かかります。
お使いのOSによっては、OSのCD-ROMが必要な場合があります。その場合は指示に従ってCD-ROMを入れてください。

ドライバーのインストールの確認

ドライバーのインストールが完了した後、ドライバーが認識されているかどうかを確認します。

4–6 画面はWindows XPのものです。



1 **「スタート」メニューから「設定」→「コントロールパネル」を選びクリックする。**

コントロールパネルの画面が表示されます。

2 **「システム」のアイコンをダブルクリックする。**

3 **「デバイスマネージャ」のタブをクリックする。**

「種類別に表示」が選択されていることを確認します。

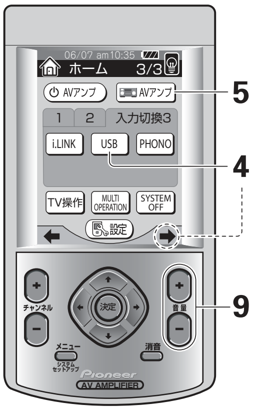
4 **「サウンド、ビデオ、およびゲームのコントローラ」の項目の中に「USBオーディオデバイス」が認識されていることを確認します。**

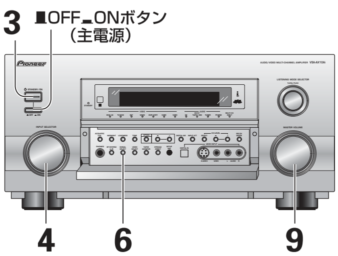
5 **「USB (Universal Serial Bus)コントローラ」の項目の中に「USB複合デバイス」が認識されていることを確認します。**

メモ

- 上記のデバイスが認識されていない場合は、USBケーブルを抜き差しして再度、デバイスドライバーがインストールされるか試してみてください。それでも認識されない場合は、パソコンを再起動してみてください。
- OSによって名称が異なる場合があります。

USBオーディオを再生する

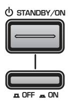




1 **USB ケーブルを接続する。**

2 **パソコンの電源を入れる。**

正常に起動するまで、お待ちください。

3 

本機の電源を入れる。

4 USB **入力を USB にする。**

本体の場合は、INPUT SELECTORを回すと入力が順に切り換わります。

- SIGNAL SELECT インジケーターは DIGITAL に固定されます。
- 映像も同時に切り換えたいときは「ビデオ入力の設定」（➡ P.66 ）をご覧ください。

5 AVアンプ **リモコンを AV アンプ画面にする。**

6 SIGNAL SELECT **入力チャンネル数を設定する。（➡ P.80 ）**

USBインターフェースでは、音声チャンネル数の情報が伝送されません。ここで入力チャンネル数を設定することにより、DSP処理などが最適な状態で行われるようになります。

7 USBオーディオ再生するスピーカーを設定する。

1）パソコンのスピーカー出力を設定する。

■Windows XP
①『スタート』メニューから『設定』→『コントロールパネル』を選び、クリックする。
②『サウンド、音声、およびオーディオデバイス』のアイコンをクリックする。
③『スピーカーの設定を変更する』をクリックする。
④『オーディオ』のタブを選んで、音の再生の『規定のデバイス』が『PIONEER AV Reciever/Amplifier』であることを確認します。
⑤音の再生の『詳細設定』をクリックして、『スピーカー』タブの『スピーカーの種類』を実際のセッティングに合わせます。

■Windows98(98SE)
①『コントロールパネル』→『マルチメディア』を選び、クリックする。
②『オーディオ』のタブを選んで、音の再生の『優先するデバイス』が『ＵＳＢオーディオデバイス』であることを確認します。
③再生の『詳細プロパティ』をクリックして、『スピーカー』タブの『スピーカーの種類』を実際のセッティングに合わせます。

■WindowsMe、Windows2000
①『コントロールパネル』→『サウンドとマルチメディア』を選び、クリックする。
②『オーディオ』のタブを選んで、再生の『優先するデバイス』が『ＵＳＢオーディオデバイス』であることを確認します。
③再生の『詳細設定』をクリックして、『スピーカー』タブの『スピーカーの種類』を実際のセッティングに合わせます。

2）ご使用の再生ソフトのオーディオのスピーカー設定を行います。

設定方法は再生ソフトのマニュアルをご覧ください。

8 パソコン側で再生操作する。

本機に接続しているスピーカーからパソコンで再生している音楽の音が出ます。

9 本機で音量を調節する。

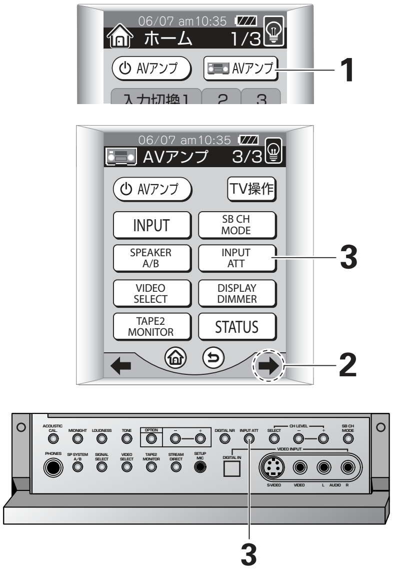
パソコンでの音量調節も可能です。

✎メモ

- パソコンから本機をコントロールしたり、本機からパソコンをコントロールすることはできません。
- USBオーディオ再生中は次の操作をしないでください。
  - 本機の電源を切らないでください。
    パソコンの誤動作の原因になることがあります。
  - USBケーブルを抜かないでください。
    USBケーブルを抜くときはパソコンで再生中のソフトを閉じてから抜いてください。
  - 他のソフトを使用しないでください。
    ノイズが入ることがあります。
- パソコンのサウンド設定音は本機のスピーカーからも出力されます。パソコンのサウンド設定音を出したくないときはパソコン側で設定を行ってください。
- パソコンの使用環境によっては、音が途切れたり、ノイズが発生することがあります。
- 本機リアパネルのUSB AUDIO端子に入力された音声信号はDIGITAL OUT1、2からは出力されません。
- 本機からUSB経由でパソコンへ音を転送することはできません。

インプットアッテネーターを使う

インプットアッテネーターは、アナログの過大信号入力により音声が歪んだとき（OVERインジケーターが頻繁に点灯するとき）にONにします。ONにすることで入力信号のレベルが下がり、歪みを低減させることができます。



1 AVアンプ　**リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 ➡　**リモコン画面を切り換える。**

INPUT ATT　ボタンのある画面を表示させます。

3 INPUT ATT　**インプットアッテネーターをONにする。**

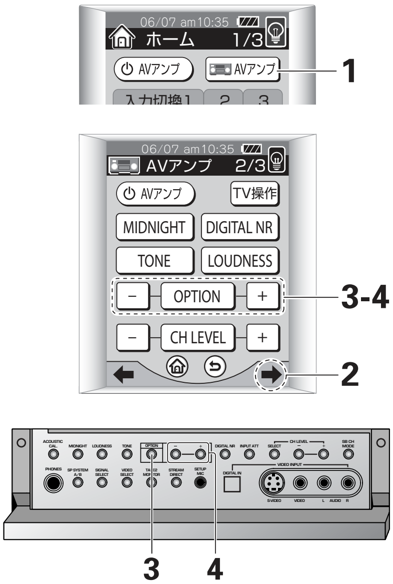
ボタンを押すたび、インプットアッテネーターがONまたはOFFに切り換わります。

メモ

- A/Dコンバーターへの過入力を防止する機能ですので、デジタル入力信号や、すべてアナログで処理を行うモードを選択しているときにはこの機能のON/OFFは関係ありません。

SACD GAIN機能

工場出荷時（「0dB」）は、高レベルで記録されているSACDディスクを再生しても音が歪まない設定になっています。「+6dB」に切り換えてデジタル処理に+6dBのゲインを持たせることにより、SACDディスクの情報をより忠実に引き出すことができるようになり、高音質再生が可能になります。



1 AVアンプ　**リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 ➡　**リモコン画面を切り換える。**

OPTION　ボタンのある画面を表示させます。

3 OPTION　**SACD GAIN機能の設定にする。**

ディスプレイに「SACD GAIN」が表示されるまで OPTION ボタンを押してください。

4 + −　**SACD GAIN機能を調整する。**

ボタンを押すたび、0dBと+6dBが切り換わります。

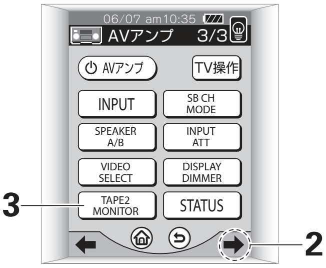
メモ

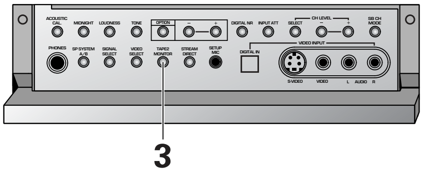
- ほとんどのSACDディスクは「+6dB」の設定で問題ありませんが、再生音声が歪むようなときは設定を「0dB」にしてください。

録音モニター（TAPE 2 MONITOR）の再生

録音モニター付きのカセットデッキをTAPE 2 MONITOR端子に接続すると、録音しながら録音されている音声を聴くことができます。TAPE2 MONITORの再生モードにすると、ソース機器の再生音から録音されている音声に切り換わります。このときディスプレイの「TAPE2」インジケーターが点灯します。







1 [AVアンプ] **リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[TAPE2 MONITOR] ボタンのある画面を表示させます。

3 [TAPE2 MONITOR] **TAPE2 MONITORの再生モードにする。**

ボタンを押すたび、TAPE2 MONITORの再生モードがONまたはOFFに切り換わります。

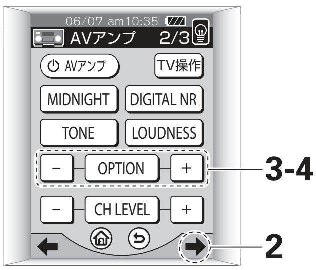
メモ

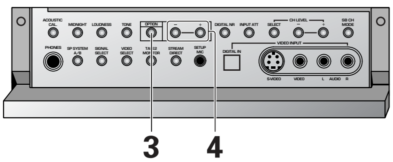
- TAPE2 MONITORがONのとき、入力信号は自動的にANALOGが選択されます。
- TAPE2とともにTAPE1やVCRにも同時録音する場合、TAPE2 MONITORボタンを押してしまうと、TAPE2 MONITOR端子に接続された機器の出力がTAPE1やVCRに録音されるので音が劣化する可能性があります。

サウンドディレイの設定

DVDソフトなど、本機を通して映像と音声を楽しんでいるとき、映像の動きとセリフなどの音声とが合っていない場合は、音声を遅らせることで、映像の動きと音声とを合わせることができます。







1 [AVアンプ] **リモコンをAVアンプ 画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[OPTION] ボタンのある画面を表示させます。

3 [OPTION] **サウンドディレイの設定にする。**

ディスプレイに「DELAY」が表示されるまで [OPTION] ボタンを押してください。

4 [+][−] **音声のディレイ時間を調整する。**

音声のディレイ時間は、0.0～6.0frameの範囲で、0.1frameのステップで調整することができます。

メモ

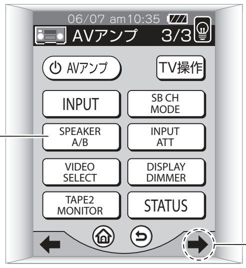
- 調整範囲の目安は、NTSC方式の場合1秒＝30frameでPAL方式の場合1秒＝25frameです。
- ストリームダイレクトモードが選択されている入力ファンクションでは、アナログ信号入力時にサウンドディレイの設定が無効になることがあります（➡ P.76）。

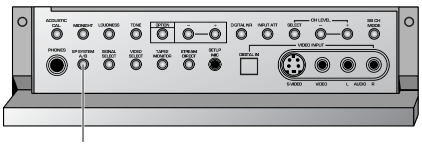
操作

スピーカーシステム A/B の切り換え

スピーカーシステム A/B を切り換えると、再生されるスピーカーが変わります。必要に応じて使用するスピーカーシステムを選択してください。ただし、「スピーカーシステムの設定」（➡ P.46）によってはスピーカーシステム A/B の切り換えに制限がかかることがあります。例えば、「Front Bi-Amp」または「Bi-Surround」を選択したときは A と OFF のみの切り換えとなり、SP-B に「ITU-R」を選択したときは A、B、OFF のみの切り換えとなります。







1 [AVアンプ] **リモコンを AV アンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[SPEAKER A/B] ボタンのある画面を表示させます。

3 [SPEAKER A/B] **スピーカーシステムを切り換える。**

ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

A → B → A + B → OFF →（A に戻る）

スピーカーシステムの設定によって選択できるモードが換わります。

メモ

- ヘッドホンをヘッドホンジャックに差し込んでいる間は自動的に OFF に切り換わります。

スピーカーシステム A、B、A+B について

「スピーカーシステムの設定」（➡ P.46）で Speaker System Select を「Normal Surround」に、SP-B を「Second Zone」に設定している場合、スピーカー端子やプリアウト端子からの出力音声はスピーカーシステムの切り換えに応じて次のように変わります。

A（SP►A）　：スピーカー端子Aのスピーカー（とサブウーファー）から音が出ます。プリアウト端子からも基本的に同じ音が出力されます。

B（SP►B）　：スピーカー端子B のスピーカーからのみ音が出ます。LFE 成分以外の全ての音声成分は 2ch にダウンミックスされます。プリアウト端子については、サラウンドバック ch からのみ、スピーカー端子 B と同じ音が出力されます。

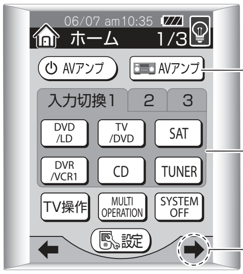
A+B（SP►AB）：スピーカー端子Aのフロント、センター、サラウンドスピーカー（とサブウーファー）、スピーカー端子Bのスピーカーから音が出ます。スピーカー端子BはLFE成分以外の全ての音声成分を 2ch へダウンミックスした再生です。

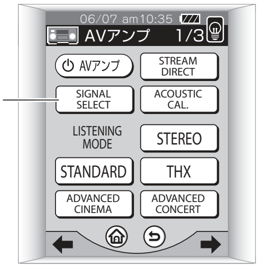
- **サラウンドバックスピーカーからは音は出ません。**
- サブウーファーを有り（YES/PLUS）に設定しているとき、LFE 成分はサブウーファーからのみ再生されます。
- プリアウト端子については、フロント、センター、サラウンドchはスピーカー端子Aと、サラウンドバック ch はスピーカー端子 B と同じ音が出力されます。

OFF（SP►　）：スピーカーからは音が出ません。ただし、入力信号の種類やスピーカーシステムの設定によってはサブウーファーからのみ音が出ます。プリアウト端子からは A を選んだときと同じ音が出力されます。

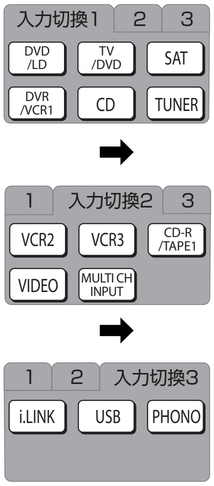
本機を使った録音 / 録画

オーディオ機器からの音声やビデオ機器からの映像、音声を本機を使って録音 / 録画する方法について説明します。ソース機器と録音・録画機器の接続は「接続」(➡ P.23 P.26) をご覧ください。





1



録音 / 録画するソースを選ぶ。

⬅ ➡ ボタンで画面を切り換えて選択します。
本体の場合は、INPUT SELECTOR を右に回すと入力が順に切り換わります。

2



リモコンを AV アンプ画面にする。

3



入力信号を選択する。

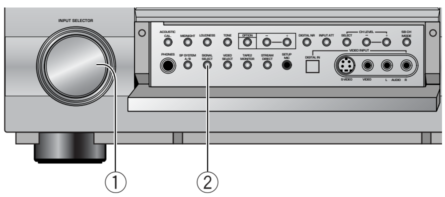
デジタル録音するときは、DIGITAL を選択します。詳しくは「I.LINK/ANALOG/DIGITAL 信号の切り換え」(➡ P.79) をご覧ください。

4 **録音機器の録音またはビデオデッキ(DVDレコーダー)の録画を開始する。**

5 **録音または録画するソースを再生する。**

✎メモ

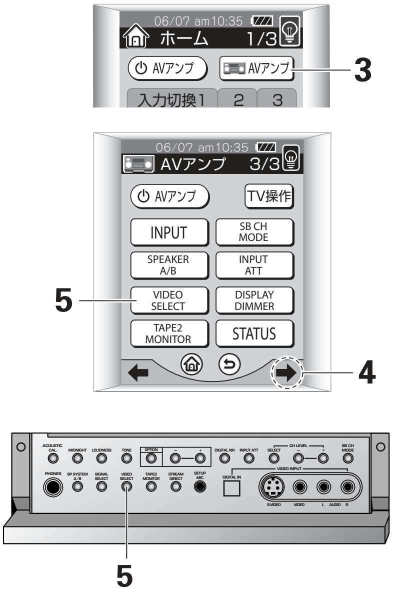
- **音声はアナログ－デジタル変換していませんので、接続する信号の種類を合わせてください。**
- **映像はビデオコンバーター(➡ P.24) を搭載していますので、コンポジットまたは S ビデオで接続してください。**
- 「オートサラウンドセットアップ (➡ P.40)」、および「音場補正(➡ P.44)」を行っているときは録音・録画を行わないでください。
- 各録音信号に、本機の音量、チャンネルレベル、「便利な音声再生用機能」(➡ P.90)、リスニングモードの設定は、反映されません。
- デジタル出力については、再生はできても信号の種類やコピーガード、録音機器の仕様などにより録音できないものがあります。この場合はアナログ接続で録音してください。
- MULTI CH INPUT に入力された音声は、フロント ch のみ録音することが可能です。
- DVD などのビデオソフトの中にはコピーガードが設定されていて録画できないものがあります。
- TAPE2 の再生信号を CD-R/TAPE1 に接続した機器で録音する場合、①CD-R/TAPE1 以外の入力ファンクションを選択し、②TAPE2 MONITOR を ON にしてください。



操作

別のファンクションの映像を見る(ビデオセレクト)

ビデオセレクト機能は、お好みの音楽ソースを聞きながら別の機器の映像を同時に見ることができる機能です。



1 音楽ソースを再生する。

(「基本再生」➡ P.74)

2 見たい映像のビデオ機器を再生する。

3 [AVアンプ] リモコンを AV アンプ画面にする。

4 ➡ リモコン画面を切り換える。

[VIDEO SELECT] ボタンのある画面を表示させせます。

5 [VIDEO SELECT] 見たい映像を選択する。

ボタンを押すたび、以下のように切り換わります。

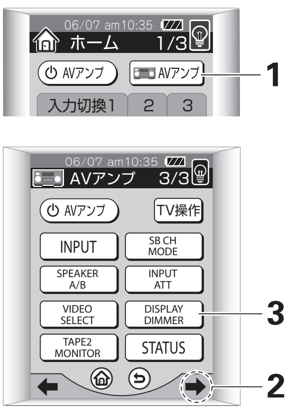
→ DVD/LD → TV/DVD → SAT → VIDEO → DVR/VCR 1 → VCR 2 → VCR 3 → OFF →(DVD/LDに戻る)

✎メモ

- ビデオセレクト機能は、本機の電源を切ったり、入力ファンクションを切り換える(または他機器操作ボタンを押す)とキャンセルされます。
- OFF では、ビデオ回路の電源も OFF になるため、画面には何も表示されません(セットアップ画面やステータス画面は表示することができます)。
- VCR3 から OFF に切り換えるときや OFF から DVD/LD に切り換えるとき、または VIDEO 系と AUDIO 系の入力ファンクション間を切り換えるときに、画面にノイズが出たり、スピーカーからノイズが出ることがありますが、これはビデオ回路の電源 ON/OFF も自動的に行っていることによるものです。

ディスプレイの明るさを調整する(ディマー)

リモコンの[DISPLAY DIMMER]ボタンを使って、フロントパネルディスプレイの明るさを調整できます。



1 [AVアンプ] リモコンをAVアンプ画面にする。

2 ➡ リモコン画面を切り換える。

[DISPLAY DIMMER]ボタンのある画面を表示させせます。

3 [DISPLAY DIMMER] 好みの明るさに調整する。

ボタンを押すたびにディスプレイの明るさを4段階に調整できます。

一巡すると、普通の明るさに戻ります。

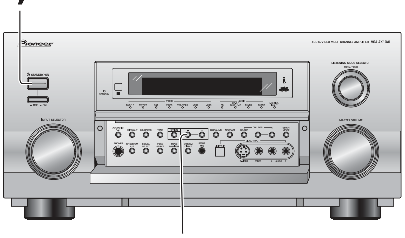
✎メモ

- 調整値に関わらず、操作時は一時的に明るく表示します。

スピーカーインピーダンスの切り換え

スピーカーインピーダンスの設定は、4Ω以上6Ω未満の設定と6Ω～16Ωの設定の２通りあります。4Ω以上6Ω未満のスピーカーをご使用になるときは以下の手順で設定を変更してください。工場出荷時は6Ω～16Ωの設定になっています。

1,2

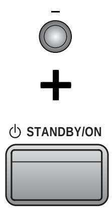


2

1 本機をスタンバイ状態にする。

スタンバイインジケーターが点灯します。

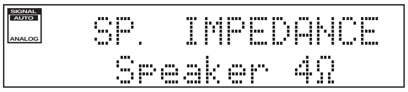
2



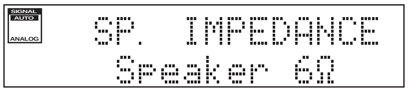
OPTION －ボタンを押しながらSTANDBY ボタンを押す。

スピーカーインピーダンスが変更されます。

再度、設定を変更したいときは手順１からやり直してください。



スピーカーインピーダンスが4Ω以上6Ω未満の場合



スピーカーインピーダンスが6Ω～16Ωの場合

メモ

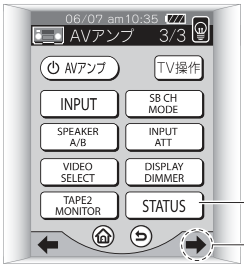
- ストリームダイレクトモード」（➡ P.76 ）を２か３に設定しているとき、4Ω以上6Ω未満の設定に切り換えると、ストリームダイレクトモードは自動的に１に切り換わります。

各種設定内容の確認（ステータス画面）

リモコンの「STATUS」ボタンを押すことで、現在の各種設定内容を確認することができます。確認はOSD画面（テレビ画面）と本体のディスプレイの両方に表示されます。各種設定内容の確認は各入力ごとに確認することができます。



1



3
2

1 [AVアンプ] **リモコンをAVアンプ画面にする。**

2 ➡ **リモコン画面を切り換える。**

[STATUS]ボタンのある画面を表示させます。

3 [STATUS] **設定内容を確認する。**

OSD画面とディスプレイに以下の内容が表示されます。ディスプレイは以下のように2秒ごとに切り換わって表示します。

OSDの表示例

SB CH MODE	:	OFF
ACOUS. CAL EQ	:	ALL ADJ
DIGITAL NR	:	OFF
MIDNIGHT	:	ON
LOUDNESS	:	OFF
TONE CONTROL	:	OFF
VIDEO SELECT	:	DVD/LD
DUAL MONO	:	CH1
SOUND DELAY	:	0.0frame
HI-BIT	:	OFF
HI-SAMPLING	:	OFF
REAL PHANTOM	:	OFF

ディスプレイの表示例

ディスプレイ	内容
DVD/LD -53.0 SB CH MODE:ON	• サラウンドバックチャンネルモード
⬇	
DVD/LD -53.0 A-EQ:ALL CH ADJ	• アコースティックキャリブレーションEQ
⬇	
DVD/LD -53.0 DIGITAL NR:OFF	• デジタルノイズリダクション機能
⬇	
DVD/LD -53.0 MIDNIGHT:ON	• ミッドナイトリスニング機能 • ラウドネス機能 • トーンコントロール機能
⬇	
DVD/LD -53.0 VSEL: DVD/LD	• ビデオセレクト
⬇	
DVD/LD -53.0 DUAL:CH1	• デュアルモノの設定
⬇	
DVD/LD -53.0 DELAY:0.0frame	• サウンドディレイ
⬇	
DVD/LD -53.0 HI-BIT:OFF	• ハイビット機能
⬇	
DVD/LD -53.0 HI-SAMPLING:OFF	• ハイサンプリング機能
⬇	
DVD/LD -53.0 R.PHANTOM:OFF	• リアルファントム

✎ **メモ**

- ステータス表示中に[STATUS]ボタンを押すと、通常表示に戻ります。
- ストリームダイレクトモードがONのときに、設定が無効になっている機能はOFF表示されます。ストリームダイレクトモードをOFFにするとON表示に戻ります。

他機器を操作するためのリモコン設定

付属のリモコンを使って、本機以外のパイオニア製品（DVD プレーヤーなど）や他社の機器（ビデオデッキ、テレビなど）を操作することができます。お手持ちの機器のプリセットコードがリモコンに登録されている場合は、該当するコードを呼び出して簡単に本機のリモコンで操作できるようになります（プリセット呼び出し）。プリセットコードが登録されていない場合、または本機のリモコンで操作できる機能を追加したい場合は、その操作のリモコンコードを直接登録することができます（学習）。

メモ

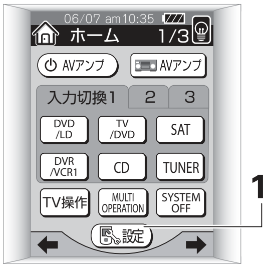
- ケーブルTV チューナーとモニターTV などを登録したい場合はモニターTV をTV CONTROL、ケーブルTV チューナー(ソース機器）を TV に登録すると便利です。

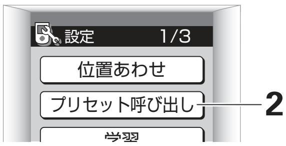
プリセット（コード）呼び出し

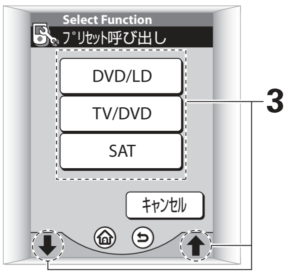
本機のリモコンの他機器操作ボタンに、操作したい他機器のプリセットコードを呼び出して割り付けることができます。ここでは、DVD/LD ボタンにパイオニア製DVD プレーヤーのプリセットコードを割り付ける手順を例にあげて説明します。

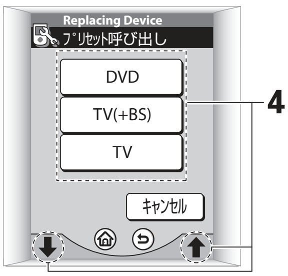
メモ

- ⑤ボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。









1 

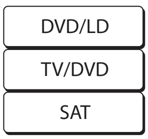
リモコン設定モードにする。

リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

2 

プリセットコード呼び出しモードにする。

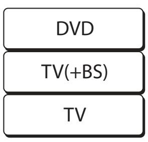
「Select Function」と表示され、入力ファンクションボタンが表示されます。

3 

プリセットコードを割り付けたい入力ファンクションボタンを選択する。

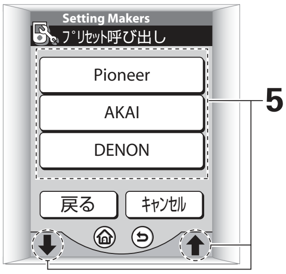
操作したい機器を接続した入力ファンクションに対応するボタンを選択してください。

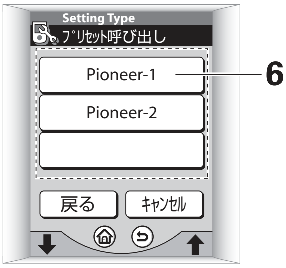
入力ファンクションボタンは ⬆⬇ ボタンで画面を切り換えて選択します。

4 

呼び出す機器の種類を選択する。

DVD/LDボタンにはDVD、CDボタンにはCD のように操作する機器とボタンを一致させることをおすすめします。







5 [Pioneer] [AKAI] [DENON]

(呼び出す)機器のメーカーを選択する。

メーカー名が3つまで表示されます。4つ以上のメーカーが登録されている場合は、リストの下の⬇ボタンを押すとリストの続きを表示します(⬆ボタンを押すと戻ります)。

6 [Pioneer-1]

プリセットコードのタイプを選択する。

同一メーカーに複数のコードが登録されている場合、番号順に表示されます。まずは「-1」と番号がふられているボタンを選択してください。選択すると確認画面が表示されます。

7 [テスト]

選択した機器にリモコンを向けて [テスト] ボタンを押す。

リモコンから選択したコードの電源 ON/OFF 信号が送信されます。

機器の電源が ON または OFF したときは手順８へお進みください。

機器の電源が ON/OFF しない場合で手順6に -2、-3 と複数のボタンが表示されていたときは、[戻る] ボタンを押して手順6へ戻り他のボタンでお試しください。

✎メモ

- パイオニアのハードディスク付きDVDレコーダーを２台以上お持ちの場合、それぞれに違う番号を割り付けると１台ずつ独立して操作することができます。対応機器とプリセットコードのタイプは以下の通りです。

  [Pioneer-1]：DVR-1000、DVR-2000、DVR-3000、DVR-7000

  [Pioneer-2]～[Pioneer-4]：DVR-55、DVR-77H、DVR-99H、DVR-510H、DVR-515H、DVR-610H、DVR-710H

✎メモ

- [テスト] ボタンを押すときに、リモコンを操作したい機器の方に向けていないと機器の電源は ON/OFF しません。
- 選択した機器にSTANDBY/ONモードがない場合は、正しく設定できていてもON/OFFはしません。この場合はそのまま手順８へ進み、その後に実際に操作できるかどうかお試しください。
- 表示されている全ての番号を押しても電源がON/OFFしないまたは操作できない場合は必要な操作を「学習(他機器のリモコン操作を本機のリモコンに登録する)」(➡ P.107)で登録してください。

8 [決定]

呼び出すコードを確定する

プリセットコードが呼び出され、「お待ちください」表示の後、手順３の表示画面に戻ります。

手順３～８を繰り返し、その他の機器も設定してください。

リモコン設定を終了するには

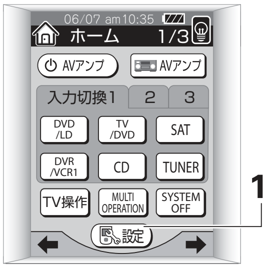
🏠ボタンを押します。

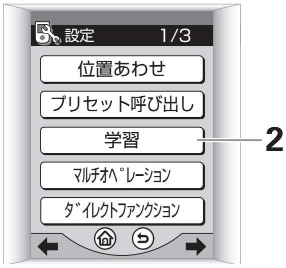
学習（他機器のリモコン操作を本機のリモコンに登録する）

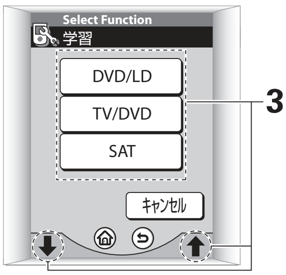
本機のリモコンで操作したい他機器のプリセットコードが呼び出せない場合は、以下の手順で他機器のリモコン操作を本機のリモコンに登録（学習）することができます。プリセットコードを呼び出しただけでは使用できない操作についても、以下の手順で本機のリモコンに追加登録（学習）することができます。

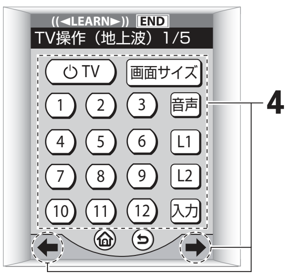
メモ

- ⑤ボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。
- 画面によっては、あらかじめ学習用の空きボタンが用意されており、それらは学習モードにしたときのみ「Learn ＊」または「L ＊」というボタンになって表示されます。学習させた後、ボタンラベル機能（➡ P.116）で好きな名前に変えてお使いください（学習させたボタンはその後も常に表示されるようになります）。









1



リモコン設定モードにする。

リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

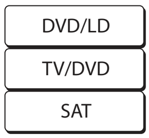
2



学習モードにする。

「Select Function」と表示され、入力ファンクションボタンが表示されます。

3



リモコン操作を登録したい入力ファンクションボタンを選択する。

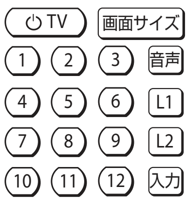
入力ファンクションボタンは⬆⬇ボタンで画面を切り換えて選択します。

ここではTV/DVDボタンを押します。

一番上の行に((◀LEARN▶))と表示され、学習画面になります。

ホーム画面やAVアンプ画面には学習できません。

4

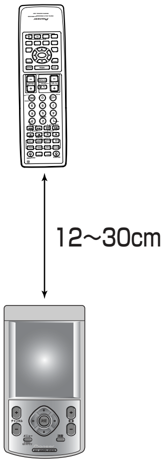


登録したいボタンを選択する。

右上にマークが表示され、他機器のリモコンからの操作信号受信待ち状態となります。

- リモコンの全てのハードキーにも登録できます（音量＋/－/ミュートハードキーは「TV操作」を選んだ場合のみ登録可能です）。ただし各ページに異なる操作を登録することはできません。
- END ボタンを押すとキャンセルされます。
- 登録したいボタンが違うページにあるときは⬅➡ボタンで画面を切り換えて選択します。
- 登録するボタンを変更するには、選択したボタンをもう一度押してください。

5





5 **（マーク）が表示されている間に他機器のリモコンを左図のように本機のリモコンに向け、他機器のリモコンの登録したい操作ボタンを押す。**

登録が完了すると、リモコンの表示画面に「OK!」と表示され、３秒後に手順４へ戻ります。
手順４～５を繰り返し、その他のボタンにも登録します。

メモ

他機器のリモコンのボタンを押しても「OK!」と表示されなかったり、「Failed」と表示されたり、登録後に実際に操作できない場合はリモコンどうしの距離を変えて試してみてください（プロジェクター用のリモコンなどの中には赤外線出力が強力なものもあります。その場合は少し距離を離して学習させてください。また、リモコンコードによっては正しく登録できないものもあります）。

- **「Memory Full」と表示された場合は不要なリモコンコードを登録（学習）してしまっている入力ファンクションに対し、プリセット呼び出し（➡ P.105）を行ってください。**
  リモコンのメモリの空き容量が増えます。ただし、この機器の操作画面に個別に登録（学習）していたリモコンコードはすべてクリアされます。

6 END **選んだ機器の学習画面を終了する。**

手順３の表示画面に戻ります。
別の機器のボタンにも学習させる場合には手順３～５を繰り返して登録します。

リモコン設定を終了するには

ボタンを押します。

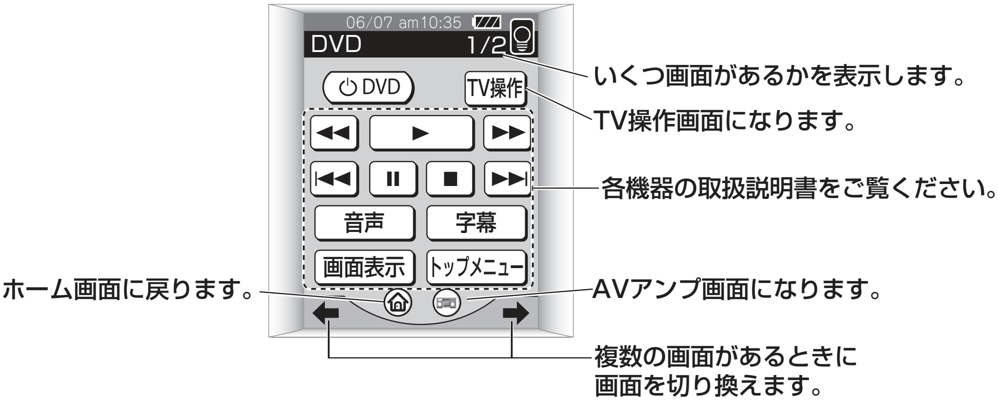
メモ

- 画面を切り換える機能のみが割り付けられているボタン（例えばやや⬅/➡）には学習させることができません。それらのボタンを押すと設定の途中でも画面が切り換わってしまいますのでご注意ください。
- コード送信と画面切換の両方の機能が割り付けられているボタンに学習させると、そのボタンの画面切換機能は削除されます。

他機器のリモコン操作

- リモコン操作を行うには、あらかじめ操作したい機器のプリセットコードを登録しておく必要があります。詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」(➡ P.105)をご覧ください。
- **実際に操作を始める前に操作したい機器の他機器操作ボタンを押して、リモコンをその機器の操作モードにしてください。**
- 機種によっては操作できないボタンもあります。
- 各機器の詳しい機能については、それぞれの取扱説明書をお読みください。

DVD/LD



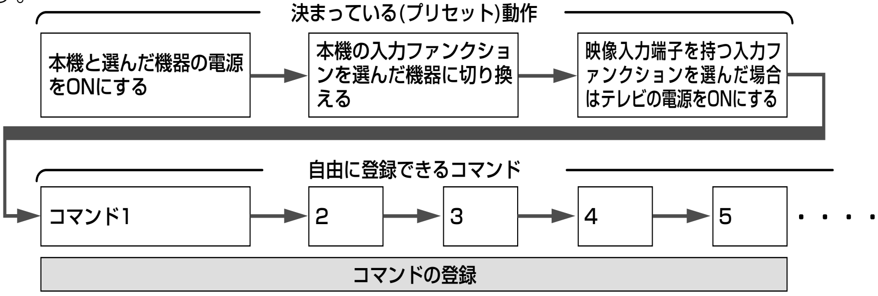
TV操作



基本的にはDVD/LDと
同じ動きをします。

マルチオペレーション

マルチオペレーションとは、他機器操作ボタンを押して本機の入力ファンクションを切り換えるかわりに、2つのボタン（MULTI OPERATIONと他機器操作ボタン）を押すだけで、あらかじめ決められている（プリセット）動作と、複数の操作（コマンド）を一度に実行する便利な機能です。ある機器の音を聴くときに、その機器の電源ONや本機の入力ファンクションの切換操作などに加え、本機の再生などがプログラム通りに行われます。各入力ファンクションとTV操作ボタンに登録することができます。リモコンからは次のようにコマンドが送信されます。

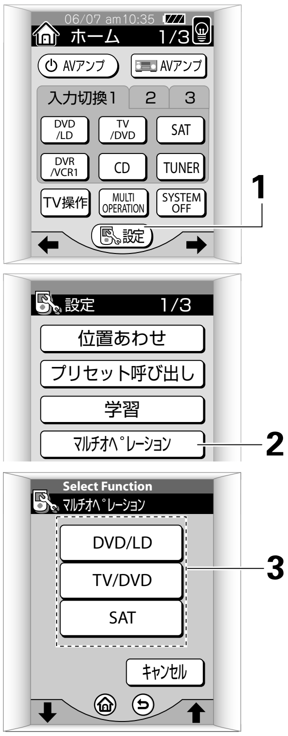


- 登録する他機器操作ボタンでTV操作を選んだときの「決まっている（プリセット）動作」は「テレビの電源をONにする」のみとなります。
- 「決まっている（プリセット）動作」ではパイオニア以外の機器の電源はONしません。
- CDなどのオーディオ機器でも映像入力端子を持っている入力ファンクションの場合はテレビの電源がONされます。テレビの電源をONにしない場合は、テレビの電源をOFFにする操作のプログラムをしてください。

マルチオペレーションをプログラムする

マルチオペレーション機能で実行したい一連の操作をプログラムする方法について説明します。

メモ
- 以下の手順を始める前に、操作したい機器のプリセットコードまたはリモコン操作を本機のリモコンに登録しておく必要があります（詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」（➡ P.105 ）をご覧ください）。
- ⑤ボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。



＊ ここでは、DVD/LDボタンに「DVDを再生する」という操作をプログラムする手順を例にとって説明します。

1 設定

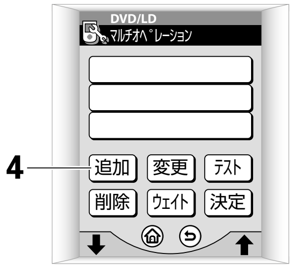
リモコン設定モードにする。
リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

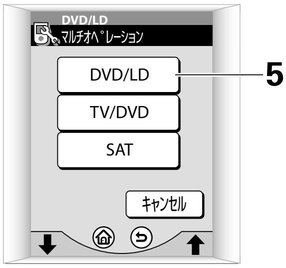
2 マルチオペレーション

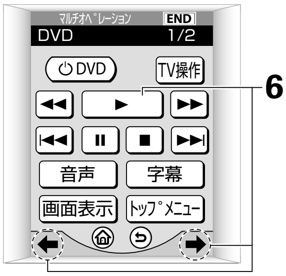
マルチオペレーションモードにする。
「Select Function」と表示され、入力ファンクションボタンが表示されます。

3 DVD/LD / TV/DVD / SAT

マルチオペレーションをプログラムしたい入力ファンクションボタンを選択する。

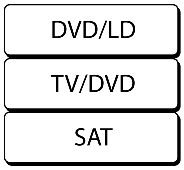






4 [追加]　[追加]ボタンを押す

5



操作したい機器（ここではDVD/LDボタン）を選択する。

選択した機器のリモコン操作画面が表示されます。

6



実行したいコマンドのボタン（ここでは►再生ボタン）を選択する。

画面には、コマンド１に選択した機器とコマンドが表示されます。

- リモコンのハードキーの⬆/⬇/⬅/➡/(決定)ボタンも登録できます。
- 操作ボタンは⬅➡ボタンで画面を切り換えて選択します。

[変更]　**登録したコマンドを変更するときは、変更したいコマンドのボタンを選んでから[変更]ボタンを押します。**

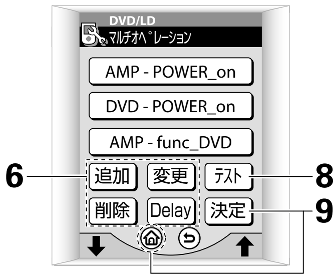
[削除]　**登録したコマンドを削除するときは、削除したいコマンドのボタンを選んでから[削除]ボタンを押します。**

[Delay]　**コマンドとコマンドの間で数秒間をあけたいときは[Delay]ボタンを押します。**

登録した秒数を変更するときは、変更したいDelayコマンドのボタンを選んでからSetボタンを押します。

[追加]　**登録したコマンドの前にコマンドを追加登録したいときは、追加登録したいコマンドの前のコマンドボタンを押してから[追加]ボタンを押します。**

7 **手順４～６を繰り返し、コマンドを登録する。**



8 [テスト]　**登録したコマンドが正しく動作するか確認する。**

リモコンを機器に向けてボタンを押してください。決まっている動作の後に、プログラムしたコマンドが登録されます。

9 [決定]　**コマンドの登録を終了する。**

「お待ちください」と表示され、手順3の表示画面に戻ります。

別の機器にも登録するときは、手順３～９を繰り返してください。

リモコン設定を終了するには

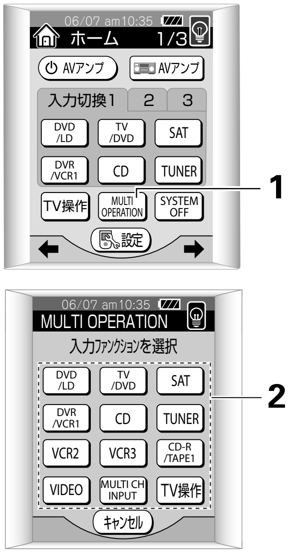
(ホーム)ボタンを押します。

✎メモ

- [決定]ボタンを押さずに(戻る)ボタンや(ホーム)ボタンまたは[キャンセル]ボタンを押して終了しても、それまでに登録したコマンドは有効となります。

マルチオペレーションを実行する

簡単な操作で入力ファンクションごとにあらかじめ決められた操作と自分で登録した一連の操作を実行する方法について説明します。決められた操作の内容ならびに一連の操作の登録方法については「マルチオペレーションをプログラムする」（➡ P.110 ）をご覧ください。



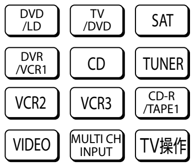
1



マルチオペレーション実行モードにする。

「Select Function」と表示され、入力ファンクションボタンが表示されます。

2

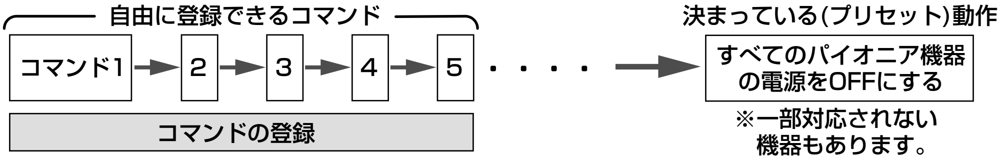


操作したい機器（例えばDVD/LD）を選択する。

プリセット動作と、このボタンに登録されているコマンドが実行されます。

システムオフ

システムオフとは、自由に登録できる操作（コマンド）と、本機を含めたすべてのパイオニアの機器の電源OFFを、ワンタッチで実行する便利な機能です。 例えば本機の使用を終了するときに、DVD再生を停止したり各機器の電源OFFなどの一連の操作をワンタッチで実行できます。リモコンからは次のようなコマンドが送信されます。

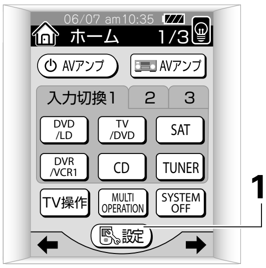


システムオフをプログラムする

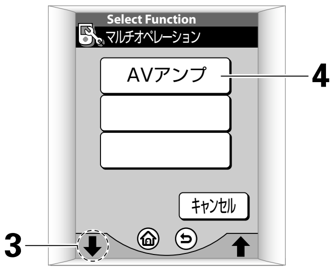
システムオフ機能で実行したい一連の操作をプログラムする方法について説明します。

メモ

- 以下の手順を始める前に、操作したい機器のプリセットコードまたはリモコン操作を本機のリモコンに登録しておく必要があります（詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」（➡ P.105）をご覧ください）。
- ⮌ボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。









＊ ここでは「DVDの再生を停止（■）する」という操作をプログラムする手順を例にとって説明します。

1 〔設定〕

リモコン設定モードにする。
リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

2 〔マルチオペレーション〕

マルチオペレーションモードにする。
「Select Function」と表示され、入力ファンクションボタンが表示されます。

3 ⬇

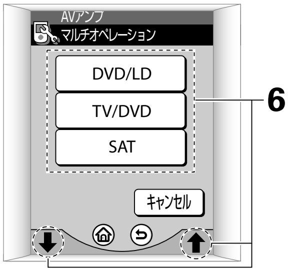
リモコン画面を切り換える。
「AVアンプ」ボタンが表示されるまで⬇ボタンを押します。

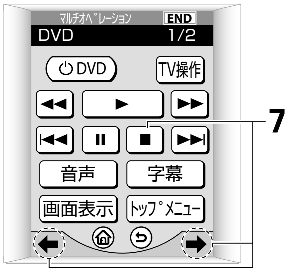
4 〔AVアンプ〕

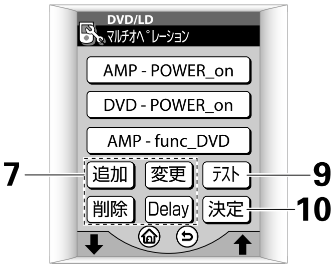
AVアンプボタンを押してシステムオフモードにする。

5 〔追加〕

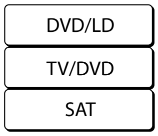
〔追加〕ボタンを押す。







6



操作したい機器（ここではＤＶＤ/LD）を選択する。

選択した機器のリモコン操作画面が表示されます。
他機器操作ボタンは⬆⬇ボタンで画面を切り換えて選択します。

7



登録するコマンドのボタン（ここでは■停止ボタン）を選択する。

画面には、コマンド１に選択した機器とコマンドが表示されます。
操作ボタンは⬅ ➡ ボタンで画面を切り換えて選択します。

[変更] **登録したコマンドを変更するときは、変更したいコマンドのボタンを選んでから[変更]ボタンを押します。**

[削除] **登録したコマンドを削除するときは、削除したいコマンドのボタンを選んでから[削除]ボタンを押します。**

[Delay] **コマンドとコマンドの間で数秒間をあけたいときは[Delay]ボタンを押します。**

登録した秒数を変更するときは、変更したいDelayコマンドのボタンを選んでからSetボタンを押します。

[追加] **登録したコマンドの前にコマンドを追加登録したいときは、追加登録したいコマンドの前のコマンドボタンを押してから[追加]ボタンを押します。**

8 **手順５～７を繰り返し、コマンドを登録する。**

9 [テスト] **登録したコマンドが正しく動作するか確認する。**

リモコンを機器に向けてボタンを押してください。
決まっている動作の後に、プログラムしたコマンドが登録されます。

10 [決定] **コマンドの登録を終了する。**

「お待ちください」と表示され、手順3の表示画面に戻ります。
設定をもう一度やり直すときは、手順３～１０を繰り返してください。

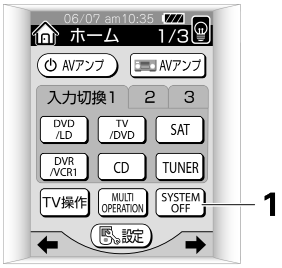
リモコン設定を終了するには

ⓗボタンを押します。

✎メモ

- [決定]ボタンを押さずにⓢボタンやⓗボタンまたは[キャンセル] ボタンを押して終了しても、それまでに登録したコマンドは有効となります。

システムオフを実行する



1 SYSTEM OFF **システムオフを実行する。**

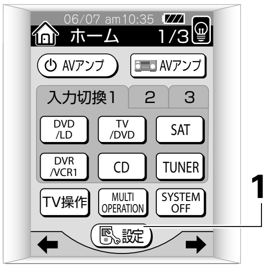
P.113 であらかじめプログラムされたコマンドが実行された後、各パイオニア製品の電源がOFFになります。

ダイレクトファンクション

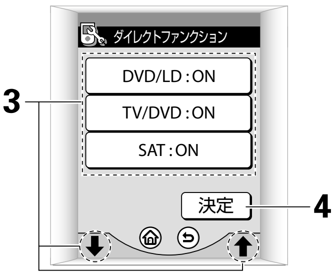
ダイレクトファンクションモードとは、他機器操作ボタンを押したときに、本機の入力ファンクションを機器に合わせて切り換えるかどうかを設定する機能です。OFFにすると本体の入力ファンクションは切り換わらず、リモコン画面の表示だけが切り換わります。

メモ

- ⮌ボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。







1 設定 **リモコン設定モードにする。**

リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

2 ダイレクトファンクション **ダイレクトファンクションモードにする。**

ダイレクトファンクション画面が表示されます。

3 DVD/LD : ON / TV/DVD : ON / SAT : ON **それぞれの入力ファンクションボタンについて設定する。**

押すたびにONとOFFが切り換わります。

⬆⬇ ボタンで画面を切り換えて選択します。

4 決定 **ダイレクトファンクションモードを終了する。**

リモコン設定画面に戻ります。

リモコン設定を終了するには

ホームボタンを押します。

メモ

- 工場出荷時はすべてONに設定されています。

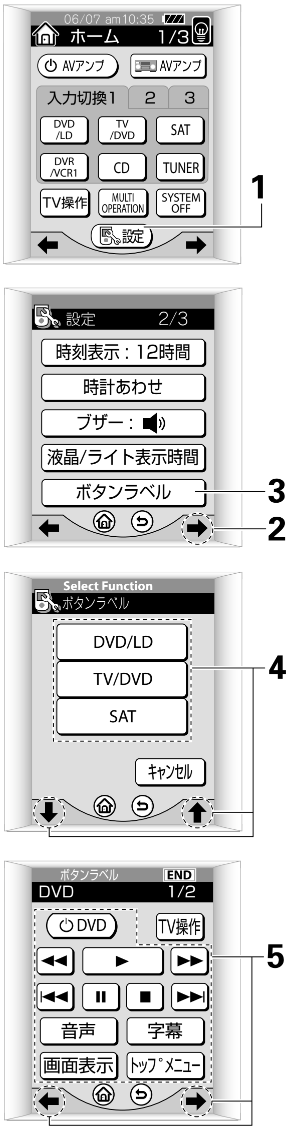
リモコン

ボタンラベルを変更する

ボタンラベルとはリモコンの他機器操作画面で、各入力ごと、すべてのボタンにお好みの名前が付け換えられる機能です（ボタンによって付け換えられる文字数は異なります）。また、「►」などのマークに置き換えることもできます。例えば便利な使い方として、あるボタンに他機器のリモコン操作を学習させた場合（➡ P.107）、そのボタンの名前を付け換えたり、絵やマークに変更することによって、その操作がどこのボタンに学習されたのかを簡単に確認することができます。

メモ

- 入力できる文字はアルファベット（大、小）とスペースのみで、漢字、ひらがな、カタカナは入力できません。
- ⊃ボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。



＊ ここでは「DVD再生（►）」ボタンのラベルを変更する手順を例にとって説明します。

1 ［設定］

リモコン設定モードにする。

リモコンのＬＣＤ 画面に設定メニューが表示されます。

2 ➡

➡ ボタンを１回押してリモコン画面を切り換える。

［ボタンラベル］のある画面を表示させます。

3 ［ボタンラベル］

ボタンラベル入力モードにする。

「Select Function」と表示され、他機器操作ボタンが表示されます。

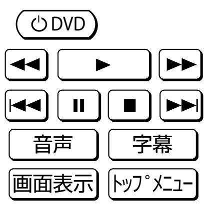
4 ［DVD/LD］［TV/DVD］［SAT］

ボタンのラベルを付け換えたい入力ファンクションボタンを選択する。

ここでは例としてDVD/LDを選択します。

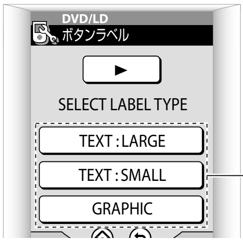
⬆⬇ ボタンで画面を切り換えて選択します。

5



ラベルを付け換えるボタン（ここでは ► ボタン）を選択する。

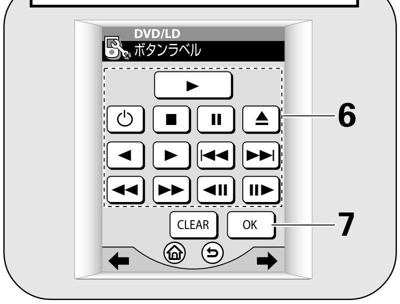
- 操作ボタンは ⬅➡ ボタンで画面を切り換えて選択します。
- END ボタンを押すと手順4の画面に戻ります。
- 選択したボタンが画面の一番上に表示されます。



TEXTボタンを選んだ場合



GRAPHICボタンを選んだ場合



6 **手順５で選択したボタンのラベルを変更する。**

ラベルの変更には文字（大/小）または絵ラベルの３つの種類を選ぶことができます。

TEXT : LARGE / TEXT : SMALL **TEXT ボタンを押すと文字入力画面になります。**

「TEXT : LARGE」は大きな文字、「TEXT : SMALL」は小さな文字で表示されます。SMALL を選んだときのみ改行マークが表示され、２行表示ができます。

SPACE ：１度押すと１文字分のスペースが入力されます。
CLEAR ：入力した文字や数字を右から１つ消去します。
⬅/➡ ：数字や記号など、文字の種類を変えたいときは、このボタンを押して選択します。

GRAPHIC **GRAPHIC ボタンを押すと絵・マーク入力画面になります。**

CLEAR ：変更前のラベルに戻ります。
⬅/➡ ：ラベルの種類を変えたいときはこのボタンを押して入力したいラベルを選びます。

7 OK **手順６で入力したラベルを確定する。**

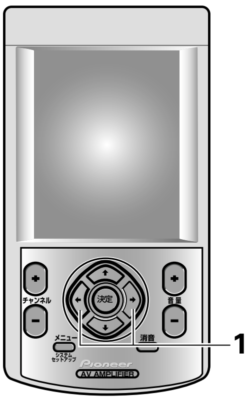
「お待ちください」と表示され、手順５の画面に戻ります。リモコン設定を終了するには⌂ボタンを押します。

メモ

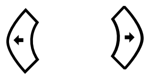
- 一度変更したラベルを元に戻すことはできません。元に戻したいときはリモコンのオールリセット（➡ P.119）ですべてのリモコン設定を工場出荷状態に戻してください。
- 各機器の操作画面左上に表示される⏻ボタンの⏻マークは消すことはできません。電源ボタンとしてお使いください。

リモコンのボタン操作ロック

リモコンのボタンとLCD画面に表示されるボタン操作を禁止させることができます。



1



⬅ ボタンと ➡ ボタンを３秒間同時に押し続ける。

ボタン操作ロック画面に切り換わり、すべてのボタン操作が禁止されます。

ボタン操作ロックを解除するには、もう一度⬅ボタンと➡ボタンを3秒間同時に押し続けます。

ボタン操作ロックは解除されホーム画面に戻ります。

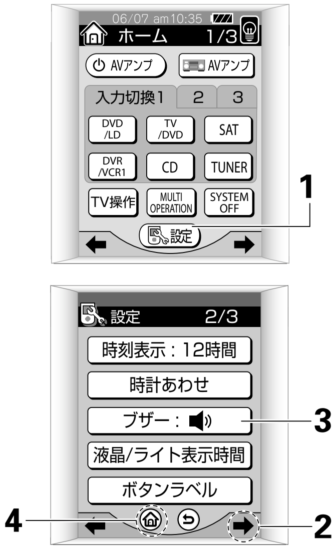
メモ

- リモコン設定モード中はボタン操作ロックはできません。⌂ボタンを押すなどしてリモコン設定モードを終了してからボタン操作ロックを行ってください。

リモコン

ボタン確認音を変更する

ボタンを押したとき、または設定内容の送信を完了したときに発信音が「ピッ」と鳴ります。ここでは、ボタンを押したときの確認音を「大」、「小」または「OFF」の中から変更することができます。



1 [設定]
リモコン設定モードにする。
リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

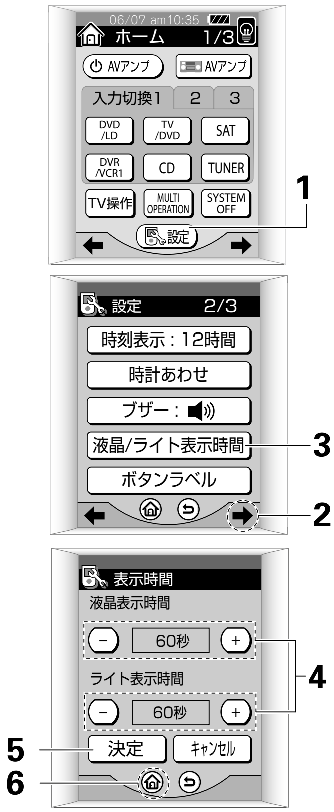
2 ➡
➡ ボタンを 1 回押してリモコン画面を切り換える。
[ブザー：🔊] のある画面を表示させます。

3 [ブザー：🔊]
ボタンを押したときの確認音を選択する。
[ブザー：🔊] を押すと、🔊(大) → OFF →🔉(小) のように順次切り換わります。

4 [ホーム]
設定を終了する。
ホーム画面に戻ります。

液晶表示とライト表示の時間を設定する

LCD画面の表示やライトが消えるまでの時間を設定します（設定秒数の間にリモコンの操作がないと表示が消えます）。



1 [設定]
リモコン設定モードにする。
リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

2 ➡
➡ ボタンを 1 回押してリモコン画面を切り換える。
[液晶/ライト表示時間] のある画面を表示させます。

3 [液晶/ライト表示時間]
液晶表示とライト表示時間の設定モードにする。

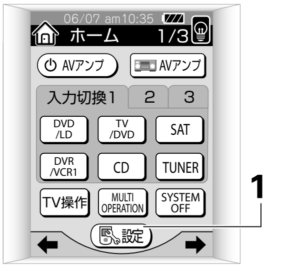
4 [+] [−]
液晶表示時間とライト表示時間を設定する。
- 20 〜 120 秒の間で 1 秒ステップの設定ができます。
- ライト表示時間は液晶表示時間より長く設定することはできません。

5 [決定]
液晶表示時間とライト表示時間を決定する。

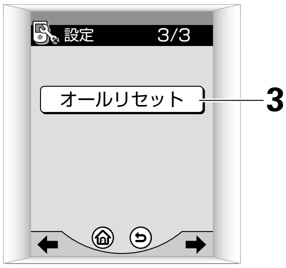
6 [ホーム]
設定を終了する。
ホーム画面に戻ります。

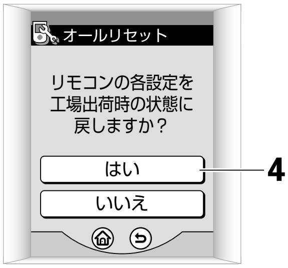
リモコンのオールリセット

以下の操作を行うと、リモコンに設定されたすべてのメモリ内容（時計を含む）が工場出荷時の設定に戻りますのでご注意ください。









1 （設定）

リモコン設定モードにする。

リモコンのLCD画面に設定メニューが表示されます。

2 ➡

➡ ボタンを２回押してリモコン設定オールリセット画面にする。

「オールリセット」を表示させます。

3 （オールリセット）

リモコン設定をオールリセットする。

確認画面になります。

4 （はい）

（はい）ボタンを押す。

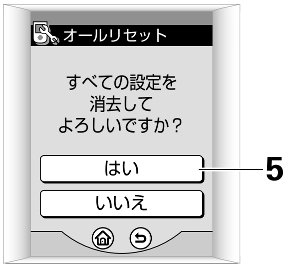
「いいえ」を選択したときは手順３に戻ります。

5 （はい）

もう一度（はい）ボタンを押す。

リモコンの設定がすべて消去され、工場出荷時の状態に戻ります。

画面が５秒程消えた後に、「お待ちください」と表示され、１分以内にホーム画面が表示されます。



メモ

- リモコンの画面リセットについては（➡ P.137）をご覧ください。

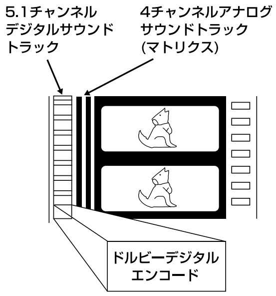
リモコン

サウンドフォーマットについて

ドルビー

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、ドルビーのマルチチャンネル音声システムのディスクリート･デジタルサラウンド方式の名称です。アナログ音声を記録した従来の映画フィルム上にデジタル音声も記録できる、映画業界にとって互換性の高い方式です。



映画フィルムでのドルビーデジタル

しかし、CD 等で用いられるリニアＰＣＭ音声方式のマルチチャンネル化では記録信号のデータ量が膨大になってしまうため、人間の聴覚特性に基づいたマスキング技術と適用型トランスフォームコーディングにより聴覚上の音質低下を招かないドルビーデジタル技術が開発されました。
ドルビーデジタルはDVDビデオの標準音声方式としても採用され、米国ではＨＤＴＶでも採用されるなど、デジタル時代の標準フォーマットとなっています。
その他の特長としては以下のような機能があり、ドルビーデジタルは柔軟性の高いコーディングシステムです。

1） モノ、ステレオ、プロロジック対応の構成および5.1ch音声の再生に最適なダウンミキシング
2） 広範囲のビットレートにわたる動作
3） ダイナミックレンジ情報を伝達する機能
4） ダイアログノーマライゼーション機能

ダイアログノーマライゼーション機能とは平均的音量レベルが異なるさまざまなソフトでも､一定の音量で再生されるように自動調整する機能です｡「Dial. Norm.」と表現されることもあります。

ドルビーデジタルサラウンド EX

ドルビーデジタルサラウンドEXは、映画「スターウォーズ・エピソード１」の製作に向けて、ドルビーラボラトリーズと THX で共同開発された、6.1ch 再生可能な新しい音響フォーマットです。
新たに加えられたサラウンドバック ch により空間表現力、定位感が高められ、中央から離れた客席からでも 360 度の回転や頭上を通過するような移動音効果･音像をより生々しく体感することが可能となりました。フィルム上ではサウンドトラックのサラウンド L/R ch にエンコードされるため、既存のドルビーデジタル（5.1ch）環境での再生互換性があります。この技術により製作された映画のリストはドルビーラボラトリーズのウェブサイトにてご覧になれます。
http://www.dolby.com/

この技術で収録されたソフトを忠実にデコード（再生）する技術が、Dolby Digital EX 技術です。
本機では STANDARD EX モード（➡ P.84）を選択することで Dolby Digital EX 再生が可能になりました。

ドルビープロロジック IIx

ドルビープロロジック IIx は、ドルビープロロジック II やドルビーデジタル EX をさらに改良し、ステレオ音声や 5.1ch の映画コンテンツを 6.1ch または 7.1ch 再生するマトリクスデコード技術です。
ステレオ音声に対するマトリクスデコード技術は、メインchを5.1ch化していた従来のドルビープロロジックIIをさらに進化させ、メイン 7ch を作り出します。CD のような通常のステレオ音楽素材に対してもより優れた立体音場効果、包囲感、定位感をもたらし、ドルビ−サラウンドエンコ−ドされた素材に対してはより効果的です。
また5.1chソースに対するマトリクスデコード技術は従来のドルビーデジタル EX をさらに進化させて、独立したサラウンドバック 2ch を作り出し、7.1ch 再生が可能になりました。今まで以上に自然でシームレスな移動感、滑らかで包み込むような、音楽および映画サウンドを体験できます。
本機にはプロロジック IIxの機能として、2ch ソースに対しては、MOVIE モード（映画再生向き）/MUSIC モード（音楽再生向き）/PRO LOGIC モード、5.1ch マルチ ch ソースに対しては MOVIE モード（映画再生向き）/MUSIC モード（音楽再生向き）を用意しており、お好みに合わせて切り替えることが可能です。
サラウンドバックチャンネルモードがOFF設定またはサラウンドバックスピーカーが無しに設定されている場合は自動的に従来のプロロジック II モードになります。

■ 2ch ソースに対するプロロジックとプロロジック IIx の違い

	プロロジック	プロロジックII	プロロジックIIx
効果的なソース	ドルビーサラウンドエンコード処理されたステレオ音声	すべてのステレオ音声	すべてのステレオ音声
デコードチャンネル数	4.1ch（サラウンド モノラル）	5.1ch（サラウンド ステレオ）	7.1ch（サラウンド、サラウンドバック、ステレオ）
周波数特性	サラウンド 7kHz 帯域制限	全チャンネル フルバンド	全チャンネル フルバンド

プロロジックIIx製品は、プロロジックIIxの持つ様々な機能を、選択して搭載することが可能です。プロロジック IIx 搭載、とキャッチフレーズされた商品でも、必ずしも全く同じ機能を持っているとは限らないことにご注意ください。

MPEG-2 AAC(Advanced Audio Coding)

MPEG-2オーディオの標準方式の一つとして、ISOで規格化(ISO/IEC 13818-7)された音声符号化フォーマットです。MPEG-1オーディオに対する下位互換性はありませんが、高圧縮率(低ビットレート)にもかかわらず高音質を確保できる点が特長で、2000年の年末から始まったBSデジタル放送で採用されました。番組内容によりマルチチャンネル設定が可能で、今後日本のデジタル地上波放送でも採用が予定されています。
以下が米国パテントナンバーです。

08/937,950	5,583,962	98/03037	08/039,478	5,264,846
5848391	5,274,740	97/02875	08/211,547	5,268,685
5,291,557	5,633,981	97/02874	5,703,999	5,375,189
5,451,954	5 297 236	98/03036	08/557,046	5,581,654
5 400 433	4,914,701	5,227,788	08/894,844	05-183,988
5,222,189	5,235,671	5,285,498	5,299,238	5,548,574
5,357,594	07/640,550	5,481,614	5,299,239	08/506,729
5 752 225	5,579,430	5,592,584	5,299,240	08/576,495
5,394,473	08/678,666	5,781,888	5,197,087	5,717,821
			5,490,170	08/392,756

DTS

DTS

DTSは、新しい劇場用の音声記録方式として1993年公開映画「ジュラシックパーク」より採用され、その高音質、 かつ大迫力のサウンド効果は高い評価を得ています。 このシステムは、6チャンネルのデジタル音声CD－ROMに収録するため、音声信号の圧縮率が低く、転送レートも高いフォーマットです。この映画界で完成したテクノロジーをホームシアター用に発展させたのが、“DTS DIGITAL SURROUND”です。現在は、DVD、DVDオーディオ、DTS-CDなど幅広い分野で採用されています。

DTS-ES

2000年11月に発表された新たなるサラウンドフォーマットで、DTS-ESは「DTS Extended Surround」の略称です。“DTS-ESディスクリート6.1”と“DTS-ESマトリクス6.1”の2種類があり、どちらも従来のDTS5.1chデコーダーとの下位互換性を有しています。DTS-ESは従来の5.1chシステムにサラウンドバック（SB）chを加えたもので、かつてない音像・定位感をもたらすことが可能になりました。

DTS Neo:6

全ての2chソースを6.1chサラウンドにしたり、5.1chソースを6.1ch化するマトリクスデコード技術です。
2chソースに対してはCinemaモード/Musicモードがあります。

DTS 96/24

DTS社が開発した最新サラウンドフォーマットで、スタジオのマスター音源のクオリティ（96 k Hz/24Bit）を踏襲する高音質な圧縮技術です。DVD-VIDEOフォーマットにおいて高画質な映像と高音質サウンドを同時に楽しめることを目的として開発されました。既存のDTS対応DVDプレーヤーと、DTS96/24に対応するデコーダー（AVアンプ等）をデジタル接続することで、DTS96/24のハイクオリティー音声が再生可能です。（専用プレーヤーは必要ありません）
従来のDTSデコーダーでも、従来通りの音質での再生が可能で、完全互換性を持っています。（本機は、DTS96/24対応デコーダーを搭載しております）

THX

HOME THX®:

THXは、世界的に有名な映画製作会社であるルーカスフィルム社によって確立された独自の規格と技術の集大成です。「映画館でもホームシアターでも、映画のサウンドトラックは映画監督の意図通り、できる限り忠実に再生して欲しい」というジョージ・ルーカス監督の情熱によって誕生しました。THXはホームシアターの音場最適化に関する数々の特許技術を開発しています。

THX Ultra2™:

ホームシアター機器がTHX Ultra2認証されるには、下記の技術を備え、かつ品質と動作に関する一連の厳しい試験に合格しなくてはなりません。こうして製品搭載が許諾されるTHX Ultra2のロゴは、ご購入いただいたホームシアター製品が長年にわたって素晴らしい性能を維持する保証となります。THX Ultra2規格は、プリアンプ・パワーアンプの性能、操作性、デジタル・アナログの両分野に渡る何百もの性能要求を含め、製品の全体像を網羅しています。

HOME THX Cinema®:

映画のサウンドトラックはダビングステージ（ミキシング専用大型映画館）で制作されます。DVDなどに収録する音声もそのサウンドトラックのままで、ホームシアター向けの変更は加えません。THX Cinemaは家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正し、映画館の音場を正確に再現します。

THX Surround EX™:

「THX Surround EX _ Dolby Digital Surround EX 」はTHXとドルビーラボラトリーズとの共同開発によるものです。従来の5.1chスピーカー構成では表現しきれなかった後方部の繊細な描写力・空間の奥行きや広がり感・音像定位などが得られます。THX Surround EXはDolby Digital Surround EX技術でエンコードされたソフトを映画館上映時の臨場感のまま一般家庭で再生するための技術です。
この製品は通常の5.1chソースでも「THX Surround EX 」モードでお楽しみいただけます。この場合のサラウンドバックchの音声は、所定の演算処理によって生成されますので、お好みに応じてご使用ください。

THX Ultra2™ Cinema:

Dolby DigitalやDTS等で収録された5.1ch映画ソースに適しています。このモードにおけるASA 処理は、サラウンド成分を分析し、雰囲気や方向感が最善になるようサラウンドバックに成分を振り分けます。

THX MusicMode:

マルチチャンネルのDVD音楽ソフトの中には、映画のサウンドトラックとは全く違ったミキシングを行っているものがあります。 ASA 技術は、この DTS や Dolby Digital 等で収録された5.1ch音楽ソースに対し、音楽再生に適した後部音場の安定的な広がり感をもたらします。

Re-Equalization™:

映画のサウンドトラックは、映画館での上映用に製作されているため、それを家庭用の機器で再生すると、過度に明るく耳障りに聞こえます。 Re-Equalizationは小型のホームシアターでも正確な音色バランスを再現します。

Timbre Matching™:

人間の耳は、音の到達方向によって音色の感じ方が変わります。映画館では数多くのサラウンドスピーカーが聴衆を囲むように配置されていますが、ホームシアターではリスナーの両側の２本のみです。 Timbre Matching フィルターはこのスピーカー配置の違いから起こる音色の性質の差を補正することによって、フロント－サラウンド間の音の繋がりをスムーズにします。

Adaptive Decorrelation™:

映画館ではサラウンドスピーカーが多数なのに対し、ホームシアターは通常2本です。そのため、広がり感やサラウンド感に欠けてしまったり、近接したスピーカーに音場が偏ってしまうことがあります。Adaptive Decorrelation は サラウンド信号間の時間と位相の関係を微妙に変化させることにより、2本のスピーカーでもリスニングエリアを拡大して、映画館と同様の効果をもたらします。

Advanced Speaker Array™(ASA):

ASA 処理は、サラウンドバックスピーカー２本使用し、その２本を近接して設置した場合に最高能力を発揮します。この技術はTHX Ultra2 Cinema と THX MusicMode で使用します。

Boundary Gain Compensation™:

ホームシアターでは、壁面の影響で空間利得が生じ、低域の周波数帯が自然と持ち上がってしまう場合がありますが、この技術により、超低域再生能力のあるサブウーファーなどを使用していても、空間利得を補正し、聴感レベルをフラットにすることが可能です。

本機は「6.1再生検出信号」（DTS - ES と Dolby Digital Surround EX）を自動検出しますが、それらの技術を用いて上映された映画でも、DVD化の際にこの検出信号を収録していないものがあります。この場合は手動にて最適なモードに変更してください。Surround EX技術により製作された映画のリストは各ウェブサイトにてご覧になれます。
[上映映画リスト：http://www.dolby.com.][ＤＶＤタイトルリスト：http://www.thx.com.]

Windows Media® Audio 9 Professional

Windows Media® Audio 9 Professional（WMA9 Pro）は、マイクロソフト社が 従来のWindows Media Audio（WMA）のテクノロジーをさらに進化させて開発したディスクリート・デジタルサラウンドフォーマットです。WMAは圧縮効率の高さを特徴とし、インターネット配信によるストリーミング再生やダウンロード再生などWindows® PCでの音楽再生に用いられる圧縮音声の標準フォーマットとなっています。

そしてこのWindows Media 9シリーズでは、WMAの特徴を継承しながら、さらにマルチチャンネル対応に拡張しました。WMA9 Proコーデックは、96kHz/24bitの解像度によるクリアな音質・5.1/7.1ch完全ディスクリート処理による高い臨場感を確保しながら、低ビットレートでデジタル サラウンド サウンドを実現します。またその高い圧縮効率により、CD/DVDなどのデジタルメディアだけでなく、高速ブロードバンド通信によるストリーミング配信にも対応しています。

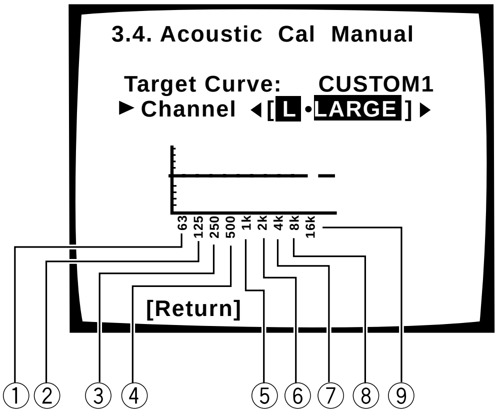
	WMA	WMA9 Pro
最大ディスクリートチャンネル数	2ch	5.1/7.1ch
最大量子化ビット数	16bit	24bit
最大サンプリング周波数	48kHz	96kHz
対応ビットレート	128bps～192kbps	128kbps～768kbps
S/PDIF伝送	非圧縮	圧縮

本機はWMA9 Proデコーダーを内蔵していますので、WMA9 Pro対応プレーヤー*と同軸または光ファイバーケーブルでデジタル接続することによって、WMA9 Proでエンコードされた音声を本機でデコードして再生することができます。もしくはパソコンとUSB接続をして、Windows Media 9シリーズまたはWMA9 Pro対応のメディアプレーヤーなど、パソコン側のデコーダーを使ってWMA9 Proフォーマット音声を聴くこともできます。（「USBオーディオ再生」(➡ P.95)）

* WMA9 Pro対応プレーヤーとしては、PC、DVDプレーヤー、セットトップボックス等が考えられます。ただし、それらの機器の同軸または光出力端子からWMA9 Pro音声を出力できる場合のみ、本機でデコードして再生することができます。

Plays Windows Media™

各種音声の周波数分布について



① 63 Hz（低音域）
耳というより、体で振動を感じる帯域です。

② 125 Hz（低音域）
音楽の中で低音を感じる多くが、この帯域で、音楽に厚みをつくる低音域のポイントです。

③ 250 Hz（中低音域）
アコースティックギターやバスボーカルの低音域が含まれる帯域です。音楽の輪郭をつくりだすポイントです。

④ 500 Hz（中音域）
音の情報密度がもっとも濃い帯域で、さまざまな楽器やボーカルの味わいが出るところです。

⑤ 1 kHz（中高音域）
ボーカルの艶やかさや力強さが表現される帯域です。

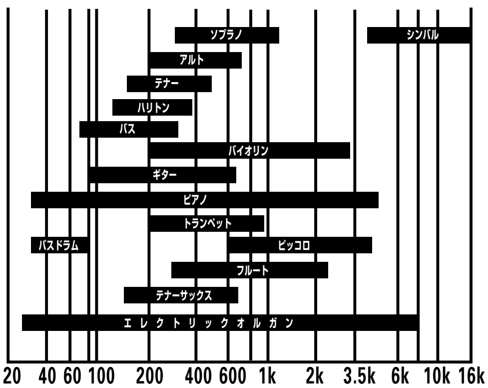
⑥ 2 kHz（中高音域）
プログラムソース全体の音質バランスをはかる上で重要な役目を果たします。

⑦ 4 kHz（高音域）
金管楽器やエレキギターのシャープな響きや伸び、音色を感じる帯域ですが、強調しすぎると疲れやすい音質になります。

⑧ 8 kHz（高音域）
音の華やかさ、明るさを演出する帯域です。強調するとノイズが耳ざわりになりますので注意してください。

⑨ 16 kHz（超高音域）
8 kHz以上の周波数では楽器などの基本周波数はほとんど含まれておらず、また一般的に成人の耳ではこれ以上の周波数の音は急速に聞こえにくくなります。

音声信号の周波数分布図



フレキシブルA/Dシステム

このシステムはアナログの２チャンネル信号を入力しているとき、他チャンネル用のA/Dコンバーターを、フロントch用にパラレル接続することで、S/N比と音質を向上させるものです。理論上、「SN比向上分」＝√n倍（n：パラレル接続数）となり、本機は6dBの向上が見込めます（MULTI CH INPUTでは入力信号のチャンネル数切り換えを2chに選択してください）。

また、本機では192kHz/24bit対応A/Dコンバーターを搭載しています（MULTI CH INPUTでは入力信号のチャンネル数切り換えを2chに選択してください）。A/Dコンバーターが192kHzで動作しているときはディスプレイに「A/D 192」という表示が出ます。A/Dコンバーターを192kHzで動作させる方法は以下の２通りです。

①ストリームダイレクトモードをONにする。
②リスニングモードをSTEREOにして、以下の機能をOFFにする。

・ミッドナイトリスニング（➡ P.90）	・ラウドネス機能（➡ P.91）
・デジタルノイズリダクション機能（➡ P.90）	・ダイナミックレンジコントロールの設定（➡ P.69）

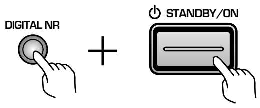
工場出荷時の設定一覧

設定項目	初期値	参照ページ
スピーカーシステム	Normal Surround （一般的サラウンド）	P.46
スピーカーの有り無し/低域再生能力	全てＳＭＡＬＬ（小）	P.46
サブウーファー	ＹＥＳ（有り）	P.46
クロスオーバー周波数	80Hz	P.46
スピーカーまでの距離	全て3.0m	P.51
スピーカー出力レベル	０ｄＢ（補正無し）	P.50
視聴環境の周波数特性の補正	全帯域0dB（補正無し）	P.52
聴感上の高域補正	OFF （オートサラウンドセットアップを行うとONになります）	P.62
入力ファンクション	DVD/LD	
入力信号の種類	AUTO（MULTI CH INPUTはANALOG固定 /USBはDIGITAL固定）	P.79
ストリームダイレクトモード	ON（1：NORMAL）	P.76
サラウンドバックチャンネルモード	ON	P.81
バーチャルサラウンドバックモード	OFF	P.82
リスニングモード	STANDARD（MULTI CH INPUT/USB） STANDARD（VIDEO系入力ファンクション） STEREO（AUDIO系入力ファンクション）	P.83
アコースティックキャリブレーションEQ	OFF (自動設定を行うと自動的に ALL CH ADJモードでONされます）	P.78
デジタルノイズリダクション機能	OFF	P.90
ミッドナイトリスニング機能	OFF	P.90
ラウドネス機能	OFF	P.91
トーンコントロール機能	BYPASS	P.91
スピーカーシステムA/B	A（Normal Surroundのとき）	P.100
MULTI CH INPUTとUSB入力チャンネル数	8 CH IN	P.80
デュアルモノの設定	DUAL：CH1	P.93
インプットアッテネータ	OFF	P.98
TAPE2 モニター	OFF	P.99
ビデオセレクト	VIDEO系入力ファンクション：入力ファンクションと同じ AUDIO系入力ファンクション：OFF MULTI CH INPUT/USB入力ファンクション：OFF	P.102
デジタル入力の設定	リアパネル表記通り	P.63
コンポーネントビデオ入力の設定	全てOFF	P.64
ビデオ入力の設定	全てOFF	P.66
超低域音声のピークレベル設定	OFF（ピークレベル設定無し）	P.68
ダイナミックレンジコントロールの設定	OFF	P.69
入力ファンクション表示の名称	フロントパネル表記とほぼ一致	P.70
ウルトラ2サブウーファーの設定	NO	P.72
サラウンドバックスピーカー間の距離の設定	0−0.3m	P.73
Hi-bit（ハイビット）機能	OFF	P.92
Hi-sampling（ハイサンプリング）機能	OFF	P.92
サウンドディレイ	0.0 frame	P.99
エフェクト（ADVANCEDモードのとき）	5/7CH STEREO：90　　その他のモード：50	P.89
SACD GAIN機能	0dB	P.98

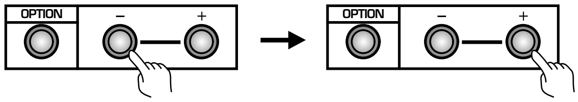
設定オールリセット

設定オールリセットは以下の手順で実行します。操作は本体フロントパネルで行います。設定オールリセットを行うと、前ページのすべての設定が工場出荷時の状態になりますので**十分ご注意ください。**

1 本機が STANDBY モードのときに DIGITAL NR ボタンを押しながら STANDBY ボタンを３秒以上押します



2 FL に「RESET?」と表示されたら OPTION －ボタンを押し、「OK?」表示後にOPTION+ボタンを押します



表示中にボタンを押さなかったり、手順と異なるボタンを押したときは、設定オールリセット操作がキャンセルされます。

仕様

オーディオ部

実用最大出力（JEITA、1kHz、10%、6Ω）
　フロント .... 200 W+200 W
　センター .... 200 W
　サラウンド .... 200 W+200 W
　サラウンドバック .... 200 W+200 W
定格出力（ステレオ動作時）
　20 Hz～20 kHz、0.09%、6Ω　150 W+150W
定格出力（サラウンド動作時）
　20 Hz～20 kHz、0.09%、6Ω
　フロント .... 150 W+150W
　センター 150W
　サラウンド .... 150 W+150W
　サラウンドバック .... 150 W+150W
入力端子（感度/インピーダンス）
　PHONO MM .... 4.7 mV/47 kΩ
　LINE系 .... 382 mV/47 kΩ
PHONO最大許容入力（T.H.D. 0.1%、1kHz）
　PHONO MM .... 120 mV
周波数特性
　PHONO（RIAA偏差）
　　........ 20 Hz～20 kHz（± 0.3dB）
　LINE系 .... 5 Hz～100 kHz、$^{+0}_{-3}$ dB
出力端子（レベル/インピーダンス）
　REC OUT系 .... 382 mV/2.2 kΩ
トーンコントロール
　BASS .... ± 6dB（100 Hz）
　TREBLE .... ± 6dB（10 kHz）
　LOUDNESS（ボリュームポジション－40dB時）
　　........ +4dB/+2dB（100 Hz/10 kHz）
SN比（IHF、ショートサーキット、Aネットワーク）
　PHONO MM .... 86 dB
　LINE系 .... 105 dB
SN比（EIA、1W（1kHz））
　PHONO MM .... 83 dB
　LINE系 .... 93 dB

ビデオ部（コンポジット、S）

入力端子（感度/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz～10 MHz、$^{+0}_{-3}$ dB
SN比 .... 70 dB

コンポーネントビデオ部

入力端子（感度/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz～100 MHz（$^{+0}_{-3}$dB）
SN比 .... 70 dB

電源部・その他

電源 .... AC 100V、50/60Hz
消費電力（電気用品安全法） .... 580 W
待機時消費電力 .... 0.65 W
予備電源コンセント
　連動 .... 1（100 W 最大）
外形寸法
　...... 440（幅）× 210（高さ）× 476（奥行）mm
質量 .... 34.0 kg

付属品

リモコン 1
電源コード 1
オートサラウンドセットアップマイク 1
リモコン充電器 1
ACアダプター 1
ショートピン 2
リファレンスキャリブレーションディスク 1
マルチチャンネルオーディオ用
　スピーカーセッティングガイド 1
取扱説明書 1
安全上のご注意 1
保証書 1
ご相談窓口・修理窓口のご案内 1

●仕様および外観は改良のため予告なく変更することがあります。

故障？ちょっと調べてみてください

故障かな？と思ったら以下を調べてみてください。意外なミスが故障と思われていることがあります。また、本機以外の原因も考えられます。ご使用の他の機器および同時に使用している電気機器もあわせてお調べください。
以下の項目を調べても直らない場合は、修理を依頼してください(➡ P.139)。

音が出ない、音がおかしい、ノイズが出る

症状	原因	対応	参照
入力切換を合わせても、音が出ない。	入力端子の接続が正しくない。	接続を再確認する。	P.20
	デジタル入力の設定が正しくない。	正しく設定し直す。	P.63
	SIGNAL SELECT の入力信号選択が正しくない。	SIGNAL SELECTボタンで正しい入力信号を選択する。	P.79
	ミューティング状態になっている。	消音ボタンで MUTING を解除する。	P.16
	TAPE2 MONITOR機能がONになっている。	TAPE2 MONITOR機能をOFFにする。	P.99
	スピーカーシステム A/B 切換が OFF になっている。	A にする。	P.100
	マルチチャンネル入力モードになっている。	マルチチャンネル入力モードを OFF にする。	
	音量が下がっている。	MASTER VOLUME を調整する。	P.14
フロントスピーカー以外の音が出ない。	スピーカーシステムA/Bの切換がA＋B または B になっている。	A にする。	P.100
	スピーカーシステムの設定がフロントch 以外すべて NO になっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	P.46
	リスニングモードが STEREO になっている。	サラウンド再生用のリスニングモードを選択する。	P.84
サラウンドまたはセンタースピーカーから音が出ない。	MULTI CH INPUT と USB 入力の再生チャンネル数が 2ch に設定されている。	6ch、7ch、8ch のいずれかを選択する。	P.80
フロントスピーカーから音が出ない。	ショートピンが接続されていない。	ショートピンを元の通りに接続する。	P.18
	フロントスピーカーをスピーカー端子 B に接続している。	スピーカー端子 A に接続する。	P.30
サラウンドバックスピーカーから音が出ない（または音が小さい)。	サラウンドバックチャンネルモードが OFF になっている。	ON を選択する。	P.81
	サラウンドバックチャンネルモードが AUTO で「6.1 再生検出信号」の収録されていないソースを使用している。	ONを選択する。またはADVANCEDモードに切り換える。	P.81
	スピーカーシステムの設定でサラウンドバック ch の設定が NO になっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	P.46
	接続が正しくない。(サラウンドバック ch を 1 本のスピーカーで接続していて Rch 側に接続している)	接続を再確認する。(サラウンドバック ch を1本のスピーカーで接続しているときは Lch 側に接続する)	P.30
	ソース自体または生成されたサラウンドバックチャンネルの音声レベルが小さい。	必要に応じてサラウンドバック ch 出力レベルを上げる。	P.50
	MULTI CH INPUT と USB 入力の再生チャンネル数が 2ch に設定されている。	6ch、7ch、8ch のいずれかを選択する。	P.80

症状	原因	対応	参照
デジタル機器の音が出ない。	デジタル接続が正しくない。	デジタル接続を再確認する。	P.20
	デジタル入力の設定が正しくない。	デジタル入力の設定を修正する。	P.63
	SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。	接続されているデジタル機器に応じて、SIGNAL SELECTボタンでDIGITALを選択する。	P.79
	デジタル出力レベル調整機能が付いているCDプレーヤーなどの場合、デジタル出力レベルの設定が低すぎる。（DTS信号が正しく読み取れない。）	プレーヤーのデジタル出力設定を適切に修正する。	
	プレーヤーが対応していないデジタルフォーマットのソフトを再生している（または対応しない設定になっている）。	対応フォーマットの音声トラックを選択する（または対応させる設定にする）。	
DTS CDのサーチ中にノイズが出る。	サーチ中にCDに含まれるデジタル情報を読み取ってしまう。	故障ではありません。サーチ中はアンプの音量を下げ、スピーカーから出る音を抑えてください。	
DTSのLDを再生するとノイズがでる。	SIGNAL SELECTでANALOGが選択されている。	機器を正しくデジタル接続し、SIGNAL SELECTボタンでDIGITALを選択する。	P.79
SIGNAL SELECTをDD RFにして、LDを再生しても音が出ない。	再生ディスクがドルビーデジタル対応でない。（すべてのLDがドルビーデジタル対応とは限りません）	SIGNAL SELECTボタンでAUTOを選択する。	P.79
録音ができない。	アナログ入力信号をデジタルで、デジタル入力信号をアナログで録音しようとしている。	アナログ入力信号はアナログ録音、デジタル入力信号はデジタル録音のみ可能です。	P.101
	コピープロテクト信号の入ったデジタル信号である。	コピープロテクト信号の入ったデジタル信号は録音することができません。	P.101
	REC端子の接続が正しくない。	正しく接続し直す。	P.23 P.26
無入力でもノイズが聞こえる。	電源そのものにノイズが残っている。	パソコンなどのデジタル機器とたこ足配線になっていないか確認する。	
マルチチャンネル入力で再生しているがフロント2ch分しか音が出ない。	入力チャンネルが2chに設定されている。	SIGNAL SELECTボタンを押して8chを選択する。	P.80
MULTI CH INPUT端子に接続した機器で、DVDオーディオを再生したが2chにダウンミックスされているような音になっている。	MULTI CH INPUT端子に接続したものではない信号を再生している。（デジタルPCM出力など）	MULTI CH INPUT端子の接続を再確認し、SIGNAL SELECTボタンにて再生チャンネル数を選択する。	P.80
特定のスピーカーから音が出ない。	スピーカーシステムの設定がNOになっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	P.46
	スピーカーの接続が外れている。	スピーカーの接続を確認する。	P.30
	ソフトのサウンドトラックが意図的にそのように録音されている。（そのチャンネルにはミュート信号が録音されている）	ADVANCEDモードを選択すると効果音のみ出力される場合があります。	P.89
	スピーカーの出力レベル設定が小さい。	スピーカーの出力レベル設定を上げる。	P.50
表示部にマルチチャンネル信号のプログラムフォーマットインジケーターが点灯しているが、音が出ていないスピーカーがある。	再生しているソースのプログラムフォーマットにはそのチャンネルの情報が収録されているが、そのチャンネルに音声が収録されていない。		
ヘッドホンから音が出ない。	ショートピンが接続されていない。	ショートピンを元の通りに接続する。	P.18

サブウーファーの接続／再生について

音についての問題の中でも、特に接続したサブウーファーについての疑問や症状をまとめました。

症状	原因	対応	参照
サブウーファーから音が出ない。	サブウーファー有／無の設定が [NO] (無)に設定されている。	[Speaker System] 設定を確認して、サブウーファーの設定を ［Yes］ または [PLUS] にする。	P.46
	再生しているソースのシーンや音楽に超低域成分(LFEチャンネル)が含まれていない。	すべての場面に超低域成分(LFEチャンネル)があるわけではないので、サブウーファーから音が出ていないと感じられることがあります。	
	接続が外れている。	サブウーファーの接続を確認して、外れているときは接続し直す。	P.30
	サブウーファー側の電源がOFFになっている。	サブウーファーの電源を確認する。	
	サブウーファー側の自動スタンバイ機能が働いている。	サブウーファーの機能を確認する(詳しくはサブウーファーの取扱説明書をご覧ください。)	
	ストリームダイレクトモードの2 2CH→DIRECTを選択している。	ストリームダイレクトモードで1 NORMALを選択するかOFFにする。	P.77
サブウーファーからの音が小さい。	低域成分の少ない／ないソースやディスク(CDなど)を再生している。	再生しているソースによっては低域成分が少なく、サブウーファーからの音が十分でないと感じられることがあります。その場合 [Speaker Systems] の設定状況によっては、サブウーファーからの音をより強調した設定を選ぶこともできます。	P.46
	サブウーファー出力レベルの設定値が小さい。	[Channel Level] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。	P.50
	バスピークレベルの設定値が小さい。	[Bass Peak Level] の設定を確認して、適切なレベルに調整する。	P.68
	クロスオーバー周波数の設定が低い。	[Speaker Systems] のクロスオーバー周波数の設定を確認して、適切なレベルに調整する。	P.47
	サブウーファー側のボリューム設定が小さい。	サブウーファーのボリュームレベルを上げる。	

電源が入らない、動作しない、操作できない

症状	原因	対応	参照
OVERHEATと点滅表示したまま音が出なくなる	本機内部の温度が許容値を超えた。	通風が良くなるように設置を変える。 一度電源を切り、冷えてから使用する。	
AMP ERRと点滅して電源が切れ、STANDBYインジケーターが点滅する。	本機の故障です。	すみやかに使用を中止し、修理を依頼してください。この症状が起きた後は電源のON/OFFを繰り返さないでください。	P.139
FAN STOPと点滅表示したまま音が出なくなる。または電源が切れる。	放熱孔からの異物混入などで放熱用ファンが強制停止した。 放熱用ファンが故障した。	修理を依頼してください。	P.139
大音量で再生したときに電源が切れ、STANDBYインジケーターが点滅する。	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、＋－が接触し、保護回路が働いている。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、スピーカー端子からはみ出ないように接続する。	P.30
	スピーカーの実動作上の最低インピーダンスが非常に低いため、保護回路が働いた。	ボリュームを下げて再生する。 Acoustic Cal EQの設定で低域(63または125Hz)のレベルを下げる。 DIGITAL SAFETY機能をONにする。	P.52 P.138

症状	原因	対応	参照
操作ボタンを押しても動作しない。	空気が乾燥しているとき、静電気などの影響を受けている。	電源プラグを一度コンセントから外して、再び差し込む。	
SIGNAL SELECT ボタンを押しても入力がDIGITALまたは DDRFにならない。	接続またはデジタル入力の設定が正しくない。	機器の接続を再確認し、「デジタル入力の設定」を正しく修正する。	P.63
	TAPE2 MONITOR機能がONになっている。	TAPE2 MONITOR機能をOFFにする。	P.99
	マルチチャンネル入力(MULTI CH INPUT)またはUSB入力になっている。	マルチチャンネル入力とUSB入力以外の入力にする。	P.79
	入力設定をしていないi.LINK対応機器を選択している。	正しい入力ファンクションを選択する。	P.65
HOME THXモードで7.1ch再生を選択しているのに選べないモードがある。(THX ULTRA2 CINEMAとTHX MUSICMODE)	サラウンドバックスピーカーが1本の設定になっている。	サラウンドバックスピーカーを2本接続して、サラウンドバックスピーカーを2本接続している設定にする。	P.30 P.46
OPTIONボタンを押しても「S D :」(ストリームダイレクトモード)の表示が出ない。	スピーカーインピーダンスの切り換えで4Ωを選択しているかDIGITAL SAFETYがONになっている。(この場合ストリームダイレクトモードは「1:NORMAL」のみの選択となります)	スピーカーインピーダンスの切り換えを6ΩにするかDIGITAL SAFETYをOFFにする。	P.103 P.138

インジケーターや表示がおかしい

症状	原因	対応	参照
圧縮デジタル* のソフトを再生しても、対応するインジケーターが点灯しない。	デジタル接続が正しくない。	接続を再確認する。	P.20
	デジタル入力の設定が正しくない。	デジタル入力の設定を正しく行う。	
	SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。	SIGNAL SELECTボタンで正しい入力を選択する。	P.79
	プレーヤーが停止か一時停止になっている。	再生を開始する。	
	プレーヤーの音声出力設定が間違っている。	プレーヤーの音声出力設定を各フォーマットに対応するよう修正する。	
	再生しているトラックがPCMなどになっている。	プレーヤーの音声切り換え機能で圧縮デジタル*の音声を選択する。	
圧縮デジタル* のソフトを再生中に、プログラムフォーマットインジケーターで点灯しないチャンネルがある。	再生ソフトにそのチャンネルの音声が収録されていない。	再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	

圧縮デジタル*:ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AACなどの総称として使用します。

映像が出ない(画面が出ない)、画面にノイズが出る

症状	原因	対応	参照
入力切換を合わせても、映像が出ない。	TV モニター側の入力切り換え設定が正しくない。	TV モニターの取扱説明書をお読みになり、正しい入力に切り換えてください。	
	ソース機器と TV モニターを接続するコードの種類（整合性）が正しくない。	ビデオコンバート可能な接続法に変更する。	P.24
コンポーネント端子(またはD端子)に繋いだソース機器の映像が出ない。	TV モニターとの接続がコンポジット（または S2）である。	TV モニターとの接続にも同様にコンポーネントケーブル（または D 端子ケーブル）を使う。	P.25
	コンポーネントビデオ入力の設定が正しくない。	コンポーネントビデオ入力の設定を正しく行う。	P.64
録画ができない。	コンポーネント（または D）端子に接続したソース機器の映像を録画しようとしている。	ソース機器をコンポジット、または S2 端子でも接続する。	
	コピープロテクト信号の入った映像信号である。	コピープロテクト信号の入った映像信号は録画することができません。	P.101
	OUT 端子の接続が正しくない。	接続を再確認する。	P.23
セットアップ画面が表示されない。	モニター TV を本機の MONITOR OUT端子に接続していない。	モニターTVと本機のMONITOR OUT端子を接続する(セットアップ画面は MONITOR OUT 端子からのみ出力されます)。	P.20
	本機と TV をコンポーネント端子を使って接続している場合、TV によってはカラーバーストをオンの設定ではセットアップ画面が表示されないものがあります。	カラーバーストの設定を OFF にする。	P.138
セットアップ画面にノイズが出る。	本機と TV をコンポジット端子を使って接続している場合、TV によってはカラーバーストが OFF に設定されているとカラーノイズがのる場合があります。	カラーバーストの設定を ON にする。	P.138
オーバーレイ表示が消える。または、瞬時に画面が乱れる。	TV との相性によって、その瞬間に画面が乱れる場合があります。		

• 本機のOSD画面(セットアップ画面、ステータス画面など)表示は白黒です。

オートサラウンドセットアップによる設定がうまくいかない

症状	原因	対応	参照
オートサラウンドセットアップを何度行ってもエラーになる。または正しく測定されない。	部屋の測定環境が整っていない。	注意事項に従って部屋の測定環境を整える。	P.11
		定在波や過度な残響音の発生を抑える。	P.37
測定結果のサブウーファーの距離が実際の距離より長い。	サブウーファーの内部ローパスフィルターの遅延特性の影響で再生音にディレイがかかっている。	MCACCでは、こういった遅延特性を考慮したうえで距離を特定して正確なディレイ時間を設定するようにしています。	
スピーカーの大、小設定が誤った設定になる。	耳に聞こえにくい周波数の騒音がある。	エアコンなどモーターを使用した機器の電源を切ってみる。	
音場補正したが、音がおかしい。	スピーカー端子の位相が反転している。（+/−が逆）	正しく接続する。	P.30

オートセットアップ(自動音場補正)のOSD画面メッセージの意味

「Connect Microphone」
：SETUP MIC用ジャックに付属のオートセットアップマイクを接続してください。

「Too much ambient noise」
：周辺の騒音が大きすぎ、測定に誤差が生じる可能性があります。
- ・エアコンなどモーターを使用した機器や超音波ねずみ駆除装置などの電源を一時的にＯＦＦにするか遠ざけるなどの処置を行ってみてください。
- ・周囲が比較的静かな時間帯にもう一度やり直してください。

「Check Microphone」
：マイクからテスト信号が検出できなくなりました。
- ・オートセットアップマイクの接続や接続コードの断線をチェックしてください。
- ・スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
- ・測定中はできるだけボリュームを変化させないでください。

「Don' t change volume」
：測定精度が落ちる可能性があるため、できるだけボリュームを変化させないでください。

「ERR」
：Speaker Level測定後のYes/No Check判定で、以下のような間違った接続を検出しました。
- ・フロント、サラウンドに表示された：スピーカーがL/Rの片方しか検出されませんでした。
- ・サラウンド「ＮＯ」、サラウンドバック「ＥＲＲ」の場合：サラウンドの接続は検出されずサラウンドバックの接続が検出されました。
- ・サラウンドバック(1本接続時)の場合：R ch側から検出しました(1本のみ接続するときはL ch側を使用してください)。

「Attention Subwoofer output level is too low　Turn volume up on subwoofer」
：[YES]と設定したサブウーファーの出力信号が検出できません。サブウーファー本体の電源を確認しボリュームを適正値に上げてください。
- ・上記を確認したうえ、[Retry]または[Go Next]を選び、決定してください。

「OVER!!」
：アコースティック キャリブレーション EQのマニュアル設定で、イコライザーの総合特性のピークが、この製品であらかじめ規定しているレベルの上限を超えました。
- ・再生音に歪みを生じる可能性があります。表示される直前に調整した周波数に修正し、その周辺の設定も修正してください。

i.LINK関係

症状	原因	対応	参照
i.LINKインジケーターが点灯しているが音が出ない。	接続した機器が著作権保護(DTCP)に対応していない。	本機は著作権法(DTCP)に対応しています。接続した機器の取扱説明書を参照してください。	P.28
	本機が対応していない音声フォーマット信号を入力している。	接続した機器の取扱説明書を参照してください。	
	接続した機器のi.LINK出力端子から出力されていない。	接続した機器の取扱説明書を参照してください。	
i.LINKインジケーターが消灯していて、音が出ない。	入力信号の切り換えで、i.LINK対応機器を選んでいない。	SIGNAL SELECTボタンで i かAUTOを選択する。	P.79
	i.LINKケーブルが外れている。	正しく接続し直す。	P.28
	i.LINKケーブルが長すぎる。	3.5m以下のケーブルを使用する。	
	i.LINK AUDIOフォーマットに対応していない機器を接続している。	接続した機器の取扱説明書を参照する。	
	再生している機器と本機との間の機器の電源が切れている。	電源が切れていたり、機種によっては、電源がスタンバイ状態の場合、信号を伝送することができません。詳しくは、接続した機器の取扱説明書を参照してください。	
	i.LINKケーブルがS400に対応していない。	S400対応のケーブルを使用する。	P.29
PQLS OFFまたはPQLS ONが一瞬表示されて、音が途切れる。	i.LINK接続で再生中に、他のi.LINK接続機器の状態を変更したりするとPQLSのON/OFFが切り換わり、音が一瞬途切れることがあります。		
SIGNAL SELECTでi.LINKが選べない。	i.LINK対応機器の電源が入っていない。	電源を入れる。	
	i.LINK入力の設定が正しくない。	正しく設定する。	P.65
DVDオーディオ/SACDの再生を停止してもプログラムフォーマットインジケーターが表示されたままになる。	DVDオーディオ/SACDの再生を停止しても、他のフォーマットが入力されるまで、プログラムフォーマットインジケーターは表示されたままです。		
他製品のアップグレードを行った後にi.LINKで接続したその機器の名前が表示されなかったりその機器をファンクションで選択できない。	製品のアップグレードなどによって機器の認識ができなくなっている。	本機内部の機器情報を初期化します。本体のボタンを使って以下の手順で行ってください。 1 電源スタンバイ時にOPTION＋ボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを3秒以上押し続ける。 2 [DB CLEAR?]表示中にOPTION－ボタンを押す。 3 [DB CLEAR OK?]表示中にOPTION＋ボタンを押す。[DB CLEAR SET]が表示されたら初期化終了です。もし[DB ERROR]が表示されたら、再度行ってください。	

i.LINK 関係の表示部のメッセージの意味

「BUS FULL」
：i.LINK の伝送容量が最大まで達したために , もうデータを送信することができない。

「CANNOT LINK 1」
：本機とi.LINK接続されている機器との接続関係が不安定である。i.LINK ケーブルが正しく接続されているか確認し、本機とi.LINK接続されている機器との間にi.LINK対応機器がある場合は、それらの機器も含めて正しく接続されているか確認してください。

「CANNOT LINK 2」
：i.LINK 接続したい機器を識別できないので、その機器からの信号を受信できない。

「LINK CHECK」
：i.LINK 接続関係を確認している。例えば本機と i.LINK 接続されているネットワーク上で、新しく機器が加えられたり、外されたりしたときに表示します。再生中にこのメッセージが表示されたときは、音が途切れる場合があります。

「LOOP CONNECT」
：i.LINK 対応機器間の接続において、接続がループになっている。

「NO NAME」
：i.LINK 接続されている機器に、製品名またはメーカー名などの情報がないときに表示します。

「NO SIGNAL」
：i.LINK 対応機器でも、アンプのように再生信号を出力しない機器や本機で受信できない信号を出力する機器を選択した時に表示します。

「PQLS OFF」
：アンプの操作により再生中の PQLS 機能が OFF になったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「PQLS ON」
：アンプの操作により再生中の PQLS 機能がＯＮになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「UNKNOWN」
：i.LINK 接続されている機器の情報が認識できない時に表示します。

リモコン関係

症状	原因	対応	参照
リモコン操作ができない。	本機の主電源ボタンがOFF（■）になっている。	主電源ボタンをON（▂）にする。	P.14
	リモコンの電池が消耗している。	電池を充電する。	P.3
	距離が離れすぎている。角度が悪い。	7m以内、左右30°以内で操作する。	P.14
	途中に信号を遮る障害物がある。	障害物を取り除くか、操作する場所を移動する。	P.14
	蛍光燈などの強い光がリモコン信号受光部に当たっている。	リモコン信号受光部に光が直接当たらないようにする。	P.14
	リモコンのボタン操作ロックが「ON」になっている。	リモコンのボタン操作ロックを「OFF」にする。	P.117
他機器をリモコンで操作できない。	プリセットコードの設定が間違っている。	正しいプリセットコードを設定する。	P.105
	プリセットコードがその操作に対応していない。	必要な操作を「学習」して登録する。	P.107
ＳＲ接続をしているのに相手機器がリモコンで動作しない。	接続でコントロール端子のＩＮ／ＯＵＴを間違えている。	正しく接続し直す。	P.37
	コントロールコード以外の接続をしていない。	アナログのオーディオコードなどを接続する。	
	他社製品の同用途端子と接続している。	他社製品の動作はサポートしていません。	
リモコンの他機器操作ボタンを押しても、レシーバーの入力がその機器に切り換わらない。	ダイレクトファンクションモードがOFFになっている。	ダイレクトファンクションモードをONにする。	P.113
リモコンＬＣＤ画面が動かなくなった。	リモコンの画面情報読み込みエラーが発生した。	リモコン画面をリセットする。	P.137
充電器にセットしてもリモコンの充電池が充電されないまたはすぐに残量がなくなる。	リモコンに充電器が正しくセットされていない。（画面右上に充電中表示が出ていない）	リモコン下部のへこみと充電器のツメが合うようにセットする	P.3
	リチウムイオン電池の寿命です。	パイオニア部品受注センターにご連絡ください。リチウムイオン電池はパイオニア部品受注センター以外で購入することはできません。（電池の購入については、製品の保証期間に関わらず有償になります）	
リモコンＬＣＤ画面に「充電してください」と表示されるまたは何も表示されない。	充電池の残量がなくなった。	充電するまたは充電器にセットしたまま使用する（残量がなくなったまま長い期間充電しなかった場合、充電器にセットしてもすぐには画面が表示されない場合があります。正しくセットしたのに、5　分以上経って画面を触っても何も表示されない場合は、一度充電器から外して、再度セットし直してください。2、3回繰り返しても何も表示されない場合は「充電器にセットしてもリモコンの充電池が充電されない」の項目をご覧ください。	P.3
日付けが2004年1月1日になっている。	リモコンの時計あわせを行っていない。	リモコンの初期設定を行う。	P.4
	リモコンの画面リセットを行ったときに時計がリセットされた。	再度、時計あわせを行う。	P.4
	長い間、充電池の残量が少なくなったままになっていたため、時計がリセットされた。		

症状	原因	対応	参照
学習モードでホーム画面やAVアンプ画面が選択できない。	ホーム画面、AVアンプ画面には学習できません。		
学習モードでボタンが選択できない。	学習できないボタンを選んでいる。(画面を切り換える機能のみが割り付けられているボタンやAVアンプボタンには学習できません)	他のボタンを選ぶ。	
	すでに他のボタンを選んでいる。(画面右上に操作信号待ちマークが表示されている)	選択済みのボタンをもう一度押すか、END ボタンを押して、一度ボタン選択モードから抜ける。	P.107
学習モードでボタンを選んだら、違う画面に切り換わった。	画面を切り換える機能のみが割り付けられているボタンを選んだ。	他のボタンを選ぶ。	
学習できないまたは学習時に「OK!」と表示されたのにそのボタンで機器が操作できない。	学習させるときのリモコンどうしの距離が近いまたは遠い。あるいはリモコンどうしの高さが大きく違う。	距離を変えて学習させてみる(プロジェクター用リモコンなど、赤外線出力が強力なリモコンから学習させる場合、距離が近いと正しく学習できない場合があります)。	P.107
コード送信と画面切換の両方の機能に割り付けられていたボタンに学習したら画面が切り換わらなくなった。	学習すると、画面切換機能は削除されます。		P.108
タッチパネル画面の文字が見えにくい。	コントラスト(濃度)の調整が適切ではない。	コントラストを調整する。	P.16
	バックライトが点灯しているまたは消えている。	バックライトを消すまたは点灯する。	P.16

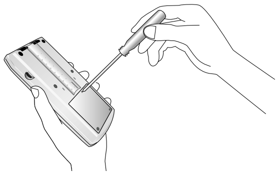
その他

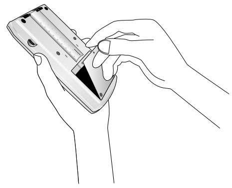
症状	原因	対応	参照
電源を切る直前のボリュームレベルを覚えていない。	ボリュームレベルを変更した直後に、電源を切った。	ボリュームレベル変更後、2秒以上おいてから電源を切る。	
電源を切る直前の設定内容を覚えていない。	設定内容を変更した直後に、電源を切った。	設定内容変更後、2秒以上おいてから電源を切る。	

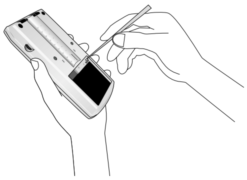
リモコンの画面リセット

リモコン画面が動かなくなったとき（どのボタンを押しても画面が反応しなくなったとき）は、以下の手順でリモコン画面をリセットしてください。画面リセットを行ってもリモコンの各種登録内容は消去されず、画面がリセットされホーム画面に戻ります。時計機能もリセットされるのでリセットの後に再度時計あわせ（➡ P.4）を行ってください。（登録内容のリセットについては「リモコンのオールリセット」（➡ P.119）をご覧ください。）

1. ＋ドライバーでリモコン裏面のネジをゆるめます。
2. フタを取り外します。
3. 穴に入る細さの棒でリセットボタンを押します。
4. フタを閉めてネジをしめます。







リモコンの電池交換

リモコンを充電器に正しくセットしても充電池が充電されなくなってきたら、パイオニア部品受注センターにて専用のリチウムイオン電池を購入して交換してください。

1. ＋ドライバーでリモコン裏面のネジをゆるめます。
2. フタを取り外します。
3. コネクタを抜いて電池を取り出します。
4. 新しい電池のコネクタを差します。
5. フタを閉めてネジをしめます。（電池やフタの間に線をはさまないように注意してください）

メモ

- 本機のリモコン用リチウムイオン電池はパイオニア部品受注センター以外で購入することはできません。
- 電池の購入については、製品の保証期間に関わらず有償になります。

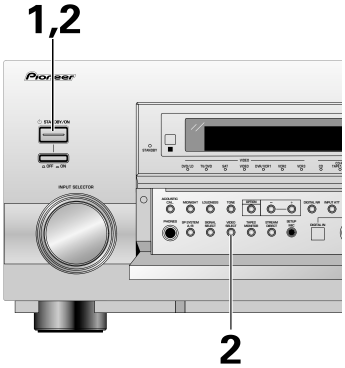
Li-ion

付属のリモコンにはリチウムイオン電池を使用しています。リチウムイオン電池はリサイクル可能な貴重な資源ですので、使用済みのときはリサイクルにご協力ください。

困ったとき

カラーバースト設定

工場出荷時のONの設定のままで、たいていの場合は問題ありません。
テレビと本機をコンポーネント端子を使って接続しているとき、テレビによってはこの設定が工場出荷時のＯＮの設定のままだと、ＯＳＤ画面（セットアップ画面など）が表示されないものがあります。この場合はＯＦＦに設定してください。また、テレビと本機をコンポジット端子を使って接続しているときにこの設定をＯＦＦにすると、テレビによってはＯＳＤ画面にカラーノイズが乗ることがあります。この場合は設定をＯＮに戻してください。



1 

スタンバイモードにする。

2 

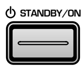
VIDEO SELECTボタンを押しながら、⏻STANDBY/ONボタンを押す。

カラーバースト設定のＯＮとＯＦＦが切り換わります。

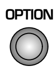
DIGITAL SAFETY 機能

低インピーダンスのスピーカーを使って大音量で再生しているとき、アンプを破壊しないように保護回路が働いて自動的に電源が切れることがあります。このようなときは、DIGITAL SAFETY 機能を ON にすると、音声信号のピークレベルがある値を超えないように制限する機能が働くため、数 dB 大きい音量で再生できるようになる場合があります。ON には「1」と「2」の２段階がありますが、「2」は「1」より低い音量レベルからこの機能が働き始めます。まずは「1」に切り換えてみて、それでも保護回路が働き、電源が切れてしまうようなら「2」に切り換えてお使いください。



1 

スタンバイモードにする。

2 

OPTIONボタンを押しながら、⏻STANDBY/ONボタンを押す。

DIGITAL SAFETY機能の1、2とOFFが切り換わります。

メモ

- DIGITAL SAFETY 機能は、どんな音量でも聴けるように制限する機能ではありません。「2」に設定しても保護回路が働くようなときは、音量をもう少し下げてお楽しみください。
- ストリームダイレクトモード（➡ P.76）で「2：2CH→DIRECT」か「3：ANALOG→DIRECT」を選んでいるときに、DIGITAL SAFETY機能をONにするとストリームダイレクトモードは自動的に「1：NORMAL」に切り換わります。

保証とアフターサービス

保証書（別添）

保証書は、必ず「販売店名・購入日」などの記入を確かめて販売店から受け取っていただき、内容をよくお読みのうえ、大切に保管してください。

保証期間はご購入日から1年間です。

補修用性能部品の最低保有期間

当社は、この製品の補修用性能部品を製造打ち切り後最低8 年間保有しています。性能部品とはその製品の機能を維持するために必要な部品です。

修理に関するご質問、ご相談

お買い求めの販売店へご相談・ご依頼ください。

修理を依頼されるとき

修理を依頼される前に取扱説明書の「故障？ちょっと調べてみてください」の項目をご確認ください。それでも異常のあるときは、必ず電源プラグを抜いてから、販売店へご依頼ください。ご転居されたり、ご贈答品などで、お買い求めの販売店に修理のご依頼ができない場合は、裏表紙をご覧になり、パイオニア修理受付センターにご相談ください。

連絡していただきたい内容

- ご住所
- お名前
- 電話番号
- 製品名：AVマルチチャンネルアンプ
- 型番：VSA-AX10Ai
- お買い上げ日
- 故障または異常の内容（できるだけ詳しく）
- 訪問ご希望日
- ご自宅までの道順と目標（建物や公園など）

■ 保証期間中は：

修理に際しては、保証書をご提示ください。保証書に記載されている当社の保証規定に基づき修理いたします。

■ 保証期間が過ぎているときは：

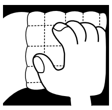
修理すれば使用できる製品については、ご希望により有料で修理いたします。



長年ご使用のオーディオ製品の点検をおすすめいたします。こんな症状はありませんか

- **電源コードや電源プラグが異常に熱くなる。**
- **電源コードにさけめやひび割れがある。**
- **電気が入ったり切れたりする。**
- **本体から異常な音、熱、臭いがする。**

⇨ **すぐに使用を中止し、電源プラグをコンセントから抜き、故障や事故防止のため電気店または当社修理受付センターに点検（有料）をご依頼ください。**



お手入れについて

通常は柔らかい布で空拭きしてください。汚れがひどい場合は水で5 ～6 倍に薄めた中性洗剤に柔らかい布を浸してよく絞った後、汚れを拭き取り、その後乾いた布で拭いてください。アルコール、シンナー、ベンジン、殺虫剤などが付着すると、印刷、塗装などがはげることがありますのでご注意ください。また、化学ぞうきん等をお使いの場合は、化学ぞうきん等に添付の注意事項をよくお読みください。



音のエチケット

楽しい音楽も時と場所によっては気になるものです。隣近所への思いやりを十分にいたしましょう。
ステレオの音量は、貴方の心がけ次第で大きくも小さくもなります。
とくに静かな夜間には小さな音でも通りやすいものです。夜間の音楽鑑賞にはとくに気を配りましょう。近所へ音が漏れないように窓を閉め、お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

目的別索引

本機でやりたいことに合わせて必要なページを見つけてください。

目的		対応する項目	参照
再生	ステレオ再生（フロント2ch出力）をしたい	リスニングモードの選択	P.83
		リスニングモードの種類と効果	P.84
	サラウンド再生（3ch以上で出力）をしたい	リスニングモードの選択	P.83
		リスニングモードの種類と効果	P.84
	i.LINK端子、USB端子、マルチチャンネル端子に接続した機器を再生したい	基本再生	P.74
	ジャンルに合わせてリスニングモードを選びたい	リスニングモードの種類と効果	P.84
	小音量でもセリフなどを聴きとりやすくしたい	ミッドナイトリスニング機能	P.90
	高音域や低音域の音を変えたい	トーンコントロール機能	P.91
	再生ソースのノイズを低減したい	デジタルノイズリダクション機能	P.90
	アナログ入力時の歪みを低減したい	インプットアッテネータを使う	P.98
	超低音成分により生じた歪みを低減したい	超低域音声のピークレベル設定	P.68
	リスニングルーム以外の場所でもステレオ再生を楽しみたい	別エリアでのステレオ再生	P.33
	フロントchをBi-Amp接続して高音質で再生したい	フロントスピーカーのBi-Amp接続	P.34
	一時的に音を消したい	リモコン（MUTINGボタン）	P.16
	ステレオ再生とサラウンド再生をソフトに忠実に自動で切り換えたい	ストリームダイレクトモード	P.76
設定	自動で設定を行いたい	オートサラウンドセットアップ	P.40
	サラウンドに関する設定の内容を知りたい	Surround Setup（音場補正）	P.44
		Check（音場補正の設定確認）	P.45
	映像と音声(セリフなど)のタイミングを合わせたい	サウンドディレイの設定	P.99
	アドバンスドモードのエフェクトレベルを調整したい	ADVANCEDモードの効果を調整する	P.89
	どんな設定項目があるのか知りたい	システムセットアップの設定項目一覧	P.39
	表示部の明るさを調整したい	ディスプレイの明るさを調整する(ディマー)	P.102
	本体に表示される入力ファンクション名を変えたい	入力ファンクション表示の設定	P.70
	OSD画面表示の位置を最適にしたい	OSD［メニュー画面］の調整	P.67
リモコン	他機器を付属のリモコンで操作したい	プリセット（コード）呼び出し	P.105
		学習	P.107
	リモコンの操作モードを切り換えたときに、同時に入力が切り換わらないようにしたい	ダイレクトファンクションモードを設定する	P.115
	すべての設定をクリアして、買ったときと同じ状態にしたい	リモコンのオールリセット	P.119
	他機器の操作画面を使いやすく編集したい	ボタンラベルを変更する	P.116
その他	現在の機能のON/OFF状態を確認したい	各種設定内容の確認（ステータス画面）	P.104
	すべての設定をクリアして、買ったときと同じ状態にしたい	設定オールリセット（本体操作のみ）	P.126

用語別索引(日本語)

用語別索引(英語)

ABC 順

PRINTED WITH SOY INK
この取扱説明書の印刷には植物性大豆油インキを使用しています。

製品のご購入や取り扱いについてのご相談窓口

● パイオニア・カスタマーサポートセンター（全国共通フリーフォン）

受付　月曜～金曜　9：30～17：00、 土曜　9：30～12：00、13：00～17：00 （日曜・祝日・弊社休日は除く）

＜ご注意＞フリーフォンは、ＰＨＳ、携帯電話、自動車電話、列車公衆電話、船舶電話、ピンク電話および海外からの国際電話ではご利用になれません。あらかじめご了承ください。

家庭用オーディオ／ビジュアル製品のご相談窓口　：**0070-800-8181-22**
カタログのご請求窓口　：**0070-800-8181-33**
ファックス　：**03-3490-5718**

パイオニアホームページでのご案内
お問い合わせ先のご案内　*http://www.pioneer.co.jp/support/*
カタログ請求とメールサービス登録のご案内　*http://www.pioneer.co.jp/support/ctlg/index.html*

部品のご購入についてのご相談窓口

付属品（リモコン・取扱説明書など）のご購入や、補修用性能部品（修理使用部品）に関するご相談についてはパイオニア部品受注センターにご相談ください。部品の交換方法などの技術相談につきましては下記のパイオニア修理受付センターにご相談ください。

● パイオニア部品受注センター

受付　月曜～金曜　9：30～18：00、 土曜　9：30～12：00、13：00～17：00 （日曜・祝日・弊社休日は除く）

＜ご注意＞フリーダイアルは、携帯電話、ＰＨＳではご利用になれません。あらかじめご了承ください。

電話（フリーダイアル）　：**0120-5-81095**
一般電話　：**0538-43-1161**
ファックス（フリーダイアル）　：**0120-5-81096**

修理のご依頼／修理についてのご相談窓口

修理を依頼される前に取扱説明書の「故障？ちょっと調べてみてください」の項目をご確認ください。それでも異常のある時は、必ず電源プラグを抜いてから、ご購入店へご連絡ください。
ご購入店がわからないときやお近くにないときは、パイオニア修理受付センターへご相談ください。（沖縄県を除く）

● パイオニア修理受付センター（沖縄県を除く全国）

受付　月曜～金曜　9：30～20：00、 土曜　9：30～12：00、13：00～18：00（弊社休日は除く）
日曜・祝日　9：30～12：00、13：00～18：00 （プラズマテレビのみ受付）

＜ご注意＞フリーダイアルは、携帯電話、ＰＨＳではご利用になれません。あらかじめご了承ください。

電話（フリーダイアル）　：**0120-5-81028**（ゴー パイオニア）
一般電話　：**03-5496-2023**
ファックス（フリーダイアル）　：**0120-5-81029**

● 沖縄サービスステーション（沖縄県のみ）

受付　月曜～金曜　9：30～18：00 （土曜・日曜・祝日・弊社休日は除く）

一般電話　：**098-879-1910**
ファックス　：**098-879-1352**

この取扱説明書は再生紙を使用しています。

高調波ガイドライン適合品